

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第241集

弥勒平遺跡・中屋敷遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町-5

弥勒平遺跡（第二東名 No.123 地点）

中屋敷遺跡（第二東名 No.112 地点）

2011

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

弥勒平遺跡・中屋敷遺跡 卷頭図版 1



森町円田丘陵周辺の地形（調査前、南上空から）

卷頭図版2 弥勒平遺跡



1. 弥勒平遺跡 遺構（南西から）



2. 弥勒平遺跡 全景（南から）

弥勒平遺跡 卷頭図版3



1. 弥勒平遺跡 積穴建物SH01～03完施状況（南西から）



2. 弥勒平遺跡 出土した主な古漬戸

卷頭図版4 中屋敷遺跡



中屋敷遺跡 全景（東から）



1. 中屋敷1号墳 全景（北西から）



2. 中屋敷1号墳 出土土師器壺



3. 中屋敷遺跡 SK30出土遺物

巻頭図版6 中屋敷遺跡



1. 中屋敷遺跡 出土した常滑



2. 中屋敷遺跡 出土した主な貿易陶磁



中屋敷遺跡 出土した主な陶磁器

巻頭図版 8 中屋敷遺跡



中屋敷遺跡 出土した近世の主な陶磁器

弥勒平遺跡・中屋敷遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町-5

弥勒平遺跡（第二東名 No.123 地点）

中屋敷遺跡（第二東名 No.112 地点）

2011

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

今回報告する二つの遺跡は第二東名高速道路森パーキングエリア設置箇所にあたります。

弥勒平遺跡は、縄文時代から江戸時代まで断続的に人為が及んでいたことが明らかとなりました。弥生時代中期、中世、江戸時代は墓域、弥生時代後期～古墳時代前期は集落が形成されていたようです。注目されるのは古瀬戸前期の四耳壺や瓶子で、中世墓に伴う蔵骨器を考えることができます。

中屋敷遺跡は、古代から近世（10世紀～19世紀）に亘る集落と墓地、古墳時代中頃（西暦400～450年頃）の古墳1基が発見されました。

中屋敷1号墳は、遠江で前方後円墳が築造されなくなる時期に築造された古墳で、掛川市和田岡古墳群の形成時期とほぼ同時期と考えられることから、古墳時代中期の政治変動に伴って新たに勢力をもった小首長の墓と考えられます。また、中世前期の中屋敷遺跡の性格について明らかにできませんでしたが、貿易陶磁（青磁・白磁）などが出土しており、ある程度の勢力をもった集団が存在していたことが窺え、近接する香勝寺遺跡との関連が推察できます。中世後期（16世紀）には墓域だったようで、宝篋印塔や土壙墓などとともに貿易陶磁や瀬戸美濃などの陶磁器が出土しました。近世になると掘立柱建物で構成される集落が形成され、出土した鉄滓により、村鍛冶が行われていたことが判明し、当地に残る屋号「鍛冶屋敷」や「鍛冶屋下」などの地名と一致することが分かりました。

両遺跡に近接する文殊堂古墳群や林古墳群、文殊堂遺跡、フケ遺跡など既に報告書を刊行した遺跡は墓所が中心でしたが、今回報告する中屋敷遺跡および弥勒平遺跡は集落にあたります。これらの遺跡と弥勒平・中屋敷両遺跡との時期的な関係を探ることで集落と墓所との関係が徐々に明らかになっていくことが期待できます。

今後は調査成果およびそれを基礎に分析した遺跡の評価に対して批評願うとともに本資料を活用した活発な研究・議論が行われることを期待します。また、本書が県民の皆様に広く活用され、地域史の一助になることを願っております。

最後になりますが、現地調査および資料整理作業、本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）、静岡県教育委員会、森町教育委員会、地元自治会をはじめとする多くの関係諸機関・各位に御援助、御理解をいただきました。この場を借りて深くお礼申しあげます。また、現地での発掘作業、地道な整理作業に従事された方々に、厚くお礼申しあげて、挨拶といたします。

平成23年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 石田 彰

例　　言

- 1 本書は、静岡県周智郡森町宮代字林に所在する弥勒平遺跡、同草ヶ谷字上屋敷に所在する中屋敷遺跡の報告書である。
- 弥勒平遺跡　森町宮代字林4543-2・4444-1・4545-1・4500-2
　　中屋敷遺跡　森町草ヶ谷字上屋敷939-1・939-2・940・941・942-1・942-2
- 2 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（旧市町村）単位にて実施している。森地区では本書が5冊目であるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書森町-5」とした。
- 3 発掘調査は第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（平成17年度途中までは日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会（平成21年度まで文化課、平成22年度文化財保護課）の指導のもと、森町教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 4 現地調査・資料整理の期間と担当者は調査体制で記載する。
- 5 本書に掲載した弥勒平遺跡および中屋敷遺跡の資料整理は、平成16～19年度まで田村隆太郎が、平成21・22年度は大谷宏治が実施した。
- 6 本書の執筆は、調査担当者の調査所見をもとに大谷宏治（第5章第4節10以外）のほか、自然科学分析（鉄滓分析）について株式会社日鐵テクノリサーチ（第5章第4節10）が行った。
- 7 現地の写真撮影は、各担当者が、遺物の写真撮影は大谷宏治および当研究所写真室が行った。
- 8 金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室　西尾太加二・大森信宏が実施した。
- 9 調査の概要については、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、本書と内容が異なる場合は本報告をもって訂正する。
- 10 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（担当　田村隆太郎・大谷宏治）が行なった。
- 11 発掘調査における指導・助言及び協力者は本頁下部に、測量等の委託先については調査経過のなかに記している。

【　謝　　辞　】

現地調査・資料整理にあたり、森町教育委員会　北島恵介氏、伊藤美鈴氏、広川達麻氏に御指導、御協力いただきました。また、縄文土器については当研究所評議員　坂場鋼二先生、中世・近世の陶磁器については、愛知学院大学教授　藤澤良祐先生、静岡県教育委員会　河合修氏、当研究所　足立順司氏、溝口彰啓氏、岩名建太郎氏、土器・陶磁器全般および石塔については、袋井市教育委員会　松井一明氏、土師器については浜松市文化財課　鈴木敏則氏、鈴木一有氏に御指導いただきました。銘記して深謝します。また、草ヶ谷地区的絵図の掲載について、地元自治会の御理解と御協力を得ました。

さらに、弥勒平遺跡の中世資料と関連した中世～近世の石塔が所在した森町林地区の地蔵山の古写真については当研究所　足立順司氏にご提供いただきました。

このほか現地調査および資料整理・報告書作成にあたり、下記の個人、機関にお世話になりました。

池谷初恵　伊藤　薰　加藤理文　篠原修二　柴田　稔　清水　尚　白澤　崇　竹内直文　戸塚和美
永井義博　長尾一男　丸杉俊一郎　山本智子

凡　　例

1 現地測量においては、日本測地系（旧測地系）を使用した。測量図・実測図もこれに準拠する。特に記載のない場合は日本測地系による位置である。

一方、国土地理院ホームページにおいて世界測地系における緯度経度を確認し、記載している部分がある。この場合は、世界測地系であることを明記した。

2 資料整理にあたり、弥勒平遺跡および中屋敷遺跡のグリッド番号を、森バーキングエリア地点の遺跡について統一したグリッド番号に変更したため、それぞれのグリッド番号を変更している。グリッド番号新旧対応表については弥勒平遺跡については第4表（18頁）に、中屋敷遺跡については第14表（47頁）に示した。また、中屋敷遺跡の本発掘調査時の遺構番号（旧遺構番号）と本書で用いる遺構番号（新遺構番号）の新旧対応表（48頁第16表）を記載した。本書をもって正式遺構番号とする。

3 土色は、小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「1999新版標準土色帖」に基づいて、分類した。

4 本書で使用した遺跡の表記は次のとおりである。

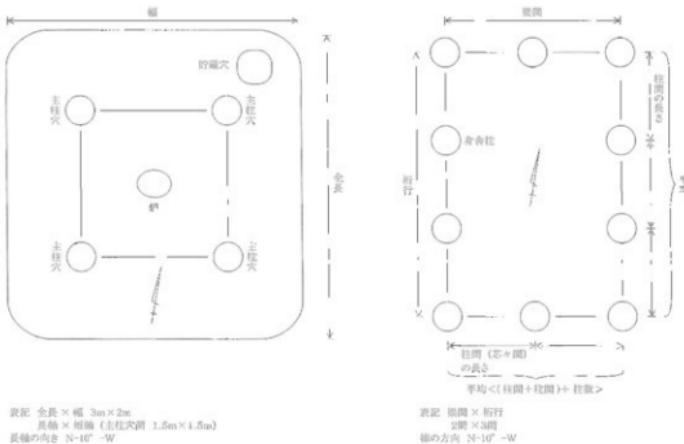
S H 壁穴建物 S B 据立柱建物 P 壁穴建物内の主柱穴、据立柱建物を構成する柱穴

S L 壁穴建物内の炉 S E 井戸 S K 土坑 S D 溝（溝状遺構）

S X 性格不明遺構 S P 小穴 S Z 古墳（方形周溝墓）

5 土器・陶器の断面は、縄文土器・土師器・土師鍋（白ヌキ）、須恵器（黒塗）、山茶碗・古漁戸などの中世・近世陶器（灰色）、貿易陶磁や日本製磁器（灰色）の磁器に分けて、網掛けをしている。また、施釉陶器については、施釉範囲を網掛けしている。

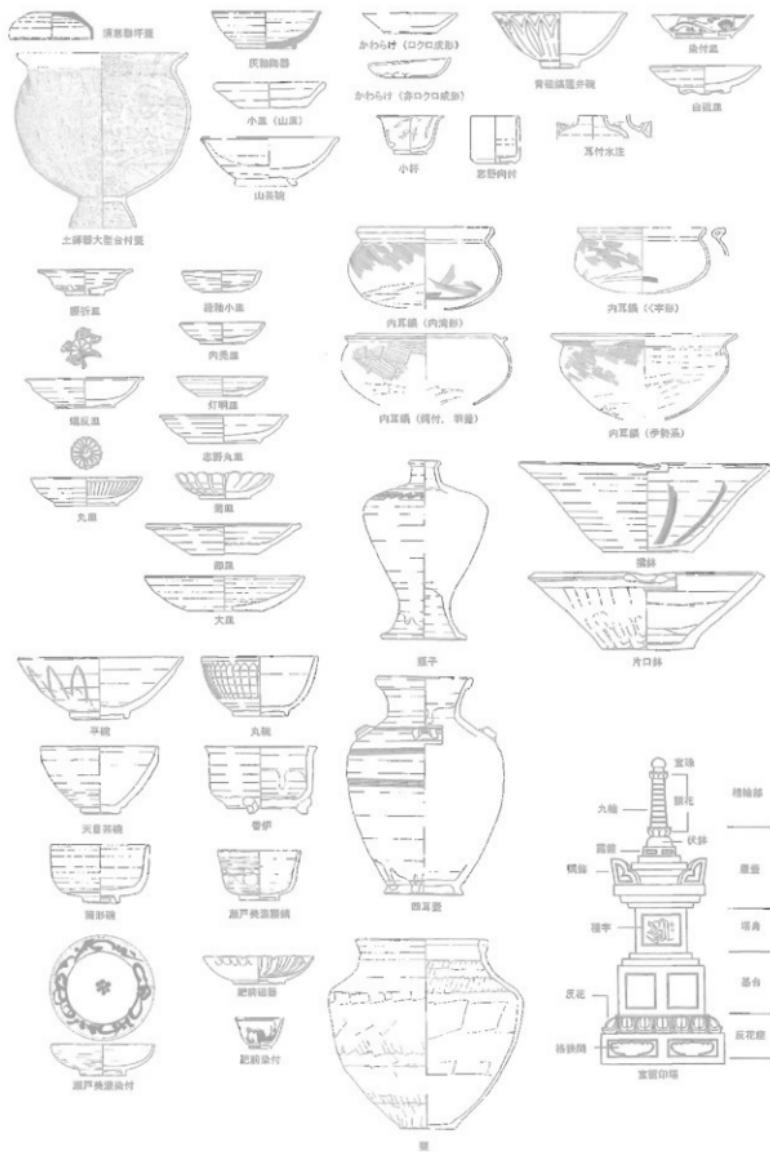
石器については、磨面に網掛けしている。



壁穴建物の名称と計測位置

据立柱建物の名称と計測位置

第1図 壁穴建物・据立柱建物の各部位の名称と計測位置



第2図 本書で使用する主な土器・陶磁器・石塔の名称

たてあなたでもの ほつたてばしらたでもの

- 6 本書で使用する竪穴建物および掘立柱建物の各部位の名称と計測位置については第1図に示した。
- 7 本書で使用する主な土器、陶磁器の種別分類および石塔（宝篋印塔）の部位名称については第2図に示した。
- 8 本書で使用する中・近世陶器の編年について歴年代とのおよその対応関係を第1表に示した。
- 9 参考文献については、191・192頁にまとめて記載した。註については、各章末に記載した。

第1表 中・近世土器・陶器の編年と歴年代のおおよその対応関係

東郷戸良綱の登場については、この表では若干時期順が異なるが、藤澤良祐氏の編年圖では各小間がほぼ西暦で時期区分されている（藤澤1987）。

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

目次

挿図目次・挿表目次・図版目次・写真目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査の方法・体制・経過	2
第1節 調査の方法	2
1. グリッド配置について	2
3. 整理作業・報告書刊行作業の方法	2
5. 自然科学分析の方法	4
第2節 調査の体制	5
第3節 調査の経過	6
1. 確認調査および本調査の経過	6
2. 資料整理および報告書作成、保存処理の経過	6
3. 自然科学分析の経過	7
第3章 地理的環境・歴史的環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	9
1. 旧石器時代	9
2. 縄文時代	9
3. 弥生時代	11
4. 古墳時代	12
5. 奈良時代・平安時代	12
6. 中世	13
7. 近世	13
第4章 弥勒平遺跡	14
第1節 弥勒平遺跡の概要	14
1. 概要	14
第2節 調査の体制と調査の経過	15
1. 確認調査および本調査の体制	15
3. 資料整理の経過	15
第3節 No.123地点確認調査の成果	16
1. 「源内屋敷」推定地	16
第4節 弥勒平遺跡の調査成果	18
1. 調査区とグリッドの配置について	18
3. 遺構・遺物の概要	18
4. 調査の成果	20
第5節 弥勒平遺跡の評価	37
1. 弥勒平遺跡の弥生時代～古墳時代の堅穴建物について	37
2. 弥勒平遺跡の中世陶器について	39
3. まとめ～弥勒平遺跡の変遷	41

第5章 中屋敷遺跡	43
第1節 中屋敷遺跡の概要	43
1. 概要	43
2. 調査歴	43
第2節 調査の体制と調査の経過	45
1. 確認調査および本調査の体制	45
2. 確認調査および本調査の経過	45
第3節 中屋敷遺跡の調査概要	47
1. 調査区とグリッドの配置について	47
2. 基本土層	47
3. 遺構・遺物の概要	47
第4節 中・近世の集落・墓の調査成果	49
1. 中・近世の遺構・遺物の概要	49
2. 挖立柱建物	49
3. 井戸	107
4. 土坑	107
5. 溝	121
6. 性格不明遺構	124
7. 小穴	128
8. 遺構外出土遺物	130
9. 遺物観察表	143
10. 鉄渾自然科学分析の成果	149
第5節 中屋敷1号墳の調査成果	171
1. 中屋敷1号墳の概要	171
2. 墳丘の構造	171
3. 遺物の出土状況	171
4. 出土遺物	171
5. 小結	173
第6節 中屋敷遺跡・中屋敷1号墳の評価	175
1. 中遠地域における中屋敷1号墳の意義	175
2. 中世の中屋敷遺跡	177
3. 近世の中屋敷遺跡	184
4.まとめ～中屋敷遺跡の変遷～	189
参考文献	191
付編1 No.118地点出土遺物	195
第1節 No.118地点 「長者屋敷」推定地の概要	195
第2節 No.118地点 「長者屋敷」推定地出土遺物	196
第3節 「長者屋敷」推定地について	200
付編2 戸綿殿ノ谷遺跡出土遺物	201
付編3 上神増A古墳群出土銅錢	202
図版（付図含む）	
抄録	
奥付	

挿 図 目 次

【凡例】

- 第1図 穹穴建物・掘立柱建物の各部位の名称と計測位置・iii
第2図 本書で使用する主な土器・陶磁器・石塔の名称 iv

【第2章 調査の方法・体制・経過】

- 第3図 弥勒平遺跡・中屋敷遺跡ほかグリッド配置図 3

【第3章 地理的環境・歴史的環境】

- 第4図 弥勒平遺跡・中屋敷遺跡の位置 8
第5図 弥勒平遺跡・中屋敷遺跡の位置 9
第6図 周辺の遺跡分布図 10

【第4章 弥勒平遺跡】

- 第7図 第二東名No.123地点の確認調査対象範囲
　　と試掘配図 17
第8図 弥勒平遺跡 基本上層図 18
第9図 弥勒平遺跡の本発掘調査対象範囲 19
第10図 弥勒平遺跡 全体図 21
第11図 弥勒平遺跡 穹穴建物実測図 23
第12図 弥勒平遺跡 調査区中央部土坑・性格不明遺構
　　位置図 24
第13図 弥勒平遺跡 土坑実測図① (SK01) 24
第14図 弥勒平遺跡 土坑実測図② (SK02～SK08) 26
第15図 弥勒平遺跡 土坑実測図③ (SK09～SK16) 27
第16図 弥勒平遺跡 土坑実測図④ (SK17～SK23, SK25) 28
第17図 弥勒平遺跡 構造遺構実測図 29
第18図 弥勒平遺跡 性格不明遺構実測図① (SK01～SX10) 30
第19図 弥勒平遺跡 性格不明遺構実測図② (SK12) 31
第20図 弥勒平遺跡 出土遺物実測図① 32
第21図 弥勒平遺跡 出土遺物実測図② 34
第22図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量分布図①
　　(口径×器高) 35
第23図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量分布図②
　　(口径×底部径) 35
第24図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量別出土数① 35
第25図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量別出土数② 35
第26図 弥勒平遺跡 出土鉢貝殻 36
第27図 寿町域における弥生時代中期～古墳時代前期の
　　窓穴建物の変遷 38
第28図 弥勒平遺跡出土の同時期の古瀬戸製品と
　　・宮川流域出土の古瀬戸瓶子 40

【第5章 中屋敷遺跡】

- 第29図 中屋敷遺跡の位置と本発掘調査対象範囲 44
第30図 中屋敷遺跡 確認調査における試掘配図 45
第31図 中屋敷遺跡 本調査の範囲と調査区の位置 46

- 第32図 中屋敷遺跡 基本上層図 47
第33図 中屋敷遺跡 全体図 50
第34図 中屋敷遺跡 調査区詳細図（西側） 51
第35図 中屋敷遺跡 調査区詳細図（中央） 52
第36図 中屋敷遺跡 調査区詳細図（東側） 53
第37図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 1
　　(SB01・SB02・SB05) 55
第38図 中屋敷遺跡 掘立柱建物出土遺物実測図① 57
第39図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 2 (SB03・SB04) 58
第40図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 3 (SB06・SB07) 59
第41図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 4 (SB08・SB09) 61
第42図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 5 (SB10) 63
第43図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 6 (SB11) 65
第44図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 7 (SB12・SB13) 67
第45図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 8 (SB14・SB15) 68
第46図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 9 (SB16・SB17) 69
第47図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 10 (SB18・SB19) 71
第48図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 11 (SB20・SB21) 73
第49図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 12 (SB22・SB23) 75
第50図 中屋敷遺跡 掘立柱建物出土遺物実測図② 76
第51図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 13 (SB24～SB26) 78
第52図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 14 (SB27～SB29) 81
第53図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 15 (SK30) 82
第54図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 16 (SB31・SB32) 83
第55図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 17 (SB33・SB34) 85
第56図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 18 (SB35・SB36) 87
第57図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 19 (SB37～SB40) 89
第58図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 20 91
　　(SB41～SB43・SB45) 91
第59図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 21 (SB44) 93
第60図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 22 (SB46・SB47) 95
第61図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 23 (SB48・SB49) 96
第62図 中屋敷遺跡 掘立柱建物出土遺物実測図③ 98
第63図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 24 (SB50・SB51) 99
第64図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 25 (SB52・SB53) 101
第65図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 26 (SB54・SB55) 103
第66図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図 27 (SB57・SB58) 104
第67図 中屋敷遺跡 井戸実測図 107
第68図 中屋敷遺跡 井戸および土坑出土遺物実測図 108
第69図 中屋敷遺跡 土坑実測図 1 (SK01～SK06) 111
第70図 中屋敷遺跡 土坑実測図 2 (SK07～SK12) 113
第71図 中屋敷遺跡 土坑実測図 3 (SK13～SK18) 115
第72図 中屋敷遺跡 土坑実測図 4 (SK19～SK24) 117
第73図 中屋敷遺跡 土坑実測図 5 (SK25～SK30) 119
第74図 中屋敷遺跡 構造遺構実測図 121
第75図 中屋敷遺跡 構造遺構出土遺物実測図 123

第76図 中屋敷遺跡 性格不明遺構実測図① (SX01～SX06) 125	第101図 試料No. 12 (遺物番号52) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 170
第77図 中屋敷遺跡 性格不明遺構出土遺物実測図 126	第102図 試料No. 13 (遺物番号50) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 170
第78図 中屋敷遺跡 性格不明遺構実測図2 (SX07) 127	第103図 中屋敷1号墳 (SZ01) 実測図 172
第79図 中屋敷遺跡 小穴出土遺物実測図① 129	第104図 中屋敷1号墳 (SZ01) 周溝 (SD04) 土層断面図 および遺物出土状況図 173
第80図 中屋敷遺跡 小穴出土遺物実測図② 130	第105図 中屋敷1号墳 (SZ01) 出土土器実測図 174
第81図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図① (包含層出土) 132	第106図 中古地域における主な古墳・古墳群の変遷 175
第82図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図② (包含層出土) 133	第107図 中古地域における古墳時代中期前半の方墳 176
第83図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図③ (包含層出土) 134	第108図 中屋敷遺跡 カワラケの時期別の出土数 180
第84図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図④ (確認調査時出土) 135	第109図 中屋敷遺跡 出土かわらけ時期別出土割合 180
第85図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図⑤ (攪乱出土) 136	第110図 中屋敷遺跡 出土ロクロ成形 かわらけ法量分布図① (口径×器高) 181
第86図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図⑥ (攪乱出土) 137	第111図 中屋敷遺跡 出土ロクロ成形 かわらけ法量分布図② (口径×底部径) 181
第87図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図⑦ (表土出土・表面採取) 139	第112図 中屋敷遺跡 出土ロクロ成形 かわらけ出土数① (口径) 181
第88図 中屋敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図⑧ (表土出土・表面採取) 141	第113図 中屋敷遺跡 出土ロクロ成形 かわらけ出土数② (器高) 181
第89図 中屋敷遺跡 金属製品実測図 142	第114図 中屋敷跡 出土非ロクロ成形 かわらけ法量分布図① (口径×器高) 181
第90図 試料No. 7 (遺物番号44) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 164	第115図 中屋敷遺跡 出土非ロクロ成形 かわらけ法量分布図② (口径×底部径) 181
第91図 試料No. 1 (遺物番号43) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 165	第116図 中屋敷遺跡 出土かわらけの時期別組成 182
第92図 試料No. 2 (遺物番号210) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 165	第117図 中屋敷遺跡 出土中世土器・陶磁器の 時期別出土数 182
第93図 試料No. 3 (遺物番号117) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 165	第118図 中屋敷遺跡 振立柱建物間数別出土数 184
第94図 試料No. 4 (遺物番号354) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 166	第119図 中屋敷遺跡 振立柱建物規模分布図(群別) 184
第95図 試料No. 5 (遺物番号199) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 167	第120図 中屋敷遺跡 振立柱建物分類図 185
第96図 試料No. 6 (遺物番号264) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 167	第121図 中屋敷遺跡 鉄滓重量別出土数 186
第97図 試料No. 8 (遺物番号97) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 168	第122図 中屋敷遺跡 グリッド別鉄滓出土数量 186
第98図 試料No. 9 (遺物番号352) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 168	第123図 中屋敷遺跡 グリッド別鉄滓出土数 186
第99図 試料No. 10 (遺物番号353) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 169	第124図 中屋敷遺跡周辺の縁図① 187
第100図 試料No. 11 (遺物番号53) 鉄滓 質物相のEPMA分析 結果 169	第125図 中屋敷遺跡周辺の縁図② 188

【図版】

付図1 中屋敷遺跡 出土遺物写真的掲載遺物番号①

付図2 中屋敷遺跡 出土遺物写真的掲載遺物番号②

挿 表 目 次

【凡例】

第1表 中・近世土器・陶器の編年と歴年代の おおよその対応関係	v
------------------------------------	---

【第2章 調査の方法・体制・経過】

第2表 調査の体制	5
-----------	---

【第3章 地理的環境・歴史的環境】

第3表 周辺の遺跡地名表	11
--------------	----

【第4章 弥勒平遺跡】

第4表 弥勒平遺跡 グリッド番号新旧対応表	18
第5表 弥勒平遺跡 壁穴建物の概要	20
第6表 弥勒平遺跡 土坑の概要	25
第7表 弥勒平遺跡 潟状遺構の概要	29
第8表 弥勒平遺跡 性格不明遺構の概要	31
第9表 弥勒平遺跡 出土土器・陶磁器観察表	36
第10表 弥勒平遺跡 出土鉄貨観察表	36
第11表 弥勒平遺跡 出土中世土器・陶磁器の構成	39
第12表 弥勒平遺跡 出土中世瀬戸美濃系施釉陶器の構成	39

【第5章 中屋敷遺跡】

第13表 中屋敷遺跡の調査歴	43
----------------	----

第14表 中屋敷遺跡 グリッド番号新旧対応表	47
第15表 中屋敷遺跡の時期別の主な遺構・遺物	47
第16表 中屋敷遺跡 連構番号新旧対応表	48
第17表 中屋敷遺跡 竪立柱建物の概要	105～106
第18表 中屋敷遺跡 井戸の概要	107
第19表 中屋敷遺跡 土坑の概要	109
第20表 中屋敷遺跡 SK30出土鉄貨観察表	120
第21表 中屋敷遺跡 溝状遺構の概要	121
第22表 中屋敷遺跡 性格不明遺構の概要	124
第23表 中屋敷遺跡 出土土器・陶磁器・土製品観察表	143
第24表 中屋敷遺跡 出土石器・石製品観察表	148
第25表 中屋敷遺跡 出土鉄滓観察表	148
第26表 中屋敷遺跡 出土鉄調品観察表	148
第27表 調査試料と調査項目	149
第28表 飲物相の成分分析結果 (wt% ; EPA) と硬さ	155
第29表 鉄滓の平均化学組成 (wt%)	155
第30表 同時代の出土鉄滓 (精錬滓) の化学組成	156
第31表 中屋敷遺跡 出土中世土器・陶磁器の構成	177
第32表 中屋敷遺跡 出土中世瀬戸美濃系施釉陶器の構成	178
第33表 No. 118地点 出土土器・陶磁器観察表	199
第34表 No. 118地点 出土石製品・金属製品観察表	199
第35表 戸隠殿ノ谷遺跡 出土土器・陶器観察表	201
第36表 上神増A古墳群 出土鉄貨観察表	202

図版目次

【卷頭図版】

卷頭図版1 森町円田丘陵周辺の地形（調査前、南上空から）

卷頭図版2 1. 弥勒平遺跡 遠景（南西から）

2. 弥勒平遺跡 全景（南から）

卷頭図版3 1. 弥勒平遺跡 垂穴建物SH01～03完掘状況

（南西から）

2. 弥勒平遺跡 出土した主な古瀬戸

卷頭図版4 中屋敷遺跡 全景（西から）

卷頭図版5 1. 中屋敷1号墳 全景（北西から）

2. 中屋敷1号墳 出土土師器蓋

3. 中屋敷遺跡 SK30出土遺物

卷頭図版6 1. 中屋敷遺跡 出土した常滑

2. 中屋敷遺跡 出土した主な貿易陶磁

卷頭図版7 中屋敷遺跡 出土した中世の主な陶磁器

卷頭図版8 中屋敷遺跡 出土した近世の主な陶磁器

【第4章 弥勒平遺跡】

図版1 森町円田丘陵周辺の地形（調査前、上空より）

図版2 森町円田丘陵周辺 遠景（南から）

図版3 1. 弥勒平遺跡 遠景（南西から）

2. 弥勒平遺跡 調査区全景（南から）

図版4 1. 弥勒平遺跡 調査区全景（北西から）

2. 弥勒平遺跡 調査区中央部完掘状況（北西から）

図版5 1. 垂穴建物（SH01～03） 完掘状況（南から）

2. 垂穴建物内炉（SL01） 完掘状況（南から）

3. SK12 遺物出土状況（北から）

図版6 1. SK01 磷出土状況（南西から）

2. SK01 集石除去後黒色土検出状況（北東から）

3. SK01 完掘状況（北東から）

4. SK03 完掘状況（南から）

5. SK04 完掘状況（南から）

図版7 1. 出土遺物①（縄文土器）

2. 出土遺物②（弥生土器）

3. 出土遺物③（弥生土器）

図版8 1. 出土遺物④（古瀬戸）

2. 出土遺物⑤（陶器・かわらけ）

図版9 出土遺物⑥（かわらけ）

図版10 1. 弥勒平遺跡 周辺の墓地

2. 弥勒平遺跡 周辺の近世墓地

【第5章 中屋敷遺跡】

図版11 1. 中屋敷遺跡 調査区全景（東から）

2. 中屋敷遺跡 調査区全景（北上空から）

図版12 1. 中屋敷遺跡 調査区西側（A区）全景（西から）

2. 中屋敷遺跡 調査区西側（A区）全景（東から）

図版13 1. 中屋敷遺跡 調査区東側（B区）全景（北上空から）

2. 中屋敷遺跡 調査区東側（B区）全景（北西から）

図版14 堀立柱建物関係撮影範囲概略図

図版15 1. 調査区南西側（A区西側） 堀立柱建物群（東から）

2. 調査区中央（A区南東側） 堀立柱建物群（東から）

図版16 1. 堀立柱建物群（SB06～SB08, SB16～SB29）

完掘状況（東から）

2. 堀立柱建物群（SB05, SB10, SB12～SB15）

完掘状況（北東から）

図版17 1. 堀立柱建物（SB01～05） 完掘状況（南東から）

2. 堀立柱建物（SB06・07） 完掘状況（南東から）

図版18 1. 堀立柱建物群（SB30～SB34） 完掘状況（北から）

2. 堀立柱建物群（SB35～SB53） 完掘状況（北西から）

図版19 1. SB11 完掘状況（西から）

2. SB22 完掘状況（南東から）

3. SB28 完掘状況（北東から）

図版20 1. SB16-P1 遺物出土状況（南から）

2. SB37-P3 遺物出土状況（北から）

3. SB45-P3 遺物出土状況（南から）

4. SK01 完掘状況（東から）

5. SK06 完掘状況（北から）

6. SK07 完掘状況（北から）

7. SK10 完掘状況（西から）

8. SK11 完掘状況（北から）

図版21 1. SK21 完掘状況（北から）

2. SK22 完掘状況（北から）

3. SK24 完掘状況（東から）

4. SK30 完掘状況（西から）

5. SK23およびSD03 完掘状況（西から）

6. SD03 遺物出土状況①（東から）

7. SD03 遺物出土状況②（北東から）

図版22 1. SP02 完掘状況（北から）

2. SP14 遺物出土状況（東から）

3. SP15・16 遺物出土状況（北東から）

4. SP196 完掘状況（北から）

5. SE01 完掘状況（北から）

図版23 1. SK01 完掘状況（西から）

2. SK04 完掘状況（東から）

3. SK02 完掘状況（北から）

4. SK05 完掘状況（北から）

5. SK07 完掘状況（北から）

図版24 堀立柱建物出土遺物①

図版25 堀立柱建物出土遺物②

図版26 堀立柱建物出土遺物③

図版27 堀立柱建物出土遺物④

図版28 堀立柱建物出土遺物⑤

図版29 堀立柱建物出土遺物⑥、井戸、土坑出土遺物①

図版30 土坑出土遺物②、溝出土遺物①

図版31 1. SK30出土鏡貨

- 図版31 2. SK30出土遺物
3. SK30出土かわらけ
- 図版32 溝出土遺物② (SD03・04)
- 図版33 性格不明遺構出土遺物
- 図版34 小穴出土遺物①
- 図版35 小穴出土遺物②
- 図版36 1. 小穴出土遺物③
2. 遺構に伴わない遺物①
- 図版37 遺構に伴わない遺物②
- 図版38 遺構に伴わない遺物③
- 図版39 遺構に伴わない遺物④
- 図版40 遺構に伴わない遺物⑤
- 図版41 遺構に伴わない遺物⑥
- 図版42 遺構に伴わない遺物⑦
- 図版43 遺構に伴わない遺物⑧
- 図版44 遺構に伴わない遺物⑨
- 図版45 遺構に伴わない遺物⑩
- 図版46 遺構に伴わない遺物⑪
- 図版47 遺構に伴わない遺物⑫

- 図版48 1. 遺構に伴わない遺物⑬
2. 金属製品①
- 図版49 1. 金属製品②
2. 主な鉄滓
- 図版50 1. SZ01 完掘状況 (北から)
2. SZ01 (SD04) 遺物出土状況 (北から)
3. SZ01 (SD04) 遺物出土状況細部 (北から)
4. SD04 遺物出土状況 (北東から)
- 図版51 1. SZ01 (SD04) 北側完掘状況 (西から)
2. SZ01 (SD04) 土層堆積状況① (北東から)
3. SZ01 (SD04) 土層堆積状況② (北東から)
- 図版52 1. SZ01 出土遺物①
2. SZ01 出土遺物②
3. SD04 出土遺物
- 【付録】
No. 118地点・戸締殿ノ谷遺跡・上神増A古墳群
- 図版53 No. 118地点 「長者屋敷」推定地出土遺物①
- 図版54 1. No. 118地点 「長者屋敷」推定地出土遺物②
2. 戸締殿ノ谷遺跡 出土遺物
3. 上神増A古墳群 出土遺物

写 真 目 次

【第2章 調査の方法・体制・経過】

- 写真1 出土品洗浄 (鉄滓土落とし) 作業 6
- 写真2 出土品復原作業 6
- 写真3 出土品実測作業 6
- 写真4 出土品トレークス作業 6
- 写真5 記録削版組作業 7
- 写真6 記録順トレークス作業 7
- 写真7 出土品写真撮影作業 7
- 写真8 報告書編集作業 7

【第4章 弥勒平跡】

- 写真9 林地蘆山の旧状① 14
- 写真10 林地蘆山の旧状② 14
- 写真11 林地蘆山の石塔 14
- 写真12 本調査 重機による表土除去作業 15
- 写真13 本調査 遺構検出作業 15
- 写真14 「源内屋敷」推定地 確認調査前の状況① 16
- 写真15 「源内屋敷」推定地 確認調査前の状況② 16
- 写真16 「源内屋敷」推定地 確認調査Tr. Aの状況 16
- 写真17 弥勒平跡 出土鉄貨 36

【第5章 中腹敷遺跡】

- 写真18 本調査 重機による表土除去作業 46
- 写真19 本調査 遺構検出作業 46
- 写真20 本調査 遺構削除作業 46
- 写真21 本調査 遺構実測作業 46

- 写真22 試料No. 1 (遺物番号43) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 158
- 写真23 試料No. 2 (遺物番号210) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 158
- 写真24 試料No. 3 (遺物番号117) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 159
- 写真25 試料No. 4 (遺物番号354) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 159
- 写真26 試料No. 6 (遺物番号264) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 160
- 写真27 試料No. 7 (遺物番号44) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 160
- 写真28 試料No. 8 (遺物番号97) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 161
- 写真29 試料No. 9 (遺物番号352) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 161
- 写真30 試料No. 10 (遺物番号353) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 162
- 写真31 試料No. 11 (遺物番号53) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 162
- 写真32 試料No. 12 (遺物番号52) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 163
- 写真33 試料No. 13 (遺物番号50) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 163
- 写真34 試料No. 5 (遺物番号199) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 164

第1章 調査に至る経緯

東名高速道路は昭和44年の開通以来、日本の大動脈として大きな役割を果たしている。しかし、経済発展に伴って交通量が激増し混雑が激しくなり、高速性・定時性を伴う交通需要に対応することが困難になると予想されるようになった。この問題に対する抜本対策として第二東名高速道路が計画された。このうち静岡県内においては、東西に貫く形で延長約170kmの路線が策定された。

この計画に伴い、静岡県教育委員会は日本道路公団から埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼、埋蔵文化財包蔵地の所在の有無についての照会を受けた。埋蔵文化財の所在の有無についての回答は、関係市町村教育委員会へ照会した結果を基に協議し、静岡県教育委員会が取りまとめて行った。調査対象となる地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に県内130箇所以上に及ぶこととなった。

その後、日本道路公団に第二東名建設の施行命令が出されたことに伴って、日本道路公団、静岡県土木部、静岡県教育委員会が埋蔵文化財調査の進め方等について協議した。また、発掘調査の実施については、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、財団法人を除いて記す）へ委託することが確認された。平成8年度には埋蔵文化財調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所を加えた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等を定めた協定書を締結した。この年度から、静岡県における第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が始まっている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社東京支社に引き継がれている。

上記したように森町域においても調査が開始された。森町域には、延長約7kmの路線とパーキングエリア、インターチェンジ取付道路が計画されており、総数21地点に対し確認調査を実施した。調査の結果、21地点で16遺跡（同一箇所の古墳群と遺跡は一つとしてカウント）の存在が認められた。この結果にもとづいて、各遺跡の発掘調査を順次実施することとなった。確認調査と現地調査、整理作業、報告書刊行作業は、静岡県教育委員会の指導のもと、静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。なお、上記の経緯の詳細や確認調査の内容については、既に報告している（静岡埋文研2004b）。

森町域のパーキングエリア建設予定地で周知の埋蔵文化財包蔵地と第二東名路線の計画範囲を対比すると、文殊堂古墳群・遺跡、林古墳群・遺跡、宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群、中屋敷遺跡、北垣遺跡、弥勒平遺跡で遺構が確認され、本調査を実施した。このうち文殊堂古墳群、林古墳群、宇藤蓮台古墳群などについては既に報告済（静岡埋文研2006・2008・2009）であり、宇藤横穴墓群・天王ヶ谷横穴墓群、北垣遺跡については23年度以降に報告書刊行予定である。

※参考文献は、191・192頁参照

第2章 調査の方法・体制・経過

第1節 調査の方法

1. グリッドの配置について（第3図）

森町域の遺跡の本調査では、それぞれの遺跡で国土座標（日本測地系）に基づき、独自にグリッド番号（A 1 から）を設定したが、資料整理にあたり第二東名高速道路森パーキングエリア予定地内の遺跡については、報告書を纏めて作成することとなり、同じグリッド番号が同一報告書の中で複数出てくることになった。このため資料整理および読者の混乱を避け、また遺跡の位置を把握しやすくするため、森パーキングエリア予定地で本調査した遺跡については、グリッド番号を設定し直し、統一した標記に変更した（第3図）。

また、グリッド杭の設置は東西方向にアルファベット、南北方向に数字で番号を付加し、その交点をグリッド杭の名称とした。調査区のグリッドの呼び方については、各グリッドの南西隅のグリッド杭を基準としている。例えば、南西に A 1 のグリッド杭がある場合は、そのグリッド名は A 1 グリッドとなる。

なお、グリッド杭は世界測地系適用前に本調査を実施したため、日本測地系（旧測地系）の国土座標に基づき設定していることを明記しておきたい。

したがって、以後の挿図の表記も、基本的には日本測地系で作成しているため、日本測地系であることを明記する。世界測地系の表記の場合にはその旨本文中・挿図に明記する。

2. 確認調査および本調査の方法

確認調査 確認調査は、対象地点内に試掘溝（試掘坑）を設定し、基本的に重機で表土除去を行い、重機の侵入が困難な箇所については、人力にて表土除去を行う。表土除去終了後、人力にて遺構・遺物の確認を行い、試掘構配置図や遺構概略図、土層図の作成、写真撮影を行い、埋め戻す方法を採用了した。

本調査 弥勒平遺跡、中屋敷遺跡の本調査（現地調査）については、基本的に重機で表土除去を実施し、それが終了した段階で遺構の検出を行った。検出できた遺構から順次遺物などに留意しながら十字あるいは一文字に土層帶を残しながら掘削した。それぞれの遺構は土層断面図、遺物出土状況図、平面図等を作成するとともに写真撮影を行った。遺物は実測・写真撮影が終了した段階で取り上げた。遺構の掘削が終了した段階で、ラジコンヘリコプターによる遺跡全体の空中写真撮影を行った。中屋敷遺跡については、空中写真撮影とともに、空中写真測量も実施した。

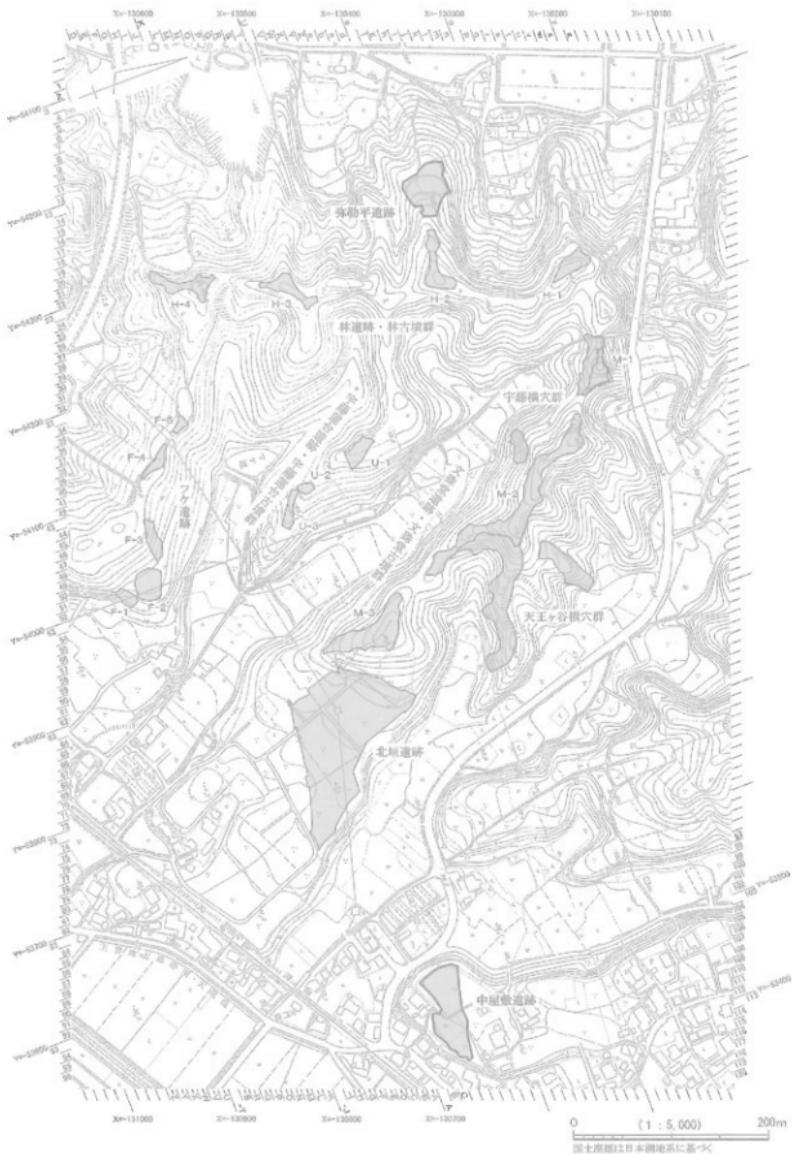
3. 整理作業・報告書刊行作業の方法

基礎整理～報告書刊行までの作業は、静岡県教育委員会通知『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき実施した。

基礎整理 土器・陶磁器などについては取り上げ後、台帳を作成し、遺物を傷つけないように慎重に洗浄・注記し、整理作業に備えた。金属製品については、現地にて劣化遅延処置を実施後、取り上げを行うとともに台帳作成し、保存処理に備えた。

記録類は現地で実測した図面の整合性を合わせるとともに、台帳を作成した。

整理作業・報告書刊行作業 出土品の分類、仕分け、接合、復原を行うとともに、復原が終了した遺物から順次実測を行い、版組を行った後でトレースした。また、実測が終了したものから写真撮影を行



第3図 弥勒平遺跡・中屋敷遺跡ほかグリッド配置図

った。金属製品は、保存処理（クリーニング）を行った後で実測、版組、トレースを行うとともに、写真撮影を実施した。

記録類は図面整理を行い、古墳・遺構ごとに版組し、トレースを行った。

これらが終了した段階で、文章の執筆、編集、構成を行い、本書を刊行した。

4. 保存処理の方法

出土した金属製品について、まず現地調査終了後に応急的な処理を行った。その後、当研究所保存処理室において順次調査前記録の作成を行った上で、X線写真撮影、クリーニングを行った。この段階で実測、写真撮影を行った後、脱塩処理などの保存処理を進め、最終的に調査後の記録を作成し、保存処理を終了した。

5. 自然科学分析の方法

中屋敷遺跡では、鉄滓が出土したため、委託において鉄滓の成分分析および鉄製造過程の復原を行うための分析を行った。詳細な分析の方法については第5章第4節10を参照願いたい。

第2節 調査の体制

確認調査、本調査、資料整理および報告書作成、保存処理の体制は、第二東名掛川工区として体制を組んで実施した。

第2表に確認調査および本調査、資料整理および報告書作成、保存処理の体制を掲載した。

なお、各遺跡の確認調査および本調査の担当者については、各遺跡の報告に掲載した。

第2表 調査の体制

役職名	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	
所長	赤瀬 忠 西野 共	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	赤瀬 忠 山下 兼	
副所長												清水 賀 清水 賀	石田 彰 石田 彰	
常勤理事														
事務局長														
(事務局)次長												大堀正夫 佐野五十三 及川 司 船橋保幸 中野賀治	船村 実 船村 実	
常勤理事 監修課長	伊藤友雄 伊藤友雄	伊藤友雄 伊藤友雄	伊藤友雄 赤瀬忠伸	赤瀬忠伸 赤瀬忠伸										
次長												船村 実 船村 実	船村 実 船村 実	
監修課長	杉木敏雄 杉木敏雄	杉木敏雄 本杉昭一	杉木敏雄 本杉昭一	杉木敏雄 赤瀬忠伸	大堀正夫 佐野五十三 及川 司 船橋保幸 中野賀治	船村 実 船村 実								
監修専門員 監修係長	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	船橋伸幸 船橋伸幸	
監修係員	田中義代 田中義代											芦川英奈子 芦川英奈子 芦川英奈子 芦川英奈子	芦川英奈子 芦川英奈子 芦川英奈子 芦川英奈子	
金針糸販賣	杉田 哲											杉山和枝 杉山和枝	杉山和枝 杉山和枝	
金針糸販賣	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸	鈴木芳幸 鈴木芳幸		中野宣子	
藤 真	石原英夫 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄	赤瀬忠雄 赤瀬忠雄			
次 具		佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司	佐野五十三 及川 司		
次長心得	佐野五十三													
担当課長	遠藤省吾 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	中野賀治		
事務課長													船橋保幸	
会計担当												船橋保幸 中野宣子		
担当係員												船橋忠志 船橋忠志	高橋幸志	
主任研究員 主任調査 研究員	平野 翁 船原修二	加藤理文 加藤理文												
主任調査 研究員	船原修二		長尾一男	長尾一男	赤井文彦									
調査研究員 (調査員)	竹原一人 西田光男 富松掌三 親葉良久 大谷宏治 九杉俊一郎	竹原一人 西田光男 富松掌三 親葉良久 大谷宏治 九杉俊一郎	竹原一人 西田光男 大谷宏治 九杉俊一郎	大谷宏治 三輪潤吾										
家員														
主任調査 研究員	西尾太加二		西尾太加二											
調査研究員	青木駿													
実地調査 中野賀治			本測定	基準整理										
実地内観	実地内観 報告書作成													
													掛川工区森坂地区全件を対象として実施	

第3節 調査の経過

1. 確認調査および本調査の経過

確認調査および本調査の経過については、それぞれの遺跡の調査成果（第4・5章）で報告する。

2. 資料整理および報告書作成、保存処理の経過

基礎整理 土器の洗浄・注記作業や遺物取り上げ台帳の作成、記録類図面台帳の作成については本調査と並行して実施した。

資料整理および報告書作成 資料整理および報告書作成については平成16年度から断続的に平成22年度まで実施した。まず、土器の接合を行い、接合が終わったものから土器の復原を実施した。

平成21年度は記録類の図面編集、版組、トレースおよび出土品の実測、版組（図面）、トレースを実施した。平成22年度は記録類の図面編集、版組、トレースおよび構造観察表の作成、出土品の実測、写真撮影、版組（図・写真）、観察表の作成を行い、原稿執筆、編集作業を行った。

なお、弥勒平遺跡出土の繩文土器について、平成21年5月17日に当研究所評議員 向坂鋼二先生に調査指導を受けた。

保存処理 中屋敷遺跡から出土した金属製品については、平成22年度にクリーニングを行い、平成23年度に脱脂処理、修復、劣化防止措置を行う予定である。

平成22年4月1日から事前準備を開始し、4月5日から処理前記録の作成、土砂・鏽の除去などを行



写真1 出土品洗浄（鐵滓土落とし）作業



写真2 出土品復原作業



写真3 出土品実測作業



写真4 出土品トレース作業



写真5 記録類版組作業



写真6 記録類トレース作業



写真7 出土品写真撮影作業



写真8 報告書編集作業

い、7月31日にクリーニングを終了した。脱脂処理作業などは平成23年度に実施する。

3. 自然科学分析の経過

中屋敷遺跡出土の鉄滓について、中屋敷遺跡で実施された鍛冶についての知見を得るために平成22年度に株式会社日鐵テクノリサーチ株式会社に委託し、鉄滓13点の自然科学分析を実施した。

委託業務について、平成22年5月26日に委託契約を締結し、分析を開始した。その後、9月30日に結果報告を受領、10月4日に完了検査を行い、自然科学分析調査を終了した。

第3章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

静岡県周智郡森町は、静岡県の西部に位置する。行政区として北へ北西は浜松市天竜区（旧天竜市・春野町）、北東は島田市、南東は掛川市、南は袋井市、南西は磐田市と接している。森町は、現在総面積133.84km²である。本書で報告する弥勒平遺跡、中屋敷遺跡は森町域の南西側に位置している（第4図）。

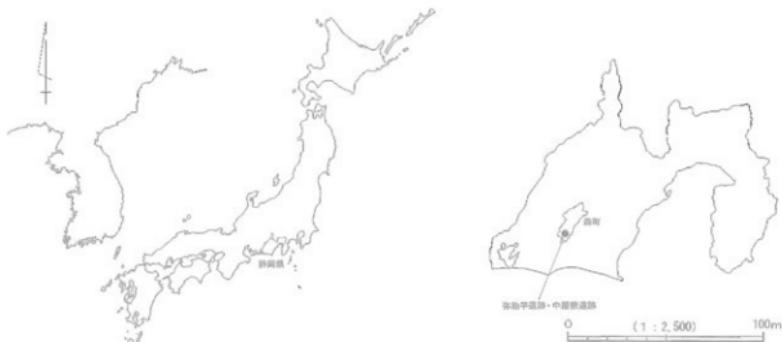
森町の地形をみると、赤石山脈から伸びる山地とそれに囲まれた太田川や一宮川が開析した袋井市や磐田市域へと広がる沖積平野で形成されており、非常に自然豊かな地域である。

森町の地理的環境をやや細かくみると、町域の北東にある大日靈是山（吉川）を起点とし、太田川が南流する。太田川の流域は古くは本宮山（圓見山）に起源し、森町天方付近で大きく西側に流れを変え、「圓田丘陵」すぐ南側、現在の小藪川を流れていると考えられている（森町史編さん室1999）。また、太田川は静岡県内では比較的大きな河川であり、森町域を流れる河川の大部分が最終的にはこの太田川と合流している。この太田川は森町域を東西に大きく隔てる、自然の境界となっている。

さらに、太田川などが形成した水田地帯を見渡すように丘陵が取り囲んでおり、この丘陵により袋井市、磐田市、掛川市域と隔てられており、やや閉塞的な感じを受けるが、原野谷川や太田川が形成した大規模な平野と隔てられる地形は森町の歴史形成にとって大きな影響を与えていたと考えができる。

現在の集落は主に太田川や一宮川が開析した平野部を見渡すことができる丘陵先端の平坦地や丘陵上に営まれており、縄文時代から近世の集落も同じような場所で発見されている。

ここで報告する弥勒平遺跡、中屋敷遺跡は森町の南西部に向かって伸びる「圓田」の丘陵のほぼ中央に位置する「円田丘陵」、「草ヶ谷丘陵」に位置しており、前者は一宮川流域を、後者は太田川流域を望む遺跡である。



第4図 弥勒平遺跡・中屋敷遺跡の位置

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

これまでのところ太田川上流域では旧石器時代の遺跡は確認されていない。

太田川が森町の水田域から磐田市・袋井市の太田川中下流域に出る磐田原台地東縁辺部上では袋井市^{たけいし}山田原遺跡群などが確認され、礫群や炭化物集中箇所などとともにナイフ形石器・スクレイバーなどが出土している(袋井市教委1994)。また、磐田原台地上は旧石器時代遺跡が複数確認されることで知られており、磐田原台地西縁近くで、磐田市勾坂中遺跡、高見丘遺跡群、寺谷遺跡などが調査され、礫群をはじめとする遺構、角錐状石器やナイフ形石器をはじめとする石器など貴重な資料が多数出土している(磐田市市史編さん委1992、静岡埋文研1998b)。

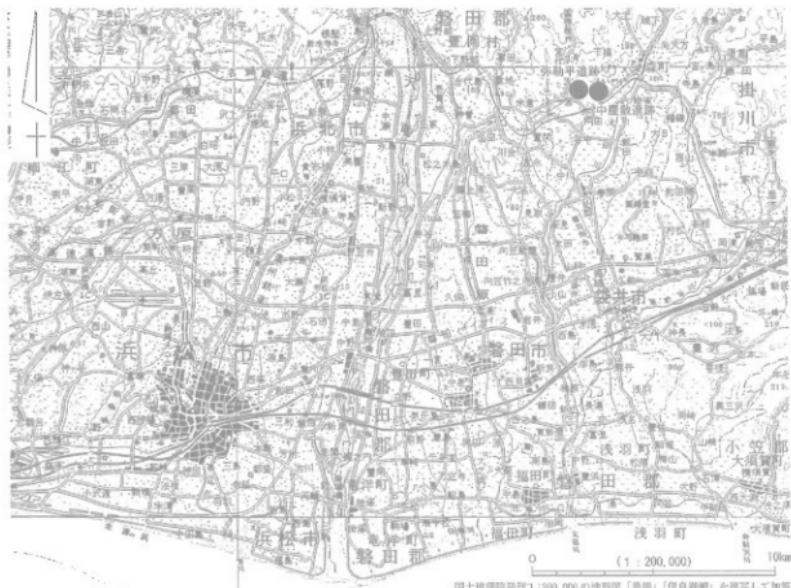
2. 繩文時代

太田川上流域では、これまで竪穴建物が確認された例はないが、縄文時代の遺物はかなり多くの遺跡で採取されている。どれも断片資料が多い。

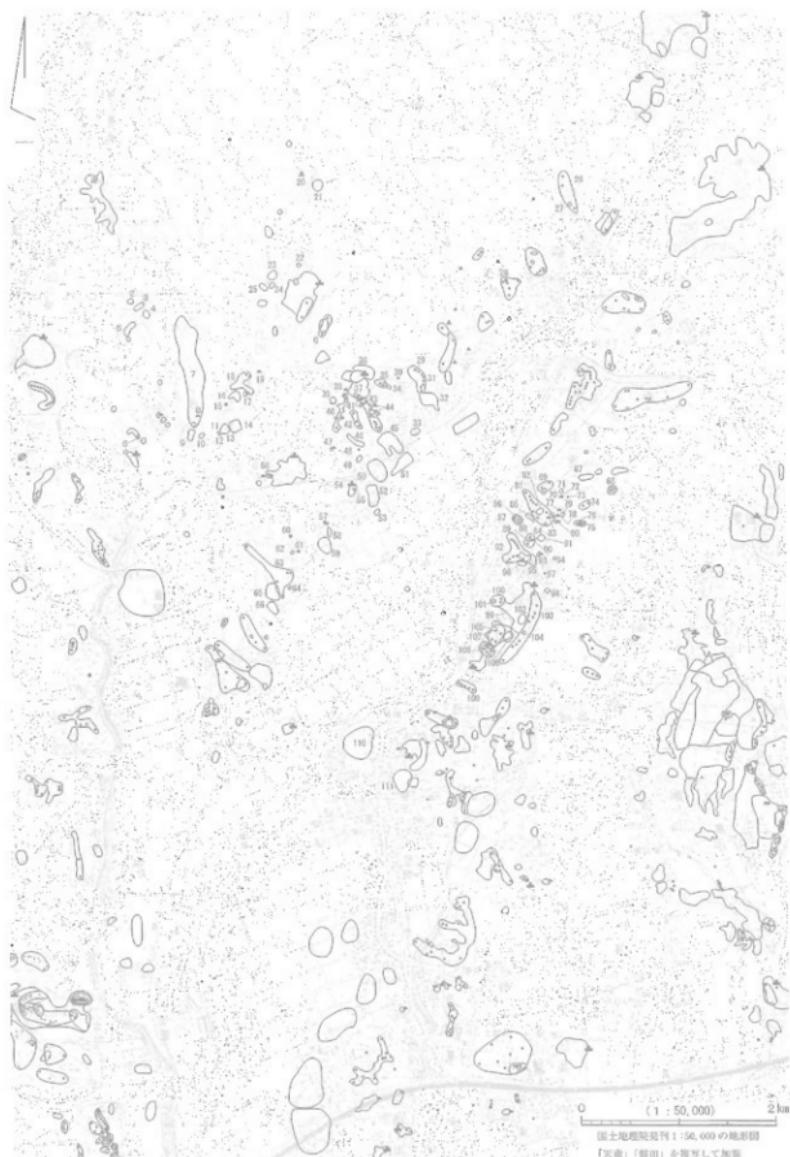
森町円田・草ヶ谷地区では、北垣遺跡(45)が挙げられる。北垣遺跡は古くから周知されており、石冠などが出土したとされている(静岡県1930、大橋1980)。また、第二東名建設事業に伴う調査で竪穴建物とともに縄文土器(曾利式、加曾利式、船元式など)や石器が出土している。

太田川をはさんで対岸の飯田地区に位置する森町坂田北遺跡(85)では、木製品に使用されたと考えられる赤漆片や、ドングリの貯蔵跡など、貴重な資料が出土している(森町史編さん委1998)。

一宮川流域では、森町網掛山古墳群(網掛山遺跡、18)で、中期の竪穴建物4軒が確認されている。



第5図 弥勒平遺跡・中屋敷遺跡の位置



第6図 周辺の遺跡分布図

第3表 屬歴の遺跡地名表

1 岩室庵寺	29 薩隅ケ谷Ⅰ遺跡	57 真國古墳	85 坂田北遺跡
2 四時水戸ヶ谷東峰Ⅰ遺跡	30 薩隅ケ谷Ⅱ遺跡	58 岳瀬遺跡	86 鶴谷二本松古墳群
3 西峰水戸ヶ谷東峰Ⅱ遺跡	31 薩隅ケ谷古墳群	59 北庭遺跡	87 鶴谷二本松遺跡
4 朝日平遺跡	32 薩隅ケ谷遺跡	60 谷中二本松古墳	88 舞ヶ谷古墳群
5 澄桂遺跡	33 中澄桂遺跡	61 丸山古墳	89 舞ヶ谷遺跡
6 カワラケ原遺跡	34 走り谷田遺跡	62 寺ノ谷遺跡	90 舞ヶ谷横穴墓群
7 片瀬遺跡・片瀬城跡	35 走り谷田古墳群	63 駒林寺古墳群	91 三坂田遺跡
8 七軒街横穴墓群	36 善千子遺跡	64 山崎遺跡	92 斎内古墳群
9 八面神社西遺跡	37 宇部遺跡	65 舟谷田Ⅰ遺跡	93 斎内横穴墓群
10 七軒町遺跡	38 舟子横穴墓群	66 舟谷田Ⅱ遺跡	94 沢井遺跡
11 舟瀬戸古墳	39 駒動寺遺跡	67 西平子遺跡	95 駒動寺遺跡
12 舟瀬戸横穴墓群	40 朴遺跡・朴古墳群	68 平戸瀬寺	96 駒作遺跡
13 舟瀬戸遺跡	41 宇瀬横穴墓群	69 舟ノ山古墳群	97 日当古墳
14 舟崎遺跡	42 宇都原古墳群	70 前ノ山遺跡	98 五六ヶ谷遺跡
15 高畠寺古墳	43 文殊堂遺跡・文殊堂古墳群	71 平原遺跡	99 斎田城跡
16 谷沢遺跡	44 天王ヶ谷横穴墓群	72 平郷横穴墓群	100 犬ヶ谷古墳群
17 谷沢横穴墓群	45 北垣遺跡	73 本堂Ⅰ号墳	101 犬ヶ谷遺跡
18 潮御山遺跡・潮御山古墳群	46 フケ遺跡	74 北谷田古墳群	102 善山遺跡
19 宮前横穴墓	47 久屋ノ横穴墓群	75 比丘尼古墳群	103 駒井寺遺跡・駒井寺古墳群
20 小瀬神社脇塚	48 留名横穴古墳	76 比丘尼藤塚	104 善山古墳羣
21 小瀬神社遺跡	49 留名遺跡	77 駒井寺本堂横穴墓群	105 駒井山久保古墳群
22 開闢所遺跡	50 五鬼遺跡	78 駒音堂横穴墓群	106 善山遺跡
23 宮代屋敷遺跡	51 円田大門遺跡	79 駒音堂中世墓	107 善ノ谷横穴墓群
24 宮代屋敷下遺跡	52 大城戸遺跡	80 西内横穴墓群	108 君ノ谷古墳群
25 真砂遺跡	53 大西遺跡	81 谷口古墳群	109 犬ヶ谷古墳群
26 山廻古墳群	54 黒倉城跡	82 谷口遺跡	110 福舟御家遺跡
27 山廻遺跡	55 舟垣遺跡	83 谷口横穴墓群	111 善岡遺跡
28 西脇古墳群・西脇古墳	56 舟田古墳	84 谷口中世墓	

なお、縄文時代遺跡は森町山間部の三倉地区でも確認されており、山間部では縄文時代の遺跡は多いものの弥生時代の遺跡が確認されない(森町史編さん室1999)。縄文時代と弥生時代の環境変化による人間と自然環境とのかかわりの変化があったことが予測できる。

3. 弥生時代

太田川上流域の集落から見ておきたい。飯田丘陵上に所在する森町西平子遺跡(67)で弥生後期～古墳前期の竪穴建物23軒が確認された。中屋敷遺跡(33)に接する北垣遺跡(45)では弥生時代の竪穴建物数軒が確認されている。太田川支流の一宮川流域では、森町片瀬遺跡(7)で第二東名高速道路建設に先立つ調査で弥生時代中期後半～後期の竪穴建物29軒や区画溝などが確認され、丘陵上に溝で区画された集落が営まれていたことが明らかとなった(静岡埋文研2009)。片瀬遺跡は後期後半～古墳時代前期には集落は廃絶し、墓域へと移り変わる。片瀬遺跡の東側の尾根上にある鋼掛山古墳群(鋼掛山遺跡, 18)でも、同時期の竪穴建物21軒が確認されている(静岡埋文研2009)。

他には森町奥谷田Ⅰ遺跡(65)のように建物が数軒確認された遺跡はあるが大規模な集落遺跡は少なく、平野部に臨む丘陵尾根上の平坦地に造営されている。

一方、墓域は多数確認されている。森町フケ遺跡(46)、文殊堂遺跡(43)、林遺跡(40)のほか、森町善千鳥遺跡(36)、片瀬遺跡(7)、崇信寺遺跡(103)、如仲庵遺跡(96)など多数の遺跡で多数の良木山溝塁や土器棺墓が確認されている(森町史編さん委1998、静岡埋文研2006・2009など)。

なお、生産域である水田跡は森町域では現状で確認されていない。太田川の流路変更により既に消失したか、あるいは地中深くに埋蔵されている可能性が高い。

4. 古墳時代

古墳時代前期（3世紀中頃～4世紀）は弥生時代から続く方形周溝墓や集落が確認されるが、古墳時代前期後半から中期前半の様相はよくわからない。古墳時代中期中葉（5世紀中頃）以降になると古墳の築造が活発化し、綱掛山古墳群（18）、文殊堂古墳群（43）、林古墳群（40）、宇摩通台古墳群（42）、崇信寺古墳群（103）などで20m以下の小規模な古墳が築造される（森町教委1996、静岡埋文研2008・2009など）。中期後半～末頃（5世紀後半～6世紀初頭）には、前方後円墳である堤田古墳（56）、東国古墳（57）が築造された（森町史編さん委1998）。後期前半（6世紀前半）になると、前方後円墳である西脇古墳（28）が築造されるが、古墳築造数は多くはない。後期後半（6世紀後半）以降、古墳や横穴墓の築造が活発化し、奈良時代直前まで続く。森町域は横穴式石室築造地域（磐田原台地以西の西遠江）と横穴墓地帯（太田川以東の東遠江）の中間地帯にあたり、両者が混在する地域として注目できる（田村2001など）。

上述したように古墳・横穴墓は多数確認されるものの、この時代の集落の様相はほとんど確認されていない。北垣遺跡（45）は、文殊堂古墳群（43）や宇摩横穴墓群（41）、天王ヶ谷横穴墓群（44）に近接し、同時期の竪穴建物數軒が確認できることから集落と古墳・横穴墓との関係がわかる貴重な遺跡である。

5. 奈良時代・平安時代

『倭名類聚抄』によれば、周智郡には「小山郷」、「山田郷」、「依智郷」、「大田郷」、「田椀郷」の5郷が挙げられており、円田・草ヶ谷地域は「田椀郷」に比定されている（森町史編さん室1999）。一宮川流域にあたる宮代地域については「田椀郷」に含まれるのかどうか明確ではない。

この時代の遺跡をみると、太田川左岸の袋井市と森町の境付近、袋井市春岡地区には「九周」や「知」などの墨書き土器が出土し、周智郡衙の有力候補地である袋井市船荷領家遺跡（110）や、それに近接し同じく郡衙候補地である春岡遺跡（111）などが所在している（森町史編さん室1999）。

また、森町飯田に所在する平戸魔寺（68）では平城宮系の文様をもつ單弁八葉軒丸瓦（平城宮6313型式系統）・均整唐草文軒平瓦（平城宮6663型式系統）が出土しており、遠江國分寺の造営以前に平城宮系瓦を採用している点は、造営にあたっての王權とのつながりが想定できる（森町史編さん委1998）。

さらに円田地域は、小国神社（21）の旧跡伝承地が存在しており、当地域が非常に重要な地域であった可能性が想定できる。小国神社が初めて記録にあらわれるのが平安時代に編纂された『統日本後記』で、承和7年に「從五位下」を授かったことが記されている。この小国神社の当時の所在地は、犬城戸遺跡（52）近くと想定されている。北須遺跡（45）では、この時期の竪穴建物、掘立柱建物などが確認でき、須恵器、縁釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、それらとの関連が想定できる。

弥勒平遺跡（39）が臨む一宮川流域をみると、小国神社経塚（20）が特筆される。現在の小国神社本殿の北側に残る經塚（円形、直徑15～18m前後と推定されている）から、「仁安二年」（1168）銘の外容器とともに銅製經筒3点、和鏡3点、太刀2点などが出土している（森町史編さん委1998）。飯田地区に所在する比丘尼經塚（76）と併せて地方經塚のあり方を示す資料として注目できる（足立1998）。

また、一宮地域の北西には、古代から中世の山林寺院である磐田市岩室廃寺（1）が所在しており、森町側にはその南丘陵表参道が位置していたと考えられ、岩室廃寺近くに所在する森町涼松遺跡（5）、朝日平遺跡（4）、西崎戸ヶ谷東跡（1・II）遺跡（2・3）では平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土しており、岩室廃寺と関連する遺跡群と想定されている（森町教委1991）。岩室廃寺、小国神社、小国神社経塚からみれば宮代地域は非常に宗教色の強い遺跡が多いといえる。

なお、森町域の南西部には条里の痕跡が確認されている（森町史編さん室1999）。

6. 中世（平安末期～江戸時代初期）

弥勒平遺跡（39）と中屋敷遺跡（33）が所在する宮代・草ヶ谷地域は、鎌倉時代には小国神社（21）の遠江國一宮領であった可能性が高い。また、森町域に現存する寺院のうち、当地に所在する古刹として著名な香勝寺はこの時期の開山（1545年）と考えられており、現在までその名声を留めている。

一宮川流域では、御廟所遺跡（22）で古瀬戸瓶子・宮代稻荷下遺跡（一宮末社稻荷社跡、24）からは同じく古瀬戸四耳壺（東京国立博物館蔵）が出土している。一宮川流域には小国神社や岩室庵寺（1）と関連してか、中世墓や経塚と考えられる遺構・遺物が確認されている。

一方、中屋敷遺跡に近接する香勝寺遺跡（32）では、香勝寺本堂の建設に先立つ調査で、一宮莊の地頭武藤氏一族の供養塔と想定される五輪塔・宝鏡印塔などが出土した。また、当遺跡では第二東名建設工事に伴う宅地移転先候補地となった地点での調査で15世紀に人工的に埋め戻された堀が確認されたことから遺跡は堀で囲まれていたと想定できる。当遺跡は12世紀後半から13世紀前半の遺物が主体であり、鎌倉時代初頭頃に盛期を迎えた遺跡である可能性が高い。中屋敷遺跡でも同時期の遺構・遺物が出土しており、一連の遺跡として把握できるかもしれない。北垣遺跡（45）では掘立柱建物や井戸のほか、土礫墓・火葬墓や石塔・宝鏡印塔が多数確認されている。円田地域にある岩名栗遺跡（49）では中世の集石墓が確認され、宝鏡印塔・五輪塔が発見されている。

弥勒平遺跡では蔵骨器の可能性が高い古瀬戸四耳壺・瓶子3点が出土しているほか、この遺跡と周辺（林地蕨山）には中世後期から江戸時代の石塔が集積されており、墓地であった可能性が高い。

このほか森町域では、古墳時代の横穴墓を再利用した中世墓が、観音堂横穴墓群（78）、谷口横穴墓群（83）、天王ヶ谷横穴墓群（44）で確認されている。

一方、この時期の城館では、文献記録に天方本城、天方新城、飯田城（99）などが記録されており、今川方の天方氏、斯波氏、徳川氏、山内氏、武田氏による攻防が行われる（森町史編さん室1999）。調査された遺跡は少なく、片瀬城跡（7）で堀切が確認されている（静岡埋文研2009）。

7. 近世（江戸前期以降）

森町域は豊臣政権下では大名山内氏の所領が置かれ、徳川政権下では大名山口氏や旗本土屋氏や掛川藩の所領となる。草ヶ谷について江戸時代前期は大名山口氏が領主、江戸時代中期以降は旗本土屋氏の所領で、宮代地城は江戸時代前期には大名山口氏、旗本花房右近とともに小国神社の所領であった。また、森町域には遠江・駿河の鉄物師集団を統括した山田七郎左衛門家があり、梵鐘や雲板、鍋・鎌などを作成していたことが明らかになっている（森町史編さん室1999）。

近世の遺跡は、本書で報告する中屋敷遺跡（33）や北垣遺跡（45）で掘立柱建物が多数確認されている。また、両遺跡では、鉄津や繩羽口が出土しており、鍛冶屋が操業されていた可能性が高い。

一宮川流域のカワラケ届遺跡（6）は、江戸時代のかわらけ製造場所・販売所があったとされている。太田川支流の瀬入川左岸の丘陵上に位置する山郷遺跡（27）では、遺跡の最も標高の高い場所で石碑を樹立した遙拝所が確認された。この遙拝所は3段の壇と石碑で構成されており、近世初期の天台宗の作法に基づいているものと考えられている。

修驗道遺跡（竹林山南閻院南光寺、95）では文化15（1818）年に森町旦那衆を勧進して構築された紫灯護摩壇が確認されている。

なお、考古資料ではないが、地元や森町に残る絵図面などに、今回報告する中屋敷遺跡が所在する草ヶ谷や円田の絵図面があり、当時の様相を知る上で重要な資料となる（第二東名記念誌編集委2005など）。

※参考文献は、191・192頁参照

第4章 弥勒平遺跡

第1節 弥勒平遺跡の概要

1. 概要 (第3~6図、巻頭図版1・2、図版

1~3、写真9~11)

弥勒平遺跡は、静岡県周智郡森町宮代の一宮川が形成した平地部分を望む丘陵上に位置しており、森町林古墳群・林遺跡（静岡埋文研2006・2008）から北西に向かって張り出す尾根緩斜面、標高70m付近に位置している。遺跡からは一宮川が形成した平地部は見渡すことができるが、太田川が形成した平野部は林古墳群・林遺跡が所在する「内田丘陵」に遮られて直接は見えない。

遺跡の周囲には、中世～近世の石塔や供養塔が集積された墓地が確認でき（図版10-1、註1、註は42頁参照）、地元の言い伝えでは尾根（林地蔵山、弥勒平遺跡と想定される）にあった石塔を集積したとされており、これらの石塔は本来弥勒平遺跡内に所在していたものと考えられる。

また、調査前まで近世以降の墓地が尾根上にも確認できた（図版10-2）。

2. 調査歴

No.123地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていないが、「源内屋敷」伝承地が所在したこと、同一丘陵に林古墳群が存在したため、確認調査対象地として選定した。これまでに調査が行われたことはない。

弥勒平遺跡の調査は今回が第1次調査であるが、遺跡が所在する丘陵はすべて第二東名高速道路用地であるため最終調査でもある。

調査の結果、「源内屋敷」推定地では遺構は確認できなかった。一方、林古墳群から続く尾根上で確認調査を行ったところ、竪穴建物が確認されたため、静岡県教育委員会文化課（当時）と森町教育委員会の協議により、小字名を採用し「弥勒平遺跡」として命名された。



写真9 林地蔵山の旧状① (昭和47年頃撮影)

足立順司氏提供



写真10 林地蔵山の旧状② (昭和47年頃撮影)

足立順司氏提供



写真11 林地蔵山の石塔 (昭和47年頃撮影)

足立順司氏提供

第2節 調査の体制と調査の経過

1. 確認調査および本調査の体制

弥勒平遺跡の確認調査および本発掘調査の調査担当者は下記のとおりである。

確認調査主任調査研究員 平野 敏 調査研究員 竹原一人・丸杉俊一郎
本発掘調査主任調査研究員 加藤理文 調査研究員 田村隆太郎・児玉 卓

2. 確認調査および本調査の経過(図版10、写真11～13)

確認調査 当初、弥勒平遺跡が所在する丘陵尾根上以外に、丘陵下の平坦地に「源内屋敷」推定地が所在したため、第二東名高速道路建設の対象範囲内について試掘・確認調査を実施したが、遺構・遺物とともに確認されていない。

弥勒平遺跡の近接箇所には、中世～近世墓が集められた墓所(図版10-1、写真11)が存在していることから、それに関係する遺構や、弥生時代の遺構が確認されることが想定できた。本遺跡名は試掘調査終了後、静岡県教育委員会と森町教育委員会の協議により「弥勒平遺跡」と命名・周知された。

弥勒平遺跡の試掘・確認調査は、123地点その1として、林古墳群とともに実施した。

確認調査その1は、平成10年9月16日から開始した。16日に調査対象地の草木の除去を行い、18日から試掘溝の人力による掘削を開始した。Dトレンチから調査を開始し、B・C、A・E～Iトレンチへと順次実施した。各トレンチの遺構確認および記録類の作成を11月30日に終了し、12月1日に試掘溝の埋め戻しを終了した。

本調査 本調査は、平成12年2月29日に開始した。まず、調査用プレハブ等の設置を行うとともに、重機による表土除去を実施した。3月1日から重機による表土除去と合わせて人力による表土除去を開始し、4月20日に一旦休止した。7月14日より表土除去を再開し、8月7日に遺構検出を行ふとともに、株式会社イビソクに委託し、国土座標にもとづくグリッド杭を設置した。人力による表土除去と併行して8月18日から遺構掘削を開始し、9月27日に高所作業車を用いて遺跡の全体写真を撮影した。9月28日から遺跡の測量を行ふとともに遺構の最終確認を行うためのサブトレンチ掘削を行い、すべての作業を10月25日に終了した。

3. 資料整理の経過

第2章第3節に記載したため、参照願いたい。



写真12 本調査 重機による表土除去作業



写真13 本調査 遺構検出作業

第3節 No.123地点確認調査の成果

1. 「源内屋敷」推定地（第7図、写真14～16）

当初123地点は、谷部に位置する「源内屋敷」推定地が所在したため、確認調査その2としてその推定地内を中心試掘溝（試掘坑）を設定した。

確認調査その2は、平成10年12月15日から調査対象地の草木の除去を開始し、16日から試掘坑8箇所、試掘溝4箇所を設定し、順次掘削、精査を行った。記録類の作成を行い、12月17日に確認調査を終了した。

調査の結果、「源内屋敷」推定地では、遺構は一切確認できず、屋敷地が想定すると考えられていた平坦面は、近代以降の造成により形成されたものであることが明らかとなった。遺物は造成土上に堆積した表土から18世紀代の陶磁器小片などが出土しただけであった。これらの遺物は、弥勒平遺跡などからの流れ込みの可能性が高い。

したがって、「源内屋敷」推定地では想定された屋敷地は確認できず、「源内屋敷」は別の地に存在する可能性が高い。

2. 弥勒平遺跡

林古墳群として周知された範囲から北に向かつて張り出す尾根上に古墳が存在する可能性があつたことから、尾根上、緩斜面、平坦地を中心に試掘溝31本を設定した（第7図）。

調査の結果、弥勒平遺跡のTr.A 1・2やその周囲から江戸時代のかわらけや陶磁器が出土したが、それ以外の遺構・遺物が出土しておらず、Tr.A 1・2については本調査対象から除外した。一方、Tr.B 1～E 3では、縄文時代から近世にわたる遺物が出土したことから、遺跡であることが確定した。また、遺跡の種別は当初想定した古墳ではなく、集落が存在する可能性が想定された。

この試掘調査により新たに発見された遺跡は森町教育委員会と静岡県教育委員会の協議により「弥勒平遺跡」と命名された。

なお、確認調査で出土した遺物については、本調査の成果で記述する。



写真14 「源内屋敷」推定地 確認調査前の状況①

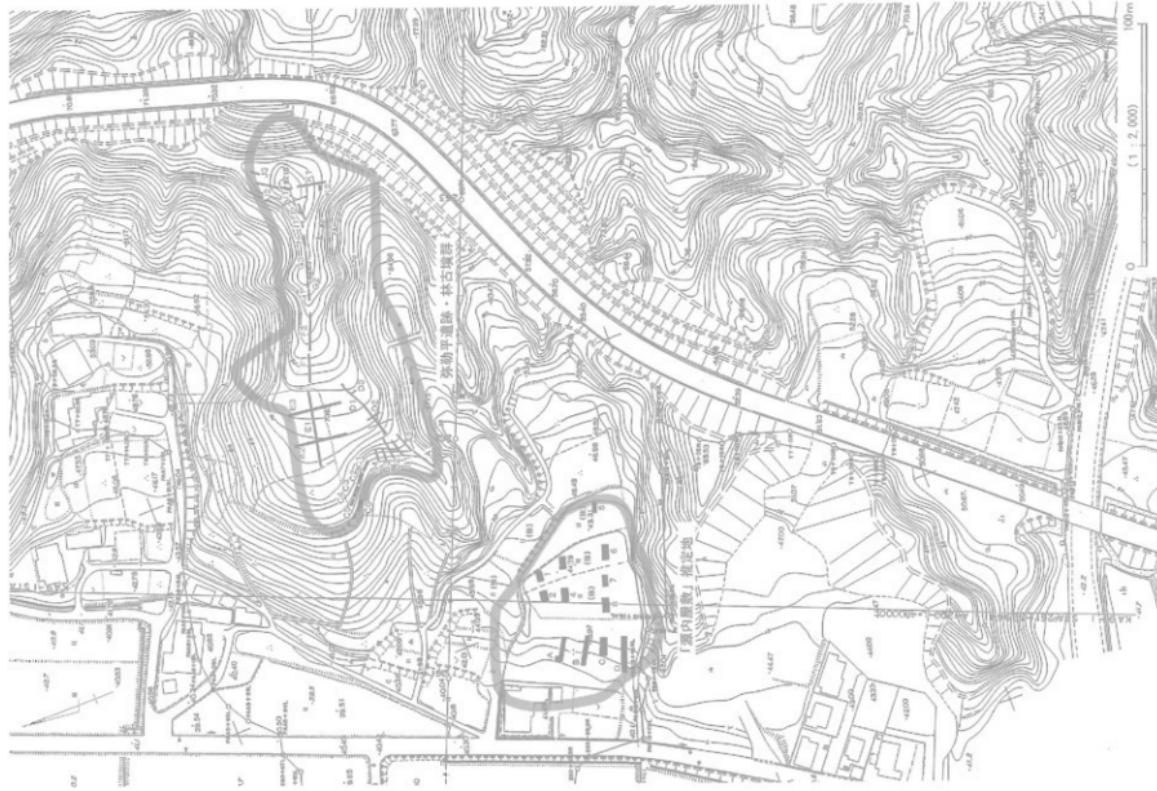


写真15 「源内屋敷」推定地 確認調査前の状況②



写真16 「源内屋敷」推定地 確認調査Tr. A の状況

第3圖 第二地点の地盤調査の概観



第7圖 第二地点の地盤調査対象範囲と試掘溝配図

第4節 弥勒平遺跡の調査成果

1. 調査区とグリッドの配置について（第3・9図、第4表）

調査区は、林古墳群、林遺跡の北側に位置し、森町バーティングエリア予定地の調査箇所統一グリッド番号のd22～i27グリッドにあたる（第3・9図）。なお、第4表に調査時（旧グリッド番号）と報告時（正式、新グリッド番号）の対応関係を記した。

遺跡の緯度経度は、世界測地系（日本測地系2000）で調査区の中央で北緯34°49' 35.3"、東経137°54' 12.6"、北西隅で北緯34°49' 36.1"、東経137°54' 11.6"、北東隅で34°49' 36.1"、東経137°54' 13"、南東隅で北緯34°49' 34.8"、東経137°54' 13.6"、南西隅で北緯34°49' 34.6"、東経137°54' 11.8"である。

第4表 弥勒平遺跡 グリッド番号新旧対応表

目	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
D5	d22	E5	e22	F5	f22	G5	g22	H5	h22	I5	i22
D6	d23	E6	e23	F6	f23	G6	g23	H6	h23	I6	i23
D7	d24	E7	e24	F7	f24	G7	g24	H7	h24	I7	i24
D8	d25	E8	e25	F8	f25	G8	g25	H8	h25	I8	i25
D9	d26	E9	e26	F9	f26	G9	g26	H9	h26	I9	i26
D10	d27	E10	e27	F10	f27	G10	g27	H10	h27	I10	i27

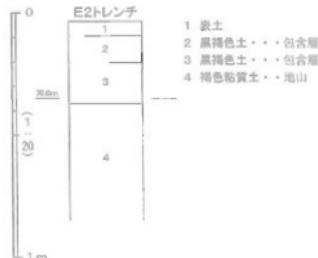
2. 基本土層について（第8図）

弥勒平遺跡は基本的に4層で構成され、表土層の1層と包含層の2・3層、地山層の4層に区分することができる。この4層上面が遺構面であり、遺構に伴わない遺物は1～3層から出土した。

3. 遺構・遺物の概要

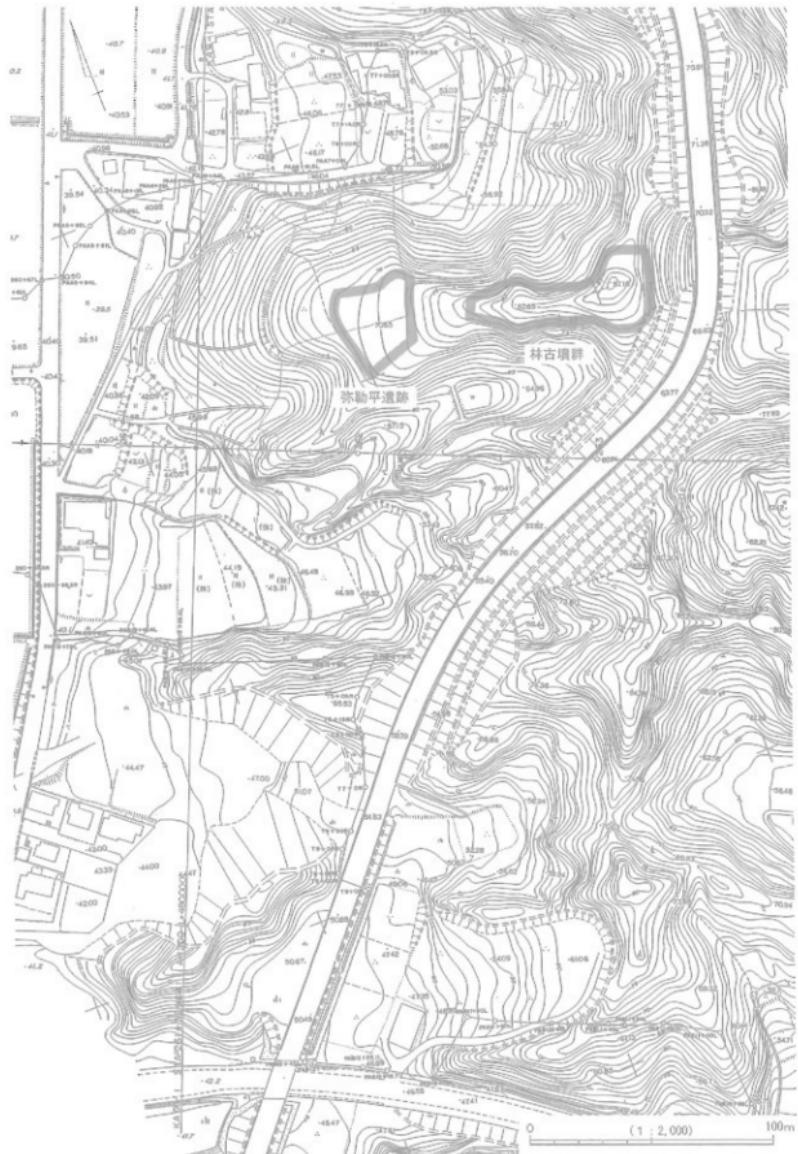
弥勒平遺跡では、竪穴建物（SH）3軒（1箇所に重複）、土坑（SK）25基、溝（SD）4条、ピット（SP）125基、性格不明遺構（SX）12基、土器棺墓の可能性がある土器出土箇所1基（SXI2）を確認した。このうち遺物が伴うのはSH02（SL01を含む）とSXI2のみで、その他の遺構は遺物が伴わないため、時期は特定できない。遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器（古墳時代）、土師器（古墳時代）、山茶碗、古瀬戸、かわらけ（近世）、陶磁器（近世）、土管、銅鏡が出土した。

なお、弥勒平遺跡の調査では、林遺跡から下る尾根の傾斜角度がややきつい斜面には遺構は築かれていない。竪穴建物をはじめとした遺構は傾斜が非常に緩く平坦地に近い部分に築かれており、尾根の平坦面を利用したことは明らかである。



第8図 弥勒平遺跡 基本土層図

第4節 弊動平道跡の調査成績



第9図 弥勒平遺跡の本発掘調査対象範囲

4. 調査の成果

(1) 穫穴建物 (SH01~03, 第11・20図, 第5・10表, 図版4・5・7)

SH01~03はf 23~f 24グリッドに位置する。同一箇所に建てられた竪穴建物で、すべて隅丸方形平面である。

遺構内に設定した土層の観察によって建物の建設順序を確認すると、G-G'断面で北側の土層で5層を切り込んで4層が堆積していることから、SH03を破壊してSH02が造られたことが判明する。また、B-B'断面で3・7層がSH02の範囲を覆っており、それを取り除くとSH01の掘方が確認できたため、SH02がSH01を破壊して造られている。SH01とSH03の前後関係が不明であるが、平面形態がSH03の隅角が丸みを帯びて梢円形（小判形）に近く、SH01が方形に近いことを遼江の竪穴建物形態の変遷から考えると、SH03がSH01よりも古い可能性が高い。したがって、SH03→SH01→SH02の順に建てられた可能性が高い。

また、このほか炉跡の可能性があるやや被熱を受けたような痕跡がSH02の南西隅に接するように確認できた。これが炉跡だとすれば、さらにもう一軒の竪穴建物が存在することになる。

①1号竪穴建物 (SH01, 第11図, 第5表, 図版4・5)

建物 1号竪穴建物（以下、SH01）は、隅丸方形平面である。2号竪穴建物（以下、SH02）よりも一回り小さく、南北3.85m×東西3.25m、深さ0.1mである。主柱穴（P1～P4）は4本ともに確認でき、検出面から0.45m程掘り込まれている。根固めのための礎石は確認できない。柱穴の直径は、25～30cmで、柱間は南北約2.35m（芯芯間、以下同じ）、東西約2.25mである。主軸（長軸）は、N-5°-Wであり、SH02・03と同方向に主軸を向ける。

炉 SH01に伴う炉跡は確認できない。SH02の構築の際に破壊された可能性が高い。

出土遺物 SH01からの出土遺物はない。

時期 時期は特定できないが、方形平面の建物であること、弥生時代後期以降の竪穴建物である可能性が高い。

②2号竪穴建物 (SH02, 第11・20図, 第5・10表, 図版4・5・7)

建物 SH02は隅丸方形平面で、規模は南北約4.65m×東西約4.45mである。主柱穴（P5～P8の可能性が高い）は4本ともに確認でき、検出面から0.3m程掘り込まれている。根固めのための礎石は確認できない。柱穴の直径は15～25cmであり、東西約2.5m、南北約2.35mである。主軸はN-5°-W（あるいはN-85°-E）である。東側壁面近くに壁溝が一部残存する。幅0.2mである。

床面には全体的に黄褐色粘質土（7層）による貼床が行われている。この上位に堆積する3層は覆土の可能性が高い。

炉 炉（SL01）は、建物の北側ほぼ中央に位置しているおり、SH02に伴う可能性が高い。ただし、SH01の北側中央でもあり、SH01に伴う炉の可能性もある。炉の形状について、平面形は隅丸方形に近

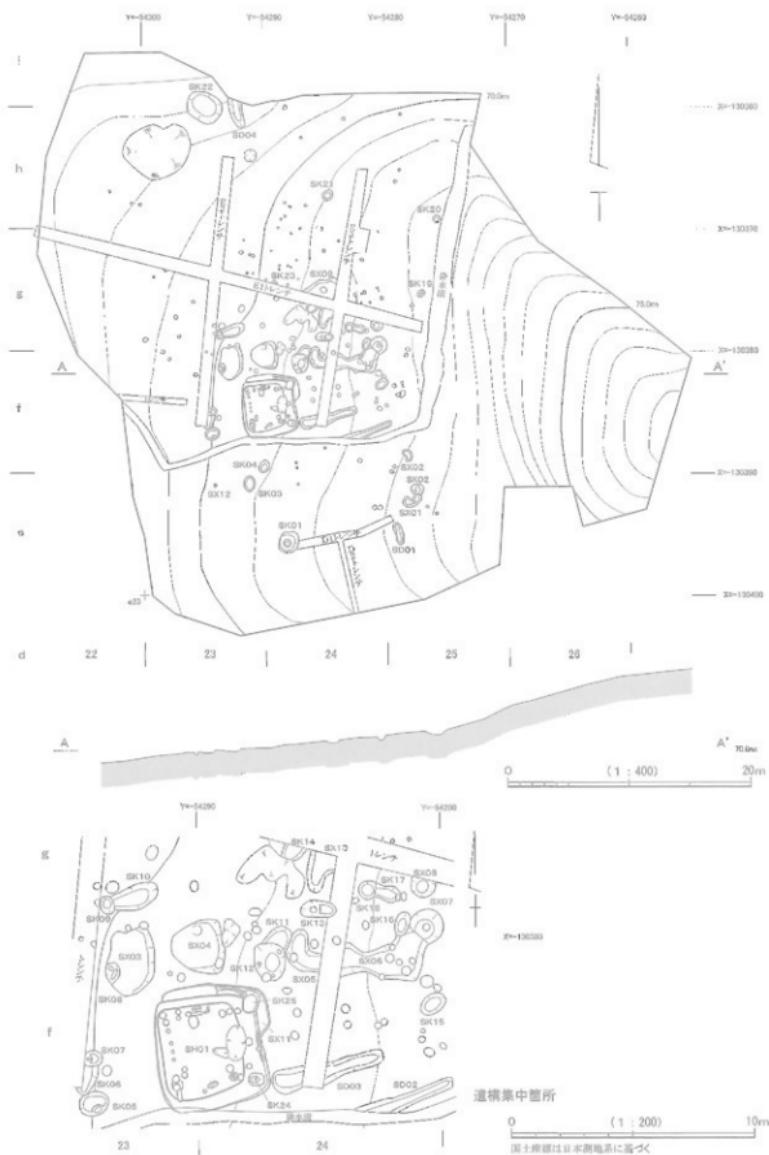
第5表 弥勒平遺跡 穫穴建物の概要

遺構名	測図	図版	グリッド	主軸方位	南北	東西	深さ	床面	遺物	備考
SH01	11	4・5	f 23~24	N-5°-W	3.85	3.25	0.1	不明	なし	SH02に破壊される。
SH02	11	4・5	f 23~24	N-5°-W	4.65	4.45	0.2	貼床	弥生土器か 土器台付臺	SL01・SK24を伴う。
SH03	11	4・5	f 23~24	N-5°-W	0.5+	3.5+	0.1	不明	なし	SH02に破壊される。

※表記 +（プラス）=以上

単位（m）

第4節 弥勒平道路の調査結果



第10図 弥勒平遺跡 全体図

い楕円形で、断面は箱形である。内部には黄褐色の粘質土（11層）を充填し、地床炉とし、一部被熱された部分（10層）が残存し、その上位には黒色土（8層）が残存する。石材の利用は確認できない。

大きさは長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ約0.1mである。

貯藏穴 貯藏穴の可能性がある土坑（SK24）が建物内の南東隅角部に掘削されている。平面形は楕円形で、断面は2段状の掘り込みであり、東側がやや深い。2段状の掘り込みは貯蔵用容器を納めるための工夫であろうか。東西0.65m、南北0.5m、深さ0.3mである。

出土遺物 SL01で弥生土器小片（2～5・7・9・13）が出土している。

条痕文土器（2～5・7）は壺・甕片であるが、小片のため器種を特定できない。2～5は貝殻条痕の各条の幅がやや広いことから中期前半の丸子式に位置づけられる可能性が高い。一方、7は上記した2～5と比較すると条の幅が狭く、やや新しく位置づけられることから、後述する四線文のある土器（8）と同時期で、嶺田式土器に位置づけられる可能性が高い。

ただし、SL01で出土していることから、同一の壺（細頸壺）破片の可能性があるが、炉に壺が設置されることは考えにくいため、SH02建設の際の混入の可能性がある。

9は細かい条痕が施されたものであり、白岩式併行段階に見られる調整に類似することから中期後半段階に位置づけることができる。

13は台付甕の台基部の破片である。磨滅が著しく、調整痕は確認できない。やや新しい印象を受けるため、弥生時代後期以降に位置づけられる可能性が高い。

時期 SH01・SH03を破壊していることから、SH01・03より後出する。SL01出土の弥生土器片は多くが中期前葉～後葉の条痕文土器である。一方で、台付甕は条痕文土器と同時期に位置づけるのは躊躇する。東造江では、中期後葉以降楕円形平面となり、後期前半は円形・楕円形の建物が多いこと、出土した台付甕片が後期以降に位置づけられる可能性が高いことを考慮すると、弥生後期～古墳時代前期の竪穴建物の可能性がある。

③3号竪穴建物（SH03、第11図、第5表、図版4・5）

建物 3号竪穴建物（以下、SH03）は、SH02に破壊されて、北辺のみが確認できた。平面形は隅丸長方形であるが、SH01・SH02と比較して、北辺がやや円弧を描いていることから、小判形にやや近い隅丸方形であった可能性もある。残存する南北0.5m、東西3.5m、深さ0.1mである。

北東壁際に壁溝が確認できる。壁溝は幅約0.2mである。主柱穴は4本（P9～P12）確認できる。直径約20～30cmで、検出面から0.35mほど掘り込んでいる。主柱穴間距離は南北約2.9m、東西約2.75mで、主軸はSH01・02同様、N-5°-Wと想定する。

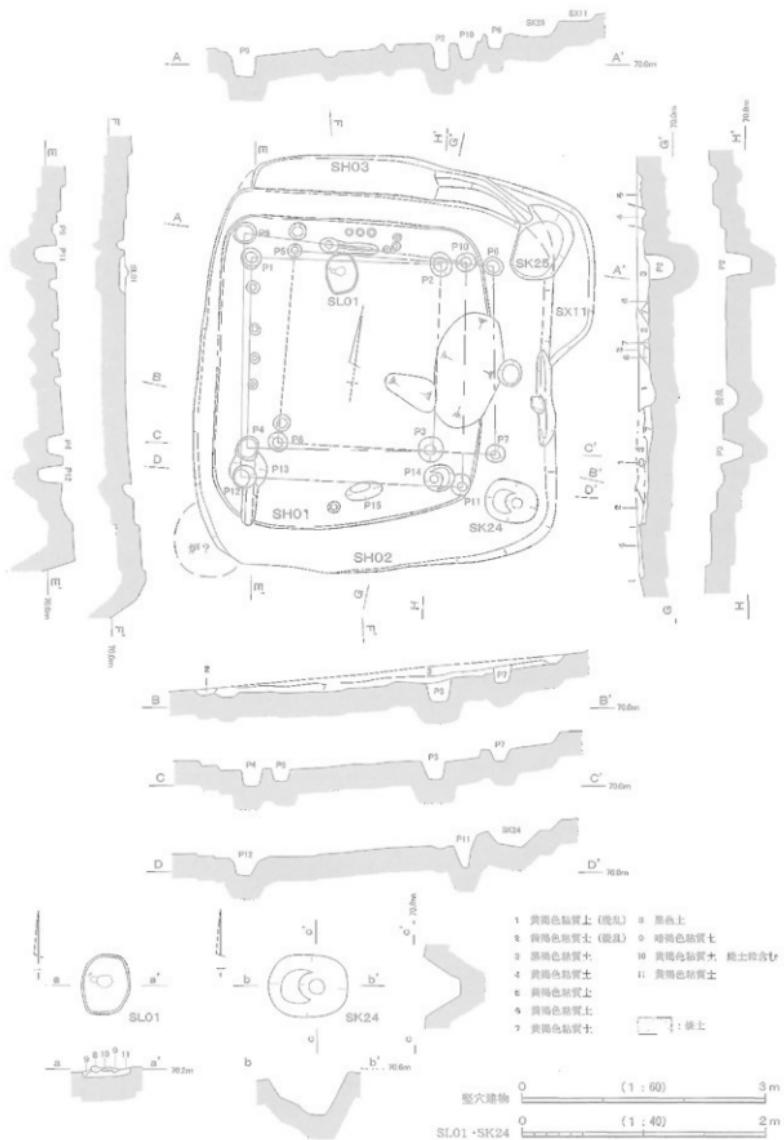
炉 炉はSH02構築の際に破壊された可能性が高く、確認できない。

出土遺物 出土遺物はない。

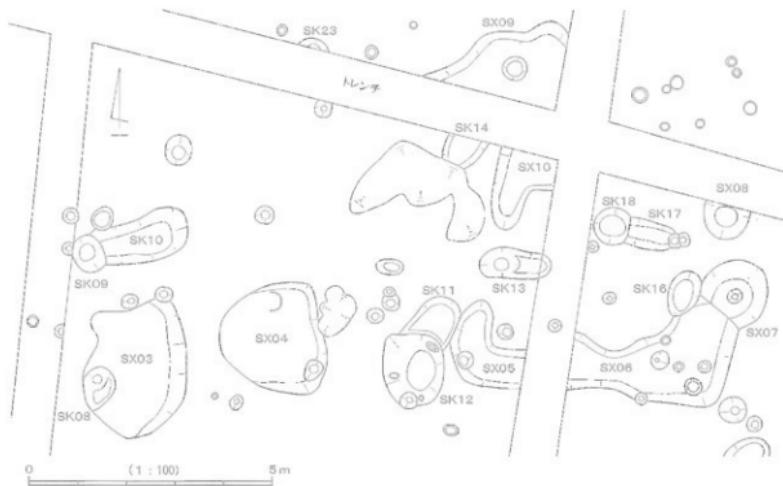
時期 出土遺物がなく、時期を特定することはできないが、SH02に破壊されていることからSH02に先行する。隅丸長方形であるが、北側の短辺が直線ではなく、やや円弧を描くことから弥生時代後期後に位置づけられる可能性が高い。

④竪穴建物の可能性のある遺構（SX11、第11図、図版4・5）

SX11は、SX11とした遺構を破壊している。このSX11は東側が円弧を描いており、SK25がこの遺構に伴う貯蔵穴とすれば、楕円形（小判形）平面の竪穴建物の可能性も否定できない。このSX11が建物とすれば、4軒の竪穴建物が同一箇所に建て替えられたことになる。



第11図 弥勒平遺跡 穴穴建物実測図



第12図 弥勒平遺跡 調査区中央部土坑・性格不明遺構位置図

⑤炉と想定される部分（第11図）

SH02の南西隅角部でやや被熱を受けたような地山部分を確認したため、炉跡の可能性を想定して周囲を精査したが、掘り込みや粘土の貼り付けは確認できないことから、その範囲（SH02南西隅角部の「炉？」部分）を記録するに留めた。

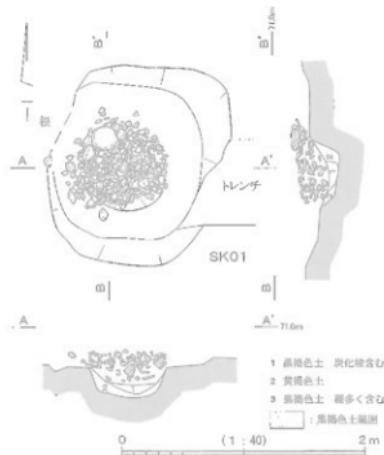
この部分が炉跡であるとすれば、SH01～SH03と重複する竪穴建物が存在した可能性が高くなり、3回の建て替えが行われたことを考慮しておく必要がある。

調査区内では、竪穴建物の掘方まで削平された遺構が多い可能性があるが、竪穴建物に伴う柱穴と想定される柱穴（SP）があり確認されておらず、当初の建物数もそれほど多くはなかった可能性が高い。

しかし、このSH01～SH03は少なくとも2回の建て替えが行われていることが判明したため、数軒の建物がある程度の長期間この場所に建て替えを行なながら存在していたことが想定できる。

(2) 土坑 (SK01～SK25, 第12～16図, 第6表, 図版6)

遺跡内で25基確認した。共伴する遺物がなく、その性格等は不明である。



第13図 弥勒平遺跡 土坑実測図① (SK01)

第6表 弥勒平遺跡 土坑の概要

遺構名	押岡	図版	グリッド	形状	南北	東西	深さ	遺物	備考
SK01	13	6	e24	圓丸方形	1.60	1.50	0.35	なし	
SK02			e25	円形	0.83	0.90	0.4	なし	
SK03			e23	椭円形	1.20	0.90	0.18	なし	
SK04	14	6	f23～24	椭円形	0.94	0.80	0.2	なし	
SK05			f23	椭円形	0.90	1.17	0.28	なし	
SK06			f23	長椭円形	(1.35)	(0.55)	0.15	なし	
SK07			f23	椭円形	0.64	(0.66)	0.27	なし	
SK08			f23	不整椭円形	0.90	0.64	0.22	なし	
SK09			g23	椭円形	0.77	0.63	0.25	なし	
SK10			g23	不整椭円形	1.00	(1.98)	0.07	なし	
SK11			f24・g24	椭円形?	(1.16)	0.95	0.12	なし	
SK12	15		f24	不整椭円形	1.60	1.30	0.24	なし	
SK13			g24	椭円形	0.64	1.44	0.25	なし	
SK14			g24	椭円形?	0.82	(0.66)	0.15	なし	
SK15			f24～25	椭円形	1.00	0.63	0.12	なし	
SK16			g24	椭円形	0.98	0.64	0.28	なし	
SK17			g24	長椭円形	0.59	(0.98)	0.14	なし	
SK18			g24	円形	0.78	0.74	0.16	なし	
SK19			g25	円形	0.58	0.48	0.2	なし	
SK20	16		h25	円形	0.54	0.56	0.18	なし	
SK21			h24	円形	0.70	0.80	0.27	なし	
SK22			h23・23	不整椭円形	2.25	2.85	0.5	なし	
SK23			g24	円形?	(0.15)	(0.58)	0.18	なし	
SK24	11		f24	椭円形	0.50	0.65	0.35	なし	SH02の野藏穴
SK25	16		f24	椭円形	0.93	0.68	0.13	なし	SX11が堅穴建物だとすれば野藏穴の可能性あり。

※括弧内は残存数値

※深さは最深部の深さ

単位 (m)

第6表に、遺構の規模と所在する位置（グリッド）を示した。

SK01 SK01は、二段の掘方の土坑である（第13図、図版6）。上段は隅丸長方形で、東西1.5m、南北1.6m、深さ0.1mで、下段は上段の掘方のほぼ中央に掘り込まれた円形坑で直径0.55～0.6m、深さ0.25mである。底面はほぼ水平である。検出面からの深さは、0.35mである。この下段の掘方の上部に礫を集積するもので、その下位には1層とした黒褐色土層とその周囲に2層（黄褐色土層）が確認できる。礫を含む土砂（3層）がレンズ状に堆積していること、2層が1層と掘方の間に充填された状況を示すことから、黒色土層は有機質物質が腐朽した痕跡である可能性が高い。この想定が正しいとすれば、本来集石は地表面に見える状態で小さな円形（直径0.7～0.8m）で塚のように盛り上がっていった可能性が高い。黒色土の平面形は隅丸方形に近く、長さ0.4mであることから、一辺0.4m以下の箱などが納められていた可能性がある。集積された石材は、直径20cmの円形の石材（川原石）を除いては、10cm以下の角のある小礫を使用している。出土遺物がないことから時期は特定できないが、火葬骨を納めた墓（集石墓）の可能性が高い。その場合は中世以降に帰属する可能性が高い。

SK02～SK19・SK23 SK02～SK19・SK23（第14～16図、図版6）は、出土遺物がなく、関連する遺構も明確ではないことから性格を想定することは困難である。円形、椭円形、不整椭円形な土坑がある。後述するSK20・21を除いて断面が皿状の土坑で遺物が出土しないことから、風倒木や木根の痕跡の可能性もある。

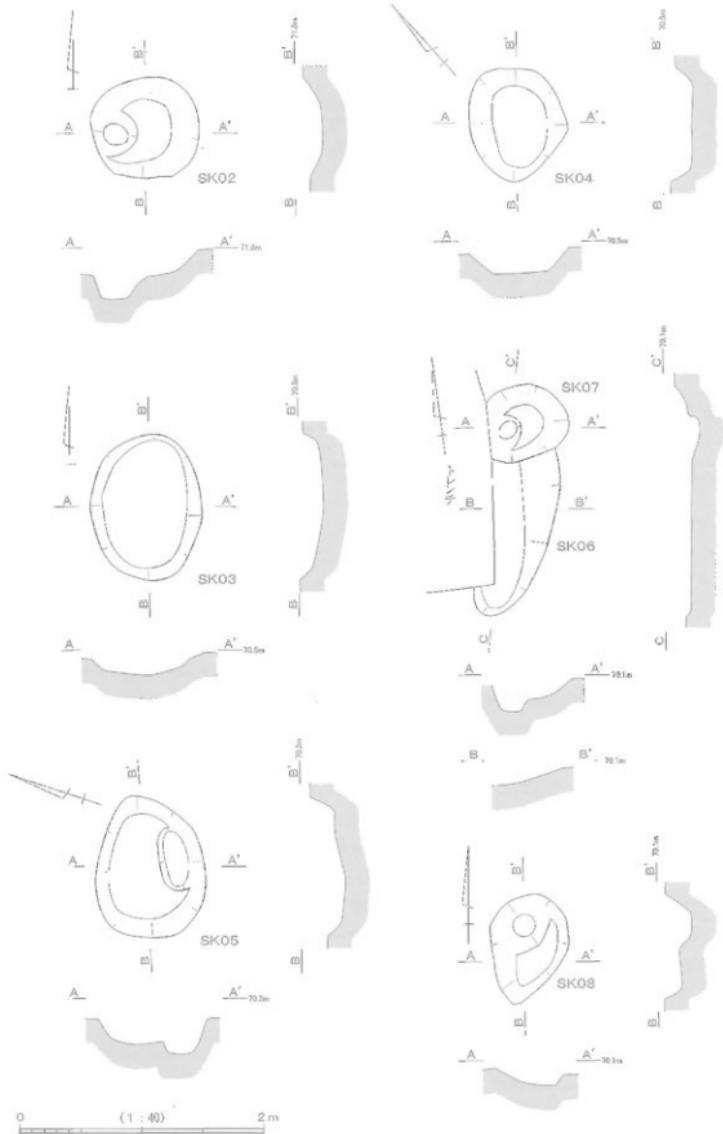
SK20 SK20（第16図）は平面円形で直径約0.55m、深さ0.18mである。底部は水平で、ほぼ直立して立ち上がるところから人為的な掘り込みの可能性が高い。

SK21 SK21（第16図）は平面円形で直径0.7～0.8m、深さ0.27mである。底部は水平で、ほぼ直立して立ち上がる。江戸時代以前に遡るとすれば福棺などが据えられた可能性がある。

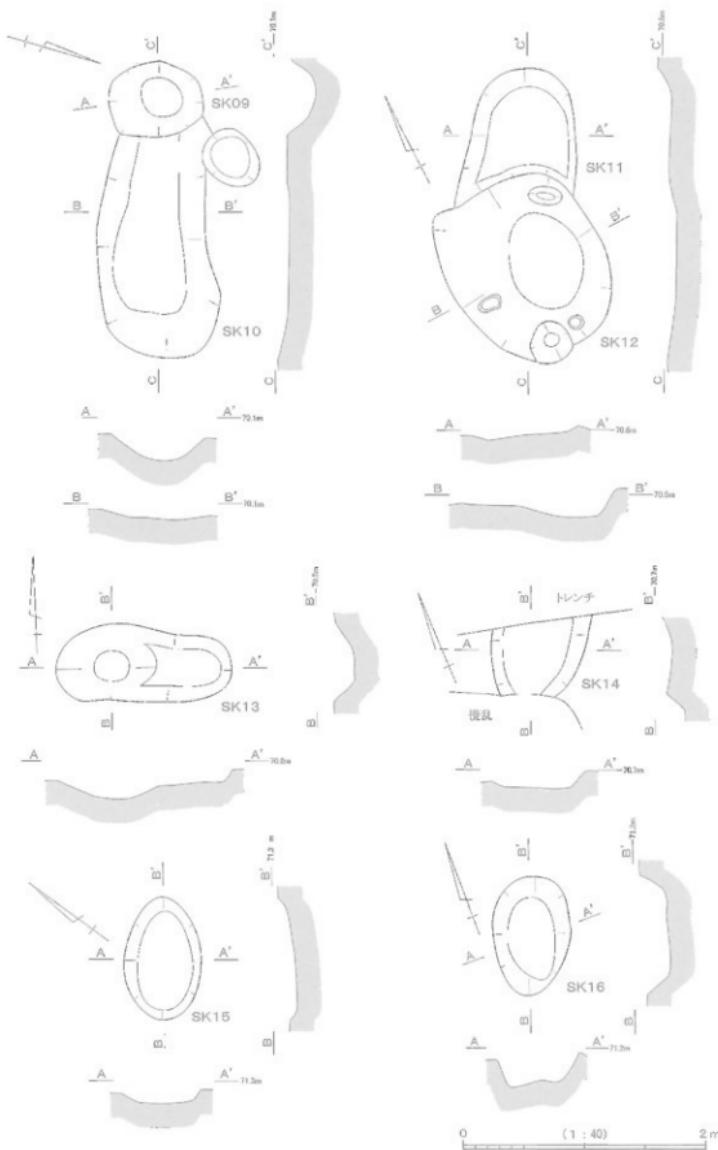
SK22 SK22は弥勒平遺跡で確認された最も大型の土坑で、平面形は不整椭円形である。長軸2.85m、短軸2.25m、深さ0.5mである。

SK25 SK25（第16図）は、SH01・03の北東隅角部で確認された椭円形の土坑で、SH03・01を破壊し

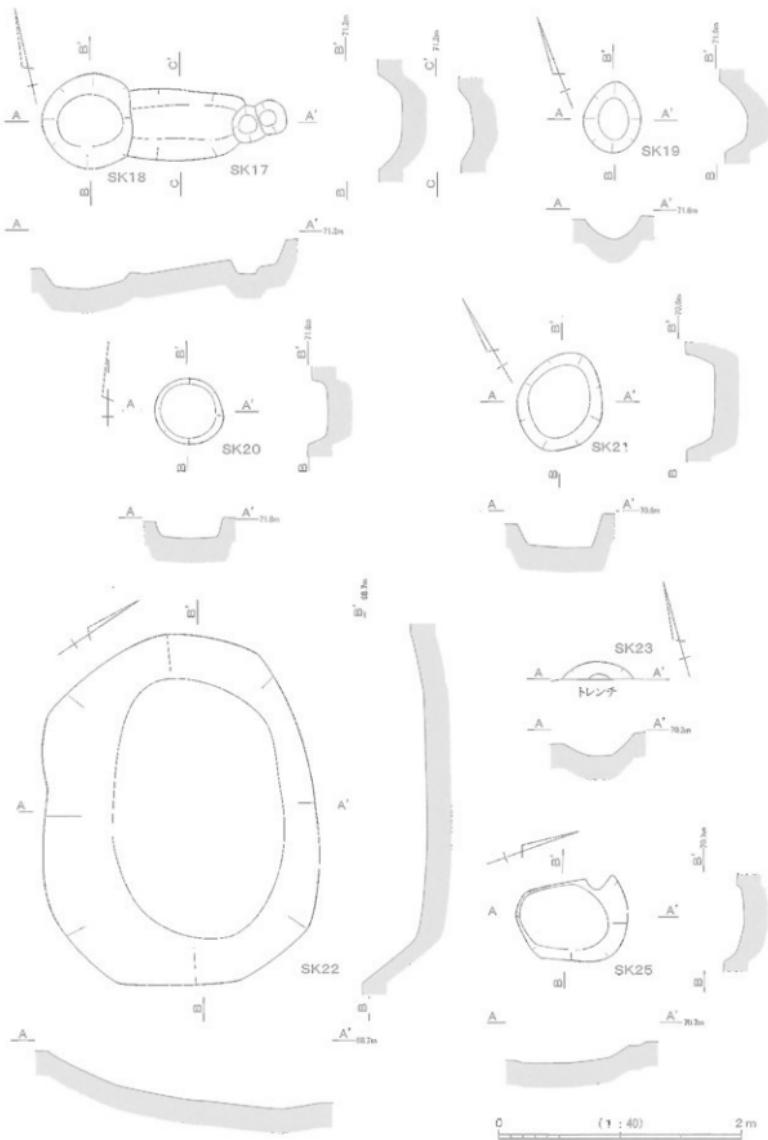
第4章 弥勒平遺跡



第14図 弥勒平遺跡 土坑実測図② (SK02~SK08)



第15圖 弥勒平遺跡 土坑実測図③ (SK09~SK16)



第16図 弥勒平遺跡 土坑窓測図④ (SK17~SK23, SK25)

第7表 弥勒平遺跡 溝状遺構の概要

遺構名	部図	図版	グリッド	長さ	幅	深さ	遺物	備考
SD01	17	-	e25	1.90	0.62	0.2	なし	
SD02		-	f24~25	(4.88)	0.88	0.08	なし	
SD03		-	f24~25	4.84	1.00	0.16	なし	
SD04		-	h23・i23	(2.76)	1.08	0.12	なし	

単位 (m)

ているように見えたためSXIIとは別時期のものとして調査したが、SH01・03よりも古くSXIIに伴う可能性もある。SXIIが竪穴建物だとすれば、その貯蔵穴の可能性もある。

SK24 SK24(第11図)は、SH02で報告したように、SH02に伴う貯蔵穴の可能性が高い。

(3) 溝状遺構(第17図、第7表、図版4)

遺跡内で溝状遺構が4基(SD01~04)確認されている。第7表に遺構の規模と所在する位置(グリッド)などの概要を示した。

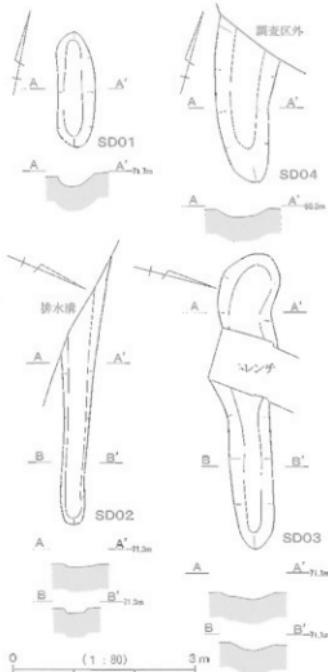
SD01 SD01は、短い溝状遺構である。断面は浅い皿状である。遺物は出土していない。

SD02 SD02は、現代の排水溝により一部が破壊された溝である。断面は浅い皿状である。遺物は出土していない。

SD03 SD03は、細長い溝で、断面皿状である。遺物は出土していない。

SD04 SD04は、調査区外から続く溝である。断面は浅い皿状である。遺物は出土していない。

なお、SD02~04は等高線に直交することから、自然流路の可能性が高い。一方、SD01は等高線に平行することから自然流路の可能性は低く、短いことから長楕円形の土坑の可能性もある。



第17図 弥勒平遺跡 溝状遺構実測図

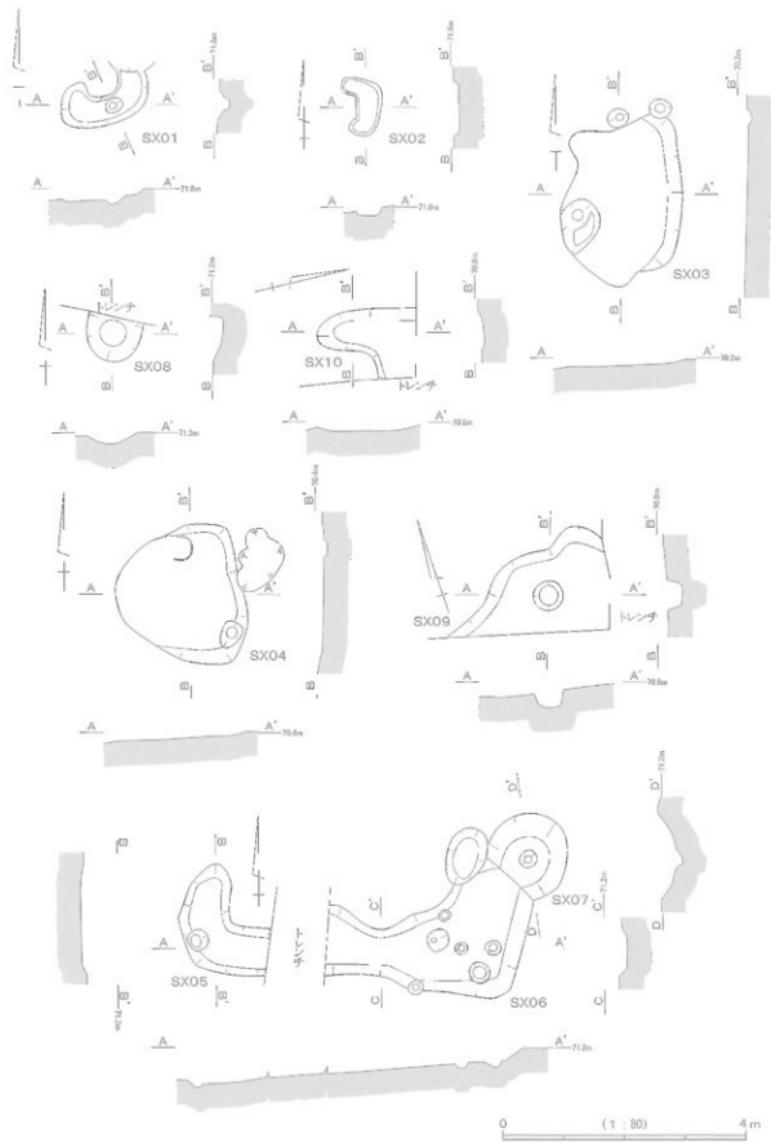
(4) 性格不明遺構(SX01~10、第18図、第8表、図版4)

性格不明の土坑状遺構が遺跡のほぼ中央で12基出土している。うちSXII・12については別途記述するためここではふれない。

SX01~SX10について不整形な遺構が多く、木の根の痕跡や樹木の倒木痕などを遺構として認知している可能性もあり、10基すべてが遺構ではない可能性もある点に注意が必要である。また、10基から遺物の出土ではなく、帰属時期を特定することはできない。

SX01・02 SX01はSK02と重複関係が確認できるが、前後関係については明らかにすることはできなかった。SX01はU字形で、深さ0.15m前後と深い。SX02はSX01と同様の形態を示す。深さ0.1m前後と深い。近接箇所にあり、対の関係にもみえることから、SX01・02が当初関連する遺構であった場合には、溝状遺構や竪穴建物の壁溝などの可能性も想定できる。

図4章 弥勒平遺跡



第18図 弥勒平遺跡 性格不明遺構実測図① (SX01~SX10)

第8表 弥勒平遺跡 性格不明遺構の概要

遺構名	押出	西版	グリッド	形状	長さ	幅	深さ	遺物	備考
SX01			e25	U字形	1.44	0.76	0.16	なし	
SX02			f25	J字形	1.00	0.42	0.1	なし	
SX03			f23~g23	不整形	2.88	2.00	0.02	なし	
SX04			f23~24・g23~24	隅丸三角形	2.24	(2.20)	0.06	なし	
SX05	18		f24	L字形	(1.52)	0.80	0.06	なし	
SX06			f24・g24	L字形	4.80	1.84	0.4	なし	SX07と同一か
SX07			f24・g24~25	円形	1.32	(1.20)	0.3	なし	SX06と同一か
SX08			g24	円形	0.72	0.72	0.2	なし	
SX09			g24	不整形	(2.70)	(1.74)	0.02	なし	
SX10			g24	不整形	(1.62)	1.12	0.08	なし	
SX11	11		f24	隅丸方形	(2.80)	(1.82)	0.08	なし	縫穴建物？
SX12	19	5	e23	円形	0.25	0.25	0.1	弥生土器	土器棺墓か

※括弧内は残存値。

SX03・04・09・10 SX03・04・09・10は不整形な浅い遺構で、自然の窪みなどに土砂が堆積したものである可能性がある。

SX05~07 SX05・06は一連の遺構で、SX07と重複関係が確認できるが、前後関係は明確にできない。SX05・06は不整形なコ字形で浅く、自然の流路の可能性が高い。SX07は円形の土坑で、断面皿状で、その中央に小穴が確認できる。

SX08 SX08は円形の土坑状のもので、断面は皿状である。深さは約0.2mと浅い。

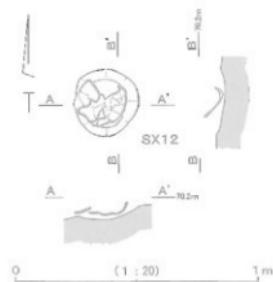
(5) 土器棺墓の可能性のある土器出土箇所 (SX12, 第19・20図, 第8・9表, 図版5・7)

遺構 e23グリッドから弥生土器壺の底部～胴部1点が出土した。壺は底部を下にして、胴部を直立から45度ほど南にやや傾けた状態で出土した。この土器の周囲には地山とやや異なる土砂が確認されたため、その存在について確定ではないが、土壙が存在する可能性が高い(第19図には土坑があったものとして図示)。周囲には縫穴建物などは確認できないことから、土壙に納められた土器棺である可能性が高い。

遠江では、弥生時代中期前半～後葉の集落の様相が不明確であることから確定できないが、この時期の事例に土器棺墓が多い点を考慮すれば、この遺構も土器棺墓である可能性が高い。

遺物 弥生土器が1点(10)出土した。

10は壺で、幅の狭い底部から外反しながら立ち上がり、胴部は丸みをもって膨らむ形状である。底部は平底である。磐田市馬坂遺跡SK1出土土器(磐田市教委1998)のような形状を呈すると推測できる。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明であるが、その形状から細頸壺の可能性が高い。弥生時代中期に帰属する可能性が高い。なお、磨滅が著しいとはいえた部下半に条痕調整が確認できないことは、弥生時代中期後葉(白岩式)に帰属する可能性が高い。

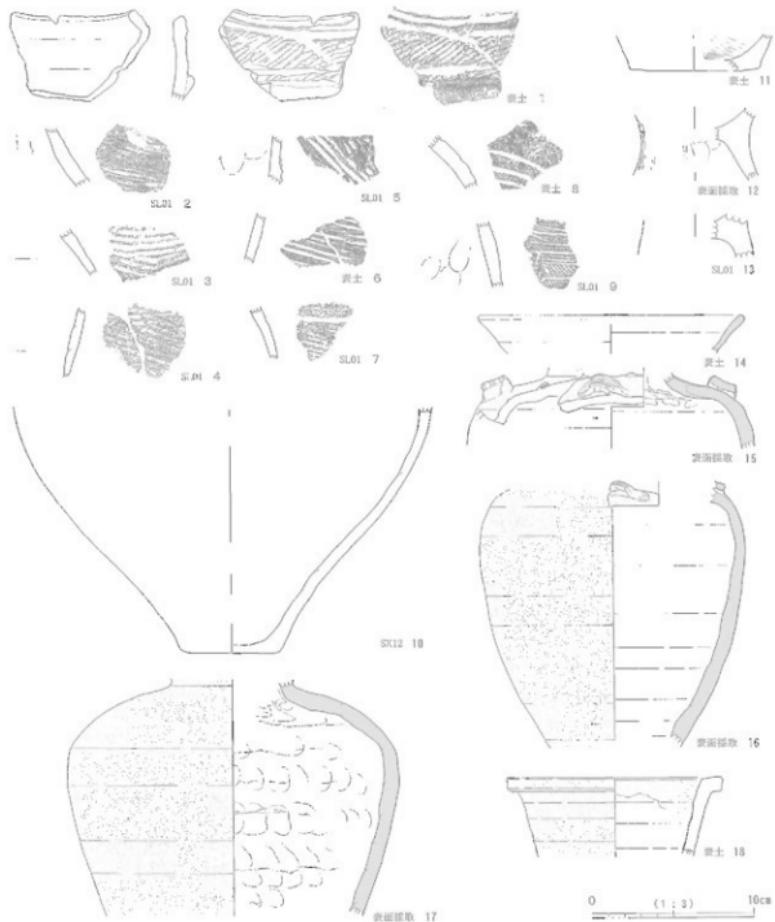


第19図 弥勒平遺跡 性格不明遺構実測図②
(SX12)

(6) 遺構外出土遺物 (第20図, 第9表, 図版7・8)

弥勒平遺跡では、遺構に伴わざる縄文土器や陶磁器が出土しており、ここでその遺物について報告する。縄文土器 深鉢の口縁部破片(1)である。口縁直下は2条の半截竹管状工具で施した凹線文、地文を挟んで貼付隆起突帯がある。区画内は縄文で充填される。縄文時代中期後半の咲烟式土器と併行する取組式土器の可能性が高い(註2)。

このほか、縄文土器の小片が出土したが文様がなく、部位も特定できないため図示していない。



第20図 弥勒平遺跡 出土遺物実測図①

弥生土器 壺（6・8・11）、台付壺（12）が出土した。

条痕文土器（6）は壺・壺片であるが、小片のため器種を特定できない。6はSL01出土遺物の項で記述した2～5と比較すると条痕の幅が狭く、やや新しく位置づけられることから、下記に記述する四線文土器（8）と同様、嶺田式土器に位置づけられる可能性が高い。

四線文のある壺（8）は、横方向に波状の文様を施したもので、弥生時代中期中葉の嶺田式土器壺である可能性が高い。

これらの土器は弥生中期中葉に位置づけられるもので、林遺跡で出土している土器棺墓や方形周溝墓

よりも時期的に一段階古い。

11は壺の底部片である。平底で木葉痕はなく平滑に仕上げられている。12は台付壺の台基部片である。外面にはハケメ調整、内面には指頭圧痕が残る。11・12については時期を特定することはできないが、12は後期の土器である可能性が高い。

須恵器 須恵器片が出土している。口縁部などの特徴的な部位は出土していないため図示していないが、胎土などの特徴から6世紀末～7世紀代の須恵器（湖西産）の可能性が高い。

山茶碗(14) 口径16.3cmの碗で、口縁部はやや薄手でわずかに外反する。器形や胎土の特徴から知多産山茶碗で、中野編年知多5型式（赤根・中野1994）、13世紀前半～中頃に位置づけることができる。

古瀬戸(15～17) 古瀬戸灰釉四耳壺、灰釉瓶子片が10数片出土し、形状や釉薬の状況から少なくとも3個体（四耳壺2、四耳壺か瓶子1）存在する可能性が高い。

15・16は四耳壺で、ともに肩部の破片であるが、釉薬の色調や掛かり具合から別個体と判断した。15は肩部の破片で、外面に4箇所突起を貼り付けるもので、突起の上面には5条の沈線が施されている。内面は平滑に撫でられている。16は肩部に最大径をもつもので、4箇所に突起を貼り付けるものである可能性が高い。耳上面には、5条の沈線が施されている。内面は回転ナデが行われ、粘土紐巻き上げの痕跡はナデ消されている。

17は瓶子の肩部片である。肩部に最大径をもち、内面は粘土紐巻き上げを行う際の指押えの痕跡が明瞭に残る。

それぞれがもつ特徴から古瀬戸前II期（藤沢1995a）、13世紀前葉～中葉に位置づけることができる。

なお、弥勒平遺跡が所在する尾根から見下ろす眼下には、供養塔（五輪塔や一石五輪塔）が集められた墓地（図版10、写真11参照）が所在していた（現在はさらに近くの高雲寺に移転された）。この墓地には中世から近世に亘る石塔が確認できることから、移動されたものであることは明らかである（足立2008）。これらの石塔には本来伴うべき蔵骨器は確認できないが、石塔の時期よりもここで報告した古瀬戸四耳壺、瓶子の方が古いことから、石塔を伴わないこれらの古瀬戸を蔵骨器として用いた中世墓があつた可能性が高い。

土管(18) 近代（明治時代）以降の土管の可能性が高い遺物が出土した。逆ハ字形に開いた後、口縁部で急激にL字形に屈曲させ、口唇部、口縁部外面に面をもつものである。

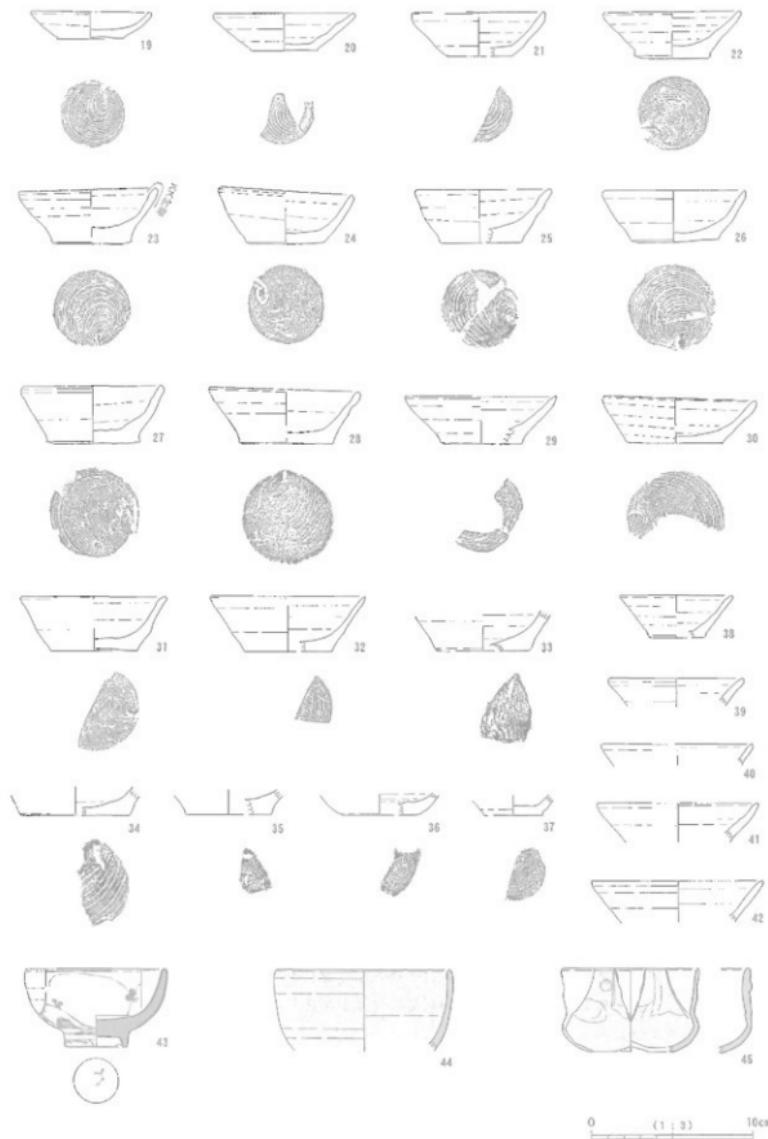
(7) 確認調査出土遺物（第21～26図、第9・10表、図版8・9、写真17）

ここに確認調査時に出土した遺物を報告する。

Aトレーナー出土品について 試掘確認調査時にA1・2トレーナー（以下、Aトレーナーとする）から陶磁器のほかわらけ（土師皿）が多数出土し、火葬場所である可能性が考えられたが、その帰属時期が江戸時代以降であることから、本調査対象には含めなかった。ここでは、Aトレーナーから出土した錢貨、かわらけおよび陶器について報告する。なお、ここで報告するかわらけは試掘溝で出土した遺物のみを取り上げたものであり、実際には数倍のかわらけが周囲に埋蔵されていた可能性が高い。

なお、上述したように弥勒平には、周辺の村落の村墓が所在したとされており、その近世墓に伴うかわらけである可能性が高い。

かわらけ(19～42) すべてロクロ成形かわらけであり、色調は赤褐色～橙色を呈し、焼き上がりは良い。底部は平底である。底部が残存するものはすべて底部に糸切痕が残存する。口縁部は底部から逆ハ字形に開くが、直線的に広がるもの（20・22・28～30・32・38・42）と、内湾気味に立ち上がるるもの（19・21・23～27・31・41）がある。口縁端部は細くつまみだすもの（21・26・29・32・38・41・42）と、丸く収められるもの（19・20・22～25・27・28・30・31・39・40）がある。



第21図 弥勒平遺跡 出土遺物実測図②

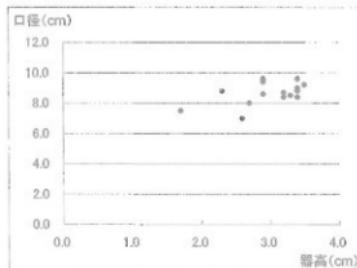
法量は19・20のように器高が低いものと、21～32・38のようにやや高いものがある。小型の19・20が口径7.5～8.8cm、器高1.7～2.3cm、底部径2.0～4.0cm、口径が小さいが19・20と比べてやや器高が高い38が口径7.0cm、器高2.6cm、底部径3.6cmである。器高が高い21～32は口径8.0～9.6cm、器高2.7～3.5cm、底部径3.8～6.0cmである。なお、口径と器高の比率によるかわらけの法量分布図・法量別出土数を第22～25図に示した。

形態的な特徴や焼き上がりからすべて江戸時代中期（18世紀）以降のかわらけである。

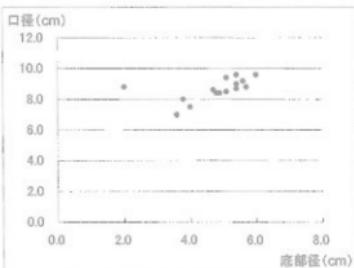
近世陶磁器 上述したかわらけのほか、陶磁器が数点出土している。このうち3点（43～45）を図示した。

43は肥前産磁器染付丸碗である。外面には花柄が描かれている。18世紀中葉に位置づけられる。44は瀬戸美濃産丸碗である。17世紀後半～18世紀初頭頃に位置づけられる。45は型碗である。志戸呂産の可能性が高い。18世紀ごろであろうか。

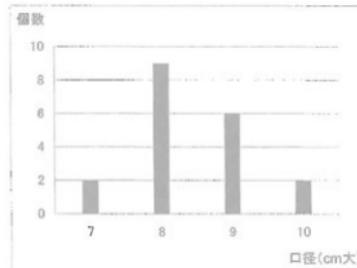
常滑 このほか図示していないが、E 2トレーナーから中世～近世（詳細な時期不明）の常滑壺片が1片出土している。



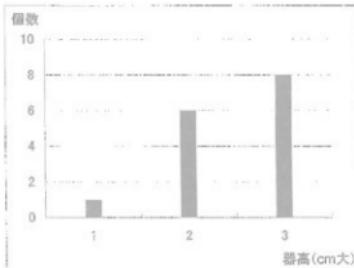
第22図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量分布図①



第23図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量分布図②



第24図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量別出土数



第25図 弥勒平遺跡 出土かわらけ法量出土数②

銭貨 「寛永通寶」 1点 (46) が出土した。古寛永の一枚銭である。

第26図 弥勒平遺跡 出土銭貨拓影



写真17 弥勒平遺跡 出土銭貨

(8) 出土遺物観察表

①出土土器・陶磁器観察表

第9表 弥勒平遺跡 出土土器・陶磁器観察表

番号	押印	回数	位置	種類	形状	部位	焼成年	口径	底径	高さ	色調(外面)	色調(内面)	備考
1			縄文土器	縄目	口縁部	10未調	-	-	-	黄褐色(10YR5/6)	黄褐色(10YR5/6)	10世紀?	
2			土生土器	灰か墨	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/3)	淡黄(2, 3YR7/3)	丸子式	
3			土生土器	灰か墨	胴部	10未調	-	-	-	灰褐色(10YR5/2)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	丸子式	
4			土生土器	灰か墨	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/3)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	丸子式	
5			土生土器	灰か墨	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/3)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	丸子式	
6			土生土器	灰か墨	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/3)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	丸子式	
7			土生土器	灰	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい黄褐色(10YR5/4)	10世紀?	
8			土生土器	灰	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい黄褐色(10YR5/4)	10世紀?	
9			土生土器	灰	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい黄褐色(10YR5/4)	10世紀?	
10			土生土器	灰	胴部	10未調	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/4)	にぶい黄褐色(10YR5/4)	10世紀?	
11			土生土器	灰	底部	20	-	(8.1)	-	明褐色(7, 5YR6/6)	明褐色(7, 5YR6/6)	白目式?	
12			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR6/6)	被(5YR6/6)	白目式?	
13			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	明褐色(10YR7/6)	にぶい黄褐色(10YR7/6)	10世紀?	
14			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/6)	にぶい黄褐色(10YR7/6)	10世紀?	
15			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	灰黒(2, 2YR7/1)	灰黒(2, 2YR7/1)	10世紀?	
16			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	灰合(7, 5YR7/1)	灰合(7, 5YR7/1)	10世紀?	
17			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	灰白(5YR7/2)	灰白(5YR7/2)	10世紀?	
18			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	明褐色(7, 5YR7/2)	明褐色(7, 5YR7/2)	10世紀?	
19			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
20			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	明褐色(10YR7/6)	にぶい黄褐色(10YR7/6)	10世紀?	
21			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
22			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
23			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
24			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
25			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
26			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
27			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
28			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
29			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
30			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
31			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
32			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
33			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
34			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
35			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
36			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
37			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
38			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
39			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
40			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
41			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
42			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
43			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
44			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
45			土生土器	灰	底部	20	-	-	-	被(5YR7/2)	被(5YR7/2)	10世紀?	
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aトレンチ													
※位置=出土位置 沢澤=貴園所取 Tr.A=福記調査Aト													

第5節 弥勒平遺跡の評価

1. 弥勒平遺跡の弥生時代～古墳時代の竪穴建物について（第27図）

弥勒平遺跡の竪穴建物の概要 弥勒平遺跡では、竪穴建物が3棟以上出土し、同一箇所で複数回建て替えられたことが判明している。この3棟は隅丸方形あるいは方形平面の竪穴建物である。これよりも遡る可能性のあるSX11が橢円形平面の竪穴建物であるとすれば、橢円形 (SX11) → 隅丸方形 (SH03)・方形 (SH01→SH02) へと変遷したことになる。ただし、弥勒平遺跡の竪穴建物内からは、弥生時代中期前葉から後期までの遺物が出土しているが小片のため時期が特定できないことから、弥勒平遺跡が面する一宮川流域の弥生時代の竪穴建物を中心に森町域の弥生時代の集落の竪穴建物との比較を通じて、弥勒平遺跡の竪穴建物（隅丸方形・方形平面建物）の周期的な位置づけや評価について考えたい。

森町域の竪穴建物との比較 一宮川流域では、片瀬遺跡と綱掛山古墳群（遺跡）で弥生時代中期後葉～後期中葉の竪穴建物が確認されている（静岡埋文研2009）。それらの平面形は方形（K 1類・T 2類）、橢円形（K 2・K 3類）・円形（K 2類）である（田村2009, 第27図）。調査者の田村隆太郎氏によれば、片瀬遺跡では中期後葉に一部丸みを帯びた方形の竪穴建物が出現し、橢円形・円形平面の竪穴建物が続いている現れ、以後方形と橢円形の建物が併存する（田村2009）。綱掛山古墳群では、方形の竪穴建物が弥生後期前葉～中葉にかけて確認できる。竪穴建物の橢円形⇒円形⇒方形という流れが想定される（井村2002）が、片瀬遺跡、綱掛山古墳群では併存することから、時期差ではなく、集団差と考えられる可能性がある（田村2009）。

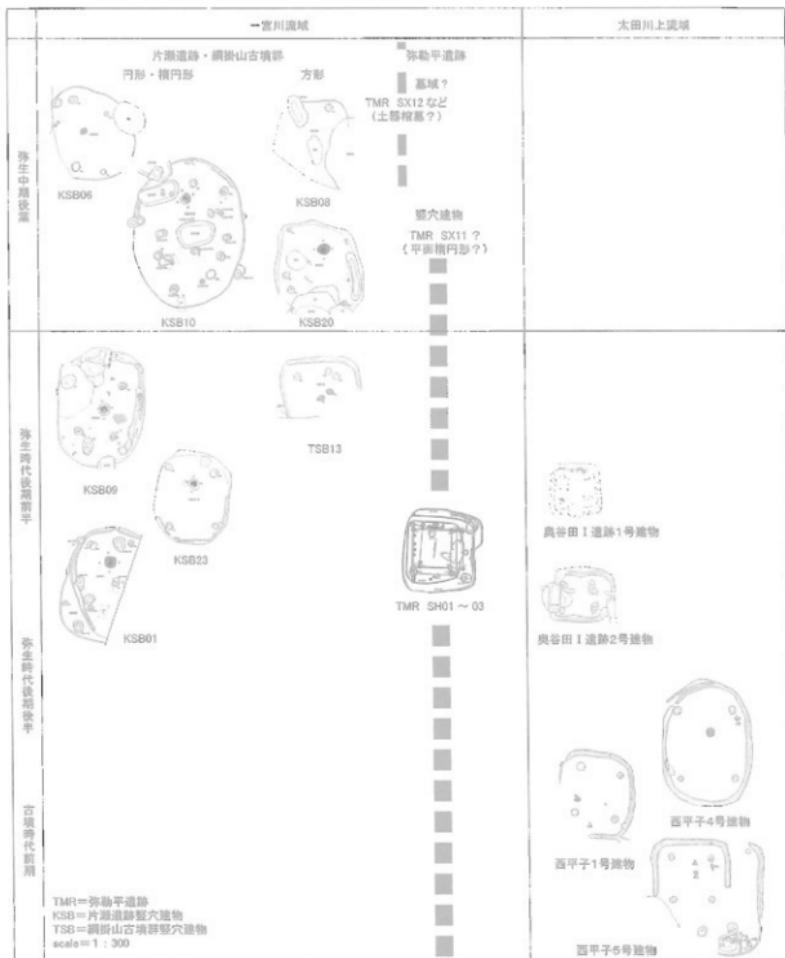
つづいて、太田川流域では、飯田丘陵の西平子遺跡（森町教委1996）、園田丘陵の奥谷田Ⅰ遺跡（森町教委1998）などで竪穴建物が確認されている。奥谷田Ⅰ遺跡では、2軒の竪穴建物が確認され、両者ともに方形の建物である。1号竪穴建物では良好な状態で土器が出土しており、菊川式新段階（古）の遺物であることから、後期前半ごろに位置づけられている。また、2号建物の遺物の残存状況は良好ではないが1号建物に続く後期後半に位置づけられており（竹内1998）、当遺跡では後期前半に方形平面の建物が出現していたことが判明している。

また、西平子遺跡では23軒の竪穴建物が確認され、円形、橢円形、不整形な平面のもののほか方形の竪穴建物も確認されている。1・5号竪穴建物（SB01・05）がそれで、1号竪穴建物は結節縄文を内面に施すことなどから後期後半（菊川式新段階）に、5号竪穴建物は瓢箪形壺やS字壺C類を伴うことから古墳時代前期初頭（元屋敷式段階）に位置づけることができる（森町教委1996）。西平子遺跡では方形平面と橢円形平面の建物が併存することから時期差ではなく、性格差であることが想定されている（伊藤1996）。

弥勒平遺跡の竪穴建物の想定される時期 以上のように、森町域の太田川流域と、その支流である一宮川流域では、平面方形（隅丸方形を含む）の竪穴建物は、中期後葉に出現し、後期前半～古墳時代前期を通じて存在していることがわかる。弥勒平遺跡の竪穴建物は最も古い時期の可能性のある隅丸方形平面の可能性の高いSH03は壁溝を伴っており、片瀬遺跡の中期後葉の方形建物は壁溝を伴わないこと、綱掛山古墳群や奥谷田Ⅰ遺跡では後期前半の竪穴建物には壁溝をともなうことから、弥勒平遺跡のSH03は最も遡っても後期前半である可能性が高い。同一箇所に建設されたSH03より新しい可能性のあるSH01、最終段階のSH02は、SH03が後期前半であれば、前者は前半～後半、後者は後期後半～古墳時代前期に位置づけられる可能性がある。

方形平面竪穴建物の位置づけ 伊藤、田村両氏が指摘する（伊藤1996、田村2006）ように、森町域における弥生時代の竪穴建物は橢円形⇒方形へという周期的な変遷ではなく、両者が中期後葉から併存していた。建物の平面形の違いに質的な差が存在しているのか明確ではないが、弥勒平遺跡のSH01～03

第4表 弥勒平遺跡



第27図 森町域における弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴建物の変遷

は方形建物であることから、その導入に当たっては森町域の方形建物を構築した集団との関係が窺える。

丘陵上の墓域との関係 弥勒平遺跡が営まれた丘陵尾根上には林遺跡（静岡埋文研2006）などの方形周溝墓、土器棺墓が存在しており、竪穴建物と同時期と想定される弥生時代後期のものも確認されている。弥勒平遺跡では一時期には1棟のみの存在であることから集落と墓域の関係とまではいえないものの、墓域と竪穴建物の関係について考えるうえで貴重な資料となろう。

2. 弥勒平遺跡の中世陶器について

(1) 中世における弥勒平遺跡の陶器の構成について（第28図、第11・12表）

弥勒平遺跡では、中世の遺構は確認できないが、山茶碗、古瀬戸、常滑などが確認できることから、時期別、産地別の出土数を示す。

山茶碗は知多産山茶碗1片（5型式）のみ、古瀬戸前期の四耳壺・瓶子14片3個体分、常滑産鏡片1片（時期不明）と非常に少ないが、古瀬戸前期の四耳壺・瓶子が出土している点が注目できる。山茶碗と古瀬戸はほぼ同時期（13世紀前半）である。常滑鏡片の帰属時期は特定できない。したがって、弥勒平遺跡では13世紀前半に尾張系山茶碗と古瀬戸が入手・使用され、中世における遺跡の形成が始まった可能性がある。

第28図に示したように、一宮川流域では、弥勒平遺跡のほか、平地部分の御廟所遺跡で古瀬戸後期の瓶子（森町史編さん委1998）、一宮谷田口で古瀬戸中期の施文瓶子（伊藤1998）が出土しており、一宮川流域は古瀬戸期の四耳壺・瓶子が集中する地域といえる。弥勒平遺跡を形成した集団が古瀬戸でも古い段階の製品を入手できるだけの有力者が存在していた可能性が高い。また、古瀬戸前期から連続的に古瀬戸がもたらされた一宮川流域は、遠江一宮小国神社が存在しており、その所領（一宮莊）であったと考えられることから、遠江一宮に関連する有力者が存在し、それらの集団の墓であった可能性が高いであろう。

第11表 弥勒平遺跡 出土中世土器・陶磁器の構成

器種組成表														
項目	破片数 個体数		山茶碗類分類一覧										合計	
	破片	個体	尾張系(知多)		3型式		4型式		5型式		6a型式		破片	個体
山茶碗類	1	1												
山茶碗	1	1												
小皿														
小碗														
常滑産	1	1												
甕	1	1												
鉢														
その他														
瀬戸・美濃産	14	3												
天目茶碗														
鏡類														
皿類														
鉢類														
壺・瓶類	14	3												
仏具類														
その他														
不明														
合計	16	5												
調査面積(m ²)	1,300	1,300												
m(あたり点数)	0.012	0.0038												

項目	尾張系(知多)		合計
	破片	個体	
山茶碗		1	1
小皿			0 0
小皿			0 0
合計			0 0
産地別破片数		1	1
割合	100%		100% 100%

※1 山茶碗以外の遺物の分類及び年代概は菊川町教育委員会2000『横浜城跡－総合調査報告書－』による。

※2 山茶碗類分類一覧表中の時期区分は湖西・瀬美及び東遠江製品は松井氏編年（松井1993）、尾張（知多）製品は中野氏編年（赤根・中野1994）による。また、1～II期のように複数時期でしか識別できなかつたものは累記した。

第12表 弥勒平遺跡 出土中世瀬戸美濃系施釉陶器の構成

瀬戸美濃

器種名	古瀬戸前期	古瀬戸中期	古瀬戸後期	古瀬戸	後IV期	大窯財品					大窯	不明	合計	
						～大3期	1期	2期	3期	4期	4後			
天目茶碗	+	+	+	+	+	0	0					0	0	0
鏡類	+	+	+	+	+	0	0					0	0	0
皿類	+	+	+	+	+	0	0					0	0	0
鉢類	+	+	+	+	+	0	0					0	0	0
壺・瓶類	+	+	+	+	+	14	9					0	0	14
合計						14	6					0	0	14

(2) 弥勒平遺跡出土中世陶器と弥勒平遺跡周辺の中世墓

大隅信好氏・足立順司氏による森町の石塔の精神性分布調査および研究による成果(足立2008)によれば、弥勒平に所在した石塔は、林地蔵山(写真9~11、図版10)に移動されている。足立氏の調査では、「林地蔵山は、地蔵山と弥勒平にあった石塔を『市右衛門さま』の御靈を鎮めるために一箇所に集め祀るが、新東名の用地となり移転。一部、近世の櫛形墓石もあり、これは宮代の共同墓地の一角に祀る。中世石塔は現在、高雲寺に移す(原田正雄氏談)。地蔵山には近世の村墓もあったが、一宮宮代は神仏分離で寺院墓地と共同墓地に墓を移動したという。それゆえ中世石塔と無縁の近世石塔は地蔵山に残り、寄せ集めて『市右衛門さま』となつたのである。宝鏡印塔の開口部は印刻の例、線刻の例、無紋の例がある」(足立2008:p16)とされる。また、地蔵山と弥勒平の中世石塔を移し祀った高雲寺には、「高雲寺石塔は、境内墓地の際、出土した。寄せ集め整備した。一宮地内を歩くと、石塔は高雲寺に移したという話を聞く。したがってこの墓地とおよびその近接地で出土したものばかりではない。しかし、大廟の移した写真にはかなりの数が写っているので、元々出土した数は多かったのである。中に古い青色凝灰岩製ではあるが、梵字を彫るタイプの五輪塔もある」(足立2008:p16)とあり、緑色(青色)凝灰岩で梵字を彫るタイプの石塔が弥勒平遺跡に存在していたものとすれば、14世紀代に遡る可能性が高い(松井・木村・溝口2009)。

弥勒平遺跡では中世における生活したような痕跡は確認できず、上述したように中世墓が存在していたことが確認されていることから、出土した古瀬戸・山茶碗は最も遡る可能性のある石塔とは時期差があるものの、13世紀前半以降に土壤墓に直接蔵骨器として納めたか、伝世し石塔に伴う蔵骨器として利用された可能性が高いと考えられる。

なお、蔵骨器を伴わず遺物が一切出土していないことから断定できないが、土坑の中央に黒色土が確認され、上部に集石が確認された弥勒平遺跡SK01が墓の可能性があることを確認しておきたい。



1~4 弥勒平遺跡出土の四耳壺・盆子想定復原図

弥勒平遺跡では四耳壺2点、盆子1点が出土地しており、肩部周辺の破片でみるとから、盆子の形態は3・4のどちらかに類似する可能性が高い。
1・2 古瀬戸前Ⅱ期 四耳壺
3・4 古瀬戸前Ⅱ期 盆子
5 森町一宮 谷田口出土盆子
6 森町一宮 御廟所遺跡出土盆子
(scale=1:6)

第28図 弥勒平遺跡出土の同時期の古瀬戸製品と一宮川流域出土の古瀬戸盆子

3.まとめ～弥勒平遺跡の変遷～

縄文時代 縄文時代中期後半（取組式土器か）のころ、人為が及んでいるが、遺跡の性格については明確ではない。

弥生時代 弥生時代では、近接する林遺跡よりも遅る時期（弥生時代中期前葉～中葉）の丸子式～嶺田式土器片が出土している、また、SX12は弥生時代中期後葉の白岩式期の土器棺墓である可能性が高い。遠江における中期前葉の集落が確認されておらず、この時期のものは土器棺墓である可能性が高いこと、また弥勒平遺跡の所在する尾根上に林遺跡など中期中葉以降の土器棺墓が確認されていることを考慮すると、弥勒平遺跡は弥生時代中期においては墓域であった可能性が高い。

一方、SX11が楕円形の竪穴建物であるとすれば、弥生時代中期後葉に竪穴建物が営まれていた可能性もあるが、方形の竪穴建物については後期以降である可能性が高く、弥生時代後期後半～古墳時代前期に亘り、炉をともなう方形の建物が複数回にわたって建て替えられていたことが判明した。現状では3軒分しか確認できないが、SH02の北西隅角の外側で確認したものが炉跡であるとすれば、もう数軒は竪穴建物が建てられていた可能性が高い。

古墳時代 調査区内で須恵器片が出土しており、古墳が所在した可能性も残るが、林古墳群に近接していることから流れ込みである蓋然性が高いだろう。したがって、古墳時代には林古墳群などへ向かうための通路などが存在していた可能性が高いが、集落や古墳等は営まれていなかったと想定する。この後、13世紀までの遺物は一切確認できない。

中世 13世紀前半の山茶碗や古瀬戸（前二期）四耳壺・瓶子が出土しており、この時期に人為が再び及んだ可能性が高い。遺跡にあったとされる石塔の集積場所には中世の石塔・宝篋印塔が多数確認されていることを勘案すれば、13世紀前半だけではなく、継続的に中世末まで中世墓が営まれていた可能性が高い。

近世 遺跡周辺には近世の墓地が営まれており、それに関連する遺物（かわらけ、陶磁器）が出土した。江戸時代は、火葬地および埋葬地であった可能性が高い。

したがって、弥勒平遺跡は中世～近世にかけては断続的に墓地として利用されていたと考えられる。

弥勒平遺跡は丘陵緩斜面に位置するとはいえ、建物が建設されたのは弥生時代後期～古墳時代前期の一時期で、一宮川流域を見渡せる立地環境が良い場所にあたることから、基本的に弥生時代から近世までは断続的に墓域が形成されていた遺跡といえる。

註（第4章）

- 1 地元で「市右衛門様」と呼ばれるものを供養する場所にあたり、石塔が集積されている。これらの石塔・宝鏡印塔は元々地蔵山の山中にあったもので、地元の言い伝えでは「市右衛門様」とともに昭和15年にこの場所に供養されたものであることから(原川2005、足立2008)、少なくともこの石塔の集積は以前に行われたものである。
- 2 当研究所評議員 向坂謙二先生の御教授による。

図・写真の出典（第4章）

写真9～11 足立順司氏提供

第27図 片瀬遺跡・網掛山古墳群 静岡理文研2009より

西平子遺跡 森町教委1996より

奥谷田I遺跡 森町教委1998より

第28図 1～4 藤澤2005より、5 森町史編さん委1998より、6 伊藤1998より

※参考文献は191・192頁参照。

第5章 中屋敷遺跡

第1節 中屋敷遺跡の概要

1. 概要

中屋敷遺跡は、^{なすおかげんしょく} 静岡県周智郡森町草ヶ谷字上屋敷941・942-1ほかに所在し、「^{そと}圓田丘陵」から太田川に向かって伸びる丘陵上部縁辺部、標高約41.5～44.0mに位置する(第3・6・29図)。遺跡からは太田川が形成した平野と対岸にある「^{わいわい}飯田丘陵」を見渡すことができる。遺跡の北東側には、著名な香勝寺が、西側には文昌堂古墳群、天王ヶ谷横穴墓群、北垣遺跡などが所在する「^{こうとう}円田丘陵」があり、北側には菖蒲ヶ谷古墳群などが所在している。

中屋敷遺跡は、遺跡内および周辺の屋号として「鐵治屋敷」や「鐵治屋下」などの屋号が残ることから鐵治生産に関係する性格をもつ遺構が存在することが想定されている(森町教委2007)。

森町教育委員会による発掘調査(第1次調査)により、土坑12基・小穴15基が確認されたが、掘立柱建物等は確認されていない。遺物は繩文土器片、山茶碗、中世陶器、かわらけなどが出土した。これにより、中屋敷遺跡が繩文時代、中世～近世に及ぶ複合遺跡であることが確実となったが、遺跡の性格については不明確であった。

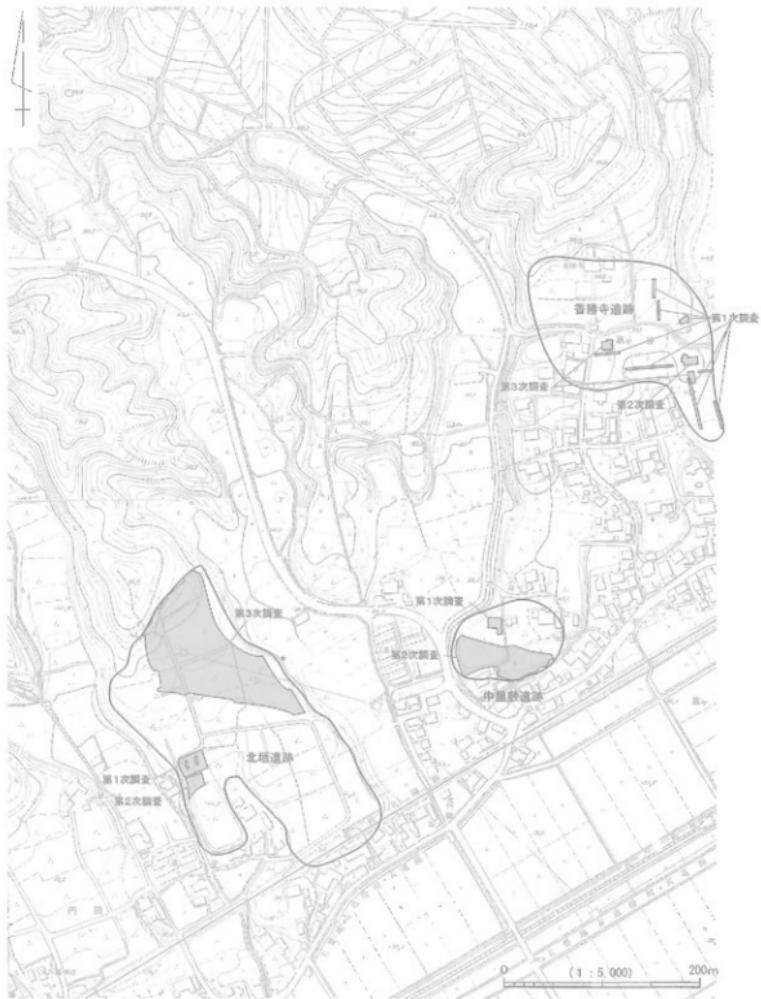
2. 調査歴

中屋敷遺跡ではこれまでに個人住宅建設に伴い1回の試掘・確認調査とそれに引き続いて本調査(平成11年8月2日～11月5日、第1次調査)が実施されている(森町教委2007、第二東名記念誌編集委2005)。

この調査が中屋敷遺跡内で行われた唯一の調査であり、今回の第二東名高速道路建設に伴う発掘調査が第2次調査(平成12年8月7日～平成13年1月25日)に当たる。

第13表 中屋敷遺跡の調査歴

調査	調査期間	調査機関	遺構	遺物	報告書
第1次調査 (本調査)	平成11年8月2日～ 平成11年11月5日	森町教育委員会	転跡・土坑・小穴	須恵器・土師器・陶磁器・かわらけ	広川2005・森町教委2007・森町史編さん委1998
第2次調査 (本調査)	平成12年8月7日～ 平成13年1月25日	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	掘立柱建物・土坑・小穴・井戸・性格不明遺構・古墳	土師器・山茶碗・陶磁器・かわらけ・鉄滓・鐵羽口・鐵製品など	本書



第29図 中里敷遺跡の位置と本発掘調査対象範囲

第2節 調査の体制と調査の経過

1. 確認調査および本調査の体制

中屋敷遺跡の確認調査は平成10年度に、本調査（現地調査）は平成12年度に、第二東名掛川工区として調査体制を組んで実施したが、確認調査および本調査の調査担当者は下記のとおりである。

確認調査主任調査研究員 平野 哲 調査研究員 竹原一人

本調査主任調査研究員 加藤理文 調査研究員 長尾一男・児玉 卓・佐藤 浩

2. 確認調査および本調査の経過

確認調査 確認調査は、平成10年12月2日から下草の除去とともに試掘溝の設定（第30図）を行った。この日から人力による表土除去、遺構の有無の確認を行うとともに、12月8日からは重機による表土除去を行った後、人力による遺構の有無の確認を実施した。各試掘溝は土層図などの記録を作成するとともに写真撮影を行い、調査が終了した12月22日埋め戻しを行い、確認調査を終了した。

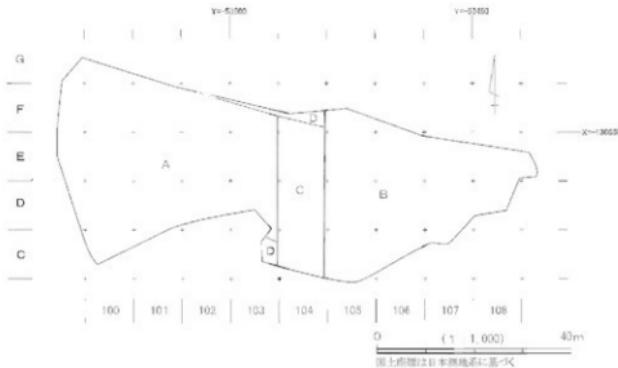
本調査 本調査は、平成12年8月7日から現地詰所の設営、防塵ネットの設営を開始した。A区はまずA区西側から取り掛かり、8月11日から重機による表土除去を始め、9月2日まで実施した。人力による包含層除去、遺構検出は8月17日～9月25日まで実施し、8月25・31日に株式会社フジヤマに委託し基準杭・グリッド杭の設置を行った後、遺構の掘削、実測、写真撮影を行った。遺構掘削・記録類の作成がほぼ終了した10月24日にA区西側の写真撮影を行い、A区西側の調査を終了した。

A区東側は重機による表土除去を9月25日～28日と10月25日～11月10日に実施した。包含層の掘削、遺構の精査は、A区西側の調査が終了した10月25日から開始し、11月13日から検出した遺構の掘削、実測、写真撮影を順次行った。遺構掘削・記録類の作成がほぼ終了した11月27・28日に株式会社フジヤマに委託し、A区全体のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・空中写真測量を実施した。補足調査を11月30日まで実施し、A区の調査を終了した。

B区は重機による表土除去を10月3日～5日に実施し、10月10日に株式会社フジヤマに委託し、基準杭・グリッド杭の設置を行った。人力による包含層掘削はA区東側の調査が終了した11月29日から開始



第30図 中屋敷遺跡 確認調査における試掘溝配置図



第31図 中層敷遺跡 本調査の範囲と調査区の位置



写真18 本調査 重機による表土除去作業



写真19 本調査 遺構検出作業



写真20 本調査 遺構剥削作業



写真21 本調査 遺構実測作業

し、12月4日から検出した遺構の掘削、実測、写真撮影を行った。それらがほぼ終了した12月22日にB区全体の写真撮影を行い、B区の調査を終了した。

C区は重機による表土除去を、12月26・27日に実施し、人力による包含層掘削を12月27日行った。翌平成13年1月9日から遺構の検出を行うとともに、検出した遺構から順次掘削、実測、写真撮影を行った。それらがほぼ終了した1月18・19日に株式会社フジヤマに委託し、B・C区のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・空中写真測量を行った。補足調査を19日に行い、25日までに防塵ネット、現地踏所や機材などの撤収を終え、中層敷遺跡の本調査を終了した。

第3節 中屋敷遺跡の調査概要

1. 調査区とグリッドの配置について（第3・31図、第14表）

中屋敷遺跡の調査箇所は、北垣遺跡の東、約170mに位置し、森バーティングエリア予定地の調査箇所統一グリッド番号のC99～G109グリッドにあたる（第3・31図）。なお、第14表に本調査時（旧グリッド番号）と報告時（正式、新グリッド番号）の対応表を掲載した。

中屋敷遺跡の緯度経度（世界測地系）は、調査区の中央で北緯 $34^{\circ} 49' 26.3''$ 、東経 $137^{\circ} 54' 44''$ 、北西隅で北緯 $34^{\circ} 49' 27.2''$ 、東経 $137^{\circ} 54' 42''$ 、北東隅で北緯 $34^{\circ} 49' 26.5''$ 、東経 $137^{\circ} 54' 45.9''$ 、中央部南東隅で北緯 $34^{\circ} 49' 26.3''$ 、東経 $137^{\circ} 54' 44.5''$ 、南西隅で北緯 $34^{\circ} 49' 25.7''$ 、東経 $137^{\circ} 54' 42.2''$ である。

第14表 中屋敷遺跡 グリッド番号新旧対応表

旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
A1	C99	B1	D99	C1	E99	D1	F99
A2	C100	B2	D100	C2	E100	D2	F100
A3	C101	B3	D101	C3	E101	D3	F101
A4	C102	B4	D102	C4	E102	D4	F102
A5	C103	B5	D103	C5	E103	D5	F103
A6	C104	B6	D104	C6	E104	D6	F104
A7	C105	B7	D105	C7	E105	D7	F105
A8	C106	B8	D106	C8	E106	D8	F106
A9	C107	B9	D107	C9	E107	D9	F107
A10	C108	B10	D108	C10	E108	D10	F108
A11	C109	B11	D109	C11	E109	D11	F109

2. 基本土層（第32図）

遺跡は基本的に表土層（1層）と包含層（2層）、地山層の3層に区分することができる（第32図）。この3層上面が遺構面であり、遺構に伴わない遺物は1・2層から出土した。

3. 遺構・遺物の概要（第15・16表）

今回の中屋敷遺跡の発掘調査では、古墳時代中期に帰属する方墳（方形周溝墓）1基（中屋敷1号墳、SZ01）と、中世以降および時期不明の掘立柱建物、土坑30基、井戸1基、溝状遺構3条、性格不明遺構7基が確認された。出土遺物は、縄文時代の土器・石器剥片、古墳時代の土師器・須恵器、中・近世陶磁器、鍋、かわらけ、鉄滓、繩羽口、鉄製品、硯、石塔などが出土した。確認された遺構の概要是下記のとおりである。

第15表 中屋敷遺跡の時期別の主な遺構・遺物

時代	遺構	遺物	報告
中・近世	掘立柱建物58棟、井戸1基、土坑30基、溝状遺構3条、性格不明遺構7基、小穴約260基	灰釉陶器、山茶碗、青磁・白磁・染付、瀬戸美濃、常滑、志呂呂、初山、備前？、肥前、かわらけ、網鉢、鐵製品、繩羽口、鉄滓など	第4節
古墳時代	方墳（方形周溝墓）1基（中屋敷1号墳）	土師器、須恵器	第5節
縄文時代	なし	縄文土器片、黒曜石ほか剥片	第4節



第32図 中屋敷遺跡 基本土層図

なお、本調査時（旧遺構番号）と正式（新遺構番号）の遺構番号の対応関係を第16表に示した。

第16表 中層部遺跡 遺構番号新旧対応表

旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号
SX2	SK04	SP103	SB06-P8	SP179	SB17-P16	SP268	SB44-P6	SD358	SD04
SF4	SK01	SP105	SB06-P1	SP181	SB08-P5	SP269	SB49-P14	SD359	SD02
SP6	SB06-P5	SP106	SB06-P2	SP183	SB18-P12	SP270	SB45-P6	SP360	SB49-P10
SE7	SE01	SP107	SB08-P4	SP186	SB16-P7	SP272	SB47-P15	SP361	SB49-P20
SD8	SD01	SP108	SB16-P11	SP187	SB18-P5	SP276	SB49-P13	SP362	SB30-P6
SX10	SX01	SP109	SB06-P3	SP188	SB08-P6	SP277	SB45-P2	SP363	SB34-P1
SX11	SX03	SP112	SB04-P3	SP189	SB16-P8	SP278	SB44-P5	SP364	SB33-P2
SX12	SX02	SP113	SK10	SP190	SB18-P7	SD279	擾乱	SP369	SB30-P2
SX13	SX04	SP114	SX05	SP191	SB16-P1	SX279	擾乱	SX372	擾乱
SP15	SB11-P14	SP115	SK07	SX193	SD02	SP280	SB48-P7	SX374	SK20
SP17	SB04-P8	SP116	SK11	SF194	SK30	SP281	SB49-P19	SX375	SX07
SP17	SB08-P2	SP117	SK06	SF195	SK22	SP282	SB44-P7	SX382	SX06
SP19	SB06-P6	SP118	SB11-P6	SP197	SB45-P3	SP286	SB49-P16	SP383	SB35-P3
SP20	SB06-P6	SX120	擾乱	SX198	SK24	SP291	SB57-P6	SD386	擾乱
SP21	SB07-P12	SP121	SB28-P16	SP199	SB37-P3	SP292	SB56-P1	SP387	SB31-P5
SP22	SB06-P4	SP122	SB28-P15	SD206	擾乱	SD294	擾乱	SD388	擾乱
SP23	SK05	SP124	SB28-P20	SP207	SB30-P11	SX295	擾乱	SH389	SB10
SP24	SB02-P11	SP125	SB27-P9	SP208	SB30-P10	SP297	SB56-P2	SH390	SB05
SP29	SK03	SP126	SB29-P23	SP213	SB30-P8	SX299	擾乱	SH391	SB10
SP31	SB10-P9	SP127	SB29-P22	SP215	SB32-P6	SP303	SB56-P4	SH391	SB15
SP32	SB10-P11	SP130	SB19-P16	SP216	SB30-P16	SP305	SB54-P6	SH392	SB11
SP33	SB10-P8	SP131	SB29-P21	SP218	SB18-P2	SP309	SB58-P3	SH393	S809
SP34	SB10-P6	SP135	SB09-P19	SD219	擾乱	SP310	SB58-P2	SH394	SB28
SP35	SB14-P7	SP135	SB09-P18	SP220	SB31-P3	SD311	擾乱C9NS	SH394	SB29
SP36	SB15-P1	SP136	SB09-P17	SP221	SB30-P9	SP315	SB65-P5	SH395	SB22
SP37	SB10-P17	SP140	SB27-P2	SP223	SB32-P1	SX318	擾乱	SH396	SB30
SP38	SB12-P5	SP142	SB28-P20	SD224	擾乱	SP320	SB48-P4	SH397	SB41
SP40	SB15-P5	SP144	SB27-P6	SD226	擾乱	SP321	SB48-P3	SH398	SB38
SP41	SB15-P4	SP146	SB25-P10	SP230	SB40-P10	SP322	SB49-P11	SH399	SB48
SP42	SB11-P10	SP147	SB24-P5	SP231	SB41-P10	SP323	SB50-P5	SH400	SB47
SP44	SB11-P8	SP148	SB26-P5	SP234	SB43-P27	SP324	SB48-P1	SH400	SB49
SP45	SB11-P18	SP149	SB27-P5	SP235	SB42-P19	SP325	SB46-P5	SH401	SB16
SP48	SB11-P7	SP151	SB21-P4	SP237	SB42-P16	SP327	SB50-P3	SH402	SB57
SP53	SB14-P2	SP153	SB22-P3	SP238	SB43-P20	SP328	SB46-P3	SH403	SK15
SP55	SB10-P2	SP155	SB23-P3	SP239	SB42-P13	SP333	SB46-P1	SH404	SK17
SP57	SB11-P15	SP157	SB21-P6	SP242	SB39-P5	SP334	SB52-P2	SP405	SK18
SP61	SB11-P16	SP158	SB21-P2	SP243	SB41-P2	SP336	SB47-P9	SP406	SK25
SP64	SB10-P15	SP159	SB20-P2	SP244	SB38-P11	SD337	擾乱	SH407	SB40
SP65	SB12-P4	SP160	SB21-P1	SP245	SB37-P5	SD338	SD09	SH407	SB44
SP67	SB10-P12	SP163	SB18-P1	SP246	SB38-P12	SX339	SK23	SH407	SB43
SP69	SB05-P8	SP164	SB22-P1	SP247	SB40-P8	SP341	SB38-P6	SH408	SB04
SP70	SB04-P10	SP165	SB22-P1	SP248	SB38-P10	SP342	SB47-P19	SH409	SB18の一部
		SP166	SB23-P6	SP249	SB41-P3	SP343	SB48-P8	SH398	SB37
SP73	SB02-P10	SP167	SB21-P3	SP250	SB37-P4	SP344	SB49-P18	なし	SK02
SP74	SB05-P4	SP168	SB23-P2	SP251	SB39-P2	SP346	SB44-P4	なし	SK08
SP75	SB11-P1	SP170	SB21-P1	SP253	SB38-P8	SP349	SB48-P5	なし	SK09
SP78	SB04-P9	SP172	SB16-P3	SD259	擾乱	SP350	SB51-P12	なし	SK12
SP86	SB03-P6	SP173	SB18-P10	SP261	SB33-P7	SP351	SB49-P12	なし	SK19
SP87	SB03-P9	SP174	SB20-P5	SF265	SK21	SP352	SB47-P12	なし	SK26
SP88	SB09-P20	SP175	SB17-P17	SP263	SB33-P6	SP354	SB44-P1	なし	SK27
SP90	SB06-P6	SP177	SB18-P8	SP265	SB35-P1	SP356	SB36-P7	なし	SK28
								なし	SK29

*遺構番号は1番から順番に付加している。ここに番号が抜けているものは、小穴（SP）で、遺構番号が変更されていないものである。

第4節 中・近世の集落・墓の調査成果

1. 中・近世の遺構・遺物の概要

第4節では、中世～近世の集落（一部墓を含む）に関する調査成果について報告する。

中屋敷遺跡の中世～近世の遺構は、掘立柱建物58棟、土坑30基以上（土墳墓を含む）、井戸1基、溝3条、性格不明遺構7基、小穴（掘立柱建物の柱穴とならない小さな穴）約260基を確認した。

出土遺物は、貿易陶磁（青磁・白磁・染付）、陶器（古瀬戸、瀬戸美濃《大窯期・登窯期》、古志戸呂、志戸呂、初山、備前）、磁器（肥前）、かわらけ、鉄製品（釘など）、繩羽口、鉄滓、硯、砥石、土製鉢、石塔が出土した。

なお、ここでは、表土や包含層から出土した平安時代以前に帰属する遺物についても報告する。一方、C105～C107、D105～D107グリッドで確認された古墳（あるいは方形周溝墓）である中屋敷1号墳（SZ01-SD04）出土遺物については第5節で報告する。

なお、陶器や鉄製品、鉄滓等の遺物については、遺構から出土したものについては遺構ごとに図示した（掘立柱建物=第38・50・62図、井戸・土坑=第68図、溝=第75図、性格不明遺構=第77図、小穴=第79・80図）。一方、直接遺構に伴わない表土（表面採取遺物を含む）、包含層、攪乱坑から出土したもの、確認調査時に出土したものについては、調査区・グリッドごとに区分して図示し（包含層=第81～83図、確認調査=第84図、攪乱=第85・86図、表土・表面採取=第87・88図）、図版では完形品に近いものは単独で、それ以外の破片については産地ごとにまとめて掲載した。

2. 掘立柱建物

掘立柱建物は、調査段階では22棟確認し、現地調査後の検討により最終的に調査区全体で58棟確認した。調査段階で確認していたものは、ここで報告するSB04・05・09～11・15・16・18の一部・22・28・29・30の一部・37・38・40～43・47～49・57であり、これ以外は資料整理段階に図上で確認したものである。

報告にあたり、梁と桁について明らかにしなければならないが、不明確であるため、基本的に長さが長い方を桁、短い方を梁として報告する。一部、調査区隅で桁側に数本の柱がさらに存在する可能性が高いものについては、現状での数値のため梁より桁の方が短い数値として報告するものがある。建物の部位の名称と計測位置については凡例の第1図に示した。

なお、検出した掘立柱建物は調査区全体に分散するわけではなく、7箇所に集中する。厳密に区分することは難しいが、調査区の南西隅角部（A群）、中央北側（B・C群）、中央南東（D・E群）、南東隅角部（F・G群）である。

それぞれに位置する掘立柱建物は下記のとおりである。

A群 SB01・02・04・05・10～15

B群 SB03・06～09・16～29（SB03はSB04と重複しておりA群に区分することも可能）

C群 SB35

D群 SB30～34・36

E群 SB37～43

F群 SB44～53

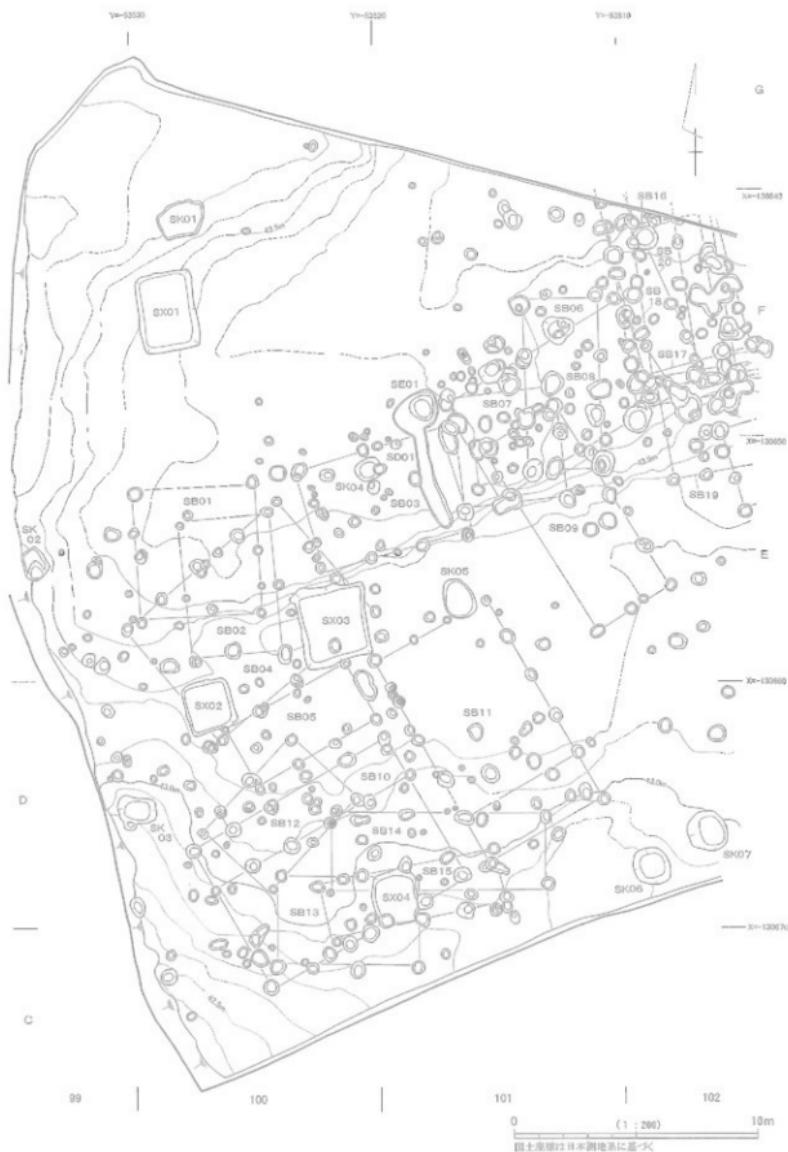
G群 SB54～58

以下、1号掘立柱建物から順次報告する。



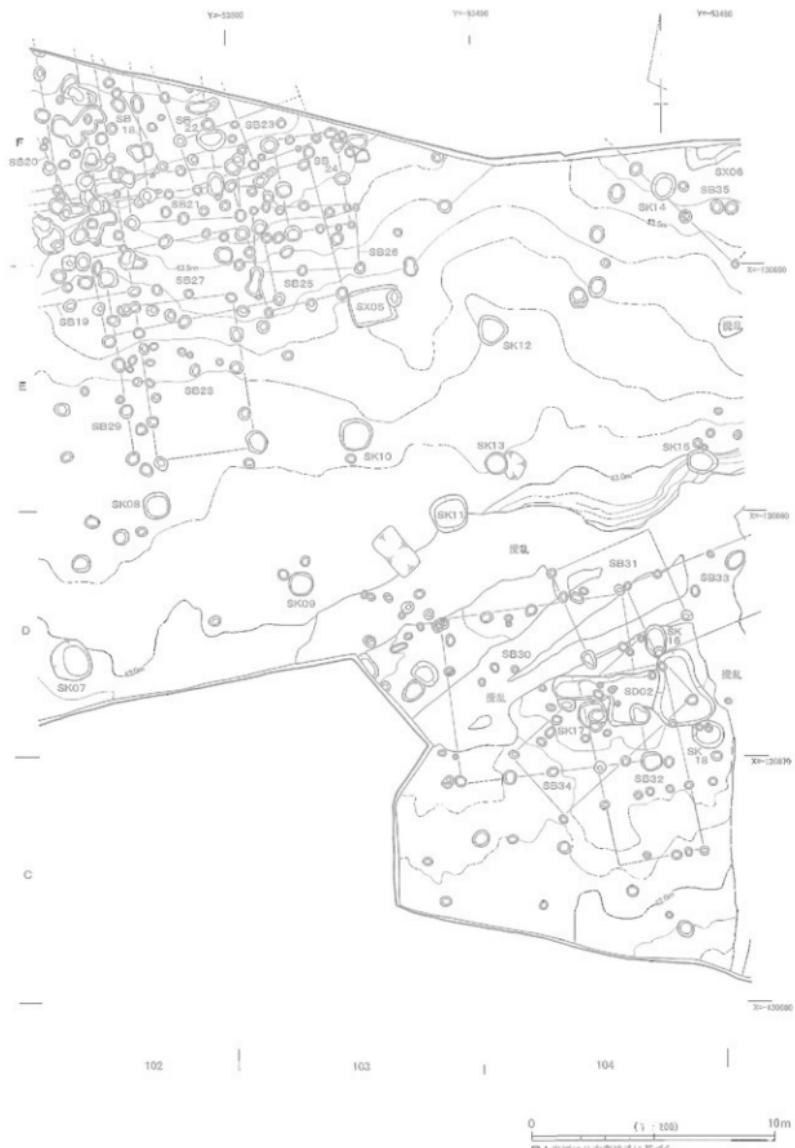
第33図 中層歎道跡 全体図

第4図 中・近世の墓地・墓の調査成果



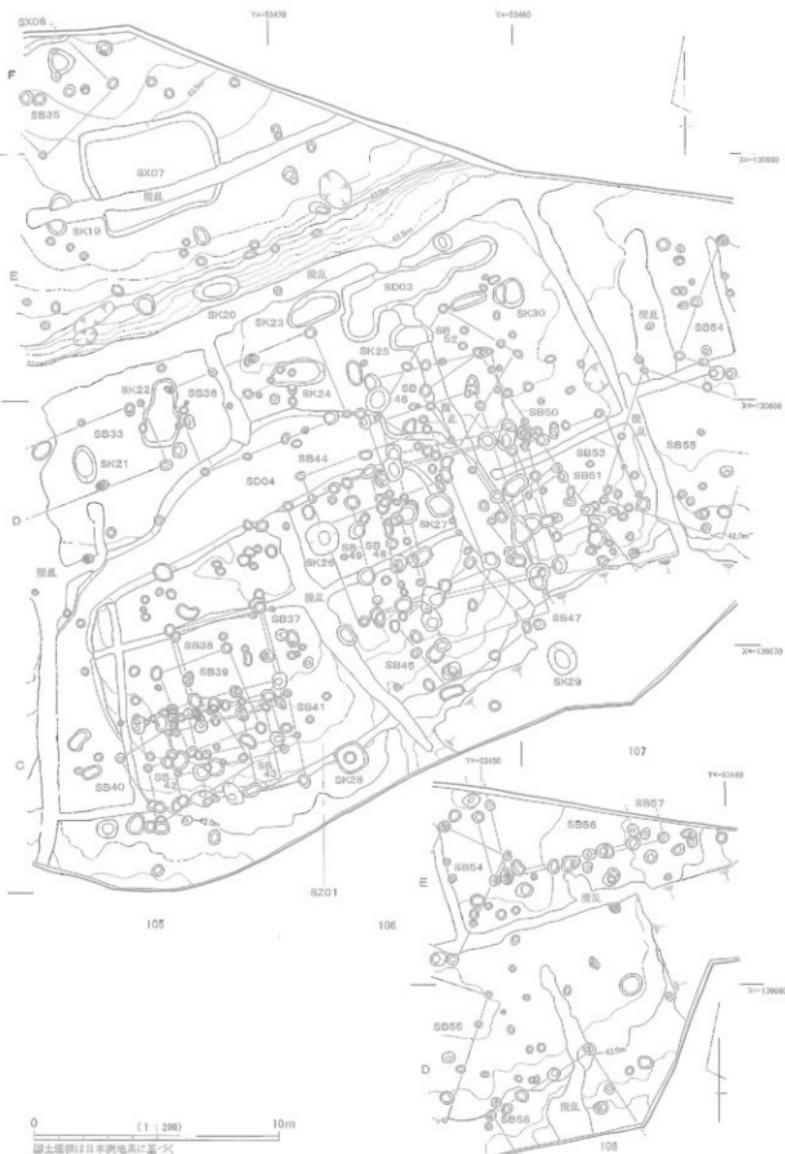
第34図 中層散遺跡 調査区詳細図（西側）

第5章 中胚层组织



第35図 中層敷遺跡 植査区詳細図(中央)

図4図 中・近世の魚塀・堀の調査成績



第36図 中・近世の魚塀・堀の調査区詳細図(東側)

(1) 1号掘立柱建物 (SB01, 第33・34・37図, 第17表, 図版12・15・17)

位置 E99・100グリッドに位置し、A群に属す。SB02と重複するが、柱穴に重複関係がなく、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約4.9×5.2mの建物 (P1～P6で構成) であり、棟をほぼ南北 (N-4°-W) 向ける。梁に対する桁の割合は約1.1倍であり、ほぼ正方形の建物である。桁と梁はやや斜交する。桁は橋筋がほぼ直線であるが、西側の身舎柱P6がやや内側にずれる。東西の身舎柱はほぼ対称している。桁は柱間の間隔 (芯芯間寸法、以下同じ) が西側で北側から約2.6m、2.6m、東側で北側から約2.7m、2.5mであり、一定していない。

柱穴はやや不整形な円形、梢円形で、直径 (長軸) 約0.4～0.6mである。大きさは一定していない。検出面からの深さは約0.3～0.4mであり、6本の柱がほぼ同じ標高まで掘り込まれている。根固石は据えられていない。また、木柱は残存していない。

建物の構造からみるとSB01は規格性が低い建物といえる（註1）。

出土遺物 SB01を構成する柱穴からは出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期を特定できないが、中世後期（室町時代～戦国時代、以下同じ）～江戸時代に帰属する可能性が高い（註2）。

(2) 2号掘立柱建物 (SB02, 第33・34・37・38図, 第17・23表, 図版12・15・17)

位置 E100グリッドに位置し、A群に属す。SB01と重複するが、柱穴に重複関係がなく、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約3.7×5.6mの建物 (P7～P12で構成) であり、棟を真北からやや西側 (N-9°-W) 向ける。桁行の柱間は西側で約2.9m、2.7m、東側で約3.0m、2.6mである。梁間にに対する桁行の比率は約1.5倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱はほぼ正対するが、約10cmずれている。

柱穴 (P7～P12) は円形、梢円形、隅丸方形で、P7～P9、P11・12は約0.3～0.5mで、P10はやや大きく長辺約0.8mである。検出面からの深さは約0.1～0.6mであり、一定していない。根固め石は採用されていない。また、木柱は残存していない。

建物の構造からみるとSB02は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P10・P11からかわらけ片が出土している。このうちP10から出土したかわらけについて図示した（第38図1）。ロクロ成形かわらけで、口径10.0cmである。16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

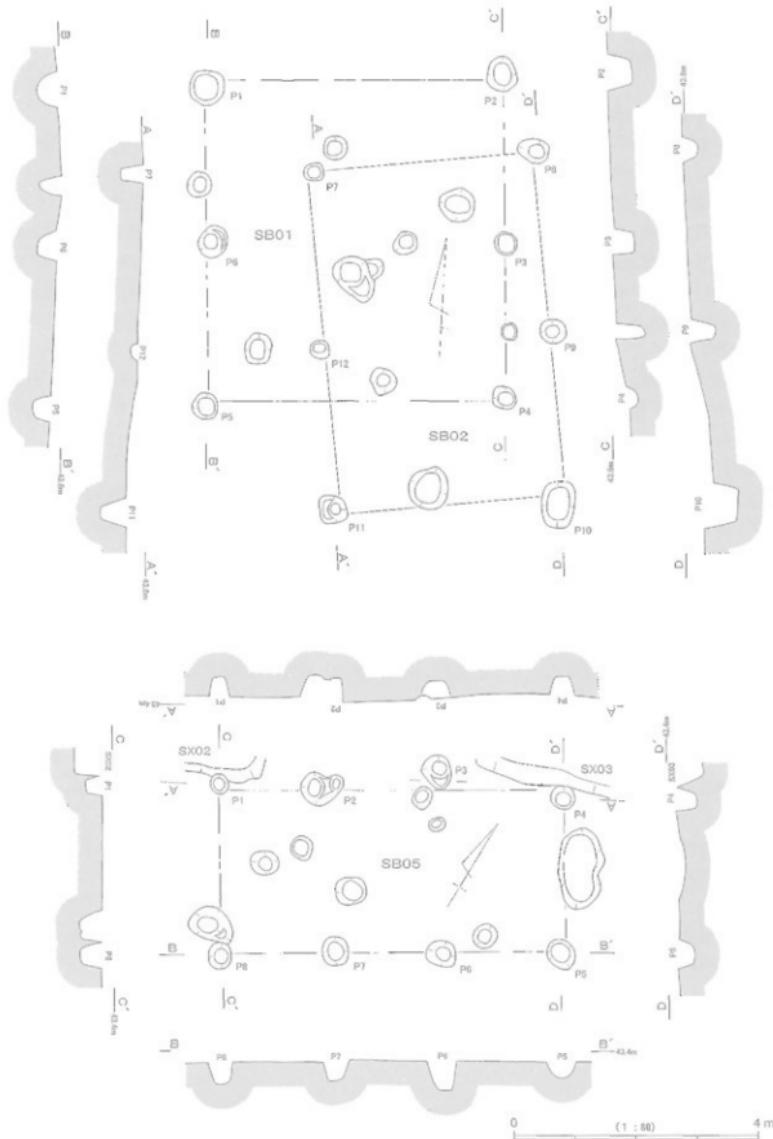
時期 出土したかわらけ（註3）は形態的特徴や焼き上がりから、中世後期に位置づけることができるため、SB02は中世後期以降の建設である可能性が高い。

(3) 3号掘立柱建物 (SB03, 第33・34・39図, 第17表, 図版12・15・17)

位置 E100・101、F101グリッドに位置し、B群に属す。SB07と重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行3間の、約4.3×6.2mの建物 (P1～P8で構成) であり、棟を東西 (N-77°-E) 向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.4倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は南北ともに柱筋が通っていない。また、桁の南北の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は北側で西側から約2.6m、1.4m、2.2m、南側で西側から約2.1m、2.1m、2.0mである。

柱穴は円形、梢円形で、大きさも一定ではない。直径 (長軸) 約0.4～0.8mである。深さは検出面からの約0.2～0.5mであり、一定していない。根固め石は採用されておらず、木柱は残存していない。



第37図 中層敷遺跡 挖立柱建物実測図1 (SB01・SB02・SB05)

建物の構造からみると、SB03は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P6・P9からクロ成形かわらけ片が出土している。

時期 時期を特定できる遺物はないが、江戸時代以降に帰属する可能性が高い。

(4) 4号掘立柱建物 (SB04、第33・34・39図、第17表、図版12・15・17)

位置 D100、E99～101グリッドに位置し、A群に属す。SB03・SB05と重複するが、先後関係を明らかにすることはできない。

構造 柱間2間（3間の可能性もある）×桁行4間の、約6.0×8.2mの大型の建物（P1～P12で構成）であり、棟を北東～南西（N-51°-E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の南北の身舎柱、梁の南北の身舎柱は0.2m以上ずれている。桁の柱間は北側で西側から1.9m、2.0m、2.1m、2.2m、南側で西側から約2.0m、2.0m、2.1m、2.1mである。梁の柱間は西側で北側から約1.7m、4.3m、東側で北側から約2.2mで一定していない。

柱穴はやや不整形な円形、梢円形で、大きさは一定していない。直径（長軸）約0.4～0.6mである。根入れの深さは約0.3～0.7mであり、深度も一定していない。根固め石は採用されておらず、木柱は残存していない。

SB04は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P9から常滑焼片、P4・P10から内耳錐体部片、P3・P9・P10から江戸時代に帰属する陶器片が出土しており、P10出土かわらけ片の一部が後述するSB05のP2出土遺物と接合している。このことからSB05とほぼ同時期に建てられた建物の可能性がある。

時期 P3などから出土した遺物から、SB04は江戸時代に帰属する可能性が高い。

(5) 5号掘立柱建物 (SB05、第33・34・37図、第17表、図版12・15～17)

位置 D100・101、E100グリッドに位置し、A群に属す。SB04・SB12と重複にあるが、先後関係は明らかにできない。

構造 柱間1間×桁行3間の、約2.6×5.6mの建物（P1～P8で構成）であり、棟を北東～南西（N-58°-E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.2倍である。梁と桁はほぼ直交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の南北の身舎柱はほぼ正対している。桁行の柱間は北側で約1.9m、1.7m、2.0m、南側で約1.9m、1.8m、1.9mである。

柱穴は円形であり、直径約0.3～0.5mである。深さは0.3～0.5mであり、ほぼ同じ深さまで行われている。根固め石は確認できない。また、柱は残存していない。

出土遺物 図示していないがP2・P4・P8からかわらけ片が出土している。上述したようにP2から出土したものはSB04・P10出土のかわらけと接合する。SB04と近い時期に建設された可能性がある。

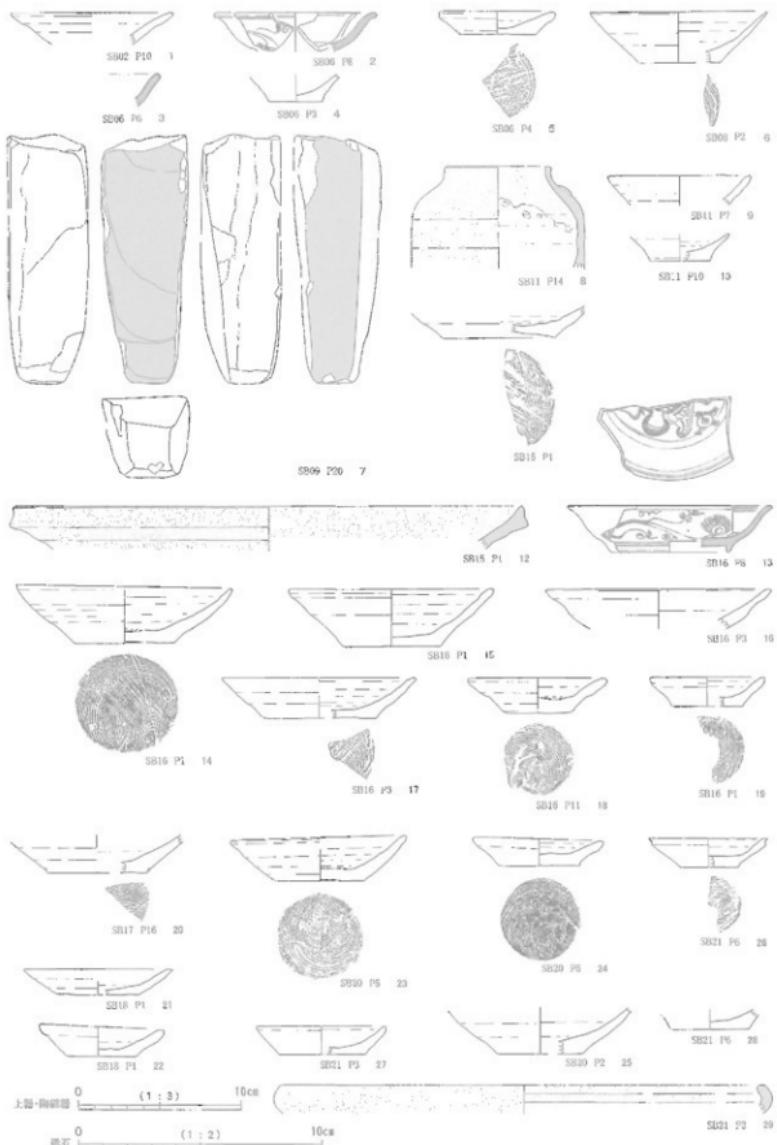
時期 江戸時代に帰属する可能性が高い。

(6) 6号掘立柱建物 (SB06、第33・34・38・40図、第17・23表、図版12・15～17・24)

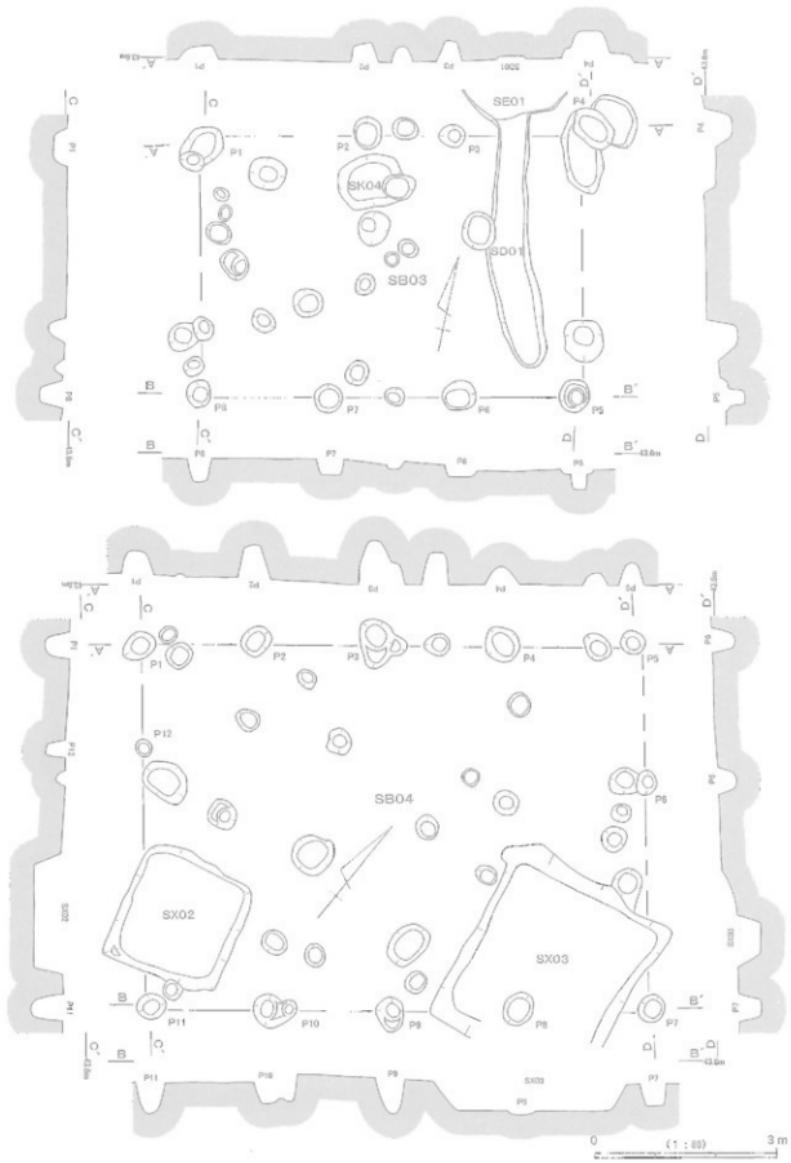
位置 E101、F101グリッドに位置し、B群に属す。SB07～09と重複する。柱穴に重複関係がなく、先後関係は不明である。

構造 柱間1間×桁行3間の、約3.2×6.8mの南北に長い建物（P1～P8で構成）であり、棟を真北からやや西側（N-5°-W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.1倍である。梁と桁は斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は約0.2mずれている。桁の柱間は西側で北側か

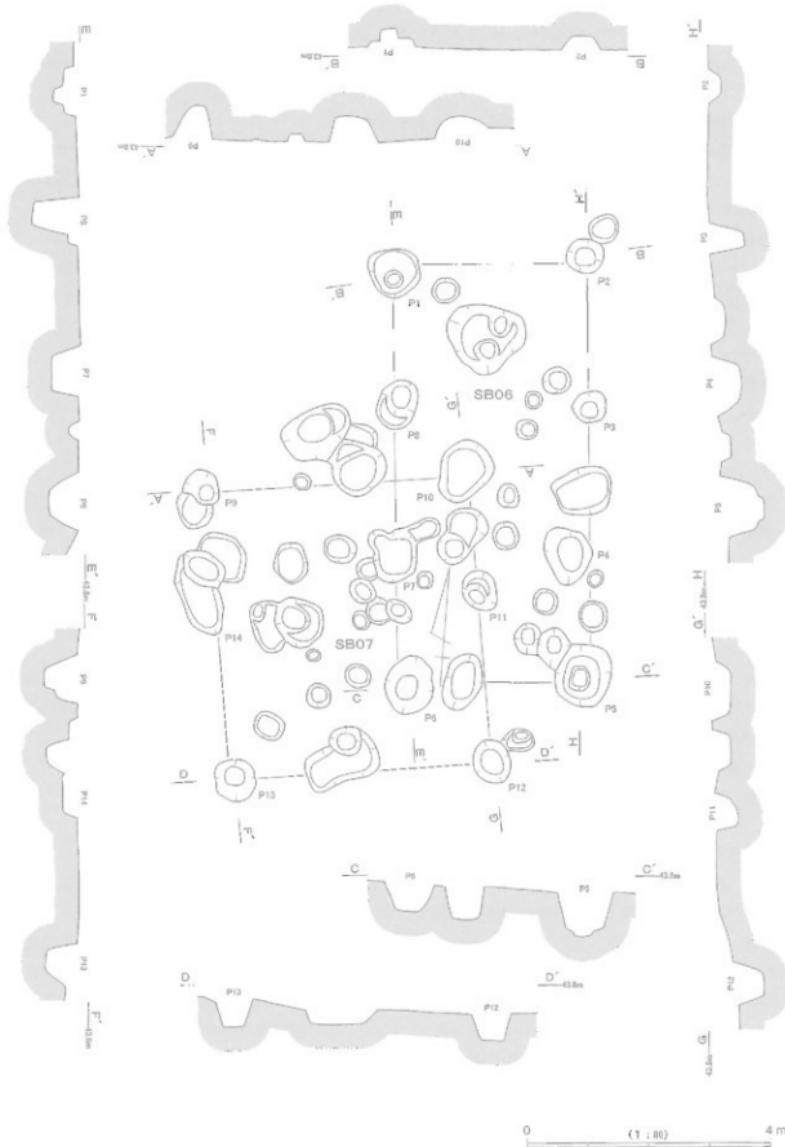
第4図 中・近世の瓦器・瓦の調査成果 2. 振立柱建物



第38回 中層敷遺跡 振立柱建物出土遺物実測図①



第39図 中層遺跡 挿立柱建物実測図2 (SB03・SB04)



第40図 中堅敷遺跡 堀立柱建物実測図3 (SB06・SB07)

ら約2.2m、2.6m、2.0m、東側で約2.4m、2.4m、2.0mであり、一定していない。

柱穴は不整形な円形で、約0.6~1.1mと大型である。抜き取り時に掘削が行われた可能性が高いが、柱穴の大きさは一定していない。柱穴の深さも一定しておらず、約0.3~0.8mである。根固め石は据えられていない。木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB06は規格性の低い建物である。

出土遺物 P8から貿易陶磁の磁器染付皿(2)、P6から貿易陶磁の青磁(3)、P3・P4からロクロ成形かわらけ(4・5)が出土した(第38図)。なお、この他、P1~P8でかわらけ片、P5から瀬戸美濃の大窯期の擂鉢が出土した。

染付皿(2)は、中国・明庶端反皿B1群に属するもので、15世紀中頃~後半に位置づけられる。青磁(3)は貿易陶磁で、鍋運弁碗の口縁部であり、鍋運弁碗D2類(15世紀後半)に位置づけられる。ロクロ成形かわらけ(4)は口縁部が欠損しており、口径・器高は不明である。底部径は3.4cmである。5は小型のロクロ成形かわらけで、口径7.2cm、底部径4.6cm、器高1.4cmである。かわらけは形態的特徴や焼き上がりから16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

時期 貿易陶磁で時期を特定することは困難であり、出土したかわらけは16世紀後半に位置づけられるため、SB06は中世後期~江戸時代に帰属する可能性が高い。

(7) 7号掘立柱建物(SB07、第33・34・40図、第17表、図版12・15~17)

位置 E101、F101グリッドに位置し、B群に属す。SB03などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約4.3×4.7mの南北にやや長い建物(P9~P14で構成)であり、棟を真北からやや西側(N-9°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁はほぼ直交する。桁の東側は柱筋が通るが、西側は柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は、P14の中心に柱が据えられていたとすればほぼ正対している。桁の柱間は西側で北側から約2.0m、2.7m、東側で北側から約1.9m、2.8mであり、一定していない。

柱穴は、不整形な円形、梢円形で、大きさは直徑(長軸)約0.6~1.4mで一定していない。根入れの深さは約0.4~0.5mであり、ほぼ一定している。根固め石は採用されておらず、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB07はやや規格性の高い建物といえよう。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 遺物が出土していないことから時期を特定できないが、江戸時代に属す可能性が高い。

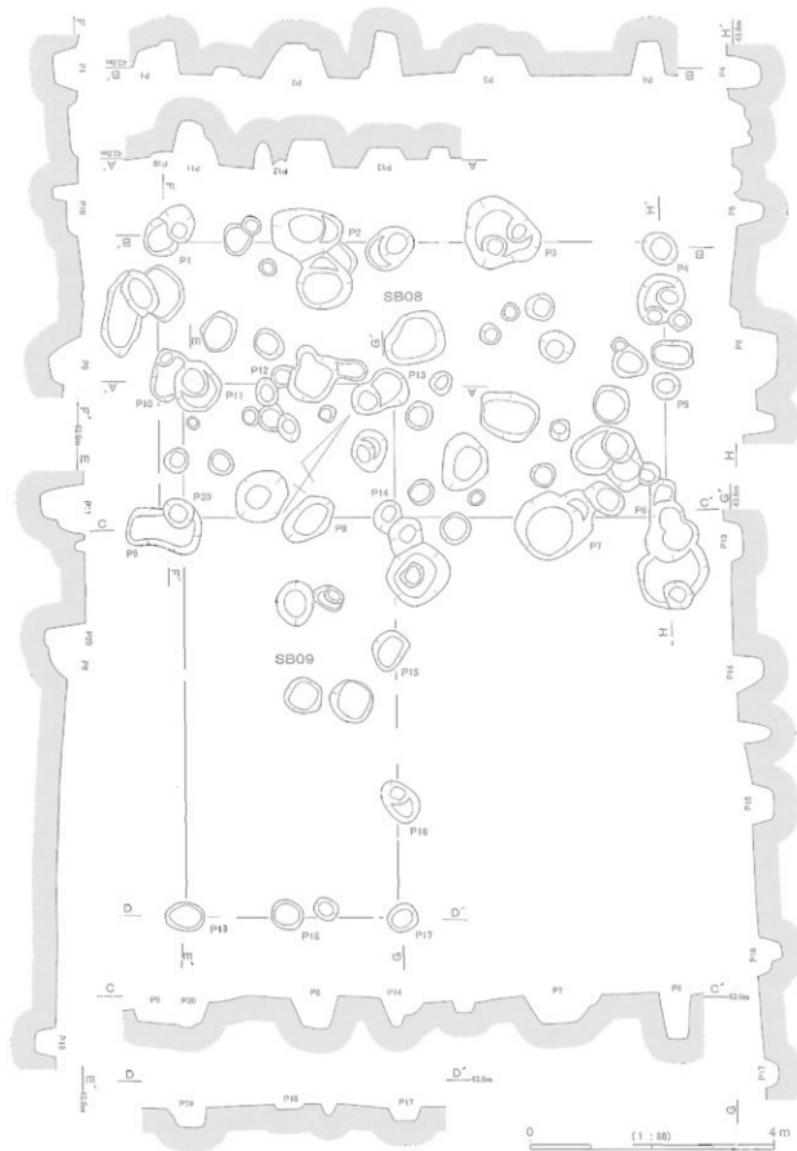
(8) 8号掘立柱建物(SB08、第33・34・38・41図、第17・23表、図版12・16・24)

位置 E101、F101・102グリッドに位置し、B群に属す。SB06・07・09・17~19と重複する。SB09の柱穴がSB08と重複するが先後関係は不明である。これ以外の建物との先後関係も不明である。

構造 梁間2間×桁行3間の、約4.5×8.3mの東西に長い建物(P1~P10で構成)であり、棟を北東~南西(N-56°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁は斜交する。桁・梁とともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は北側で西側から約2.4m、3.2m、2.7m、南側で西側から約2.5m、3.9m、1.9mで、梁の柱間は西側で北側から約2.2m、2.3m、東側で北側から約2.4m、2.1mであり、桁・梁とともに柱間は一定していない。

柱穴は不整形な円形、梢円形で、直徑(長軸)約0.5~1.3mであり、一定していない。深さは、約0.4~0.6mであり、一定していない。大きさや深さからみると柱の抜き取りが行われた可能性がある。根固め石は用いられていない。木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB08は規格性の低い建物といえる。



第41図 中世敷道跡 桁立柱建物実測図4 (SB08・SB09)

出土遺物 P2・P4～P6でかわらけ片が出土した。P2出土のかわらけ（第38図6）はロクロ成形で、底面から外上方に直線的に開き、口縁部は薄く仕上げられるものである。口径10.9cm、底部径5.0cm、器高3.1cmである。形態的特徴から17世紀前半に位置づけられる。

この他、図示していないが、P5から瀬戸美濃播鉢片が出土した。

時期 かわらけ出土により江戸時代に属す可能性が高いが、詳細は不明である。

(9) 9号掘立柱建物 (SB09、第33・34・38・41図、第17・24表、図版12・24)

位置 E101・102、F101グリッドに位置し、B群に属す。SB06～08と重複するが、上述したように先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行4間の、約3.5×8.7mの南北に長い建物（P11～P20で構成）であり、棟を北西～南東（N-35°-W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.5倍である。梁と桁はやや斜交する。桁、梁とともに柱筋が通っていない。桁、梁の身舎柱はずれている。桁の柱間は西側で北側から2.2m、6.5mであるが、上部が削平されるとともに柱穴の深度が浅く消失した可能性が高いため、P20～P19の間に柱穴の深度0.3m程度の2本の柱が存在していた可能性が高い。東側では北側から約2.2m、2.2m、2.3m、2.0mである。梁の柱間は北側で西側から約1.6m、1.9m、南側で西側から約1.7m、1.8mである。桁、梁とともに柱間は一定していない。根固め石は採用されておらず、木柱は残存していない。

建物の構造からみるとSB09は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P20から砾石（第38図7）が出土した。一部折損している。上下面が砾石の磨面として利用されている。石材は凝灰岩である。残存長10.0cm、幅3.5cm、厚さ3.2cmである。

この他図示していないが、P17～P20で江戸時代の陶器片が出土している。

時期 江戸時代以降に帰属する可能性が高い。

(10) 10号掘立柱建物 (SB10、第33・34・42図、第17表、図版12・15・16)

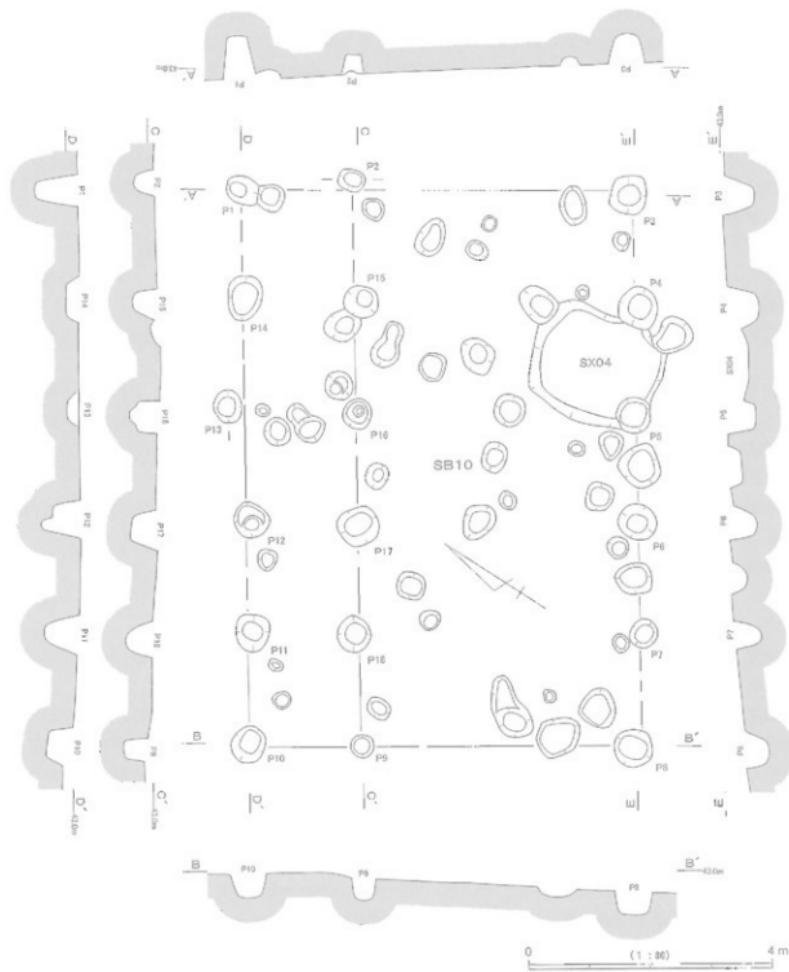
位置 C100・101、D100・101グリッドに位置し、A群に属す。性格不明遺構SX04と重複しており、P4・P5がSX04を破壊することから、SX04よりも新しいことが判明する。

構造 梁間2間×桁行5間の、約6.4×9.1mの東西に長い総柱建物（P1～P18で構成）であり、北西側に底付をもつ建物、あるいは内部に壁をもつ建物の可能性がある。梁間にに対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁はほぼ直交する。桁、梁とともに柱筋が通っていない。桁、梁の身舎柱はずれている。棟を北東～南西（N-58°-E）に向ける。桁行の柱間は北側で東側から約1.8m、1.8m、1.9m、1.8m、1.8m、中央で北側から約2.0m、1.8m、1.8m、1.8m、1.8m（P2が東側にはみ出しているためや長い）、南側で約1.9m、1.8m、1.8m、1.8m、1.8mであり、ほぼ1.8m（1間=6尺）で構成される。梁は東側で北側から約1.8m、4.6m、西側で北側から約1.8m、4.6mである。桁、梁とともに1.8mが基準となっており、梁の4.6mは1.8mを1間とすればほぼ2.5間となる。

柱穴は円形、不整形な円形、梢円形であり、大きさは直径（長軸）約0.4～0.7mである。根入れの深度は約0.2～0.5mであるが、P13・P14を除いて、約0.4～0.5mとほぼ同じ深さ掘削が行われている。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、柱の並びは不整であるが、柱間の寸法は1.8mを基準としており、SB10はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P8から瀬戸産播鉢（後IV新～大窯I期）、P9からく字形内耳鍋片、P2・P6・P8・P11・P12・P15・P17でかわらけ片が出土した。



第42図 中屋敷遺跡 捜立柱建物実測図5 (SB10)

時期 かわらけが出土していることから、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(11) 11号捜立柱建物 (SB11, 第33・34・38・43図, 第17・23表, 図版12・15～19・24)

位置 D101, E100・101グリッドに位置し、A群に属す。SB14・15、SK05と重複関係にあるが、切り合ひ関係がなく、先後関係は不明である。

構造 梁間3間×桁行5間の、約5.3×9.4mの南北に長い建物 (P1～P18で構成) であり、棟を北西一

南東(N-30° -W)に向ける。南側に1間分仕切り(壁)が設けられた建物の可能性があるとともに、P8-P9間、P13-P12間が、それ以外の部分はほぼ1.8mと一定しているにもかかわらず、この部分のみ1.8mではないことから追加された部分である可能性がある。梁間に対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱はP5とP16はずれものの、それ以外はほぼ正対している。桁の柱間は西側で北側から約1.9m、1.8m、1.8m、1.8m、2.1m、東側で約1.8m、1.8m、1.8m、1.8m、2.2mである。P4-P8とP1-P13はほぼ1.8m間隔である。
一方、梁の柱間は北側で西側から約1.8m、1.5m、1.8m、南側2列目で西側から約1.4m、2.7m、1.2m、南側で約1.8m、1.1m、2.4mと一定していない。

柱穴は円形、不整形な円形、橢円形で、大きさは直径(長軸)約0.3~0.8mであり、P2・P3・P13・P14以外の外側の柱はほぼ同じ大きさである。柱穴の深度は、約0.3~0.5mであり、一定していない。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、桁は1.8mの間隔を意図しているが、梁についてはその規格が認められないことから、SBIIはやや規格性がある建物といえる。

出土遺物 P7・P10でかわらけ(9・10)が、P14で志戸呂壺(8)が出土している(第38図)。9・10は小型のかわらけであり、ともにロクロ成形である。9は口径9.0cm。10は底部径3.8cmである。16世紀後半の可能性が高い。志戸呂壺(8)は口唇部が丸く仕上げられ、肩部には焼成時の粘土が付着している。17世紀後半~18世紀前半に位置づけられる。

この他図示していないが、P7から志戸呂産錆鉢(江戸時代)、P1から内湾系内耳鍋片、P1・P6~P8・P10・P14~P16・P18でかわらけ片が出土した。

時期 江戸時代前期以降に帰属する可能性が高い。

(12) 12号掘立柱建物 (SB12、第33・34・44図、第17表、図版12・15・16)

位置 D100グリッドに位置し、A群に属す。SB05・10・13~15と重複関係にあるが、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約3.6×5.1mの南北に長い建物(P1~P6で構成)であり、棟を北東~南西(N-40° -E)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱ははざれている。桁の柱間は西側で北側から約2.4m、2.7m、東側で北側から約2.5m、2.6mであり、一定していない。

柱穴は不整形な円形、橢円形で、大きさは直径(長軸)約0.3~0.8mであり、一定ではない。柱穴の深さは約0.2~0.4mであり、一定ではない。根固め石は使用されず、木柱は残存していない。

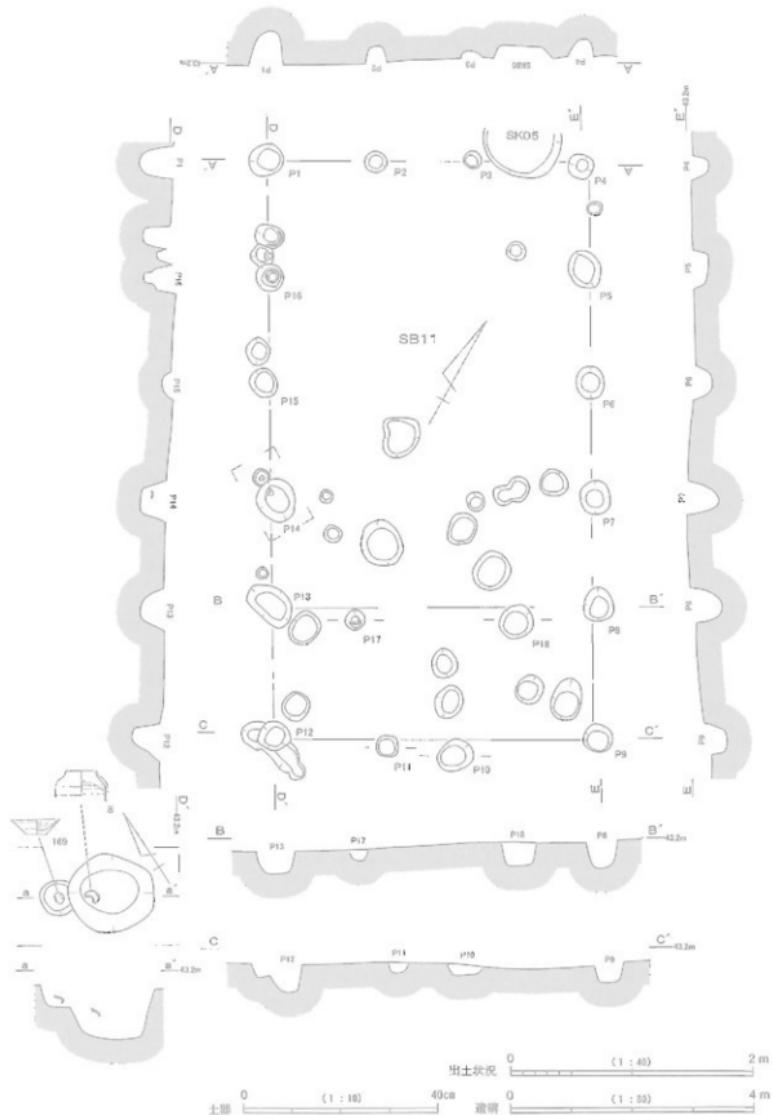
出土遺物 小片のため図示していないが、P4・P5でロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 出土したかわらけにより、江戸時代以降に帰属する可能性が高い。

(13) 13号掘立柱建物 (SB13、第33・34・44図、第17表、図版12・15・16)

位置 C100・101、D100・101グリッドに位置し、A群に属す。SB12・14・15と重複関係にある。柱の切り合い関係がなく先後関係は不明である。また、性格不明遺構SX04と重複関係にあるが、切り合い関係がなく、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約3.6×5.6mの東西に長い建物(P1~P6で構成)であり、棟をほぼ東西(N-89° -W)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.6倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の身舎柱は正対していない。桁の柱間は北側で西側から約2.6m、3.0m、南側で西側から約3.2m、2.4mであり、一定していない。



第43図 中層敷遺跡 独立柱建物実測図 6 (SB11)

柱穴は、不整形な円形、隅丸方形で、大きさは直徑（長軸）約0.2～0.7m、深さは0.1～0.4mであり、一定していない。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB13は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 SB13を構成する柱穴からは出土遺物がない。

時期 出土遺物がないため特定できない。江戸時代に属する可能性が高い。

(14) 14号掘立柱建物 (SB14、第33・34・45図、第17表、図版12・15・16)

位置 D100・101グリッドに位置し、A群に属す。SB10・12・13・15と重複関係にあるが、切り合った関係がなく、先後関係は不明である。一方、SX04のあたりにあるべき柱穴が確認できることからSX04に破壊された可能性が高く、SB14→SX04の順であることが想定できる。

構造 梁間1間×桁行3間の、約3.1×8.7mの東西に長い建物（P1～P7で構成）であり、棟をほぼ東西（N-89°-E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.8倍である。梁と桁はやや斜交する。桁の柱間は北側で西側から約2.9m、3.1m、2.7mである。南側で西側から約5.6m（P6とP7の間に1本の柱があるとすれば、2.8m、2.8m前後か）、3.1mである。桁は南北ともに柱筋が通っていない。桁の身舎柱は正対しておらず、大きくずれている。

柱穴は円形、不整形な円形、楕円形で、大きさは直徑（長軸）0.3～0.6mであり、一定していない。柱穴の深さは、約0.2～0.4mであり、一定していない。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。

建物の構造からすると、SB14は規格性の低い建物である。

出土遺物 図示していないが、P2・P7でロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 かわらけで時期を特定できないが、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(15) 15号掘立柱建物 (SB15、第33・34・38・45図、第17・23表、図版12・15・16・24)

位置 C100、D100・101グリッドに位置し、SB13・14、SX04と重複する。SB13・14とは柱穴の重複関係がなく先後関係は不明である。SX04が柱穴を破壊していることから、SB15→SX04の順である可能性が高い。

構造 梁間1間×桁行4間の、約2.2×7.2mの東西に長い建物（P1～P10で構成）であり、棟を東北東（N-74°-E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約3.3倍である。梁と桁はやや斜交する。桁の柱間は北側で西側から約1.8m、1.8m、1.8m、1.8m、南側で約1.6m、2.1m、1.9m、1.6mである。桁は南北ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱はずれている。

柱穴は不整形な円形、楕円形で、大きさは直徑（長軸）約0.3～0.7mであり、一定していない。柱穴の深さは、約0.1～0.4mであり、一定していない。根固め石は採用されず、木柱は残存しない。

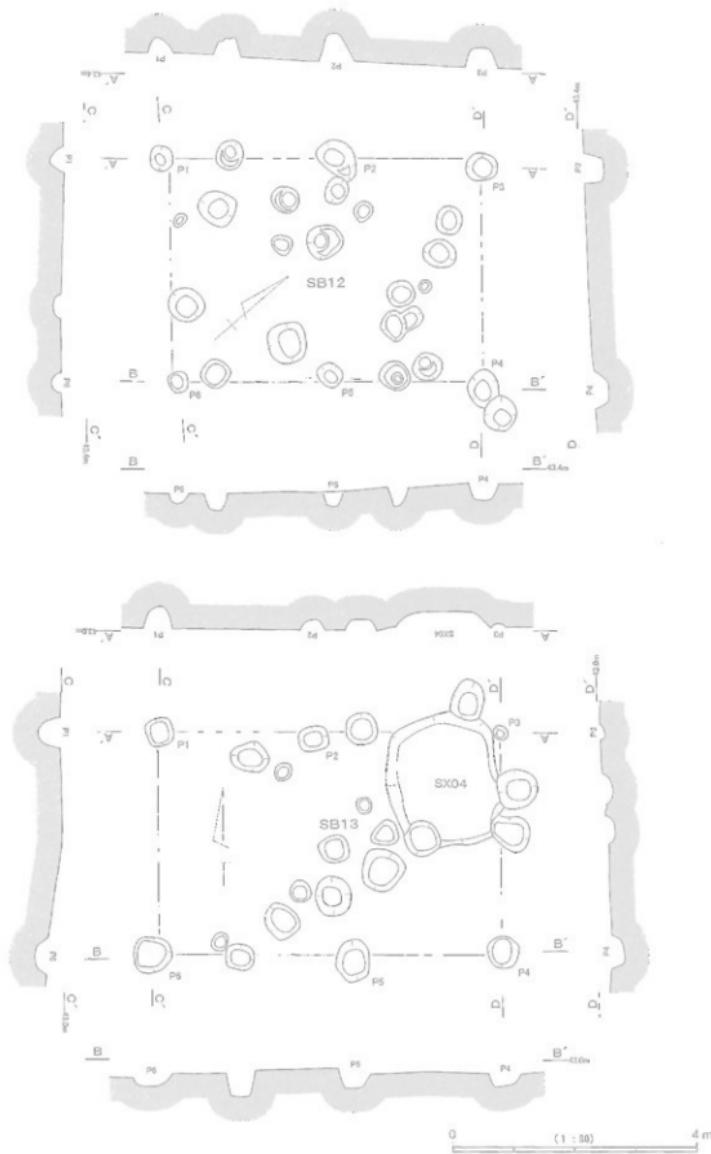
建物の構造からみると桁北側は1.8m間隔と規格性があるが、それ以外はややずれており、SB15はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 P1から擂鉢、P1・P4・P5からロクロ成形かわらけ片が出土した。このうちP1から出土した擂鉢（12）、ロクロ成形かわらけ（11）を図示した（第38図）。11は口縁部が欠損しており、口径・器高は不明である。底部径は7.0cmに復原できる。12は、瀬戸産で、大窯1期に位置づけられる。

時期 瀬戸産擂鉢からみると、中世後期以降江戸時代に帰属する可能性が高い。

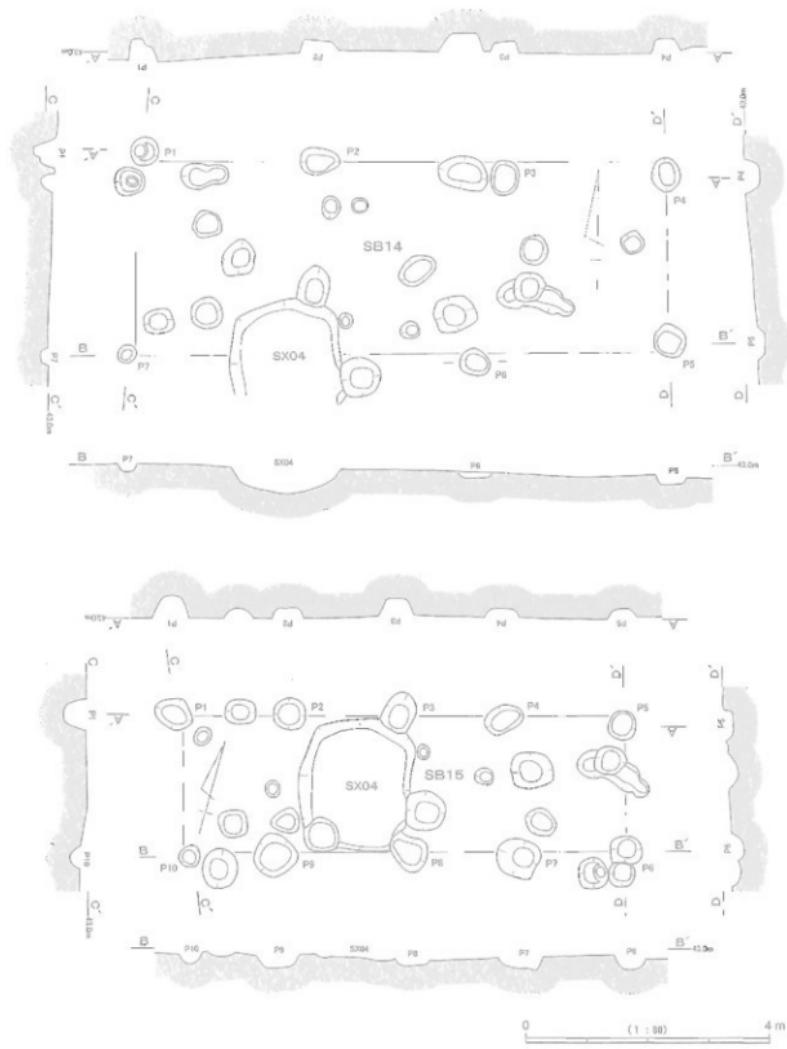
(16) 16号掘立柱建物 (SB16、第33・34・38・46図、第17・23表、図版12・16・20・24・25)

位置 F101・102グリッドに位置し、B群に属す。SB17～20と重複関係にある。SB16の柱穴がSB17を破壊している可能性が高いことからSB17→SB16の順で建築されたと想定する。それ以外の建物との

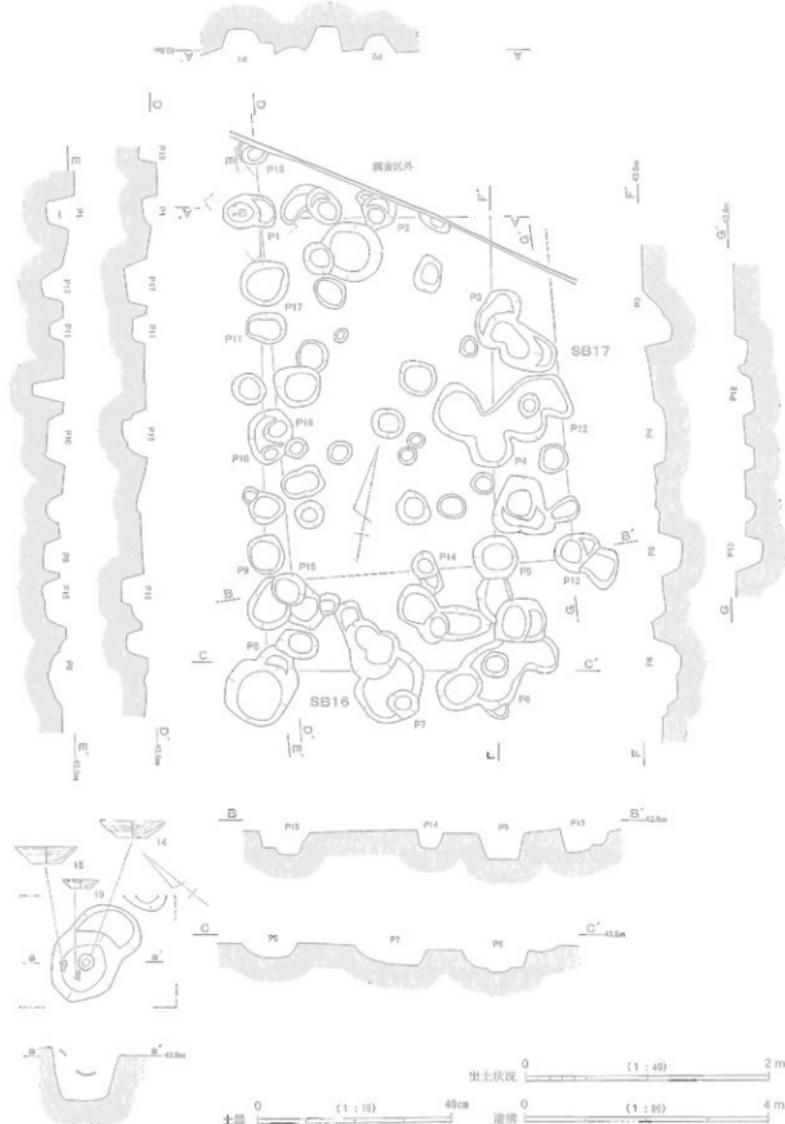


第44図 中層敷遺跡 独立柱建物実測図7 (SB12 + SB13)

图5草 中层遗迹



第45图 中层遗迹 捆立柱建物実測図8 (SB14 + SB15)



第46図 中庭敷地跡 掘立柱遺物実測図9 (SB16・SB17)

先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行4間の、約3.8×7.4mの建物(P1～P11で構成)であり、棟を真北からやや西側(N-12°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2倍である。梁と桁はやや斜交する。桁、梁とともに柱筋が通っていない。桁の柱間は西側で北側から約1.8m、1.8m、1.9m、1.8m、東側で北側から1.2m以上、約2.0m、1.9m、1.8mであり、一定していないが、1.8mを基準とした可能性が高い。梁の柱間は北側で西側から約2.0m、推定1.8m、南側で西側から2.0m、1.8mであり、一定していないが、桁同様1.8mを基準とした可能性が高い。桁の東西の身舎柱はややすれている。

柱穴は不整形な円形、梢円形で、大きさは直径(長軸)約0.6～1.2mであり、深さ約0.2～0.4mである。抜き取りが行われた可能性がある。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

構造 からみるとSB16は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P8から磁器染付皿(13)が、P7から志戸呂産擂鉢(江戸時代)、P1・3・11からかわらけが出土した(第38図)。かわらけは図示可能な6点(14～19)を示した。

13は中国・明産磁器染付皿で、内面に玉取り獅子、外面に牡丹の文様が描かれている。端反皿B1群(15世紀中頃～後半)に位置づけられる。SB16と直接関係しない遺物である可能性が高い。

かわらけはすべてロクロ成形である。大型のもの(14～16)とやや大型のもの(17)、小型のもの(18・19)の3種類がある。大型のものは口径12.6～14.0cm、器高3.5cm、底部径6.0～6.2cm、やや大型のものは口径12.0cm、底部径7.0cm、器高2.5cm、小型のものは口径7.1～8.6cm、底部径4.4cm、器高1.8～2.2cmである。かわらけは形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる。

時期 P7から出土した擂鉢により、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(17) 17号掘立柱建物(SB17、第33・34・38・46図、第17・23表、図版12・16)

位置 F101・102グリッドに位置し、B群に属す。SB08・16・18・19などと重複関係にあり、SB16よりも古い可能性が高いが、それ以外の建物との先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行3間以上の、約4.6m×7.0m以上の南北に長い建物(P12～P18で構成)であり、棟を真北からやや西側(N-16°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.5倍以上である。梁と桁はやや斜交する。桁の東西の身舎柱は大きくずれている。桁、梁とともに柱筋が通らない。桁の柱間は西側で北側から約2.0m、2.6m、2.4m、東側で北側から2.0m以上、約2.4mである。梁の柱間は約2.2m、2.4mである。

柱穴は不整形な円形で、大きさは約0.4～0.8mで、一定していない。柱穴の深さは約0.2～0.4mであり、一定していない。根固め石は用いられていない。また、木柱は残存していない。

建物の構造 からみると、SB17は規格性の低い建物といえる。

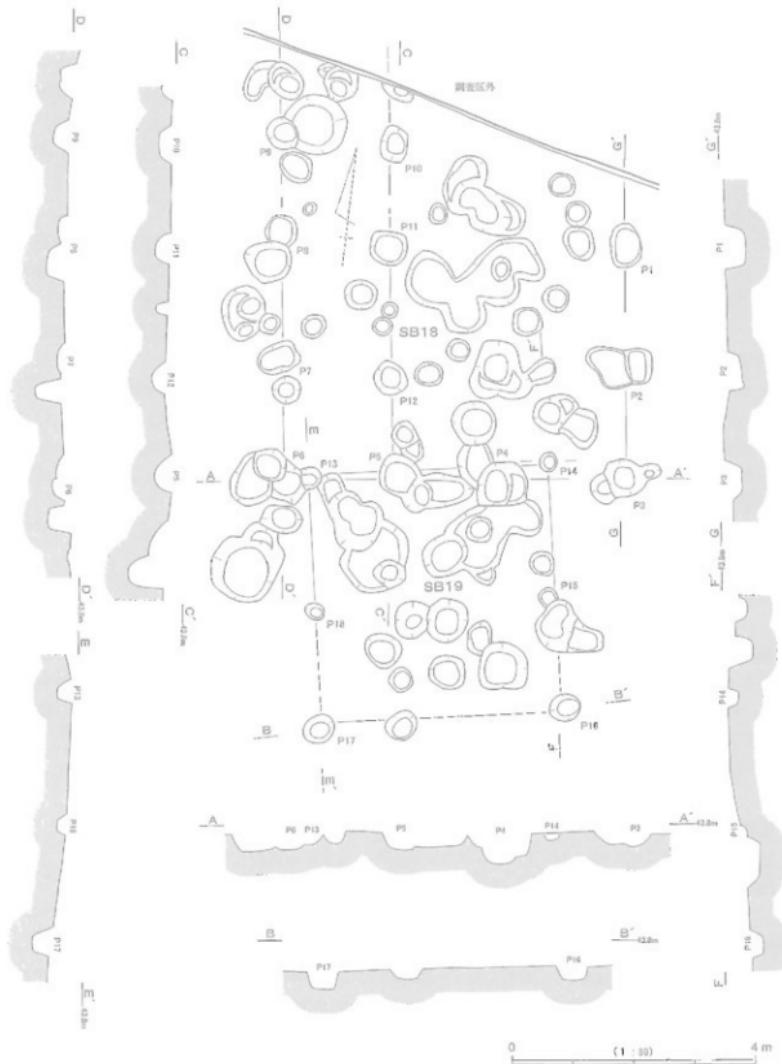
出土遺物 P16から常滑甕片、P16・P17でかわらけ片が出土した。このうちP16から出土したかわらけ(20)を図示した(第38図)。20は底部片である。口縁部が欠損しており、口径・器高は不明である。底部径は6.0cmに復原できる。形態的特徴から16世紀後半以降に位置づけられる。

時期 時期を特定できる遺物がないため確定ではないが、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(18) 18号掘立柱建物(SB18、第33～35・38・47図、第17・23表、図版12・16・25)

位置 F102グリッドに位置し、B群に属す。SB19と重複関係にあり、SB19の柱穴がSB18のものを破壊している可能性が高いことから、SB18→SB19の順に建設されたと想定する。

構造 梁間3間×桁行3間以上の、約5.6m×5.6m以上の南北に長い可能性の高い建物(P1～P12で



第47図 中世歴遺跡 墓立柱建物実測図10 (SB18・SB19)

構成)であり、庇付の建物、内部に壁のある建物、あるいは総柱建物であると想定する。総柱建物の場合はP4の北側の小穴が柱穴となる可能性がある。棟を真北からやや西側(N-7°-W)に向ける。梁間に対する桁行の比率は1:1以上である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は正対していない。桁行の柱間は西側で北側から約1.6m、2.0m、2.0m、西側2列目で北側から約1.8m、2.2m、1.6m、東側で約2.0m、1.8mであり、一定していない。

柱穴は不整形な円形、橢円形で、大きさは直径(長軸)約0.5~0.7mで、柱穴の深さは約0.1~0.3mであり、一定していない。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。

建物の構造からみるとSB18は規格性の低い建物といえる。

なお、SB18は総柱建物ではなく、2棟の建物が重複している可能性も排除できず、その場合は、P1・P2・P3・P5・P12・P11・P10で構成される建物と、P9・P8・P7・P6・P4とP4の北側に位置する小穴で構成される建物の区分される可能性もある。この場合は、前者が梁間1間×桁行3間以上の、約3.8m×5.5m以上の南北に長い建物、後者が梁間1間×桁行3間以上の、約3.4m×5.6m以上の南北に長い建物となる。

出土遺物 P1・P2・P10・P12からかわらけ片、P2・P5・P8から江戸時代の陶器が出土した。

このうちP1から出土したかわらけ(21・22)を図示した(第38図)。21・22ともにロクロ成形かわらけで、小型である。口径7.7~9.2cm、底部径4.3~5.0cm、器高1.6~1.8cmである。形態的特徴および焼き上がりから、16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

時期 P2などから出土した陶器片により、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(19) 19号掘立柱建物(SB19、第33~35・47図、第17表、図版12・16)

位置 E102、F102グリッドに位置し、B群に属す。SB18・27・29と重複関係にある。上述した通り、SB18→SB19の順に建設された可能性が高いが、SB27・29との先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約3.9×4.0mのほぼ正方形の建物(P13~P18で構成)であり、棟を真北からやや西側(N-10°-W)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1:1である。梁と桁はやや斜交する。桁の西側は柱筋が通るが、東側ははずれている。桁の東西の身舎柱は正対していない。桁の柱間は西側で北側から約2.2m、1.8m、東側で北側から約2.2m、1.8mである。

柱穴は円形、不整形な円形、橢円形で、大きさは直径(長軸)約0.3~0.5m、深さは約0.1~0.3mであり、一定していない。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB19は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P16からロクロ成形かわらけ片が出土した。

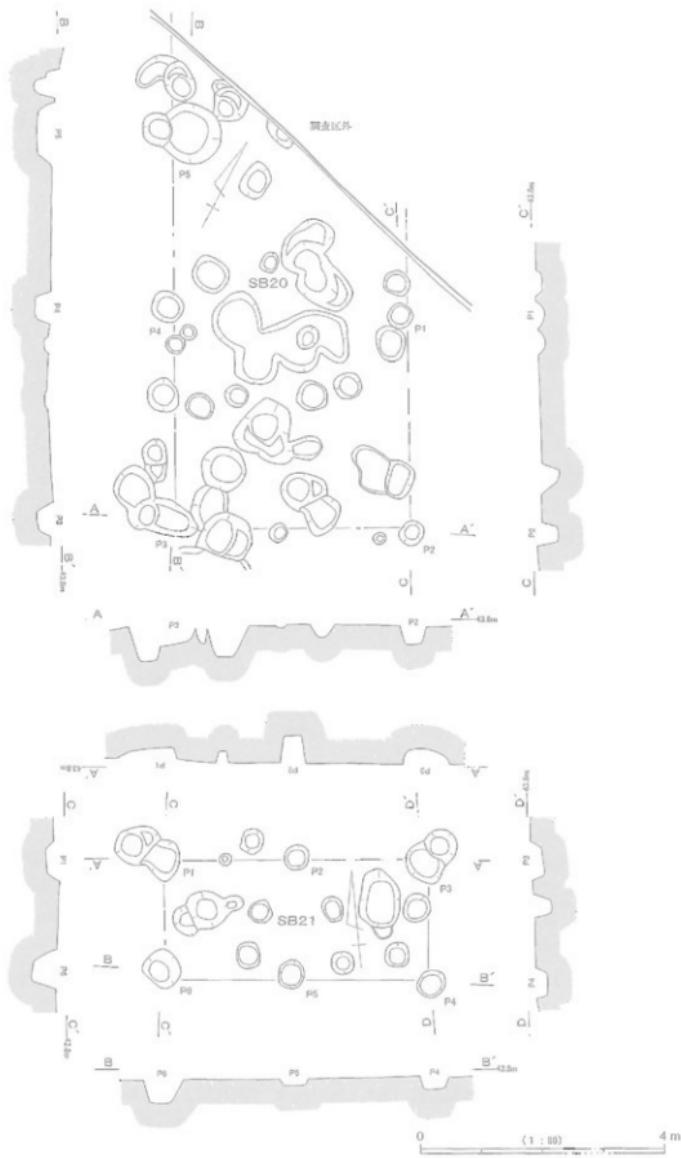
時期 時期を特定できる遺物がないため断定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(20) 20号掘立柱建物(SB20、第33~35・38・48図、第17・23表、図版12・16・25)

位置 F102グリッドに位置し、B群に属す。SB16などと重複関係にあるが、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間以上の、約3.8m×6.4m以上の南北に長い建物(P1~P5で構成)であり、棟を真北からやや西側(N-29°-W)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.7倍以上である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は正対していない。桁の柱間は西側で北側から約2.9m、3.5m、東側で約3.5mであり、一定していない。

柱穴は、不整形な円形、橢円形で、大きさは直径(長軸)約0.4~1.0mであり、一定していない。大型の柱穴(P5)は抜き取りが行われた可能性と、柱筋が非常にずれるが図示した大型の柱穴(P5)と切り合い関係にある西側の小穴がこの建物に伴う可能性がある。根固め石は採用されず、木柱は残存しな



第48図 中世敷遺跡 墓立柱建物実測図11 (SB20・SB21)

い。

建物の構造からみるとSB20は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P2・P5からかわらけ片、P5から江戸時代の陶器片が出土した。このうちP5から出土したかわらけ(23~25)を図示した(第38図)。23~25ともにロクロ成形かわらけで、23はやや大型で、口径10.9cm、底部径4.4cm、器高2.7cmである。24は小型で、口径8.1cm、底部径5.0cm、器高1.7cmである。25は大型のかわらけであり、底部径5.4cmに復原できる。これらは、16世紀後半に位置づけられる。

時期 P5から出土した陶器片により、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(21) 21号掘立柱建物 (SB21, 第33・35・38・48図, 第17・23表, 図版12・16・25)

位置 F102・103グリッドに位置し、B群に属す。SB18・20・22などと重複関係にあるが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約2.0×4.3mの東西に長い建物(P1~P6で構成)であり、棟を東西(N-85°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.2倍である。梁と桁は斜交する。桁は東西とともに柱筋が通っていない。桁の身舎柱は正対していない。桁行の柱間は北側で西側から約2.2m、2.1m、南側で西側から約2.1m、2.2mであり、一定していない。

柱穴は円形、不整形な円形で、大きさは直径約0.4~0.7mであり、深さは約0.2~0.4mで一定していない。大型の柱穴は抜き取りが行われた可能性がある。根固め石はなく、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB21は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P2から瀬戸美濃志野皿(豊窯1~2期)、P1~P4・P6からかわらけ片、P3から土師鍋が出土した。このうちP3・P6かわらけ(26~28)、古瀬戸掘鉢(29)を図示した(第38図)。

26~28はいずれもロクロ成形かわらけで、26・27は小型である。口径7.3~8.0cm、底部径3.4~3.6cm、器高1.7~1.8cmである。28は底部径4.8cmである。形態的特徴や焼き上がりの状態から16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

29は掘鉢で、口縁部は内湾する。この特徴から古瀬戸後IV期に位置づけられる。

時期 P2から出土した陶器により、中世後期~江戸時代に帰属する可能性が高い。

(22) 22号掘立柱建物 (SB22, 第33・35・49・50図, 第17・23表, 図版12・16・19・26)

位置 F102グリッドに位置し、B群に属す。重複関係にある建物との先後関係は不明である。

構造 梁間3間×桁行2間以上の、約4.7m×3.6m以上の南北に長い可能性のある建物(P1~P7で構成)であり、棟を真北からやや西側(N-6°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1:1以上であると想定する。梁と桁はほぼ直交する。桁は東西とともに柱筋がやややすれている。桁の東西の身舎柱はやややすれている。桁の柱間は西側で北側から約1.8m、1.8m、東側で約1.4m、2.2mで、梁の柱間は約1.5m、1.3m、1.9mであり一定していない。

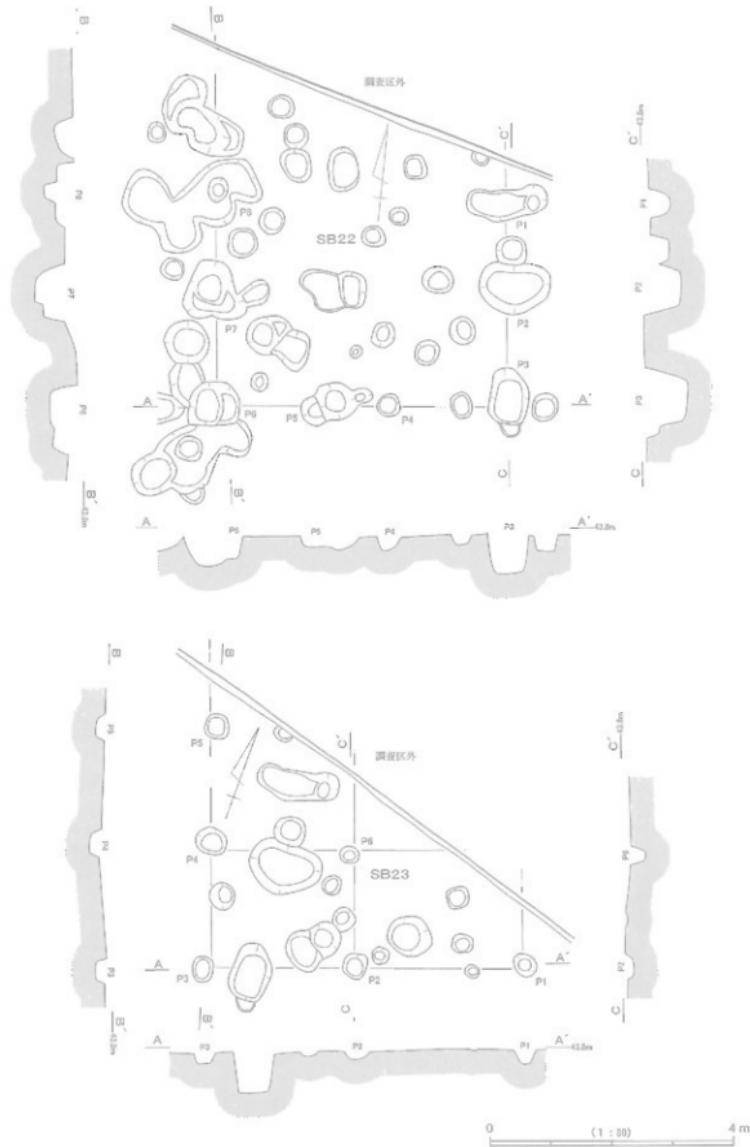
柱穴は不整形な円形、梢円形で、大きさは直径(長軸)約0.4~1.2m、深さ約0.2~0.7mであり、一定していない。1.2~1.3mにも及ぶ掘り込みがあることから、抜き取りが行われたか、柱穴の部分に土坑が掘削された可能性がある。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB22は規格性の低い建物といえる。

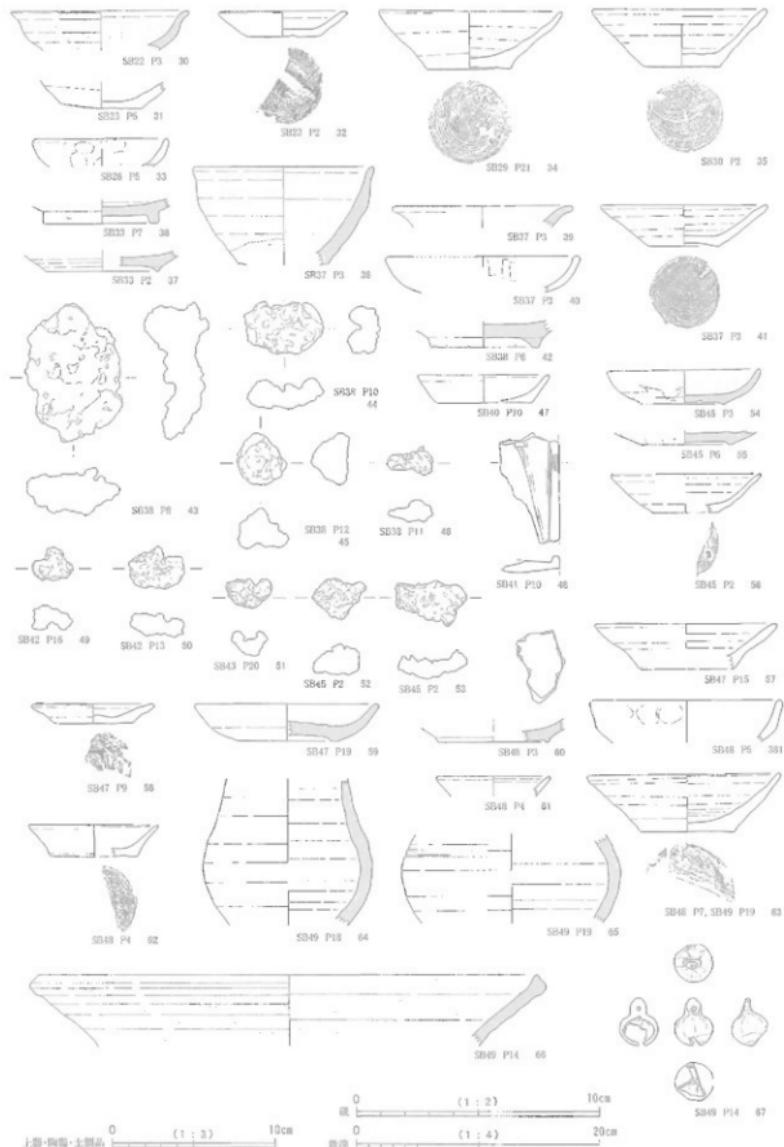
出土遺物 P3から瀬戸美濃志端反皿(30)が出土した(第50図)。見込みから内湾しながら立ち上がり、口縁部は急激に外反する。口径は11.0cmである。この特徴から大窯1期に位置づけられる。

この他、図示していないが、P1・P3からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、中世後期以降江戸時代に帰属する可能性が高い。



第49図 中世敷造跡 墓立柱建物実測図12 (SB22・SB23)



第50圖 中層遺跡 挖立柱建物出土遺物實測圖②

(23) 23号掘立柱建物 (SB23, 第33・35・49・50図, 第17・23表, 図版12・16・26)

位置 FI02・103グリッドに位置し、B群に属す。重複関係にある建物との先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行2間以上の、約5.1m×4.0m以上の南北に長い総柱の建物（内部に壁をもつ建物か、P1～P6で構成）である可能性が高い。棟を真北からやや西側（N-21° -W）に向ける可能性が高い。梁間にに対する桁行の比率は約1：1以上であると想定する。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通らない。桁、梁の身舎柱は正対しない。桁の柱間は西側で北側から約2.0m、2.0m、中央で1.9mである。梁の柱間は南側で西側から約2.4m、3.7m、中央で2.3mである。桁、梁とともに柱間は一定しない。

柱穴は不整形な円形で、大きさは直径約0.3～0.5m、深さは0.2～0.3mである。根固め石は採用されていない。木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB23は規格性の低い建物である。

出土遺物 P1～P3・P6でかわらけ片が出土した。このうちP2・P6のかわらけを図示した（第50図31・32）。31・32ともにロクロ成形かわらけで、32は小型である。口径8.0cm、底部径4.7cm、器高1.6cmである。31は底部径5.0cmである。形態的特徴や焼成具合から16世紀後半に位置づけられる。

時期 時期を特定できる遺物がないため確定ではないが、かわらけの形態的特徴からは中世後期以降江戸時代に帰属する可能性が高い。

(24) 24号掘立柱建物 (SB24, 第33・35・51図, 第17表, 図版12・16)

位置 FI03グリッドに位置し、B群に属す。SB25と重複関係にあるが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約2.6×3.8mの南北に長い建物（P7～P9で構成）であり、棟を真北からやや西側（N-21° -W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.5倍である。梁と桁は斜交する。桁は東西ともに柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱は正対していない。桁の柱間は西側で北側から約1.9m、1.9m、東側で約2.0m、1.8mであり、一定していない。

柱穴は不整形な円形で、大きさは直径約0.3～0.6mであり、深さは約0.2～0.4mであり、一定していない。直径0.6mに近い柱穴は、柱の抜き取りが行われた可能性がある。根固め石は採用されていない。また、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB24は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P5からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できる遺物がないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(25) 25号掘立柱建物 (SB25, 第33・35・51図, 第17表, 図版12・16)

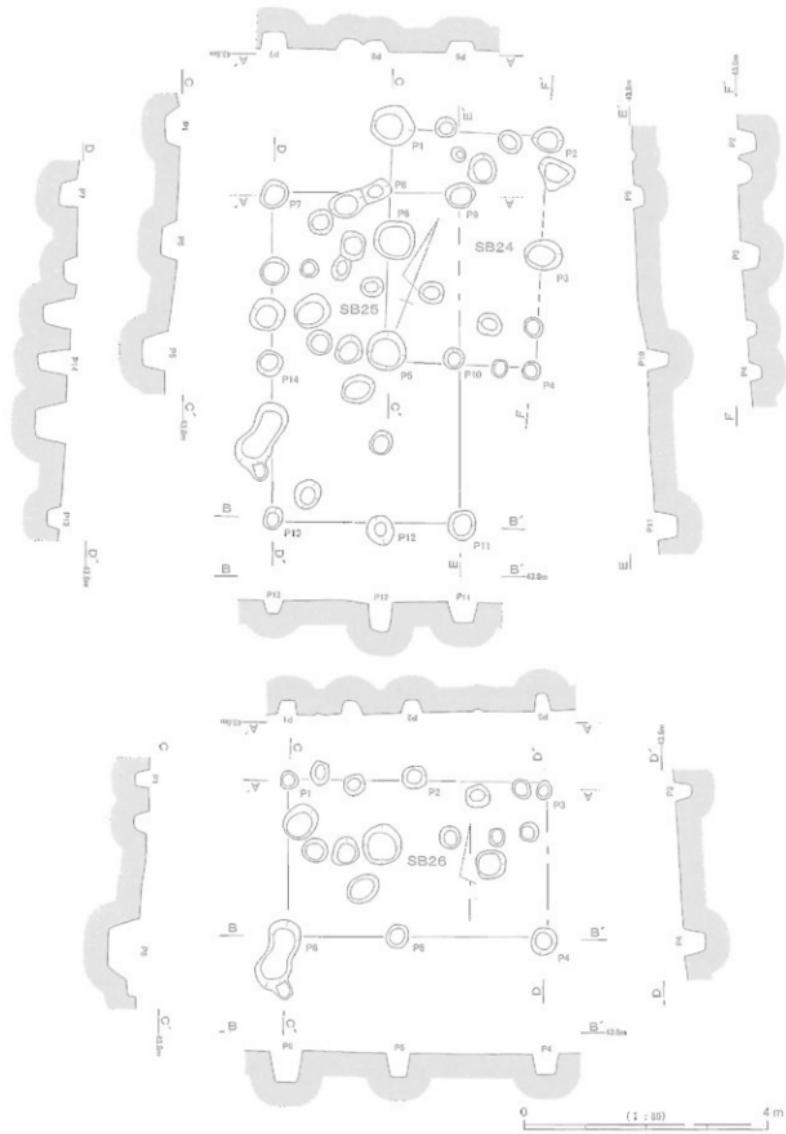
位置 EI03、FI02・103グリッドに位置し、B群に属す。重複関係にある建物との先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行2間の、約3.0×5.4mの南北に長い建物（P1～P6で構成）であり、棟を真北からやや西側（N-18° -W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通らない。桁、梁の身舎柱は正対しない。桁の柱間は西側で北側から2.8m、2.6m、東側で北側から2.7m、2.7mで、2.7m（1間半）を基準としていた可能性がある。

柱穴は円形、不整形な円形で、大きさは約0.3～0.5m、深さは約0.2～0.5mであり、一定していない。根固め石は用いられてない。木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB25はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P10からロクロ成形かわらけ片が出土した。



第51図 中層敷遺跡 桿立柱建物実測図13 (SB24～SB26)

時期 時期を特定できる遺物がないため確定ではないが、江戸時代に属する可能性が高い。

(26) 26号掘立柱建物 (SB26, 第33・35・50・51図, 第17・23表, 図版12・16・26)

位置 E103, F103グリッドに位置し、B群に属す。重複する建物との先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約2.6×4.3mの東西に長い建物 (P1～P6で構成) であり、棟をほぼ東西 (N-89°-E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.7倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は南北とともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は北側で西側から約2.1m、2.1m、南側で西側から1.8m、2.4mであり、一定していない。

柱穴は円形、不整形な円形で、大きさは直径約0.3～0.5m、深さは約0.2～0.5mで、一定しない。根固め石は用いられていない。木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB26は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P5から非ロクロ (手づくね) 成形かわらけ (第50図33) が出土した。口径は8.4cmに復原できる。かわらけは、16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

この他図示していないが、P5からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 かわらけは中世後期であるものの、SB26は中世後期～江戸時代に属する可能性が高い。

(27) 27号掘立柱建物 (SB27, 第33・35・52図, 第17表, 図版12・16)

位置 E102・103、F102・103グリッドに位置し、B群に属す。SB19・25・26・28・29と重複関係にある。柱穴の切り合い関係がないことから先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行4間の、約3.2×7.2mの東西に長い建物 (P1～P10で構成) であり、棟を東西 (N-76°-E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.3倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は南北とともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は北側で西側から約1.8m、1.6m、1.6m、2.2m、南側で西側から約1.3m、2.0m、2.4m、1.5mであり、一定していない。

柱穴は不整形な円形、楕円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.3～0.7mで、深さは約0.1～0.5mで一定していない。0.5～0.7mの柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石はなく、木柱は残存しない。建物の構造からみると、SB27は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P2から常滑窯片、P2・P5・P6・P9からかわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できる遺物がないため確定ではないが、江戸時代に属する可能性が高い。

(28) 28号掘立柱建物 (SB28, 第33・35・52図, 第17表, 図版12・16・19)

位置 E102・103グリッドに位置し、B群に属す。SB27・29と重複関係にある。SB29と東側の桁 (柱列P12～P16) を共有していた可能性があるが先後関係は不明である。また、SB27とは切り合い関係がなく、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行4間の、約3.9×6.2mの南北に長い建物 (P11～P20で構成) であり、棟を真北からやや西側 (N-11°-W) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.6倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西とともに柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱は大きくずれる。桁の柱間は、西側で北側から約1.7m、1.4m、1.6m、1.6m、東側で北側から約1.6m、1.4m、1.9m、1.3mであり、一定しない。

柱穴は円形、不整形な円形、楕円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.3～0.9m、深さ約0.2～0.5mであり、一定しない。大型のP16などは柱の抜き取りが行われた可能性もある。

建物の構造からみるとSB28は規格性の低い建物といえる。

なお、P14・15はP12・P13・P16の柱筋よりも0.2mほど内側に大きくずれることから、P12・P11・

P13・P20で構成される建物と、P14・P15・P18・P19で構成される建物に区分される可能性もある。その場合はとともに梁間1間×桁行1間の小規模な建物となる。

出土遺物 図示していないかP2・P15・P16・P20からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できる遺物がないため確定ではないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(29) 29号掘立柱建物 (SB29, 第33・35・50・52図, 第17・23表, 図版12・16・26)

位置 E102・103, F102・103グリッドに位置し、B群に属す。SB19・27・28と重複関係にあり、SB28と東側の桁(柱列)を共有する可能性がある。重複する建物との先後関係は不明である。なお、P21～P25で構成される柵列の可能性も残る。

構造 梁間1間×桁行4間の、約4.9m×7.6mの南北に長い建物 (P12～16・P21～P26で構成の可能性が高い) であり、棟を真北からやや西側 (N-10° -W) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.6倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身合柱は大きくずれる。桁の柱間は西側で北側から約1.8m、1.9m、1.9m、2.0mで、東側で北側から約1.6m、1.6m、1.4m、1.9m、1.3mであり、一定しない。

柱穴 不整形な円形で、大きさは直径約0.4～0.8m、深さ約0.3～0.5mであり、一定しない。根固め石はなく、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB29は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P21から常滑窯片、P21～P23からロクロ成形かわらけ片が出土した。このうちP21から出土したロクロ成形かわらけ (第50図34) を図示した。形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる。

時期 時期を特定できる遺物がないため確定ではないが中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(30) 30号掘立柱建物 (SB30, 第33・35・50・53図, 第17・23表, 図版13・18・26)

位置 C103・104, D103・104グリッドに位置し、D群に属す。SB31などと重複関係にあるが先後関係は不明である。

構造 梁間3間×桁行4間の、約6.8×7.5～7.7mの東西にやや長い建物 (P1～P16で構成) であり、純柱建物の可能性がある。棟を東西 (N-81° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁は斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁、梁の身合柱は正対しない。桁の柱間は北側で西側から約2.0m、1.8m、1.9m、1.8m、南側で西側から約2.0m、1.8m、1.9m、2.0mで、梁の柱間は西側で北側から約2.0m、2.8m (想定)、1.6m (想定)、東側で北側から約2.4m、2.6m、1.8mであり、一定しない。

柱穴 不整形な円形、楕円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.4～0.8mで、深さは約0.1～0.5mであり、一定しない。根固め石はなく、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB30は規格性の低い建物といえる。

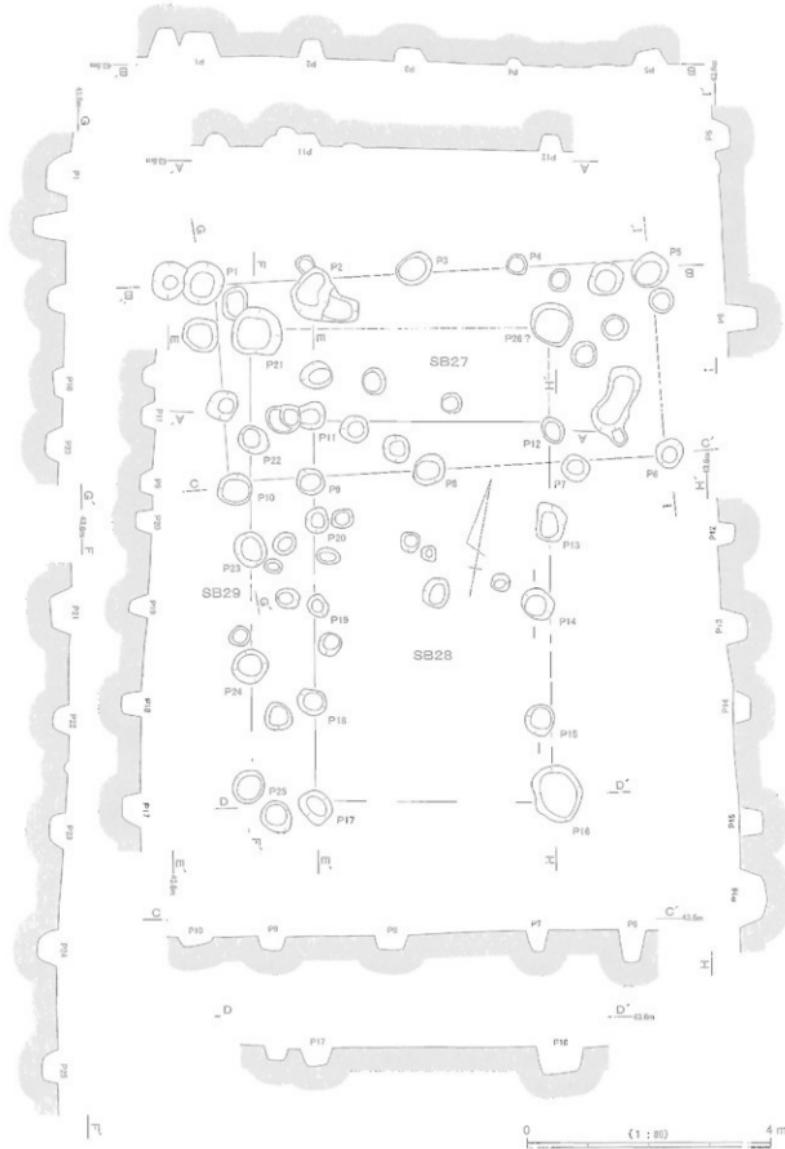
出土遺物 P10からく字形内耳鍋片、P2・P6・P8～P11・P16で、かわらけ片、P6から江戸時代の瀬戸美濃陶器片が出土した。このうちP2出土のかわらけ (第50図35) を図示した。

35はロクロ成形かわらけで、大型で、口径10.8cm、底部径4.8cm、器高3.6cmである。形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる。

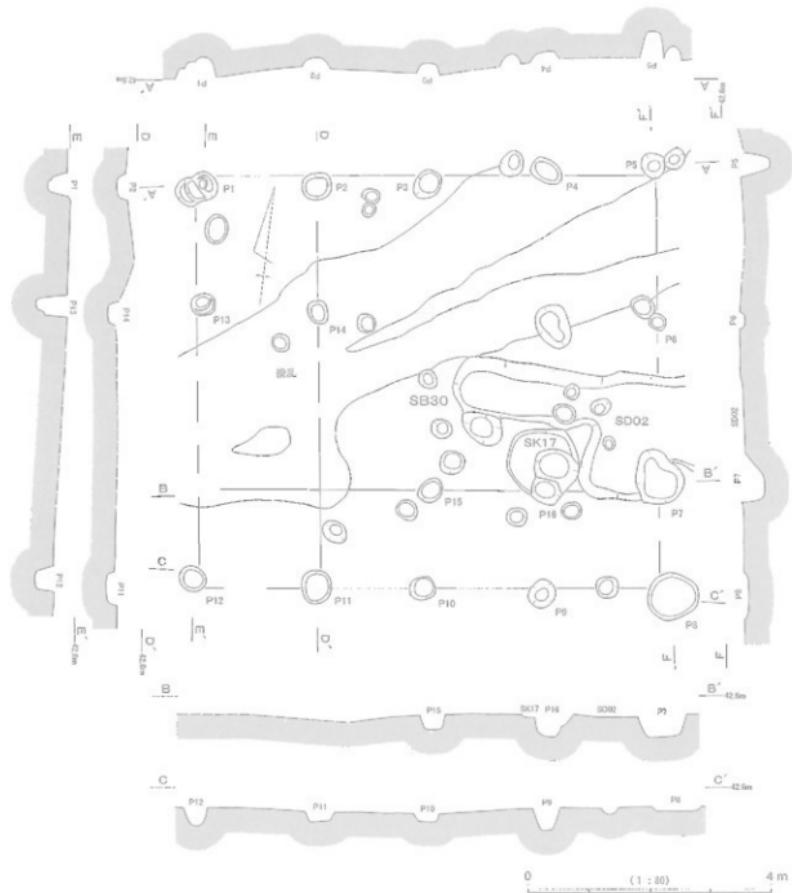
時期 P6出土の陶器から、SB30は江戸時代に帰属する可能性が高い。

(31) 31号掘立柱建物 (SB31, 第33・35・54図, 第17表, 図版13・18)

位置 D104グリッドに位置し、D群に属す。SB30・33などと重複するが先後関係は不明である。



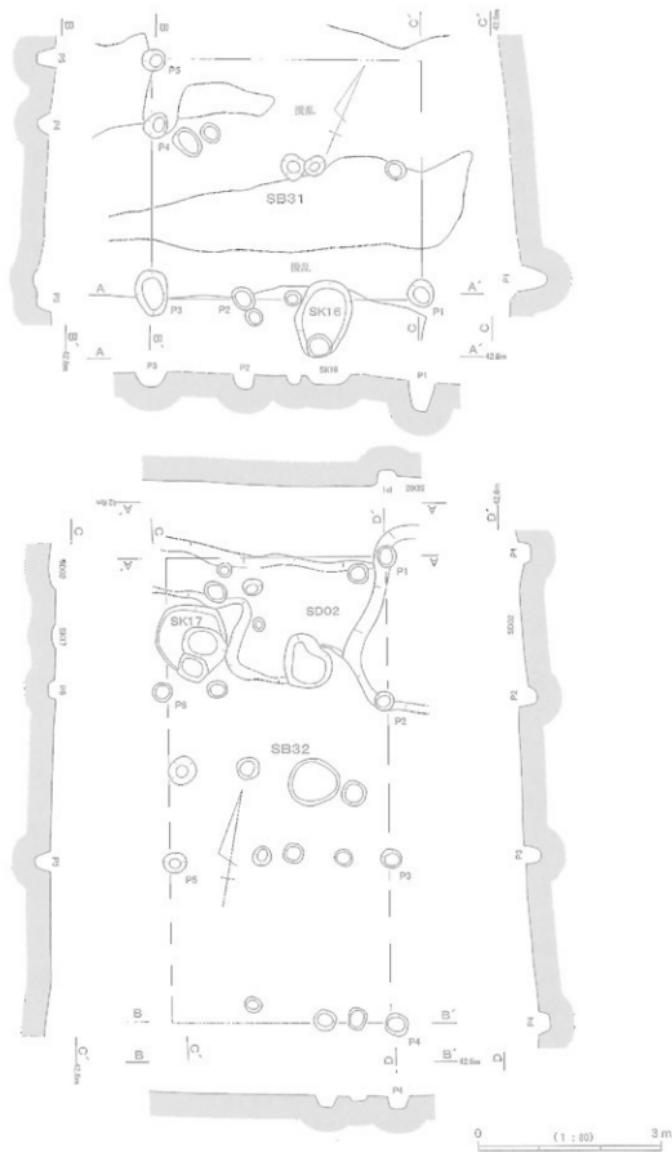
第52図 中世敷跡 捩立柱建物実測図14 (SB27~SB29)



第53図 中層敷道跡 挖立柱建物実測図15 (S830)

構造 梁間2間以上×桁行2間以上（3間×3間の可能性が高い）の、約4.0×4.4mのほぼ長方形の建物（P1～P5で構成）の可能性があるが、柱穴が少なく、柱間も一定しないことから、建物ではない可能性も残る。建物の場合は棟を東北東側（N-65°-E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁はやや斜交する。桁、梁とともに柱筋が通らない。桁、梁の身合柱については対称の位置のものが失われていて不明である。桁の柱間は現状で、南側で西側から約1.5m、2.9m、梁の柱間は西側で北側から約1.1m、2.9mである。

柱穴は不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.4～0.7mで、深さは約0.3～0.6mで一定していない。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。



第54図 中越歌道跡 墓立柱建物実測図16 (SB31・SB32)

建物の構造からみると、SB31は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P2・P5からロクロ成形かわらけ片が出土したが、小片のため図示できない。

時期 時期を特定することは難しいが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(32) 32号掘立柱建物 (SB32, 第33・35・54図, 第17表, 図版13・18)

位置 C104、D104グリッドに位置し、D群に属す。SB30などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行3間の、約3.6×7.6mの南北に長い建物 (P1～P6で構成) の可能性が高い。建物である場合には、棟を真北からやや西側 (N-9° -W) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.1倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱は正対しない。桁の柱間は西側で北側から約2.2m (推定)、2.8m、2.6m (推定)、東側で北側から約2.3m、2.6m、2.7mであり、一定していない。

柱穴は円形、不整形な円形で、大きさは直径約0.3～0.4m、深さ約0.1～0.3mであり、一定しない。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB32は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないがP1からく字形内耳鉢片、P1・P6からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、SB32は江戸時代以降に位置づけられる可能性が高い。

(33) 33号掘立柱建物 (SB33, 第33・35・36・50・55図, 第17・23表, 図版13・18・26)

位置 D104・105グリッドに位置し、D群に属す。SB31と重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行4間の、約2.9×8.9mの東西に長い建物 (P1～P8で構成) の可能性が高い。建物の場合は棟を北東～南西 (N-66° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約3.1倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱は正対しない。桁の柱間は残存している北側で西側から約1.3m、2.3m、2.7m、2.6mであり、一定していない。

柱穴は円形、不整形な円形で、大きさは直径約0.2～0.5m、深さ0.1～0.4mであり、一定しない。根固め石は用いられておらず、木柱は残存していない。

建物の構造からみるとSB33は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P2から瀬戸美濃 (美濃産) 丸皿 (37)、P7から瀬戸美濃 (美濃産) 盆 (36) が出土した (第50図)。前者は登窯1か2小期、後者は登窯期に位置づけられる。

この他図示していないが、P2・P6・P7からロクロ成形かわらけ、常滑壺片、江戸時代に帰属する陶器片が出土した。

時期 丸皿や皿から江戸時代に帰属する可能性が高い。江戸時代前期 (17世紀) の建設であろうか。

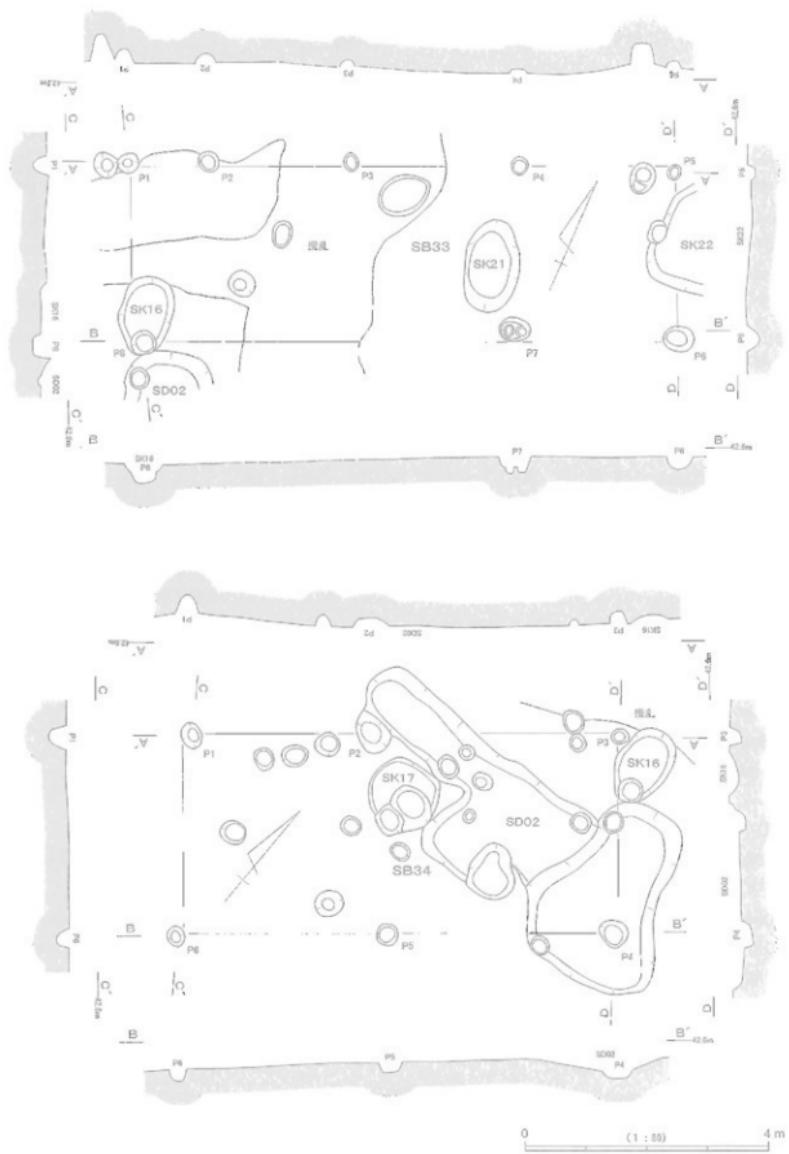
(34) 34号掘立柱建物 (SB34, 第33・35・55図, 第17表, 図版13・18)

位置 C104、D104グリッドに位置し、D群に属す。SB30などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約3.3×7.2mの東西に長い建物 (P1～P6で構成) であり、棟を北東～南西 (N-50° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.2倍である。梁と桁は斜交する。桁は東西ともに柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱は正対しない。桁行の柱間は北側で西側から3.0m、4.0m、南側で3.4m、3.8mであり、一定しない。1間の間隔も長い。

柱穴は不整形な円形で、大きさは直径約0.3～0.7m、深さ約0.2～0.3mであり、一定しない。大型の柱穴は柱の抜き取りが行われた可能性がある。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB34は規格性の低い建物といえる。



第55図 中堅敷遺跡 堀立柱建物実測図17 (SB33・SB34)

出土遺物 図示していないが、P1からかわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(35) 35号掘立柱建物 (SB35, 第33・35・36・56図, 第17表, 図版13)

位置 E105、F104・105グリッドに位置し、C群に属す。今回の調査区内では他の建物と重複関係はない。

構造 梁間1間×桁行2間以上の、約4.1m×5.6m以上の北西から南東に長い建物 (P1～P4で構成) であり、棟を北西—南東 (N-43°-W) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は1.4倍以上である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西とともに柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱は正対しない可能性が高い。桁の柱間は南側で約2.8m、2.6mであり、一定しない。

柱穴 は円形、不整形な円形で、大きさは直径約0.3～0.5m、深さ0.2～0.3mである。根固め石は用いられず、木柱も残存していない。

建物の構造 からみるとSB35は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P3からかわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(36) 36号掘立柱建物 (SB36, 第33・36・56図, 第17表, 図版13・18)

位置 D105・106、E105・106グリッドに位置し、SB33と方向が同一であることからD群に属す。

構造 梁間1間×桁行3間の、約4.0×7.0mの東西に長い建物 (P1～P8で構成) であり、棟を東北東 (N-69°-E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱はやや斜交している。桁の柱間は北側で西側から約2.0m、2.1m、2.9m、南側で約2.1m、1.9m、3.0mであり、一定しない。

柱穴 は円形、不整形な円形で、大きさは直径約0.4～0.5m、深さは約0.1～0.4mと一定しない。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造 からみると、SB36は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P1・P7からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 P1・P7の出土遺物から、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(37) 37号掘立柱建物 (SB37, 第33・36・50・57図, 第17・23表, 図版13・18・20・26)

位置 C105・106、D105グリッドに位置し、E群に属す。SB38などと重複関係にあるが、先後関係は不明である。

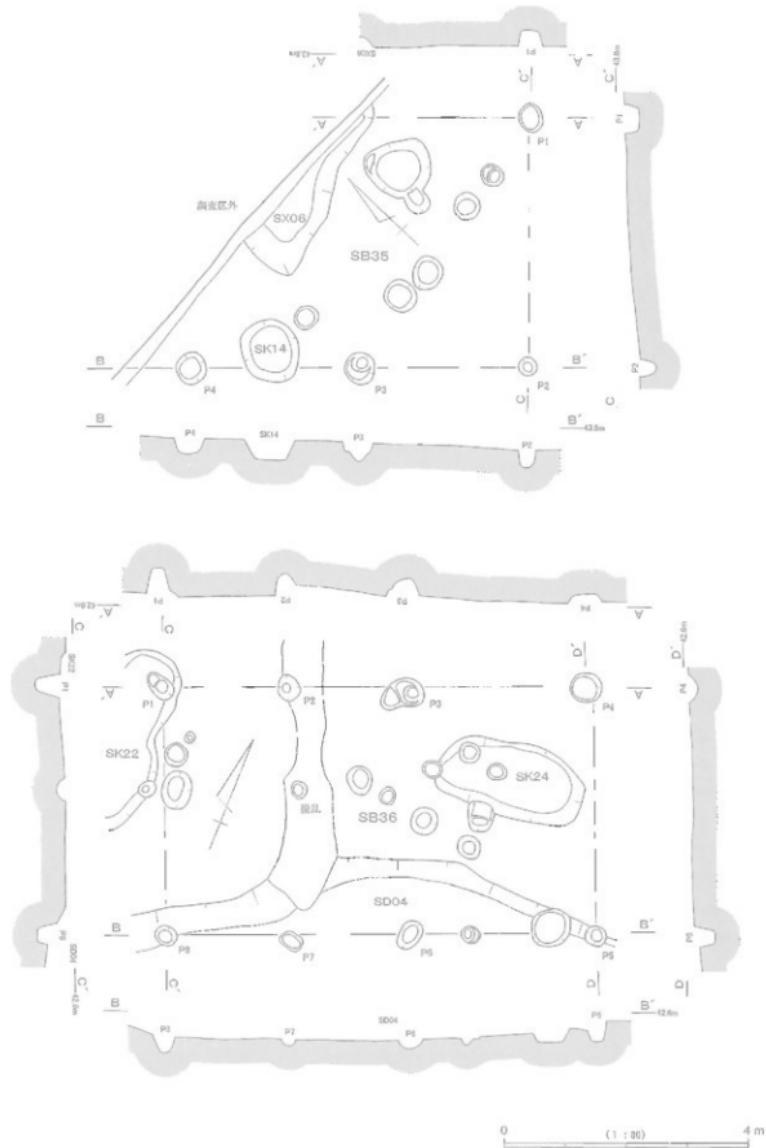
構造 梁間1間×桁行2間の、約3.1×3.6～3.8mのやや東西に長い建物 (P1～P5で構成) であり、棟を東西 (N-74°-E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.2倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通っていない。桁の身舎柱は北側が失われており、対称関係は不明である。桁の柱間は南側で1.8m、1.8mである。

柱穴 は、不整形な円形で、大きさは直径約0.4～0.7m、深さ約0.2～0.4mで一定しない。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造 からみると、SB37は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P3からは、古瀬戸腰折皿(39)、初山天目茶碗(38)、非ロクロ成形かわらけ(40)、ロクロ成形かわらけ(41)が出土した(第50図)。

腰折皿(39) は口縁部が外反するもので、口縁端部は丸く仕上げられる。古瀬戸後IV新に位置づけら



第56図 中巣敷遺跡 捨立柱建物実測図18 (SB35・SB36)

れる。天目茶碗（38）は大窓3期後半に位置づけられる。非クロ成形かわらけ（40）は底部から皿状に立ちあがり、口縁部は肥厚し、丸く仕上げられる。口径12.0cmに復原できる。クロ成形かわらけ（41）は、やや大型のもので、口径10.4cm、底部径4.3cm、器高2.5cmである。16世紀後半に属する可能性が高い。

この他図示していないが、P3～P5からかわらけ片が出土した。

時期 SB37は中世後期（16世紀後半）～江戸時代に帰属する可能性が高い。

（38）38号掘立柱建物（SB38、第33・36・50・57図、第17・23・25表、図版13・18・26・27）

位置 C105・I06、D105グリッドに位置し、E群に属す。SB39などと重複関係にあるが先後関係は不明である。

構造 柱間2間×桁行2間の、約3.3×3.8mのやや南北に長い建物（P6～P12で構成）であり、棟を真北からやや西側（N-15°-W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.2倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱はややすれている。桁の柱間は西側で北側から約1.9m、1.9m、東側で1.8m、1.9mであり、ほぼ一定している。1間（1.8m）を基準とした可能性が高い。

柱穴は不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.3～0.6m、深さ約0.3～0.4mである。P8やP12は柱の抜き取りが行われた可能性がある。

建物の構造からみると、SB38はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 P6から山茶碗（42）、P8・P11からかわらけ片、P8・P10から鉄滓（43～46）が出土した（第50図）。山茶碗は底部片で、高台にはモミ殻痕が残る。渥美湖西産で、松井一明氏の編年（松井1989）による渥美湖西二期（12世紀）に位置づけられる。

鉄滓は大型のもの（43）と、中型のもの（44）、小型のもの（45・46）がある。大型のものは全長約11.0cmで、当遺跡出土鉄滓の中では最も大きい鉄滓のうちの一つである。これらの鉄滓は精錬過程で産み出された鉄滓の可能性が高い（本節第10項参照）。

この他P8などからクロ成形かわらけが出土した。

時期 図示していないP8等出土のかわらけ片から、SB38は江戸時代に帰属する可能性が高い。

（39）39号掘立柱建物（SB39、第33・36・57図、第17表、図版13・18）

位置 C105、D105グリッドに位置し、E群に属す。SB38などと重複するが先後関係は不明である。

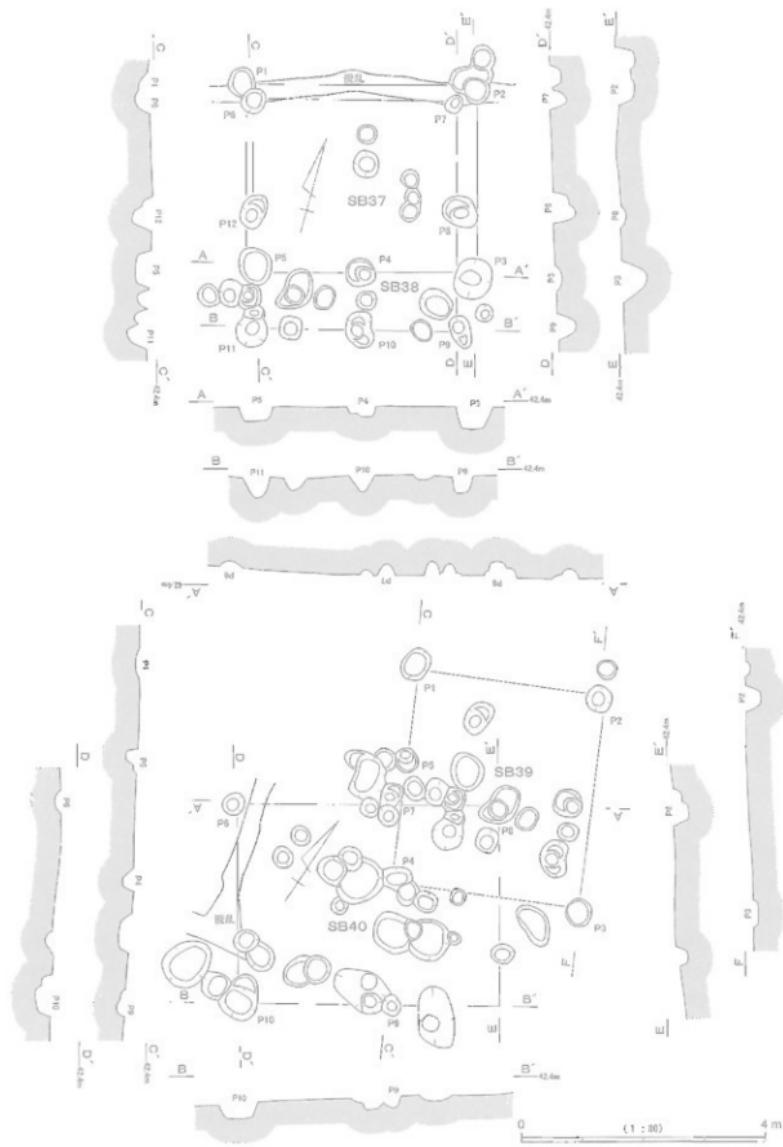
構造 柱間1間×桁行2間の、約3.1×3.5mのやや南北に長い建物（P1～P5）で構成であり、棟を北東～南西（N-26°-W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱の対称関係については不明である。桁の柱間は西側で北側から約1.6m、1.9mである。

柱穴は不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.4～0.6m、深さ約0.1～0.3mであり、比較的浅い。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB39は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないがP2・P5からクロ成形かわらけ片が出土している。

時期 時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。



第57図 中層敷遺跡 段立柱建物実測図19 (SB37~SB40)

(40) 40号掘立柱建物 (SB40, 第33・36・39・50・57・89図, 第17・23・26表, 図版13・18・27)

位置 C105グリッドに位置し、E群に属す。SB42などと重複関係にあるが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約3.3×4.3mの南北に長い建物 (P6～P10で構成) であり、棟を北東－南西 (N-57° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.3倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通らない。桁の東西の身舎柱は正対しない。桁の柱間は北側で西側から約2.5m、1.8m、南側で約2.5m、1.8m (推定) である。

柱穴は不整形な円形、梢円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.3～0.8m、深さ約0.1～0.3mであり、一定しない。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB40は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P10からはロクロ成形かわらけ (47) が出土した (第50図)。底部から外上方に直線的に立ち上がるるもので、口縁部は引き出されている。口径8.2cm、器高1.7cmである。形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

また、P8から棒状鉄製品 (第89図390) が出土した。断面方形であり、SP275 (387) やSK30 (386) 出土の釘に類似することから釘の可能性がある。

この他図示していないが、P10からロクロ成形かわらけ片が出土している。

時期 時期を特定できない。SB40は中世後期 (16世紀後半)～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(41) 41号掘立柱建物 (SB41, 第33・36・50・58・89図, 第17・24・26表, 図版13・18・27・48)

位置 C105・106グリッドに位置し、E群に属す。SB42などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行3間の、約3.5～3.6×6.1～6.2mの東西に長い総柱建物 (P1～P12で構成) であり、棟を東西 (N-73° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.7倍である。梁と桁は斜交する。桁、梁ともに柱筋が通らない。桁、梁の身舎柱はややずれている。桁の柱間は北側で西側から約2.0m、2.2m、2.0m、中央で西側から約2.0m、2.2m、1.9m、南側で西側から2.0m、2.1m、2.0mである。梁の柱間は、西側で北側から約1.8m、1.7m、西から2列目で北側から約1.8m、1.8m、3列目で北側から約1.6～1.7m、1.9～2.0m、東側で北側から約1.8m、1.8mである。梁は1.8m、桁は2.1mを基準としているのであろうか。

柱穴は不整形な円形、梢円形で、大きさは約0.3～0.8m、深さ約0.1～0.3mであり、一定しない。P1やP7のような大型の柱穴は柱の抜き取りが行われた可能性がある。柱穴に根固め石は用いられず、木柱も残存していない。

建物の構造からみると、SB41は規格性の低い建物といえる。

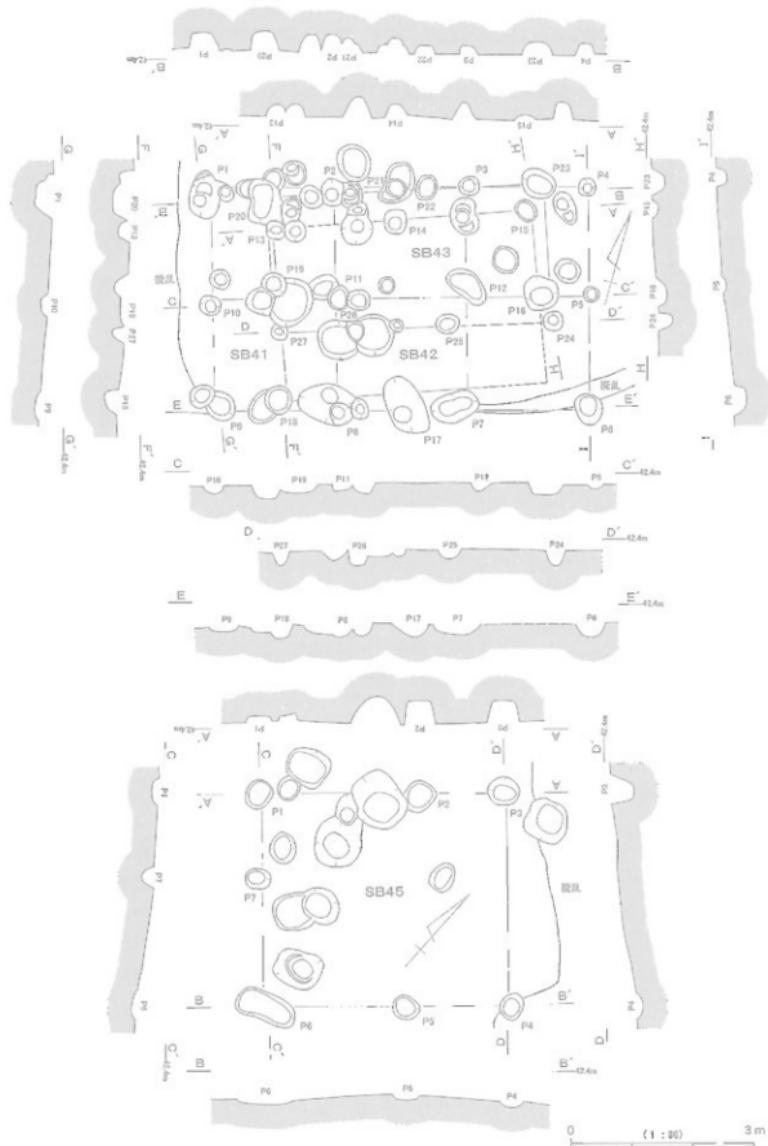
出土遺物 P10からは石製硯 (第50図48) が出土した。粘板岩製である可能性が高い。上面 (磨面) は平坦であるが、下面はやや丸みを帯びている。側縁は直角に短く立ち上がる。また、P3から板状の鉄製品 (第89図398) が出土した。長辺3.4cm、短辺2.8cm、厚さ2mmである。SB41周辺では鉄滓が多く出土しており、鍛冶が行われた可能性が高いことから、鍛冶に伴う破片あるいは精錬鍛冶を行う際の原料 (焼材) の可能性がある。

時期 時期を特定できる遺物はないが、江戸時代に位置づけられる可能性が高い。

(42) 42号掘立柱建物 (SB42, 第33・36・50・58・89図, 第17・25・26表, 図版13・18・27・48)

位置 C105・106グリッドに位置し、E群に属す。SB41などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行2間の、約2.8～3.0×4.2～4.4mの東西に長い建物 (P13～P19で構成) であり、棟を東西 (N-69° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.5倍である。梁と桁は斜交する。桁、



第58図 中屋敷遺跡 掘立柱建物実測図20 (SB41～SB43・SB45)

梁とともに柱筋が通っていない。桁、梁の身舎柱は正対していない。桁の柱間は北側で西側から約2.0m、2.2m、南側で西側から約2.0m、2.4m（推定）である。梁の柱間は西側で北側から約1.2m、1.6m、東側で北側から約1.5m、1.5m（推定）であり、一定していない。

柱穴は、不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.3～1.0m、深さ約0.1～0.2mと浅く、また一定しない。根固め石は用いられておらず、木柱は残存しない。

建物の構造からみるとSB42は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P19からロクロ成形かわらけ片、P13・P16から鉄滓、P19から鉄製品が出土した。このうち鉄滓（第50図49・50）と鉄製品（第89図388）を図示した。

鉄滓（49・50）は5cm以下であり、小型である。精鍛鍛冶による可能性が高い。鉄製品（388）は釘で、頭部がT字形に折り曲げられている。残存長2.4cm、頭部幅0.8cmである。

時期 時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(43) 43号掘立柱建物（SB43、第33・36・50・58図、第17・25表、図版13・18・27）

位置 C105・106グリッドに位置し、E群に属す。SB42などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行3間の、約2.2×4.5mの東西に長い建物（P20～P27で構成）であり、棟を東西（N-71°-E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2倍である。梁と桁は斜交する。桁は東西ともにやや柱筋が付される。桁の東西の身舎柱は正対していない。桁の柱間は北側で西側から約1.4m、1.2m、1.9m、南側で西側から約1.3m、1.5m、1.7mであり、一定しない。

柱穴は、円形、不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.3～0.8m、深さ約0.1～0.4mであり、一定しない。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB43は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 鉄滓（51）が出土した（第50図）。鉄滓は5cmに満たない小型のものである。

また、図示していないが、P27より江戸時代に帰属する陶器小片が出土した。

時期 P27から出土した陶器片から、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(44) 44号掘立柱建物（SB44、第33・36・59図、第17表、図版13・18）

位置 D106グリッドに位置し、F群に属す。SB49などと重複するが先後関係は不明である。また、SK26・27とも重複するが、SK26がSB44の柱穴を破壊していることから、SB49→SK26の順であることが判明する。SK27との先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行2間の、約5.6×6.1～6.2mの南北に長い総柱建物あるいは内部に壁をもつ建物（P1～P7で構成）であり、棟を真北からやや西側（N-22°-W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁は斜交する。桁、桁ともに柱筋が通っていない。桁、桁の身舎柱はややずれている。桁の柱間は西側で北側から2.2m（推定）、4.0m（推定）、中央で北側から2.2m、4.0m、東側で北側から約2.2m、3.9mである。おおよそ一致している。梁の柱間は、北側で西側から約2.8m、2.8m、中央で2.8m（推定）、2.8mであり、一定している。

柱穴は円形、不整形な円形、隅丸方形で、大きさは直径（一辺）約0.4～0.7m、深さ約0.1～0.4mである。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、梁と桁で柱間がほぼ一致することから、SB44はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P4～P7からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(45) 45号据立柱建物 (SB45, 第33・36・50・58図, 第17・23・25表, 図版13・18・20・27)

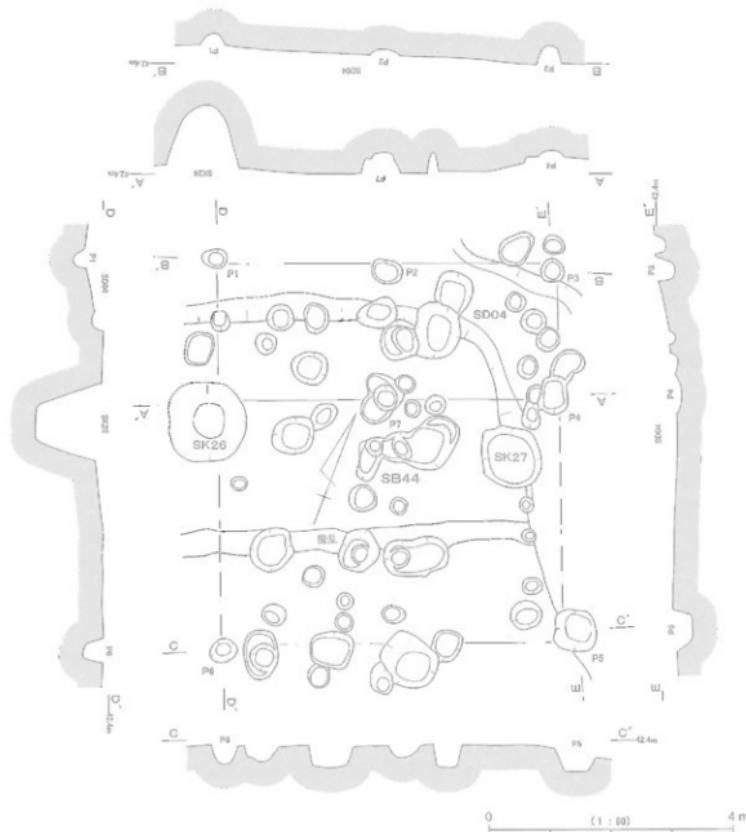
位置 C106, D106・107グリッドに位置し、F群に属す。SB44などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行2間の、約3.5×4.0mのやや東西に長い建物 (P1～P7で構成) であり、棟を北東—南西 (N46°-E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁はやや斜交する。桁、梁とともに柱筋が通っていない。桁の身舎柱は正対している。桁の柱間は北側で西側から約2.6m、1.4m、南側で西側から2.4m、1.6mであり、一定しない。

柱穴は不整形な円形、楕円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.4～1.0m、深さ約0.1～0.4mであり、一定しない。P6は柱の抜き取りが行われた可能性がある。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB45は規格性が低い建物といえる。

出土遺物 P2から鉄滓 (52・53)、ロクロ成形かわらけ (56)、P3・P6から初山内禿皿 (54・55) が出



第59図 中庭敷遺跡 据立柱建物実測図21 (SB44)

土した（第50図）。

鉄滓は6cm以下のものである。ロクロ成形かわらけは口径9.2cm、底部径4.0cm、器高2.4cmである。形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる。内丸皿（54・55）はともに形態的特徴から大窯3期後半に位置づけられる。

このほか図示していないが、P6からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 かわらけ、初山内丸皿から、中世後期（16世紀後半）～江戸時代に帰属する可能性が高い。

（46）4号掘立柱建物（SB46、第33・36・60図、第17表、図版13・18）

位置 D106、E106グリッドに位置し、F群に属す。SB50などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行2間の、約3.2×4.8mの東西に長い建物（P1～P7で構成）であり、棟を東西（N-74°-E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.5倍である。梁と桁は斜交する。桁、梁とともに柱筋が通っていない。桁の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は北側で西側から約2.2m、2.6m、南側で約2.4m、2.4mである。梁の柱間は東側で北側から約1.6m、1.6mである。建物の大きさ柱間からみると1.6mを基準としていた可能性がある。

柱穴は、円形あるいは不整形な円形、梢円形で、大きさは直径（長軸）約0.3～0.6m、深さは約0.2～0.5mであり、一定しない。P1・P7などは柱の抜き取りが行われた可能性がある。根固め石は用いられず、木柱も残存しない。

建物の構造からみると、柱間が1.6mを基準としている可能性が高いことからSB46はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P3から山茶碗片が出土している。

時期 現状では、山茶碗段階の明確な建物は確認できないため、他の掘立柱建物同様中世後期以降江戸時代に帰属する可能性が高い。

（47）47号掘立柱建物（SB47、第33・36・50・60図、第17・23表、図版13・18・27）

位置 C106、D106・107、E106グリッドに位置し、F群に属す。SB46などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行5間の、約4.6×9.6mの南北に長い建物（P8～P19で構成）であり、棟を真北からやや西側（N-19°-W）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.2倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。梁は柱筋が通る。桁の東西の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は西側で北側から約2.4m、1.8m、1.8m、2.0m、1.6m、東側で北側から約2.3m、2.2m、1.8m（推定）、1.6m（推定）、1.7m（推定）であり、一定していない。梁の柱間は、北側で約2.0m、2.6mであり、一定しない。

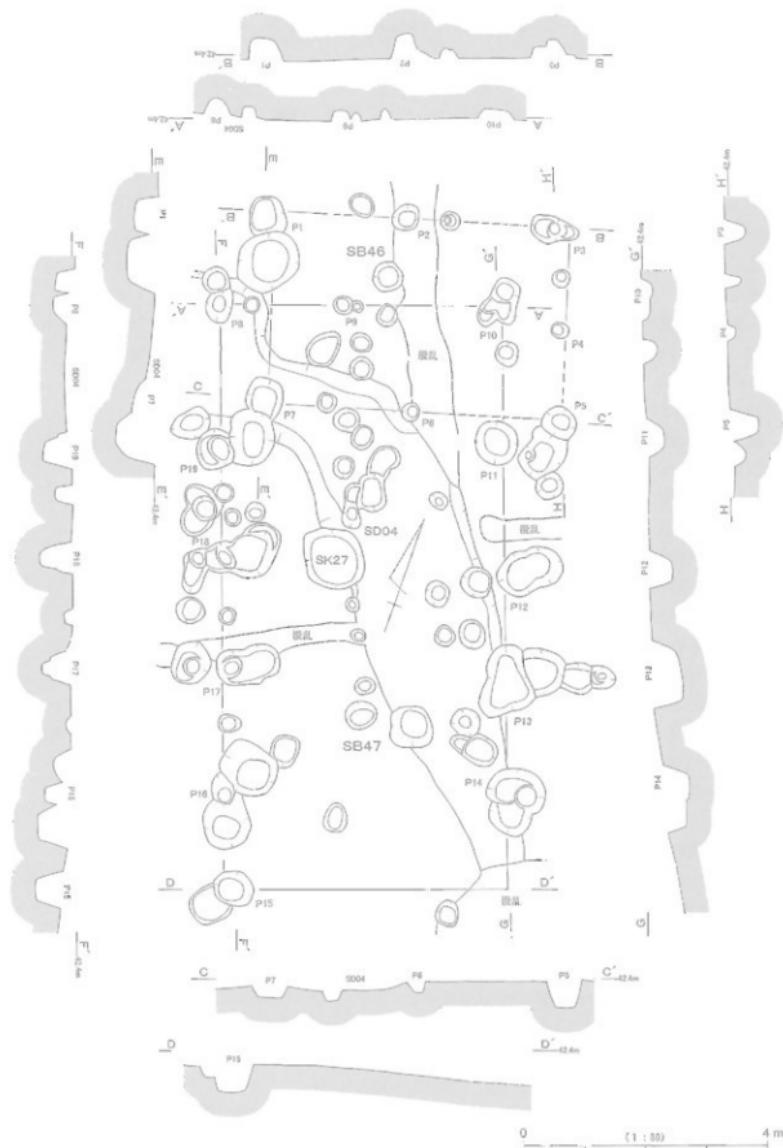
柱穴は円形、不整形な円形、梢円形で、大きさは直径（長軸）約0.3～1.2m、深さは約0.2～0.5mであり、一定していない。P10・12・13などは柱の抜き取りなどが行われた可能性がある。根固め石は用いられず、木柱も残存しない。

建物の構造からみると、SB47は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P9・P15からロクロ成形かわらけ（57・58）、P19から初山内丸皿（59）が出土した（第50図）。

かわらけ（57）は大型で、口径11.2cm、底部径5.9cm、器高2.8cmに復原できる。58は小型で、口径7.6cm、底部径4.8cm、器高1.2cmである。形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる。内丸皿（59）は形態的特徴から大窯3期後半に位置づけられる。

この他図示していないが、P19から瀬戸産天目茶碗（後II期）、P12・P19からロクロ成形かわらけ片が



第60図 中巣敷遺跡 墓立柱建物実測図22 (SB46・SB47)

出土した。

時期 出土したかわらけ、内壳皿により、中世後期（16世紀後半）～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(48) 48号掘立柱建物（SB48、第33・36・50・61図、第17・23表、図版13・18・27・28）

位置 D106・107グリッドに位置し、F群に属す。SB49などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行3間の、約6.4×5.6mの南北に長い建物（P1～P8で構成）であり、棟を真北からやや西側（N-16°-W）に向ける。桁行より梁間の方の幅が広い建物であると想定する。梁間にに対する桁行の比率は約0.9倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は大きくずれる。桁の柱間は西側で北側から約2.4m、1.6m、1.6m、東側で北側から約1.8m、1.8m、1.8mである。

柱穴は、不整形な円形、梢円形で、大きさは直径（長軸）約0.4～0.8mで、深さ約0.2～0.4mであり、一定しない。P5・P6などは柱の抜き取りなどが行われた可能性がある。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、やや規格性のある建物といえる。

出土遺物 P3から瀬戸美濃の端反皿か丸皿（60）、P5から非ロクロ成形かわらけ（381）、P4からはロクロ成形かわらけ（61・62）、P7からはSB49-P19出土かわらけと接合するロクロ成形かわらけ（63）が出土した（第50図）。

端反皿（丸皿、60）は底部の形態的な特徴から大窯1か2期に位置づけることができる。

非ロクロ成形かわらけ（381）は、底部と口縁部の境界に屈曲があるもので、口縁部はやや屈曲からやや外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。口径12.0cmに復原できる。ロクロ成形かわらけは、63が大型であり、底部から外上方に向かって直線的に立ち上がる。口径12.0cm、底部径5.7cm、器高3.5cmである。61・62は小型で、61は口径7.0cmである。62は底部からやや外反気味に外上方に立ち上がるもので、口縁端部は細く引き出される。口径8.0cm、底部径5.3cm、器高2.0cmである。SB48出土のかわらけは、形態的な特徴や焼成具合から16世紀後半に位置づけられる。

この他図示していないが、P3から瀬戸美濃端反皿（大窯1期）、P3・P7・P8からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 P7出土のかわらけから、SB48は中世後期以降江戸時代に位置づけられる可能性が高い。

(49) 49号掘立柱建物（SB49、第33・36・50・61・62図、第17・23表、図版13・18・28）

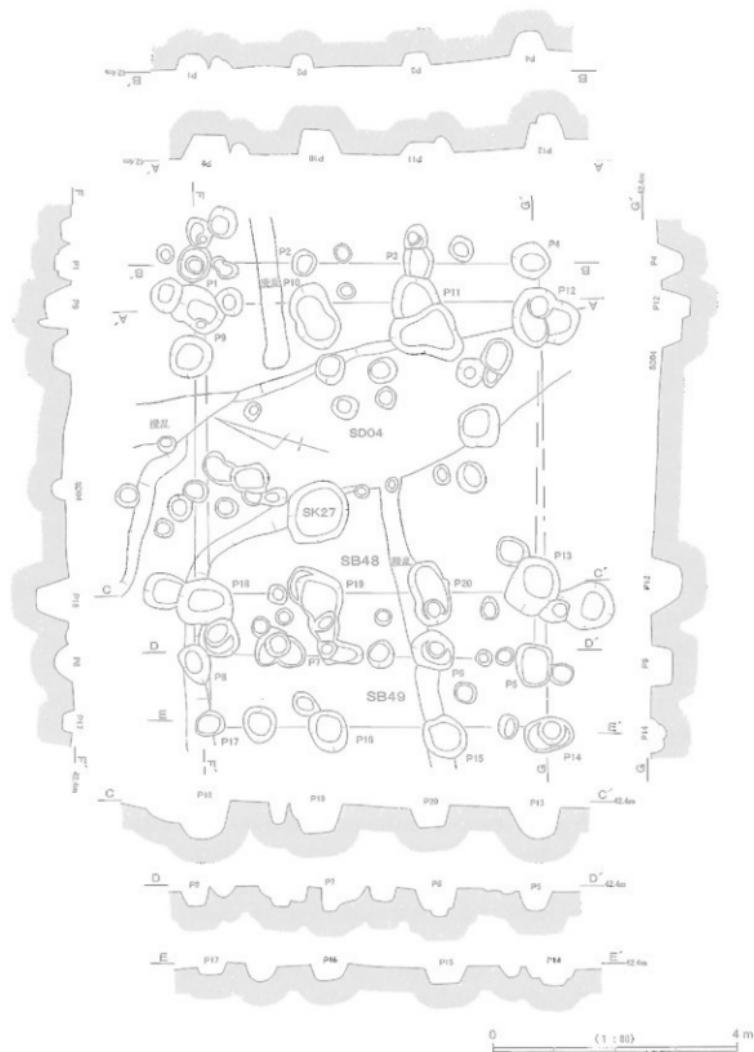
位置 D106・107グリッドに位置し、F群に属す。SB48などと重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間2間×桁行3間の、約6.9×5.5mの東西に長い絶柱建物、庇付建物あるいは壁のある建物（P9～P20で構成）であり、棟を真北から西側（N-17°-W）に向ける。桁行よりも梁間の幅が広い建物である可能性が高い。梁間にに対する桁行の比率は約0.8倍である。梁と桁はやや斜交する。桁、梁とともに柱筋が通っていない。桁、梁の身舎柱は正対していない。桁の柱間は、西側で北側から約2.0m、1.9m、1.6m、中央で北側から約1.9m、1.8m、1.8m、東側で北側から約1.8m、1.8m、1.9mである。梁の柱間は、北側で西側から約2.0m、4.9m、北側から2列目で西側から約2.2m、4.7m、3列目で西側から約2.4m、4.5m、南側で約2.4m、4.5mで一定しない。

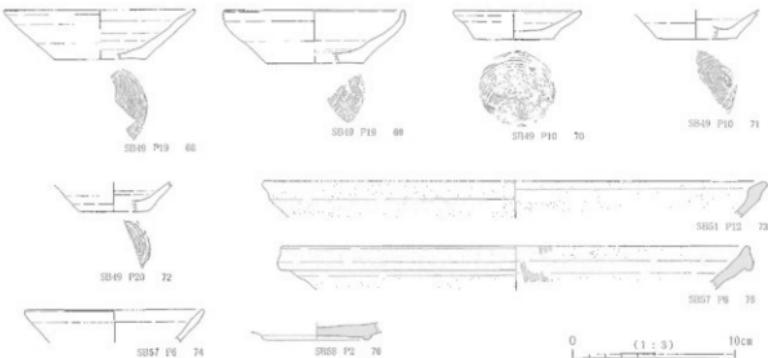
柱穴は不整形な円形、梢円形で、大きさは直径（長軸）約0.4～1.0m、深さは約0.2～0.6mであり、一定していない。柱穴が0.6m以上と大きいものが多く、それらは柱の抜き取りが行われた可能性がある。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB49は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P18・P19から須恵器?壺(64・65)、P14から、古瀬戸壷鉢(66)、土製鉢(67)、P10・P19・P20からロクロ成形かわらけ(68~72)が出土した(第50・62図)。



第61図 中層敷遺跡 圓柱建物実測図23 (SB48 + SB49)



第62図 中層遺跡 挿立柱建物出土遺物実測図③

P18・P19から出土した陶器(64・65)は須恵質で灰色を呈することから古墳時代終末期～奈良時代の壺瓶類の可能性が高い。この場合は、短頸壺、フラスコ瓶、俵形瓶の可能性が高い。

播鉢(66)は口縁部の特徴から古瀬戸後IV新に位置づけられる。

土製鈴(67)は、円形の鉢に円孔が開けられたものである。鉢口は長方形であり、鉢の方向と直交する方向に設けられている。鳴子は失われている。鉢の全長2.8cmである。

ロクロ成形かわらけは68・69が大型で、70は小型である。71・72は底部片である。68は口径に比して幅の狭い底部から外上方に向かって口縁部が直線的に立ち上がるもので、口径11.8cm、底部径5.6cm、器高3.1cmである。69は底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がるもので、口径11.0cm、底部径6.0cm、器高3.3cmである。小型の70は、口径7.9cm、底部径4.9cm、器高1.8cmである。これらのかわらけは、形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

この他図示していないが、P10～P16・P18～P20からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(50) 50号挿立柱建物 (SB50, 第33・36・63図, 第17表, 図版13・18)

位置 D106・I07、E106グリッドに位置し、F群に属す。SB46などと重複関係にあるが、先後関係は不明である。

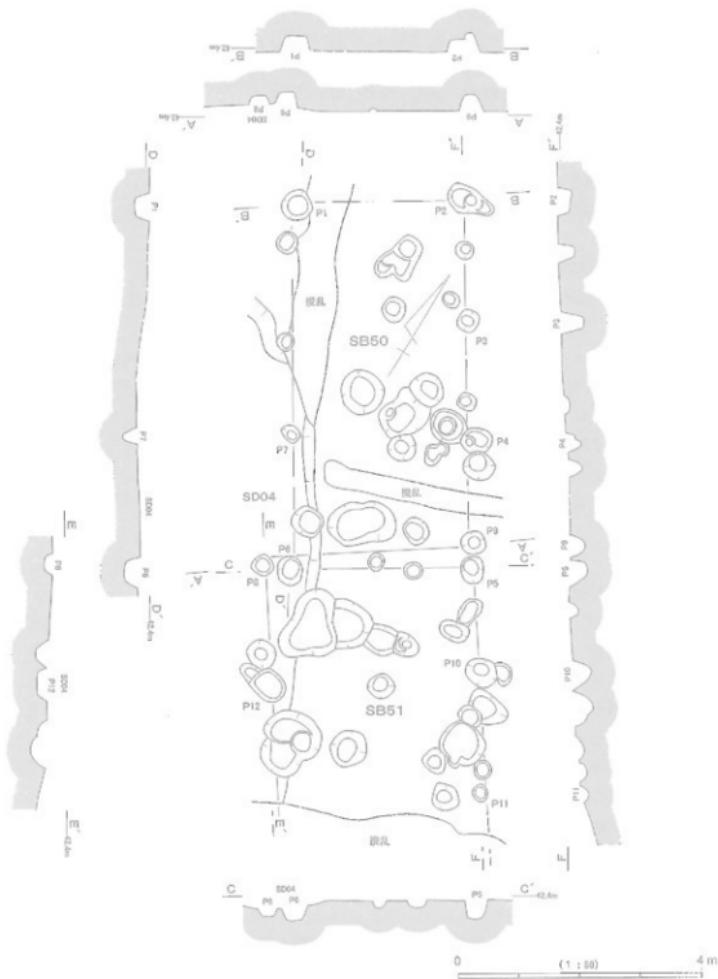
構造 梁間1間×桁行3間の、約2.8×6.0mの南北に長い建物(P1～P7で構成)であり、棟を真北から北北西(N-32°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.1倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西とともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は西側で北側から約1.9m(推定)、1.9m(推定)、2.2m、東側で北側から約2.0m、2.0m、2.0mであり、東側は一定している。

柱穴は不整形な円形、梢円形で、大きさは直径(長軸)約0.3～0.5m、深さ約0.2～0.4mであり、一定しない。根固め石は用いられず、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB50はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P3・P5からロクロ成形かわらけ小片が出土した。

時期 時期を特定できる遺物がないが、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。



第63回 中層敷遺跡 据立柱建物実測図24 (SB50・SB51)

(51) 51号据立柱建物 (SB51, 第33・36・62・63図, 第17・23表, 図版13・18・28)

位置 D106・107グリッドに位置し、F群に属す。SB53などと重複するが、先後関係は不明である。構造 梁間1間×桁行2間以上の、約3.4m×4.0m以上の建物(P8~P12で構成)であり、棟を北北西(N-33°-W)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.8倍以上である。棟と桁は斜交する。桁は東西

とともに柱筋が通っていない。桁の東西の身合柱は正対しない。桁の柱間は西側で約2.0m、東側で北側から約2.0m、2.0mであり、一定している。

柱穴は不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.2～0.6m、深さ約0.1～0.3mであり、一定しない。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB51はやや規格性のある建物といえる。

出土遺物 P12から志戸呂壠鉢（73）が出土した（第62図）。口縁部の特徴から、江戸時代前期（17世紀中頃）に位置づけられる可能性が高い。

時期 73から判断して、江戸時代（17世紀中頃）以降に帰属する可能性が高い。

(52) 52号掘立柱建物（SB52、第33・36・64図、第17表、図版13・18）

位置 D106、E106・107グリッドに位置し、F群に属す。SB46などと重複するが、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約3.5×5.3mの建物（P1～P6で構成）であり、棟を北東（N-34° -E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.5倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通っていない。桁の東西の身合柱は大きくなっている。桁の柱間は北側で西側から約2.4m、2.9m、南側で西側から約2.7m、2.6mであり、一定しない。

出土遺物 図示していないが、P2から須恵器片が出土した。

時期 須恵器片は建物の時期を特定するものではない。確定的ではないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(53) 53号掘立柱建物（SB53、第33・36・64図、第17表、図版13・18）

位置 D106・107グリッドに位置し、F群に属す。SB51などと重複するが、先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約4.0×3.8mのほぼ正方形の建物（P1～P6で構成）であり、棟を東西（N-66° -E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.0倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は南北ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身合柱は正対しない。桁の柱間は北側で西側から約1.8m、2.0m、南側で西側から約1.8m、2.0mである。

柱穴は、不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.4～0.7m、深さ約0.2～0.3mである。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB53は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P5からクロ成形かわらけ片が出土している。

時期 時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(54) 54号掘立柱建物（SB54、第33・36・65図、第17表、図版13）

位置 E107・108グリッドに位置し、G群に属す。SB56・57と重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間×桁行2間の、約2.6×4.8mの南北に長い建物（P1～P6で構成）であり、棟を北北東（N-25° -E）に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁は斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身合柱はズレている。桁の柱間は西側で北側から約2.8m、2.0m、東側で北側から約2.6m、2.2mである。

柱穴は、不整形な円形、楕円形で、大きさは直径（長軸）約0.4～0.5m、深さ約0.1～0.5mである。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB54は規格性の低い建物といえる。



第64図 中層敷遺跡 残立柱建物実測図25 (SB52・SB53)

出土遺物 図示していないが、P6から江戸時代に帰属する陶器片・ロクロ成形かわらけ片が出土した。
時期 P6出土の陶器片から判断して、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(55) 55号掘立柱建物 (SB55, 第33・36・65図, 第17表, 図版13)

位置 D107、E107・108グリッドに位置し、G群に属す。他の建物とは重複しない。

構造 梁間2間×桁行2間の、約5.1×5.6mのほぼ正方形の建物 (P7～P12で構成) あり、棟を北北東 (N-19° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は大きくずれている。桁の柱間は西側で北側から約2.8m、2.8m、東側で北側から約3.2m、2.6m (推定) である。梁は北側で西から約2.6m、2.5mである。

柱穴は、不整形な円形、梢円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.3～0.4m、深さ約0.1～0.3mであり、柱穴はある程度規則的に掘削されている。根固め石は用いられておらず、木柱は残存していない。

柱穴は大きさが類似するが、建物の構造からみると、SB55は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(56) 56号掘立柱建物 (SB56, 第33・36・66図, 第17表, 図版13)

位置 E106・107グリッドに位置し、G群に属す。SB54・57と重複するが、先後関係は不明である。

構造 梁間1間以上×桁行3間の、約2.7×7.1mの建物 (P1～P5で構成) であり、棟を東西 (N-76° -E) に向けていた可能性が高い。梁間にに対する桁行の比率は約2.6倍である。梁と桁はやや斜交する。桁は東西ともに柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱について、正対する身舎柱が調査区内に存在しないため不明である。桁の柱間は南側で西側から約2.4m、2.2m、2.5mである。

柱穴は、不整形な円形、梢円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.4～0.8m、深さ約0.3～0.6mである。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB56は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 図示していないが、P1・P2・P4からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(57) 57号掘立柱建物 (SB57, 第33・36・62・66図, 第17・23表, 図版13・28)

位置 E108グリッドに位置し、G群に属す。SB54・56と重複するが先後関係は不明である。

構造 梁間1間以上×桁行2間の、約3.0m以上×5.4mの建物 (P6～P9で構成) であり、棟の方向は東西 (N-76° -E) に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約1.8倍以上である。梁と桁はやや斜交する。桁は柱筋が通っていない。桁の東西の身舎柱は不明確である。桁の柱間は南側で西側から約2.6m、2.8mであり、一定していない。

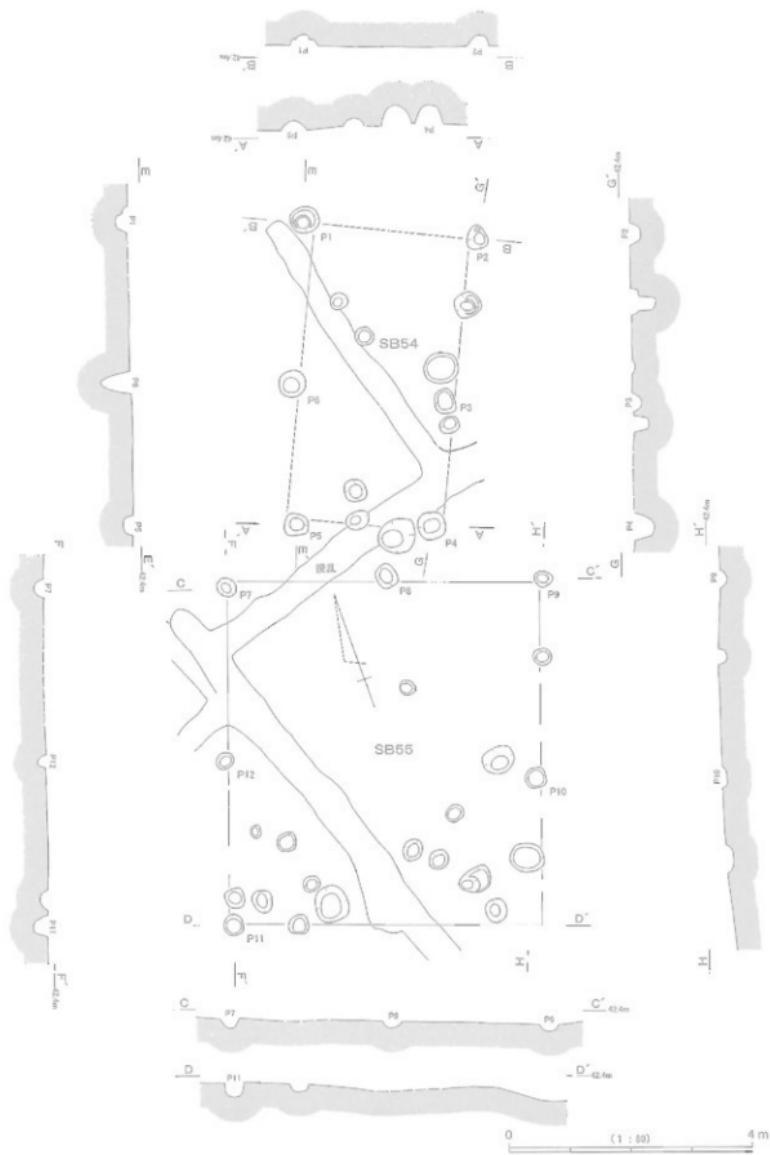
柱穴は、不整形な円形、梢円形で、大きさは直径 (長軸) 約0.4～0.8m、深さ約0.4～0.6mである。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB57は規格性の低い建物といえる。

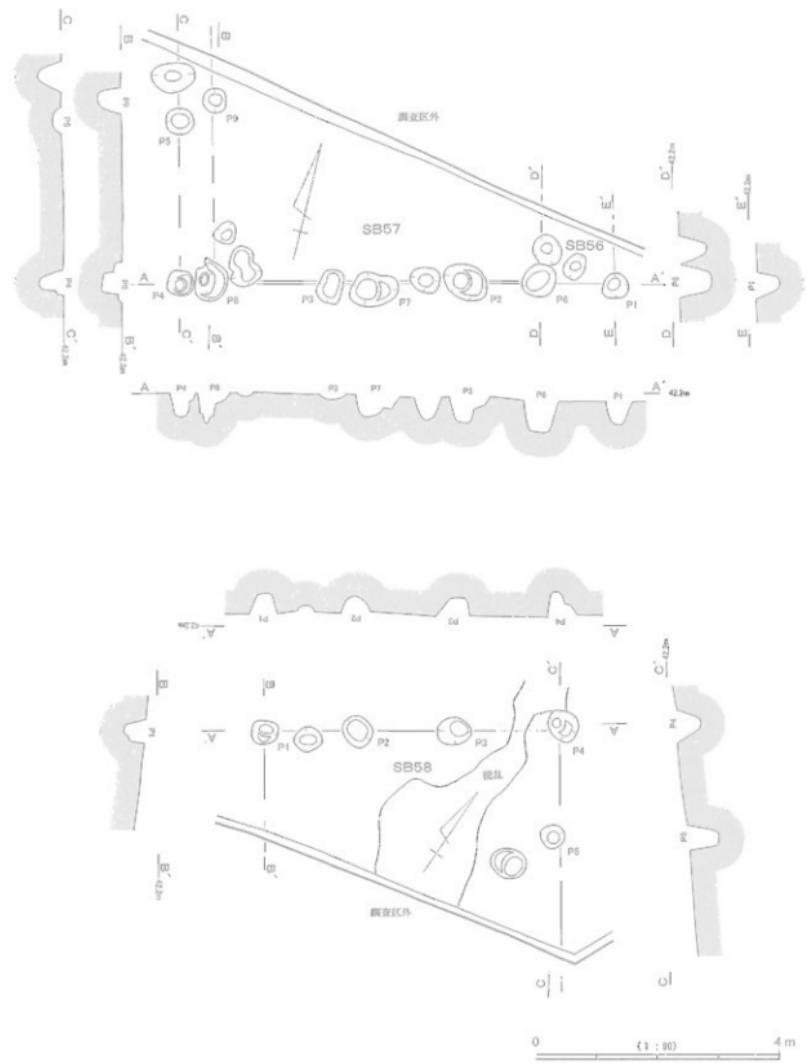
出土遺物 P6から瀬戸美濃壺鉢 (75)、ロクロ成形かわらけ (74) が出土した (第62図)。

壺鉢 (75) は口縁部の特徴から大窯2期に位置づけられる。ロクロ成形かわらけ (74) は外上方に向かって直線的に立ち上がるもので、口径は11.1cmである。かわらけは形態的特徴から16世紀後半に位置づけられる。

時期 時期を特定できないが、中世後期 (大窯2期) ～江戸時代に帰属する可能性が高い。



第65図 中屋敷遺跡 挿立柱建物実測図26 (SB54・SB55)



第66図 中屢數遺跡 圓柱建物実測図27 (SB57・SB58)

(58) 58号堀立柱建物 (SB58、第33・36・62・66図、第17・23表、図版13・29)

位置 D107・108グリッドに位置し、G群に属す。他の建物とは重複しない。

構造 梁間1間以上×桁行3間の、約1.8m以上×4.8mの建物であり、棟を北北東(N-56°-E)に向ける。梁間にに対する桁行の比率は約2.7倍以下である。梁と桁はやや斜交する。桁は柱筋が通っていない。桁の身舎柱についてP5の対面に柱穴が確認できることから正対していなかった可能性が高い。桁行の柱間は西側から約1.5m、1.7m、1.6mである。

柱穴は、不整形な円形、橢円形で、大きさは直径(長軸)約0.4~0.6m、深さ約0.3~0.6mである。根固め石は用いられず、木柱は残存しない。

建物の構造からみると、SB58は規格性の低い建物といえる。

出土遺物 P2から、瀬戸美濃志野丸皿(76)が出土した(第62図)。形態的な特徴から大窯4期後半に位置づけられる。

この他図示していないが、P2から瀬戸美濃播鉢片(大窯期)、P3からロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 時期を特定できないが、志野丸皿が中世末であることから、中世末～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(59) 堀立柱建物一覧表

第17表 中層敷遺跡 堀立柱建物の概要

番号	押図	図版	グリッド	群	棟方位	梁×桁	梁間	桁行	出土遺物	時期
SB01	34・37	12・15・17	E99・100	A	N-4°-W	1×2	4.9	5.2	-	中世後期 以降近世
SB02	34・37・38	12・15・17	E100	A	N-9°-W	1×2	3.7	5.6	かわらけ	中世後期 以降近世
SB03	34・39	12・15・17	E100・E101, F101	B	N-77°-B	1×3	4.3	6.2	かわらけ	近世
SB04	34・39	12・15・17	D100, E99・100・101	A	N-51°-S	2×4	6	8.2	常滑窯・内耳罐・陶器・かわらけ	近世
SB05	34・37	12・15・17	D100・101, E100	A	N-58°-E	1×3	2.6	5.6	かわらけ	近世
SB06	34・38・40	12・15・17・24	E101, F101	B	N-5°-W	1×3	3.2	6.8	磁器染付皿・青磁・かわらけ・瀬戸美濃播鉢	中世後期 以降近世
SB07	34・40	12・15・17	E101, F101	B	N-9°-W	1×2	4.3	4.7	-	近世
SB08	34・38・41	12・16・24	E101, F101・102	B	N-56°-E	2×3	4.5	8.3	かわらけ・瀬戸美濃播鉢	近世
SB09	34・38・41	12・24	E101・102, F101	B	N-35°-W	2×4	3.5	8.7	砥石・陶器	近世
SB10	34・42	12・15・16	C100・101, D100・101	A	N-58°-E	2×5	6.4	9.1	瀬戸播鉢・内耳罐・かわらけ	中世後期 以降近世
SB11	34・38・43	12・15・19・24	D101, E100・101	A	N-30°-W	3×5	5.3	9.4	かわらけ・志戸呂壺・志戸呂壺・内耳罐	近世
SB12	34・44	12・15・16	D100	A	N-40°-E	1×2	3.6	5.1	かわらけ	近世
SB13	34・44	12・15・16	C100・101, D100・101	A	N-89°-W	1×2	3.6	5.6	-	近世
SB14	34・45	12・15・16	D100・101	A	N-89°-E	1×3	3.1	8.7	かわらけ	中世後期 以降近世
SB15	34・38・45	12・15・16・24	C100, D100・101	A	N-74°-E	1×4	2.2	7.2	かわらけ・瀬戸播鉢	中世後期 以降近世
SB16	34・38・46	12・16・20・24・25	F101, F102	B	N-12°-W	2×4	3.8	7.4	磁器染付皿・志戸呂壺・かわらけ	近世
SB17	34・38・46	12・16	F101, F102	B	N-16°-W	2×3+	4.6	7.0+	常滑窯片・かわらけ	中世後期 以降近世
SB18	33・35・38・47	12・16・25	F102	B	N-7°-W	3×3+	5.6	5.6+	かわらけ・陶器	近世
SB19	33・35・47	12・16	E102・102	B	N-10°-W	1×2	3.9	4.0	かわらけ	近世

番号	地図	図版	グリッド	群	種方位	横×縦	聚間	桁行	出土遺物	時期
SB20	33~35・38~48	12・16・25	F101・102	B	N-29°-W	1×2+	3.8	6.4	かわらけ・陶器片	近世
SB21	35・38・45	12・16・25	F102・103	B	N-85°-W	1×2	2.0	4.3	瀬戸美濃志野組・かわらけ・土師瓶・古瀬戸彌跡	中世後期以降近世
SB22	35・49・50	12・16・19・26	F102	B	N-6°-W	3×2+	4.7	3.6	瀬戸美濃焼反皿・かわらけ	中世後期以降近世
SB23	35・49・50	12・16・26	F102・103	B	N-21°-W	2×2+	5.1	4.0+	かわらけ	中世後期以降近世
SB24	35・51	12・16	F103	B	N-21°-W	1×2	2.5	3.8	かわらけ	近世
SB25	35・51	12・16	E103, F102・103	B	N-18°-W	2×2	3.0	5.4	かわらけ	近世
SB26	35・50・51	12・16・26	E103, F103	B	N-89°-E	1×2	2.6	4.3	かわらけ	中世後期以降近世
SB27	35・52	12・16	E102, E103, F102・103	B	N-76°-E	1×4	3.2	7.2	常滑窯・かわらけ	近世
SB28	35・52	12・16・19	E102・103	B	N-11°-W	1×4	3.9	6.2	かわらけ	近世
SB29	35・50・52	12・16・26	E102・103, F102	B	N-10°-W	1×4	4.9	7.6	常滑窯・かわらけ	中世後期以降近世
SB30	35・50・53	13・18・26	C103・104, D103・104	D	N-81°-E	3×4	6.8	7.6	く字形内耳鍋・かわらけ・瀬戸美濃陶器	近世
SB31	35・54	13・18	D104	D	N-65°-E	2×2+	4.0	4.4+	かわらけ	近世
SB32	35・54	13・18	C104, D104	D	N-9°-W	1×3	3.6	7.6	く字形内耳鍋・かわらけ	近世
SB33	35・36・50・55	13・18・26	D104・105	D	N-60°-E	1×4	2.9	8.9	瀬戸美濃丸皿・皿・かわらけ・常滑窯・陶器	近世
SB34	35・55	13・18	C104, D104	D	N-50°-E	1×2	3.3	7.2	かわらけ	近世
SB35	35・36・56	13	E105, F104・105	C	N-43°-W	1×2+	4.1	5.6+	かわらけ	中世後期以降近世
SB36	36・56	13・18	D105・106, E105・106	D	N-69°-E	1×3	4.0	7.0	かわらけ	近世
SB37	36・50・57	13・18・20・26	C105・106, D105	E	N-74°-E	1×2	3.1	3.8	古瀬戸腰折鉢・初山天目茶碗・かわらけ	中世後期以降近世
SB38	36・50・57	13・18・26・27	C105・106, D105	E	N-15°-W	2×2	3.3	3.8	山茶碗・かわらけ・鉄滓	近世
SB39	36・57	13・18	C105, D105	E	N-25°-W	1×2	3.1	3.5	かわらけ	近世
SB40	36・50・57・89	13・18・27	C105	E	N-57°-E	1×2	3.3	4.3	かわらけ・鉄製品	中世後期以降近世
SB41	36・50・58・89	13・18・27・48	C105・106	E	N-73°-E	2×3	3.6	6.2	石製鏡・鉄製品	近世
SB42	36・50・58・89	13・18・27・48	C105・106	E	N-69°-E	2×2	3.0	4.4	かわらけ・鉄滓・鉄製品	近世
SB43	36・50・58	13・18・27	C105・106	E	N-71°-E	1×3	2.2	4.5	鉄滓・陶器片	近世
SB44	36・59	13・18	D106	F	N-22°-W	2×2	5.6	6.2	かわらけ	近世
SB45	36・50・58	13・18・20・27	C106, D106・107	F	N-46°-E	2×2	3.5	4.0	鉄滓・かわらけ・初山内壳鳳	中世後期以降近世
SB46	36・60	13・18	D106, E106	F	N-74°-E	2×2	3.2	4.8	山茶碗	中世後期以降近世
SB47	36・50・60	13・18・20・27	C106, D106・107, E106	F	N-19°-W	2×5	4.6	9.6	かわらけ・初山内壳鳳・瀬戸産天目茶碗	中世後期以降近世
SB48	36・50・61	13・18・27・28	D106・107	F	N-16°-W	1×3	6.4	5.6	瀬戸美濃焼反皿が丸皿・かわらけ	中世後期以降近世
SB49	36・50・61・62	13・18・28	D106・107	F	N-17°-W	2×3	6.9	5.5	須恵器?盤・古瀬戸彌跡・土師鉢・かわらけ	中世後期以降近世
SB50	36・63	13・18	D106・107, E106	F	N-32°-W	1×3	2.8	6.0	かわらけ	中世後期以降近世
SB51	36・62・63	13・18・28	D106・107	F	N-33°-W	1×2+	3.4	4.0+	志戸呂彌跡	近世
SB52	36・64	13・18	D106, E106・107	F	N-34°-E	1×2	3.5	5.3	須恵器	近世
SB53	36・64	13・18	D106・107	F	N-66°-E	1×2	4.0	3.8	かわらけ	近世
SB54	36・65	13	E107・108	G	N-25°-E	1×2	2.6	4.8	陶器片・かわらけ	近世
SB55	36・65	13	D107, E107・108	G	N-19°-E	2×2	5.1	5.6	-	近世
SB56	36・66	13	E107・108	G	N-76°-E	1+×3	2.7+	7.1	かわらけ	近世
SB57	36・62・66	13・29	E108	G	N-76°-E	1+×2	3.0+	5.4	瀬戸美濃彌跡・かわらけ	中世後期以降近世
SB58	36・66	13・29	D107・108	G	N-56°-E	1+×3	1.8+	4.8	瀬戸美濃志野丸皿・瀬戸美濃彌跡・かわらけ	中世後期以降近世

※獨立柱建物は第33回(遺跡全体図)にはすべての掲載されているため、第33回は神社番号からは除いている。

※時期については、本文中では江戸時代としたものを近世に表記を変えている。

3. 井戸

井戸は1基のみ確認した。

(1) SE01 (第67・68図, 第18・23表, 図版22・29)

位置 F101グリッドに位置する。

構造 石組井戸である。掘方は平面が不整形な円形で、その中央に角礫を用いてやや不整形な円形の井戸を組みあげている。掘方の長軸約2.0m、短軸約1.5m、深さ約0.5m、内径は直径約0.7m、石組の高さ約0.3mである。石組に用いられた石材の大きさは、最大で15~20cm前後であり、現状で石組3段分残存している。

なお、南側がSD01と重複するが、関連する遺構かどうか判断できなかった。

出土遺物 覆土中からかわらけ、陶磁器が出土し、肥前窓(77)とロクロ成形かわらけ(78・79)を図示した。77は内面底部に文様が描かれている。江戸時代前期(17世紀後半~末頃)に位置づけられよう。ロクロ成形かわらけは中型のもので、口径8.3~8.4cm、底部径4.4~4.8cm、器高2.7~3.4cmである。形態的特徴、焼成具合から18世紀前半に位置づけられる。

時期 肥前窓の存在から、SE01は江戸時代中期(18世紀前半)以降に帰属する可能性が高い。

第18表 中層敷遺跡 井戸の概要

遺構名	掲図	図版	グリッド	掘方	内径	深さ	遺物	備考
SE01	67・68	22・29	F101	1.5~2.0	0.7~0.9	0.5	かわらけ・陶磁器	

※掘方は、短軸長~長軸長の長さを、内径は石組内部の短軸長~長軸長を表記している。

[SE01]

- 1. 墓区覆色砂質土
- 2. 緑褐色土
- 3. 黄色土 酸化む
- 4. 灰褐色砂質土



第67図 中層敷遺跡 井戸実測図

4. 土坑 (第68~73図, 第19・23・25表, 図版20・21・29~31)

土坑は、30基確認した。以下、順に出土位置、特徴、出土遺物、帰属する時期について報告する。

(1) SK01 (第68・69図, 第19・23表, 図版20・29)

位置 F100グリッドに位置する。今回検出した最も北西の遺構である。

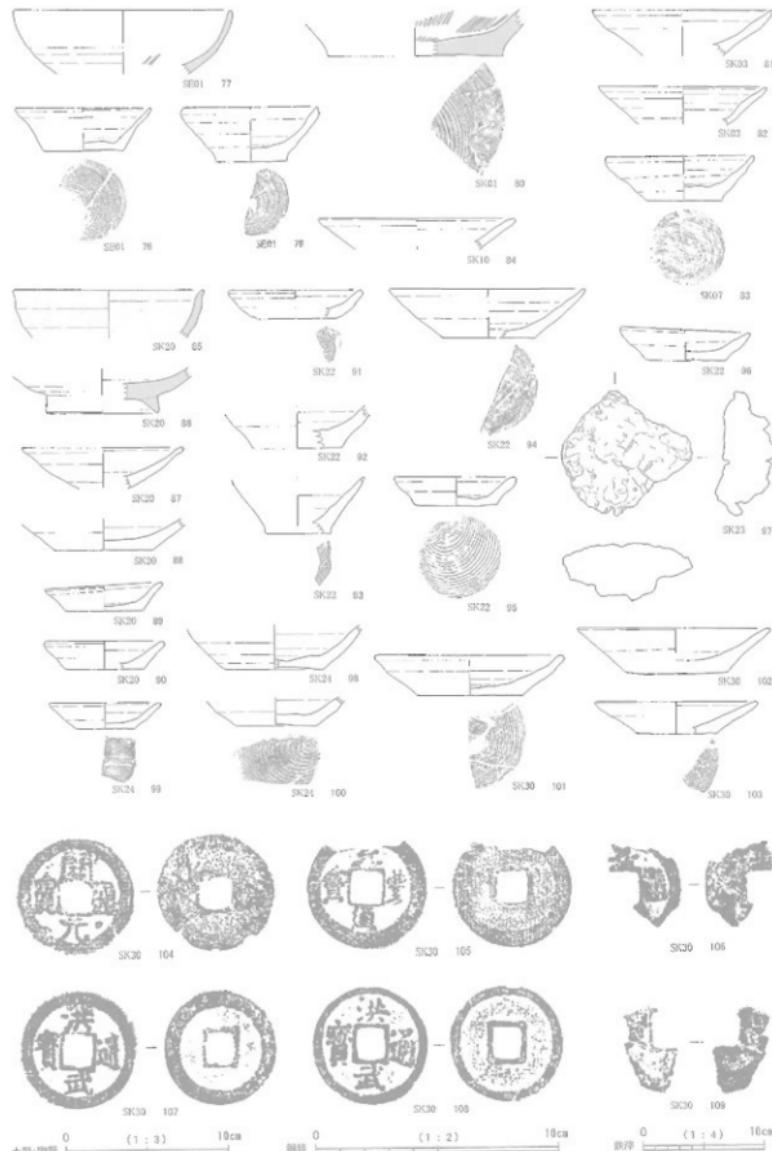
特徴 不整形な隅丸長方形平面であり、断面は皿状である。長辺約2.0m、短辺1.4m、深さ約0.25mである。

出土遺物 古志戸呂掘鉢底部片(80)のほか、図示していないがロクロ成形かわらけが出土した。古志戸呂掘鉢は、古瀬戸後IV新併行期、15世紀後半に位置づけられる。

時期 時期を特定できないが、中世後期(15世紀後半)~江戸時代に位置づけられる可能性が高い。

(2) SK02 (第69図, 第19表)

位置 E99グリッドに位置する。



第68図 中層遺跡
井戸および土坑出土遺物実測図

第19表 中層敷遺跡 土坑の概要

遺構名	地図	図版	グリッド	形状	直径(長軸)	短軸	深さ	遺物	備考
SK01	68-69	20-23	E100	隅丸長方形	2.00	1.40	0.25	古志戸呂掘鉢・かわらけ	
SK02	69	-	E99	隅丸長方形	1.20	0.90	0.4	-	
SK03	68-69	-	D99-100	隅丸長方形	1.60	1.10	0.75	かわらけ	
SK04	-	E100-101	隅丸方形	1.10	0.85	0.3	陶器片		
SK05	69	-	E101	楕円形	1.65	1.28	0.2	-	
SK06	-	-	D102	円形	1.55	-	0.55	-	
SK07	69-70	20-23	D102	円形	1.60	-	0.65	かわらけ	
SK08	-	-	D102-E102	円形	1.05	-	0.3	-	
SK09	70	-	E103	円形	1.00	-	0.2	-	
SK10	68-70	-	E103	隅丸方形	1.55	-	0.3	内耳鉢・かわらけ	
SK11	20	-	D103-E103	隅丸方形	1.30	-	0.35	-	
SK12	70	-	E104	円形	1.20	-	0.3	-	
SK13	-	-	E104	円形	0.90	-	0.25	-	
SK14	-	-	E104	円形	1.10	-	0.35	-	
SK15	-	-	E104	楕円形	1.30	1.00	0.4	-	
SK16	-	-	D104	楕円形	1.30	0.90	0.15	-	
SK17	-	-	D104	円形	1.15	-	0.1	-	
SK18	-	-	D104-105	楕円形	1.30	1.15	0.15	-	
SK19	72	-	E105	楕円形	1.70	0.90	0.25	-	
SK20	68-72	29	E105	楕円形	1.90	0.90	0.6	灰釉陶器・古瀬戸天目茶碗・かわらけ・常滑窯	
SK21	72	21	D105	楕円形	1.55	0.90	0.3	-	
SK22	-	21-29-30	D105, E105	瓶形	2.80	1.50	0.2	かわらけ・古瀬戸腰折鉢・志戸呂天目茶碗・志戸呂掘鉢・常滑窯・内耳鉢・陶器片・鉄斧	
SK23	-	21-30	E106	楕円形	2.30	1.15	0.2	鉄斧・かわらけ	
SK24	-	-	E106	楕円形	2.20	1.10	0.2	かわらけ	
SK25	-	-	E106	楕円形	1.80	1.05	0.2	-	
SK26	-	-	D106	円形	1.30	-	1.05	-	
SK27	-	-	D106	円形	0.95	-	0.4	-	
SK28	-	-	C106	隅丸方形	1.25	-	0.2	-	
SK29	-	-	C107, D107	楕円形	1.30	1.10	0.5	-	
SK30	68-73-89	21-31-48	E105-107	長方形	1.20	0.80	0.08	銅鏡・かわらけ・釘	

※括弧内は残存直数
※深さは最深部の深さ

※長辺は長軸として、短辺は短軸として表記する。

単位(m)

特徴 不整形な隅丸長方形平面であり、やや南北に長い不整形な土坑である。長辺約1.2m、短辺0.9m、深さ約0.4mである。南側が深く掘りこまれおり、その部分の形態は柱穴状である。

出土遺物 SK02からは遺物は出土していない。

時期 時期を特定できないが、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(3) SK03 (第68・69図、第19・23表)

位置 D99・100グリッドに位置する。

特徴 平面形は不整形な隅丸長方形で、断面は逆台形であり、深い。長辺約1.6m、短辺約1.1m、深さ約0.75mである。

出土遺物 ロクロ成形かわらけが出土し、2点を図示した(81・82)。口径は10.4～11.0cmである。硬質の焼き上がりである。形態的な特徴、焼成状況から2点は17世紀後半～18世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

時期 出土したかわらけから江戸時代前期後半(17世紀後半)以降に帰属する可能性が高い。

(4) SK04 (第69図、第19表)

位置 E100・101グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な隅丸方形で、一部小穴により破壊される。断面は皿状である。長辺約1.1m、短辺約0.85m、深さ約0.3mである。

出土遺物 図示していないが、江戸時代の陶器小片が出土している。

時期 出土した陶器片から江戸時代に帰属する可能性が高い。

(5) SK05 (第69図、第19表)

位置 E101グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な橢円形で、断面は逆長台形である。長軸約1.65m、短軸約1.28m、深さ約0.2mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期を特定できないが、中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(6) SK06 (第69図、第19表、図版20)

位置 D102グリッドに位置する。

特徴 平面はやや不整形な円形で、断面はU字形である。最上層（1層）に焼土および炭化物を含むがSK06の性格については不明である。直径約1.5～1.55m、深さ約0.55mである。焼土・炭化物を含むことから鍛冶に関連する遺構あるいは火葬墓の可能性がある。前者の可能性が高いと想定する。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がなく時期を確定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(7) SK07 (第68・70図、第19・23表、図版20・29)

位置 D102グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な円形で、断面はU字形である。SK06と平面、断面の特徴が同一であり、同じような性格をもつ土坑である可能性が高い。覆土上層（1層）と3層に焼土と炭化物が含まれる。直径約1.5～1.65m、深さ約0.65mである。鍛冶に関連する遺構であろうか。

出土遺物 中型のロクロ成形かわらけ（83）が出土した。口径は9.0cm、底部径4.7cm、器高2.8cmであり、硬質な焼き上がりである。形態的特徴、焼成具合から18世紀前半に位置づけられる。

時期 出土したかわらけから江戸時代中期（18世紀前半）以降に帰属する可能性が高い。

(8) SK08 (第70図、第19表)

位置 D102、E102グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な円形で、断面は逆台形である。SK06・07と平面、断面形態が類似しており、同様の性格をもつ土坑の可能性がある。直径約1.05m、深さ約0.3mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

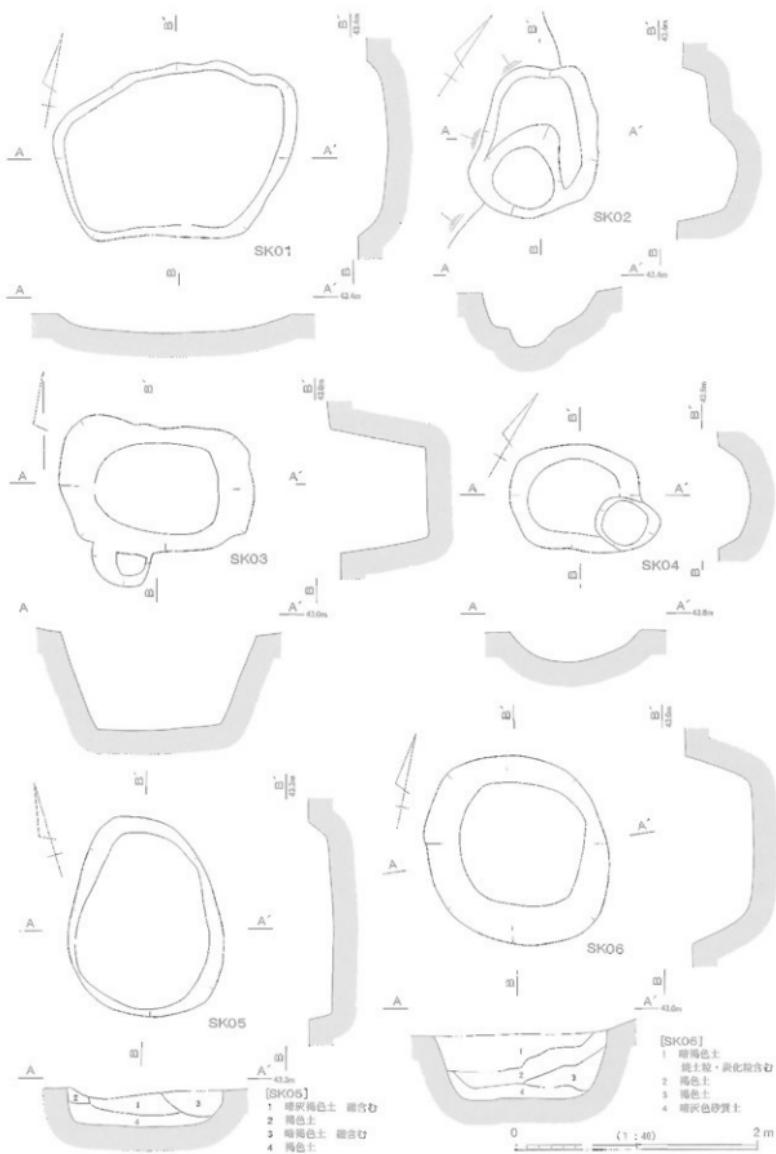
(9) SK09 (第70図、第19表)

位置 D103グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な円形で、断面は逆台形である。SK06～08と同様の特徴を有する。同様の性格の遺構の可能性がある。直径約0.95～1.0m、深さ約0.2mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期を確定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。



第69図 中層歎遺跡 土坑実測図1 (SK01~SK06)

(10) SK10 (第68・70図、第19・23表、図版20)

位置 E103グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な隅丸方形で、断面はU字形である。一边約1.5~1.55mで、深さは約0.3mである。

出土遺物 ロクロ成形かわらけ(84)が出土した。口径は12.2cmに復原できる。形態的な特徴から17世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

また、図示していないが、内耳鍋体部片が出土した。

時期 江戸時代中期（18世紀前半）以降に位置づけられる。

(11) SK11 (第70図、第19表、図版20)

位置 D103、E103グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な隅丸方形で、断面はU字形、逆台形である。SK10と同様の特徴をもつ。一边約1.3m、深さ約0.35mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期を特定できない。SK10と同形態であるが、同時期かどうか不明である。中世後期～江戸時代に帰属する可能性が高い。

(12) SK12 (第70図、第19表)

位置 E104グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な円形で、東側が突出する。断面は逆台形である。直径約1.2m、深さ約0.3mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はないため時期を確定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に帰属する可能性が高い。

(13) SK13 (第71図、第19表)

位置 E104グリッドに位置する。

特徴 平面は円形で、断面は逆台形である。SK06～SK09と同様の特徴をもつ。直径約0.9m、深さ約0.25mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できない。中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(14) SK14 (第71図、第19表)

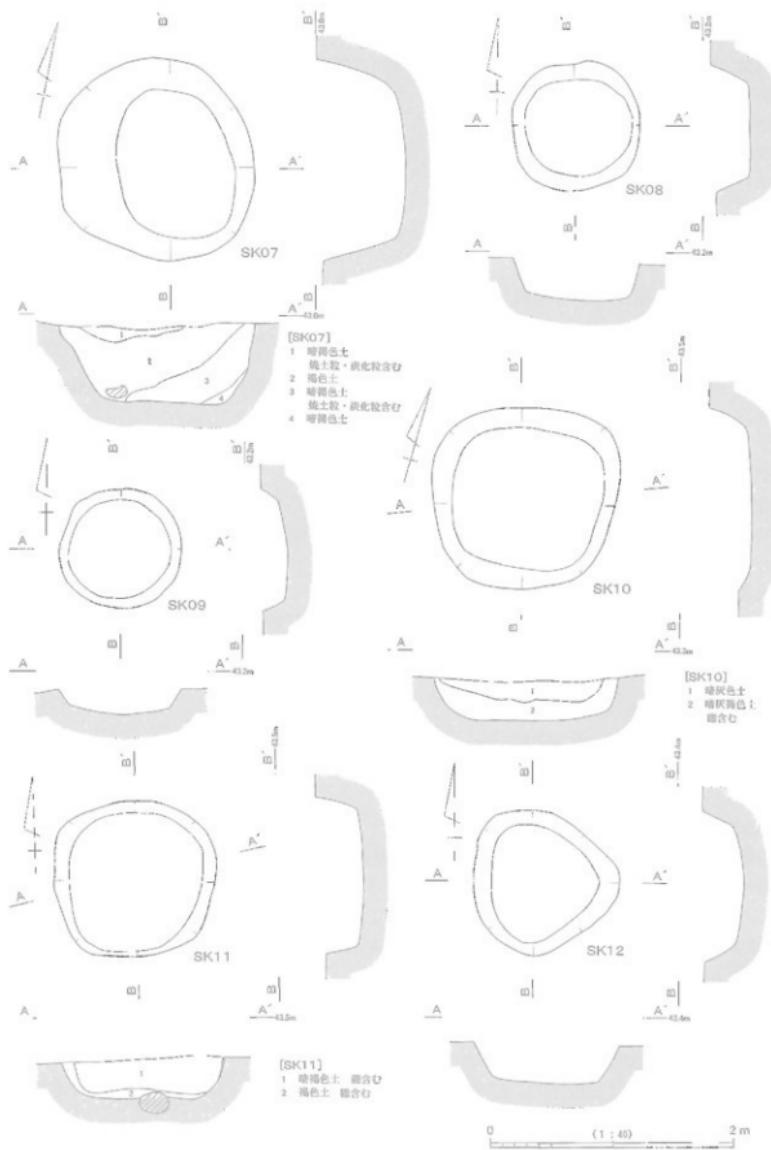
位置 F104グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な円形で、断面は逆台形である。SK06などと同様の特徴をもつ。直径約0.95～1.1m、深さ約0.35mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

第4図 中・近世の施設・墓の調査成績 3. 井戸 4. 土坑



第70図 中層敷道跡 土坑実測図2 (SK07~SK12)

(15) SK15 (第71図、第19表)

位置 E104グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な、東西に長い梢円形で、断面はU字形である。長軸約1.3m、短軸約1.0m、深さ約0.4mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(16) SK16 (第71図、第19表)

位置 D104グリッドに位置する。

特徴 平面は、南北に長い不整形な梢円形で、断面は逆台形である。長軸約1.3m、短軸約0.9m、深さ約0.15mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(17) SK17 (第71図、第19表)

位置 D104グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な円形で、断面は皿状である。遺構の南東部に小穴が2基掘削されている。直径約1.15m、深さ約0.1mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(18) SK18 (第71図、第19表)

位置 D104・105グリッドに位置する。

特徴 平面はやや東西に長い不整形な梢円形で、断面は皿状である。長軸約1.3m、短軸約1.15m、深さ約0.15mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(19) SK19 (第72図、第19表)

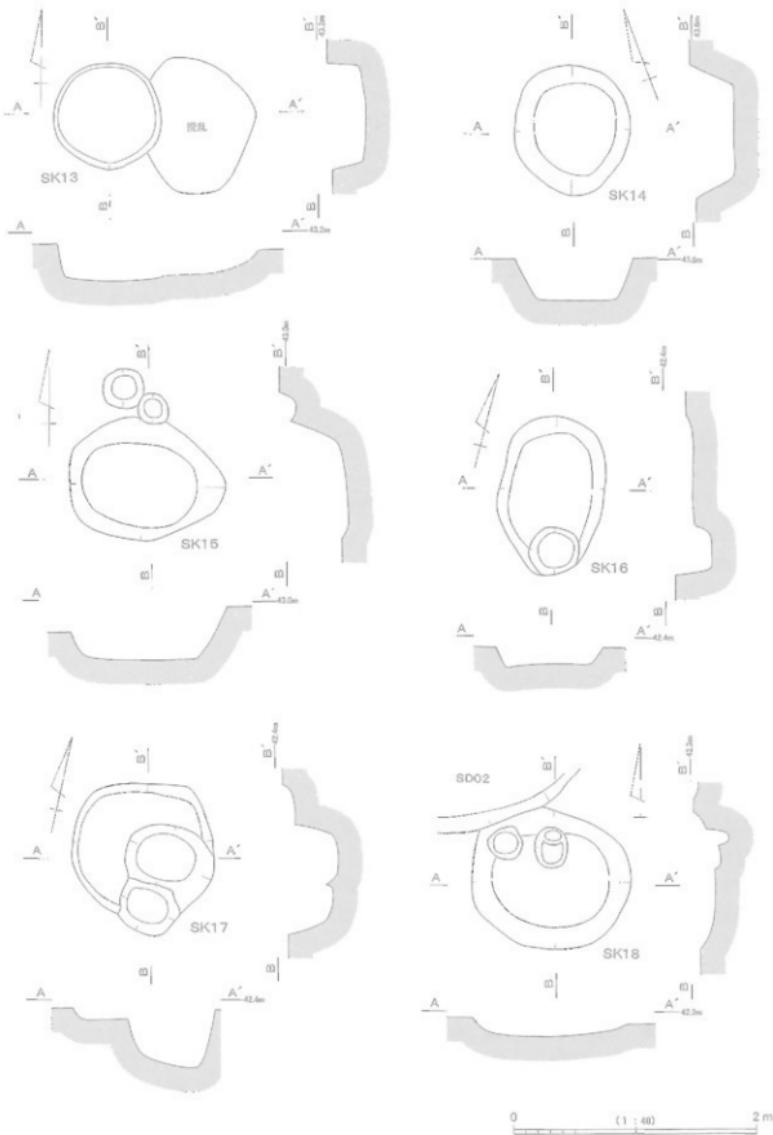
位置 E105グリッドに位置する。

特徴 平面は南北に長い、やや不整形な梢円形で、断面は逆台形である。中央を掘乱により破壊されている。長軸約1.7m、短軸約0.9m前後、深さ約0.25mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

第4節 中・近世の施設・墓の調査成果 3. 井戸 4. 土坑



第71図 中層敷道跡 土坑実測図3 (SK13~SK18)

(20) SK20 (第68・72図、第19・23表、図版29)

位置 E105グリッドに位置する。

特徴 平面は東西に長い、やや不整形な梢円形で、断面は皿状である。長軸約1.9m、短軸約0.9m、深さ約0.6mである。

出土遺物 SK20からは灰釉陶器（86）、古瀬戸の天目茶碗（85）、かわらけ（87～90）が出土した。

灰釉陶器（86）は碗の底部片で、高台は三角高台である。高台径7.0cmである。東遠江の清ヶ谷窯で、松井編年IV～4期に位置づけられる。天目茶碗（85）は、古瀬戸後II期（14世紀末～15世紀初頭）に位置づけられる。かわらけはすべてロクロ成形で、大型のもの（87・88）と小型のもの（89・90）がある。87は口径10.0cmに復原でき、88は底部径6.0cmである。小型の2点は口径7.2～7.5cm、底部径4.8cm、器高1.6～1.8cmである。87は16世紀後半まで遡る可能性があり、89・90は18世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

この他図示していないが、常滑窯片が出土した。

時期 灰釉陶器・古瀬戸は混入の可能性が高く、かわらけの帰属時期から江戸時代中期（18世紀以降）に位置づけられる可能性が高い。

(21) SK21 (第72図、第19表、図版21)

位置 D105グリッドに位置する。

特徴 平面は南北に長い、やや不整形な梢円形で、断面逆台形である。長軸約1.55m、短軸約0.9m、深さ約0.3mである。

出土遺物 SK21からは出土遺物はない。

時期 時期を特定できないが、中世後期～江戸時代に位置づけられる可能性が高い。

(22) SK22 (第68・72図、第19・23表、図版21・29・30)

位置 D105、E105グリッドに位置する。

特徴 平面は瓶形あるいはボーリングのピン形であり、断面は逆台形である。長辺約2.8m、上部幅0.95m、下部幅約1.5m、深さ約0.2mである。

出土遺物 かわらけ6点が出土した。小型のもの（91・95・96）と大型のもの（92～94）がある。小型のものは、口径7.4～8.4cm、底部径4.9～5.6cm、器高1.8～1.9cmである。大型のものは、口径12.2cm、底部径4.0～5.6cmである。これらのかわらけは形態的特徴と焼成状況から18世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

この他、図示していないがSK22からは、古瀬戸腰折皿（後IV新期）、志戸呂天目茶碗・壺鉢（江戸期）、常滑窯片、内耳鍋体部片、江戸時代に帰属する陶器片が出土した。また、小型の鉄滓が2点出土した。

時期 かわらけにより、江戸時代中期（18世紀前半）以降に帰属する可能性が高い。

(23) SK23 (第68・72図、第19・25表、図版21・30)

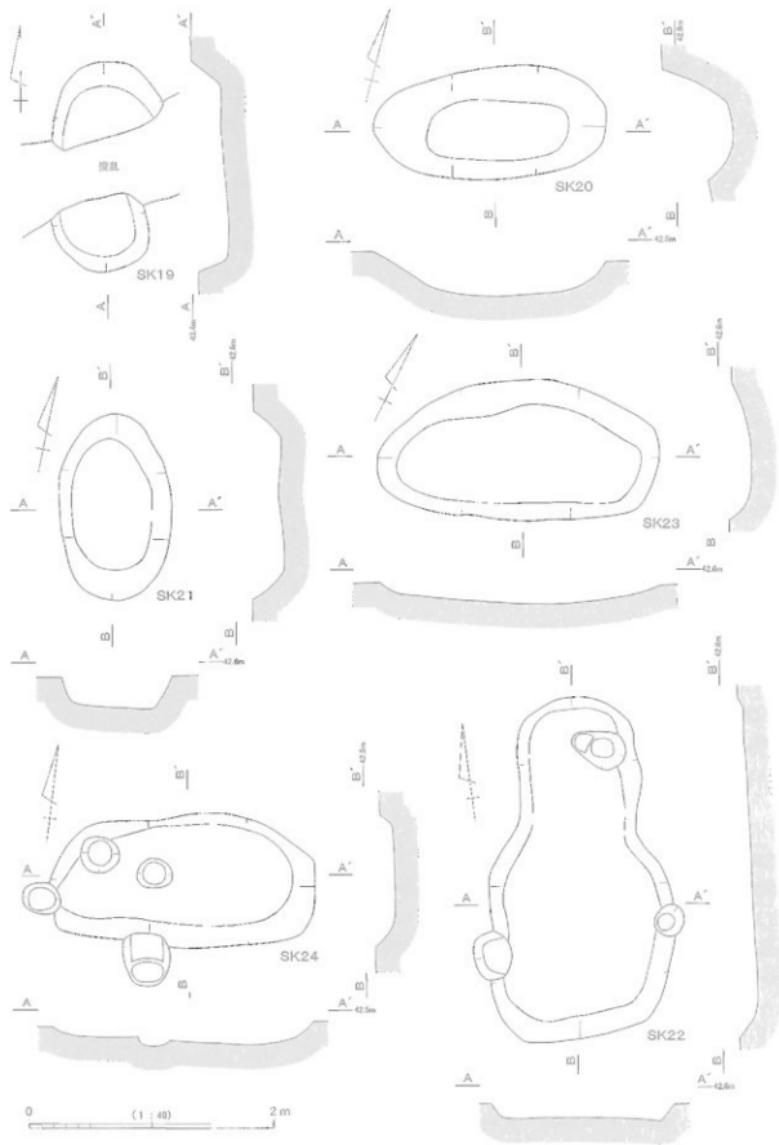
位置 E106グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な梢円形で、断面は皿状である。長軸約2.3m、短軸約1.15m、深さ約0.2mである。

出土遺物 覆土中から大型の鉄滓（97）が出土した。鉄滓は図上で全長10.8cm、幅10.3cmである。

この鉄滓は自然科学分析を実施しているため、成分等についてはそちらを参照願いたい。

なお、図示していないが、この他ロクロ成形かわらけ片が出土した。



第72図 中唐歌遺跡 土坑実測図4 (SK19~SK24)

時期 かわらけ小片、鉄滓では時期を特定できないが、江戸時代の可能性が高い。

(24) SK24 (第68・72図、第19・23表、図版21・30)

位置 E106グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な楕円形で、断面は皿状である。後述するSK30と特徴が類似しており、中世墓であった可能性がある。長軸約2.2m、短軸約1.1m、深さ約0.2mである。

出土遺物 かわらけ3点(98~100)が出土した。3点ともにロクロ成形かわらけである。大型でやや器高の高いもの(98・100)と小型のもの(99)に区分できる。大型のものは口縁部が欠損している。底部径は6.0cm、5.0cmである。小型のものは口径6.9cm、器高1.6cm、底部径3.6cmである。99・100に糸切痕が残存し、99にはさらにスノコ痕が残る。かわらけ(98~100)は、16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

時期 かわらけから、中世後期(16世紀後半)に位置づけられる可能性がある。

(25) SK25 (第73図、第19表)

位置 E106グリッドに位置する。

特徴 平面形は不整形な楕円形で、断面は皿状である。SK23・24と同様の特徴を有す。中央を大きく搅乱されている。長軸約1.8m、短軸約1.05m以上、深さ約0.2mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できない。中世後期～江戸時代の一時期に帰属する可能性が高い。

(26) SK26 (第73図、第19表)

位置 D106グリッドに位置する。

特徴 平面はやや不整形な円形で、断面は逆台形である。直径約1.3m、深さ約1.05mである。陥穴状の造構であるが性格は不明である。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(27) SK27 (第73図、第19表)

位置 D106グリッドに位置する。

特徴 平面はやや不整形な円形で、断面は箱形である。直径約0.95m、深さ約0.4mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

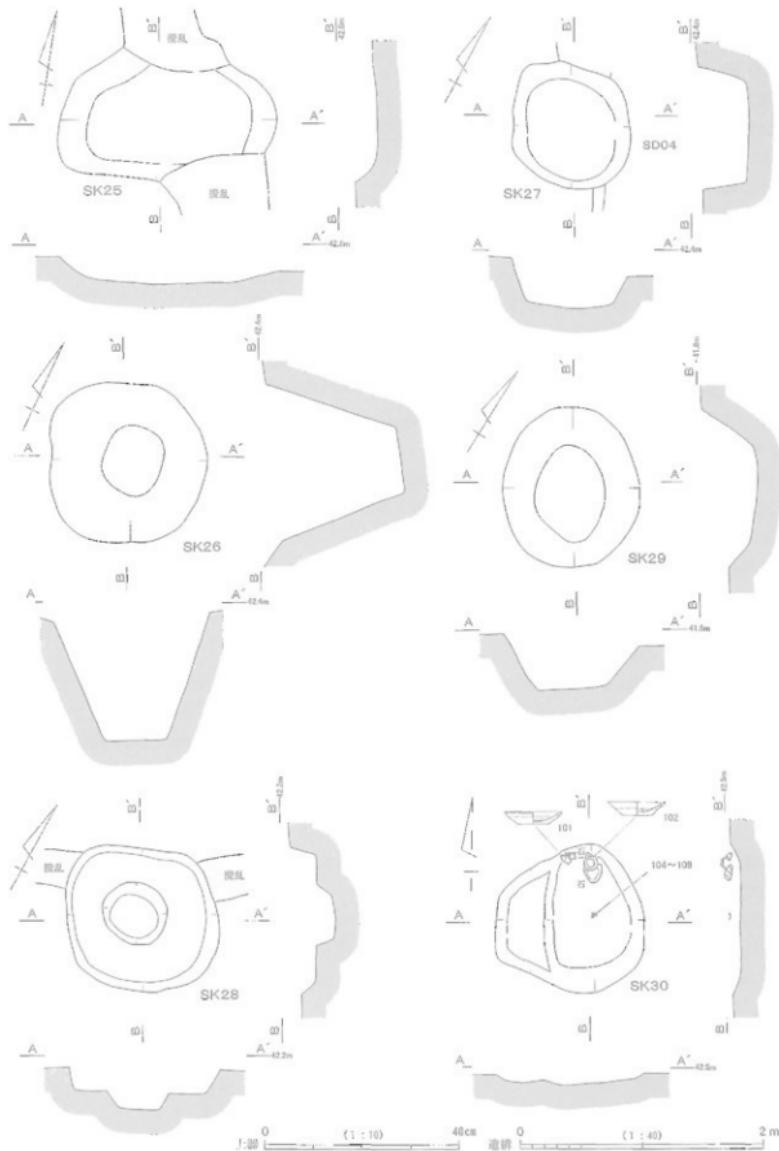
(28) SK28 (第73図、第19表)

位置 C106グリッドに位置する。

特徴 平面形は不整形な楕丸方形で、中央は一段深く掘りこまれている。上段で直径約1.2～1.25m、深さ約0.2m、下段で直径約0.55m、深さ約0.15mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性



第73図 中層歴道跡 土坑実測図5 (SK25~SK30)

が高い。

(29) SK29 (第73図、第19表)

位置 C107、D107グリッドに位置する。

特徴 平面は不整形な南北に長い梢円形で、断面は逆台形である。長軸約1.3m、短軸約1.1m、深さ約0.5mである。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物はなく時期を特定できないが、中世後期～江戸時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(30) SK30 (第68・73・89図、第19・20・23・26表、図版21・31・48)

位置 E106・107グリッドに位置する。

特徴 SK30は出土した銅鏡6枚（六道鏡）、かわらけ3点から中世墓と推断できる。平面は、不整形な南北に長い長方形であり、西側は別の土坑と重複している可能性が高い。断面は皿状である。長軸約1.2m、幅約0.8m、深さ0.08mである。成人の伸展葬是不可能であることから、膝を抱えた状態での横伏（横臥屈葬）で埋葬された可能性が高い。

土坑の北側隅からかわらけ3点が、中央で銅鏡6枚（六道鏡）が出土した。

出土遺物 上述したように銅鏡6枚（104～109）、かわらけ3点（101～103）、鉄釘（386）が出土した（第68・89図）。

銅鏡6枚のうち4枚は「開元通寶」（104）、「元豐通寶」（105）、「洪武通寶」（107・108）と判読できるが、残りの2枚（106・109）は破片のため鏡種は特定できない。「開元通寶」は唐鏡で、621年初鋳造、「元豐通寶」鏡は宋鏡で、1078年初鋳である。「洪武通寶」鏡は明鏡で、1368年初鋳である。いずれも本鏡（中国大陆からの輸入鏡）である。

かわらけは、3点すべてがクロコ形である。3点は口径に対して器高が低いもので、やや大型のもの2点（101・102）と小型のもの（103）である。大型のものは口径11.7～12.0cm、底部径6.2～6.4cm、器高2.5～2.8cm、小さいもので口径10.1cm、底部径4.9cm、器高2.0cmである。101・103の底部には糸切痕が残存する。102は磨滅により糸切痕は失われている。これらのかわらけは、口径に比して底部径が狭いこと、やや浅い形態であることから16世紀後半に位置づけることができる。

この他、木棺の固定に用いられた可能性が高い鉄釘が1点（第89図386）出土した。小型の釘であり、頭部はT字形である。釘身の断面は方形である。残存長4.1cm、頭部幅0.8cmである。釘身下部には梢材の可能性が高い木質が残存している。

時期 銅鏡に「寛永通寶」を含まないことや、出土したかわらけの特徴から中世末（戦国時代末、16世紀後半）に帰属する可能性が高い。今回の調査で確認した中世に帰属することが明確な遺構は少ないため、中世に帰属する注目すべき遺構である。

第20表 中世敷造跡 SK30出土銅鏡観察表

No	鏡図	図版	種別	鏡名	国名	初鋳年	鏡径	内径	孔幅	重量	備考
104	68	31	銅鏡	開元通寶	唐	621	24	19	7	2.19	
105			銅鏡	元豐通寶	宋	1078	25	18.5	6.5	2.11	
106			銅鏡	不明	-	-	-	-	-	0.63	
107			銅鏡	洪武通寶	明	1368	24	18.5	6.5	2.57	
108			銅鏡	洪武通寶	明	1368	23	19.5	6	2.3	
109			銅鏡	不明	-	-	-	-	-	0.45	

単位 鏡径・内径・孔幅（mm） 重量（g）

5. 溝（溝状遺構、第74・75図、第21・23・25表、図版21・30・32）

溝は4条確認した。

なお、第5節で報告する中層敷1号墳(SZ01)の周溝にあたるSD04を搅乱した部分からは、江戸時代に帰属する陶器、かわらけ、鉄滓などが出土している。

(1) SD01(第74図、第21表)

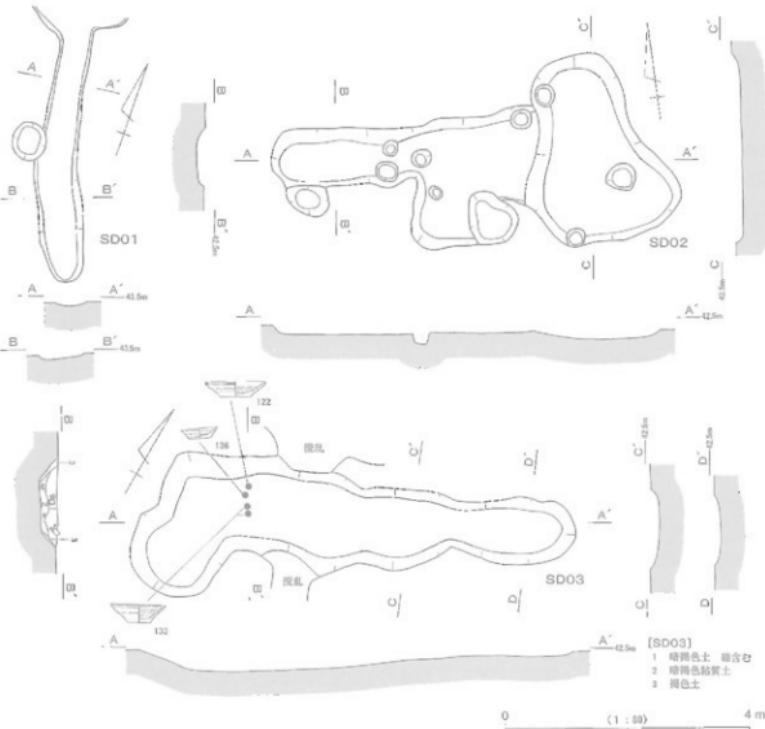
位置 E101、F101グリッドに位置する。SE01と重複関係にあるが、先後関係は不明である。

特徴 南北に細長く浅い溝で、全長約4.0m、幅約0.7m、深さ0.05mである。北側がSE01と重複関係。

第21表 中層敷遺跡 溝状遺構の概要

遺構名	埠図	図版	場所	長さ	幅	深さ	遺物	備考
SD01	74	-	E101, F101	4.0	0.7	0.05	-	
SD02		30	D104	4.3	0.5	0.15	灰釉陶器？盤、瀬戸美濃菊皿、く字形内耳鍋、かわらけ、鉄滓	
SD03	74・75	30・32	E106	7.3	1.6	0.3	調付鍋、古瀬戸加賀鉢、瀬戸美濃菊鉢、瀬戸美濃天目茶碗、常滑窯、鉄滓、かわらけ	
SD04	32・50・51	C105, D105～107	22.0前後	3.9	0.3	-	鉄滓、常滑窯、かわらけ、陶磁器片	

単位(m)



第74図 中層敷遺跡 溝状遺構実測図

係にある。先後関係は不明であるが、井戸に関連する溝の可能性がある。

出土遺物 SD01から出土遺物はない。

時期 出土遺物がなく時期を特定できないが、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(2) SD02 (第74・75図、第21・23表、図版22・30)

位置 D104グリッドに位置する。

特徴 東西に延びる溝で、東側には別の土坑が存在する可能性が高い。東西に長い部分は全長約4.3m、幅約0.5m、深さ約0.15mである。東側の土坑状部分については、平面形はSK22と類似する形状で、断面は皿状である。長さ約3.1m、北側幅約1.5m、南側幅約2.6m、深さ約0.1mである。

出土遺物 SD02からは灰釉陶器～山茶碗期の壺底部片 (110)、瀬戸美濃（美濃産）の菊皿 (111)、かわらけ (112・113)、鉄滓 (114) などが出土した。

110は、灰釉陶器あるいは山茶碗期の壺であると推測するが、帰属時期については明確にできない。菊皿 (111) は登窓3か4小期に位置づけられる。かわらけはロクロ成形かわらけで、大型のものである。口径13.0cm、底部径6.4～6.6cm、器高3.5cmである。形態的な特徴から16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。鉄滓は約3cmとやや小型である。精鍛鍛冶に伴う鉄滓である可能性が高い。

この他図示していないが、く字形内耳鍋片、ロクロ成形かわらけ片が出土した。

時期 出土した菊皿から、SD02については江戸時代中期（18世紀前半）以降に帰属する。

(3) SD03 (第74・75図、第21・23・25表、図版30・32)

位置 E106グリッドに位置する。

特徴 SD03は東西に長い溝で、西側で急激にL字形に折れる。断面は皿状である。全長約7.3m、幅約1.6m、深さ約0.3mである

なお、鉄滓が出土したことから近くに鍛冶関連施設が存在していた可能性がある。

出土遺物 SD03からは、釣付鍋 (118)、古瀬戸掘鉢 (119、後IV期新)、瀬戸美濃掘鉢 (120・121、大窯1期)、鉄滓 (115・116) のほか、かわらけ (122～138) が多数出土した。

釣付鍋（羽釜、118）の口縁部は内傾し、鉢はやや外上方に長く突出する。この特徴から15世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

かわらけはすべてロクロ成形で、大型のもの（122～133）と小型のもの（134～138）がある。大型のものは口径10.7～12.4cm、底部径4.4～6.2cm、器高3.0～3.9cmである。小型のものは口径7.3～7.8cm、底部径4.1～5.0cm、器高1.7～2.1cmである。これらのかわらけは、16世紀後半に位置づけられる。

鉄滓は約4～5cmのものである。精鍛鍛冶に伴う鉄滓である。

この他図示していないが、瀬戸美濃天目茶碗（大窯1期）片、常滑窯片が出土した。

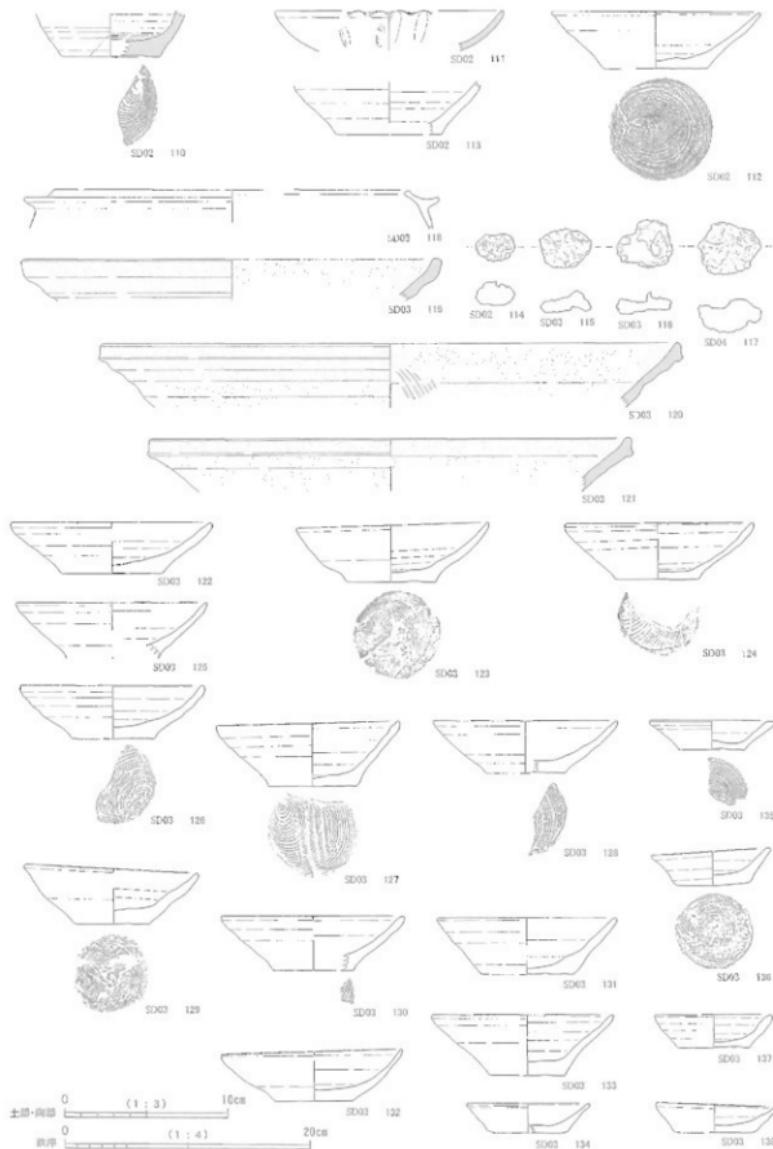
時期 古瀬戸掘鉢や瀬戸美濃掘鉢などの陶器は大窯1期までに位置づけられる。かわらけは陶器よりもやや遅れ16世紀後半に位置づけられる可能性が高い。したがって、SD03は中世後期（16世紀後半）に帰属する可能性を排除できないが、鉄滓から判断して江戸時代に帰属する蓋然性が高い。

(4) SD04 (第74・75図、第21・25表、図版32・50・51)

SD04については、中屋敷1号墳（SZ01）を形成する遺構であることから、詳細は第5節で詳述する。

SD04を擾乱したと想定される時期の鉄滓（第75図117）が出土しているため、ここで記述する。鉄滓はやや大きなもので、全長約5cm、幅約4cmのものであり、精鍛鍛冶段階の鉄滓である。

この他、図示していないが、常滑窯片、ロクロ成形かわらけ片、江戸時代の陶器片がある。



第75回 中屋敷遺跡 溝状遺構出土遺物実測図

6. 性格不明遺構

性格不明遺構については7基確認した。

(1) SX01 (第76・77図、第22・23表、図版23)

位置 F100グリッドに位置する。

特徴 平面形は東西に長い隅丸長方形で、断面は逆台形である。覆土は水平に堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。上層には礫が多く含まれている。南北約3.2m、東西約2.4m、深さ約0.6mである。

出土遺物 ロクロ成形かわらけ(139)が出土した。硬質な焼き上がりで、小型である。口径7.4cm、底部径4.0cm、器高1.8cmである。

時期 かわらけにより時期を特定することは難しいが、硬質な焼き上がりであることから判断すると、江戸時代に帰属する可能性が高い。

(2) SX02 (第76・77図、第22・23表、図版23・33)

位置 D100、E100グリッドに位置する。

特徴 平面形は隅丸方形で断面は逆台形である。覆土は、隅角がやや壁面に向かって弧を描いて立ち上がるが、ほぼ水平に堆積している。人為的に埋め戻した可能性がある。規模は南北約2.1m、東西約2.0m、深さ約0.5mである。

出土遺物 灰釉陶器(140)、貿易陶磁染付(141)、瀬戸美濃丸皿(142)・瀬戸美濃天目茶碗(143)が出土した(第77図)。

140は灰釉陶器碗類の底部であり、三角高台である。高台径6.5cmである。清ヶ谷産で、松井編年IV-1期に位置づけられる。丸皿(142)は大窯3期で、天目茶碗(143)は大窯2期に位置づけられる。染付(141)は染付碗C群に位置づけられ、15世紀末～16世紀前半に位置づけられる。

この他、ロクロ成形かわらけ片が出土している。

時期 灰釉陶器、染付碗は混入品の可能性が高く、それ以外の出土遺物が中世後期(16世紀後半)に位置づけられることから、中世後期以降に位置づけられる可能性が高い。

(3) SX03 (第76・77図、第22・23表、図版33)

位置 E100グリッドに位置する。

特徴 平面形は方形であり、断面は逆台形である。SX02と形状、土層の堆積状況も酷似しており、同様の性格を有する可能性が高い。規模は南北約3.3m、東西約2.9m、深さ約0.5mである。

出土遺物 かわらけ(144)が出土した。底部には糸切痕、スノコ痕が残る。口径10.5cm、底部径4.7cm、器高2.9cmである。形態的な特徴から17世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

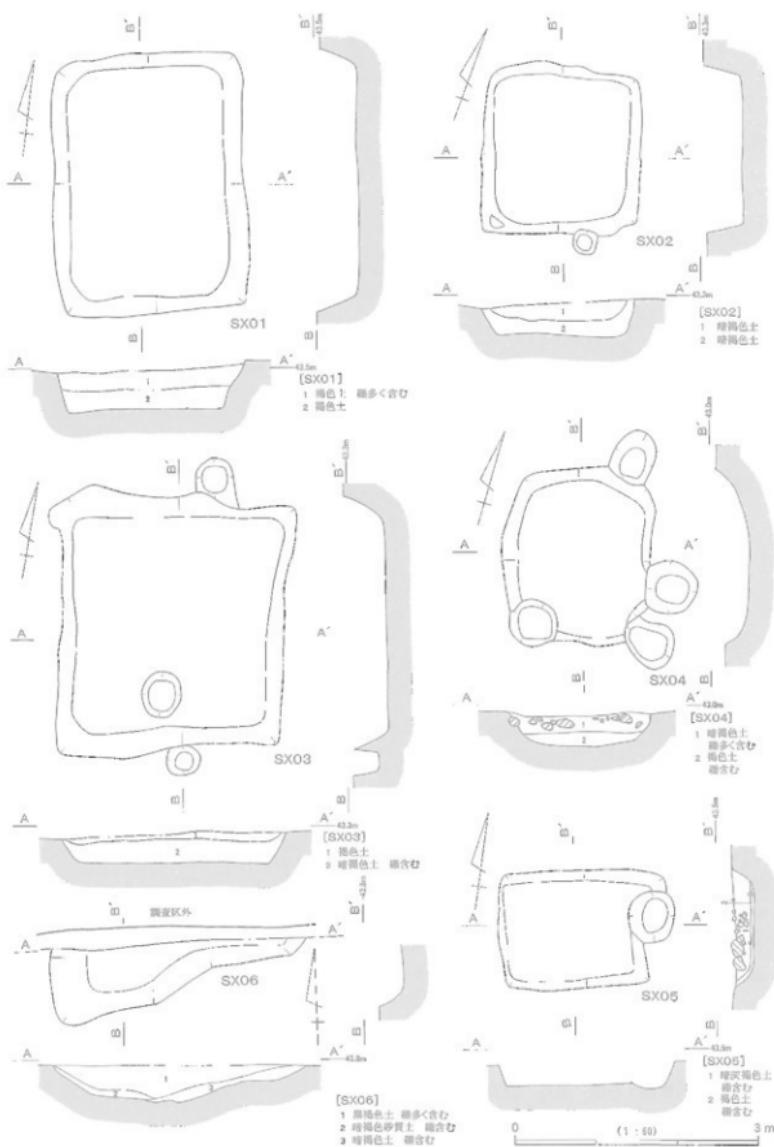
時期 かわらけの特徴から、中世末～江戸時代初期に帰属する可能性がある。

第22表 中層敷遺跡 性格不明遺構の概要

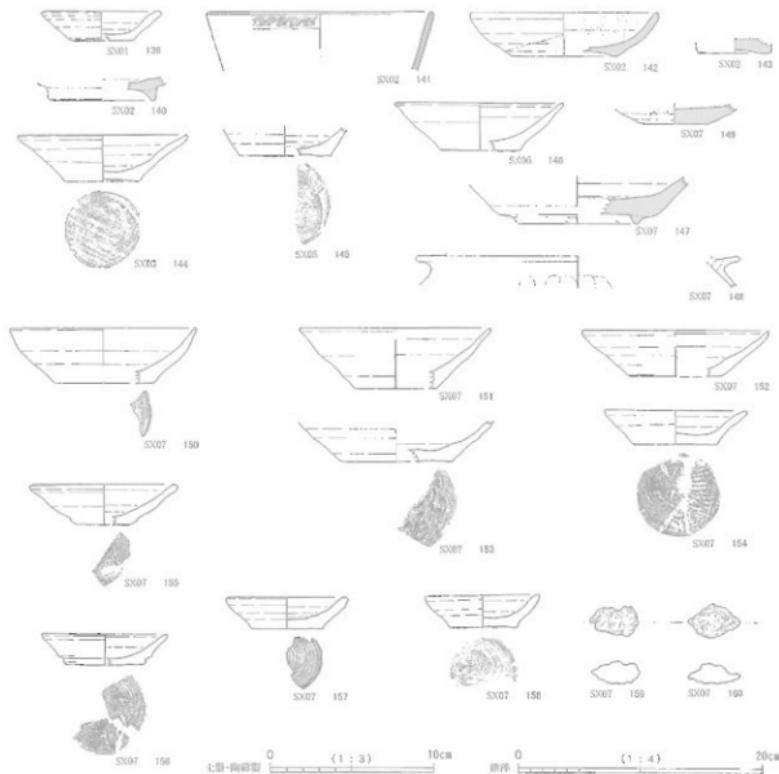
遺構名	地図	図版	グリッド	形状	長さ	幅	深さ	遺物	備考
SX01		23	F100	隅丸長方形	3.2	2.4	0.6	かわらけ	
SX02	76・77	23・33	D100, E100	隅丸方形	2.1	2.0	0.5	灰釉陶器・貿易陶磁染付・瀬戸美濃丸皿・瀬戸美濃天目茶碗・かわらけ	
SX03	-	E100		方形	3.3	2.9	0.5	かわらけ	
SX04	76	-	D100・101	隅丸長方形	2.2	1.9	0.3	かわらけ・瀬戸産撃鉢	
SX05		-	E103	長方形	2.1	1.5	0.3	かわらけ	
SX06	76・77	-	F104・105	不明體	3.2	0.9+	0.5	かわらけ	
SX07		-	E105, F105	隅丸長方形	5.6	4.4	0.5	山茶碗・鈎付碗・古瀬戸緑釉小皿・常滑窯片・かわらけ・陶器片・鉄滓	

※表記+(プラス)は以上を表す。

単位(m)



第76図 中型敷遺跡 性格不明遺構実測図1 (SX01～SX06)



第77図 中庭敷遺跡 性格不明遺構出土遺物実測図

(4) SX04 (第76図、第22表、図版23)

位置 D100・101グリッドに位置する。

特徴 平面形は隅丸長方形であり、断面は皿状である。土層は水平に堆積しており、上層には20cm大以下の川原石が多く含まれている。規模は、南北約2.2m、幅約1.9m、深さ約0.3mである。

出土遺物 図示していないが、ロクロ成形かわらけ、瀬戸産掘鉢（古瀬戸後IV新期か大窯1期）が出土した。

時期 出土遺物が少なく確定でないが、中世後期に位置づけられる可能性がある。

(5) SX05 (第76・77図、第22・23表、図版23)

位置 E103グリッドに位置する。

特徴 平面形は東西に長い長方形であり、断面は皿状である。土層はほぼ水平に堆積しており、上層には20cm大以下の川原石が多く含まれている。SX04と類似しており、同様の性格を有すると推測する。

規模は東西約2.1m、南北約1.5m、深さ約0.3mである。

出土遺物 ロクロ成形かわらけ（第77図145）が出土した。底部径5.6cmであり、硬質な焼き上がりである。17世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

時期 時期を特定するのは困難であるが、江戸時代前期以降に帰属する可能性が高い。

(6) SX06 (第76・77図、第22・23表)

位置 F104・105グリッドに位置する。

特徴 調査区の隅角で確認された遺構であり、遺構の北側部分は調査区外である。検出した部分は直角三角形のような形状を示すが、本来の形状は不明確である。断面は皿状である。東西約3.2m、南北0.9m以上、深さ約0.5mである。上層に礫が多く含まれる。

出土遺物 ロクロ成形かわらけ（第77図146）が出土した。底部から外上方に直線的に開きながら立ち上がり、口縁端部を強く撫でて、先端を引き出すものである。口径10.3cm、底部径5.0cm、器高3.0cmである。形態的特徴などから17世紀後半に位置づけられる可能性が高い。

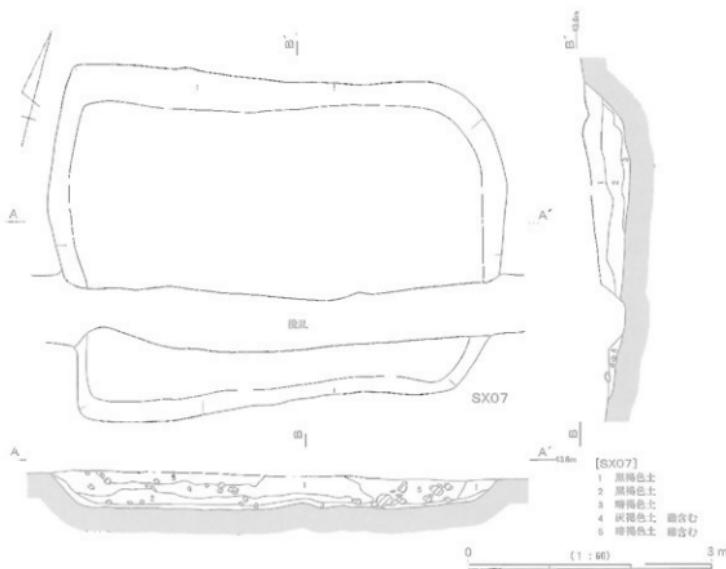
時期 かわらけにより江戸時代前期以降に帰属する可能性が高い。

(7) SX07 (第77・78図、第22・23・25表、図版23・33)

位置 E105、F105グリッドに位置する。

特徴 平面形は東西に長い割丸長方形で、断面は皿状である。下層に礫を含むものである。東西約5.6m、南北約4.4m、深さ約0.5mである。

出土遺物 山茶碗（147）、鉗付鍋（148）、古瀬戸緑釉小皿（149）、ロクロ成形かわらけ（150～158）、



第78図 中層敷遺跡 性格不明遺構実測図2 (SX07)

鉄滓（159・160）が出土した（第77図）。

山茶碗（147）は碗の底部片で、高台は低く潰れた三角高台で、高台にはモミ殻痕が残る。高台径6.6cmに復原できる。源美湖西産で、松井編年I期2段階～II期に位置づけられる。鍔付鍋（148）は、鍔部の破片で鍔はほぼ水平に取り付けられ、この部分に穿孔が行われている。15世紀後半頃に位置づけられる。古瀬戸（149）は縁軸小皿の底部片で、底部にはヘラ削り調整が施される。古瀬戸後IV新期に位置づけられる。かわらけ（150～158）は大型（150・151・153）、やや大型（152）、中型（154・155）、小型（156～158）がある。大型のものは、口径11.8～12.6cm、底部径5.0～6.6cm、器高2.5～3.8cmである。やや大型のものは口径11.5cm、底部径6.0cm、器高2.8cmに復原できる。中型は、口径8.8～9.1cm、底部径4.0～5.1cm、器高2.1～2.5cmである。小型は7.0～7.8cm、底部径4.2～4.8cm、器高1.9～2.0cmである。硬質の焼き上がりである。鉄滓2点は小型のもので、約14gである。

この他図示していないが、常滑焼片、江戸時代の陶器片が出土した。

時期 江戸時代の陶器片が出土したことから、江戸時代に帰属する可能性が高い。

7. 小穴（第79・80・89図、第23・25・26表、図版22・34～36）

小穴（SP）は260基以上確認できるが、ここでは図示できる小穴から出土した遺物について報告する。

なお、遺物が出土した小穴のうち、遺物が完全に近い状態で出土した小穴の写真を図版22に示した。

貿易陶磁 SPI01では、貿易陶磁染付皿（162）が出土している。染付碗B1群に属し、15世紀中頃～後半頃に位置づけられよう。SP380では、貿易陶磁の白磁皿（183）が出土しているが、時期を特定できない。SP331では青磁が出土し（189）、鎬蓮弁碗の可能性が高い。15世紀中葉～後半に位置づけられようか。

須恵器 SP331からは須恵器破片（192）が出土しており、壺瓶類の可能性が高い。古墳時代終末期（7世紀）～奈良時代の壺瓶類（フラスコ瓶か像形瓶など）であろう。

須恵器～山茶碗 SP357出土の2点（190・191）は壺瓶類の可能性が高い。灰釉陶器あるいは山茶碗の時期の壺瓶類の可能性も残るが、無釉薬であり、胎土が湖西産須恵器と類似することから須恵器の可能性が高い。SB49-P19出土の65などの特徴と類似することから、それらと同一個体の可能性もある。

灰釉陶器 SP379では灰釉陶器碗（188）が出土した。底部は三角高台であり、高台径6.0cmである。胎土の特徴から浜松市浜北区の宮口窯産で、松井編年宮口窯III-2期（10世紀後半）に位置づけられる。

古瀬戸 SP225では古瀬戸平碗（184）が出土した。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部はS字状に湾曲し、口縁端部はやや外反する。口縁部に最大径がある。古瀬戸後III期（15世紀前半）に位置づけられる。

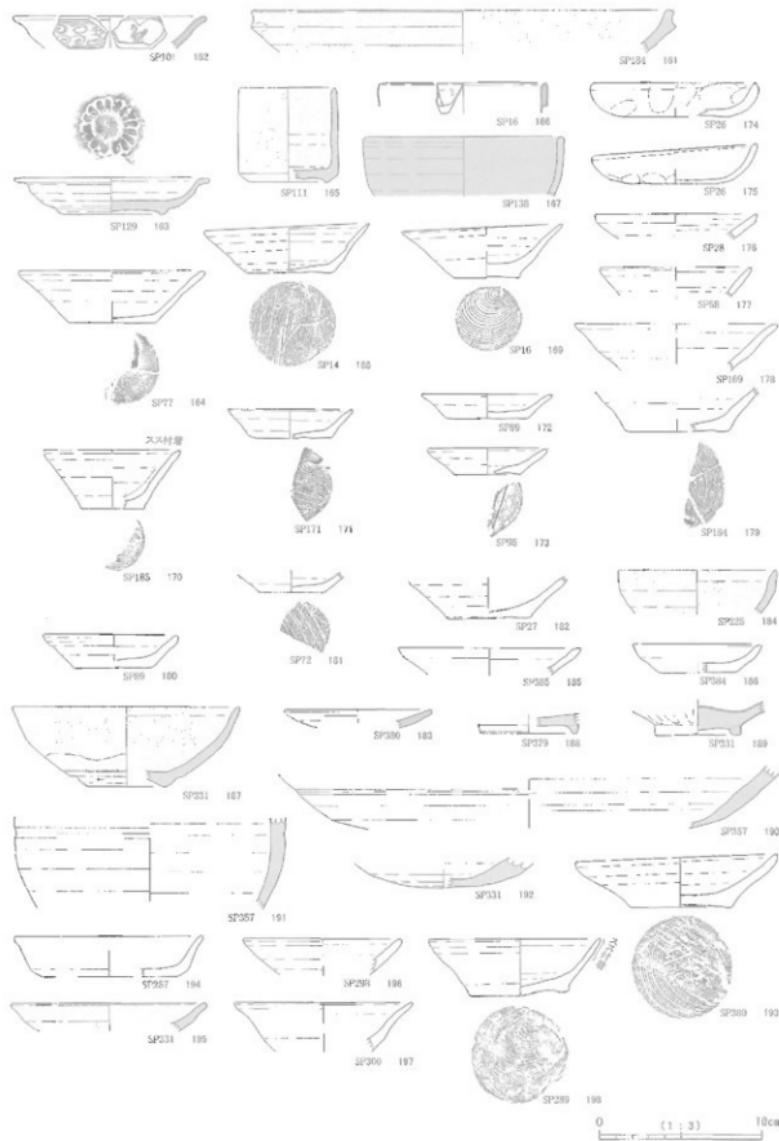
瀬戸美濃 SP184では、瀬戸美濃播鉢（161）が出土した。口縁部の形態的特徴から大窯I期に位置づけられる。SP129では美濃産端反皿（163）が出土した。内面には印花文が刻印される。登窯1か2小期である。SP111では瀬戸美濃志野向付（165）が出土し、大窯4期後半に位置づけられる。SP331から端反皿（195）が出土した。形態的な特徴から大窯I期に位置づけられる。

初山 SP331では、初山天目茶碗（187）が出土した。高台は削り出しであり、口縁部は内湾しながら立ち上った後、口縁部をわずかに屈曲させる。口径13.9cmである。大窯3期後半に位置づけられる。

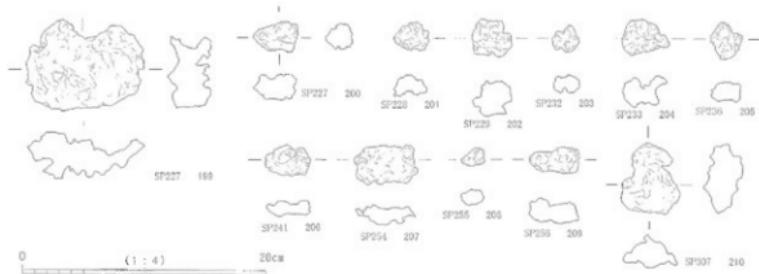
志戸呂 SPI38では江戸時代の志戸呂碗（167）が出土した。

近世染付 SP16では肥前磁器染付碗（166）が出土した。近世染付の可能性が高い。

非ロクロ成形かわらけ SP26では非ロクロ成形かわらけ2点（174・175）が出土した。皿状のかわらけである。口径は10.2～10.4cm、器高2.0～2.1cmであるが、174は口縁部が厚く、口唇部はつまみだされるのに対し、175は丸く收められている。SP257出土のもの（194）は箱形に近い形状で、底部は水平で、



第79図 中層敷遺跡 小穴出土遺物実測図①



第80図 中層敷遺跡 小穴出土遺物実測図②

口縁部は外反しながら立ち上がる。口径11.5cm、器高2.5cmである。SP26出土の2点(174・175)とSP257出土のもの(194)は、形態的特徴が異なるため時期が異なる。SP26出土の2点(174・175)は17世紀前半、SP257出土のもの(194)は17世紀後半に位置づけられる。

ロクロ成形かわらけ SP77・14・16・185・171・89・95・72・28・58・169・184・27・289・298・300・380・385・384からロクロ成形かわらけが出土した(164, 168~173, 176~182, 185・186, 193, 196~198)。

口径が10cm以上の164・168・176・178・185・193・197・198、8~10cmの169・170・177・180・196、8cm以下で、器高が低い小型の171~173・186がある。形態的な特徴や焼成具合から、164・168~170・179・182・193・197が17世紀前半、172・178・180・198が17世紀後半、171が18世紀後半、それ以外の176・177・181・185・186・196が18世紀代に位置づけられる。

鉄滓 鉄滓はSP227~229、232、233、236、241、254~256、307から出土した(199~210)。大きい鉄滓(199)はSP227から出土し、9.6×7.5×3.9cmで、重量210gである。中屋敷遺跡から出土した鉄滓の中でも大型の鉄滓である。これ以外は60gとやや大きめのもの(210)があるが、大部分が30g以下の小型のものである。B区に所在する南西隅(調査区中央南側)に位置する小穴から多数出土している。これらの鉄滓は精鍊鍛冶あるいは小銀治によって産出された廃棄物である可能性が高い。

なお、図示していないが、鉄滓は、掘立柱建物E群(SB37~SB43)周辺の小穴から多く出土しており、この掘立柱建物群周辺で鍛冶が行われていた可能性が高い(第6節第3項参照)。

鉄製品 釘(387)は、頭部をT字形に折り曲げたもので、残存長3.4cm、頭部幅0.9cmである。

このほか鉄製品は鎌の可能性のある394、板に突起が接合されている395、用途不明の399、389が出土しているが、鉄滓の分析などからすると製品ではなく、素材を再生産するための廃材の可能性が高い。

8. 遺構外出土遺物(第81~89図、第23・25・26表、図版36~49)

包含層や擾乱土、表土から遺物が多数出土しており、ここではグリッド取り上げした遺物、確認調査で取り上げた遺物、擾乱から出土した遺物、確認調査時出土遺物、表土出土土器に区分して掲載した。以下には、煩雑になるのを避けるため、遺構外出土遺物について遺物の種類、産地・器種などの特徴で区分し、まとめて報告することとする。遺構外出土遺物には、縄文土器、石器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、貿易陶磁(青磁・染付)、瀬戸美濃(古瀬戸・大窯・登窯)、常滑、志戸呂(古志戸呂・大窯・登窯)、初山(大窯)、備前?、肥前、土師鍋(内耳鍋)、かわらけ、鉄製品(楔?・釘など)、鉄滓、礪羽口、瓦、石塔がある。

(1) 須恵器 (第83・84・87図、第23表、図版36)

須恵器は、グリッド出土の277、確認調査時出土の305、表面採取の368・369がある。

277は短頸壺の可能性が高い。肩の張りが緩やかなものと想定でき、肩部に凹線が巡らされ、口縁部はほぼ直立するものである。古墳時代終末期（7世紀）に位置づけられる可能性が高い。305は壺片で、外側には平行タクキ痕が残る。古墳時代～奈良時代に位置づけられる可能性が高い。368は須恵器杯蓋天井部片である。天井部と口縁部の境には沈線が巡らされる。天井には「×」字のヘラ記号が描かれている。推定される口径は、12cm前後である。時期は、古墳時代後期末（遠江III期後葉）～終末期前半（遠江IV期前葉）に位置づけられる可能性が高い。369は壺瓶頸の可能性が高い。灰釉陶器あるいは山茶碗の時期の壺瓶頸の可能性も残るが、無釉薬であり、胎土が瀬戸須恵器と類似することから須恵器の可能性が高い。碗部中央に沈線が巡らされる。時期を特定することは困難である。SP357出土の190・191やSB49-P19出土の65などの特徴と類似することから同一個体の可能性もある。

(2) 灰釉陶器・山茶碗 (第83～85・87図、第23表、図版36)

灰釉陶器はグリッド出土では276、攪乱出土で319、表面採取で370がある。山茶碗はグリッド出土で278～280、282、確認調査時出土で304・306、攪乱出土では318、表土出土では371がある。

灰釉陶器 276は碗の底部片で、底部は低い三角高台である。高台径6.0cmである。胎土の特徴から浜松市浜北区にある宮口窯産で、松井編年宮口窯III-2期（10世紀後半）に位置づけられる。

319は碗で、高台は三角高台である。底部径は5.8cmである。底部は糸切り後ナデ調整が行われている。胎土や色調の特徴から、掛川市清ヶ谷産の可能性が高く、形態的特徴から松井編年、清ヶ谷IV-4期に位置づけられる。370は碗で、口径11.2cmである。清ヶ谷産の可能性が高い。形態的特徴から、松井編年清ヶ谷IV-4期（11世紀後半）に位置づけられる。

山茶碗 278は山茶碗小皿（山皿）である。底部は平底であり、口縁部は外上方に向かって直線的に短く立ち上がる。胎土と形態的特徴から知多産で、知多6a型式に位置づけられる可能性が高い（赤根・中野1994）。

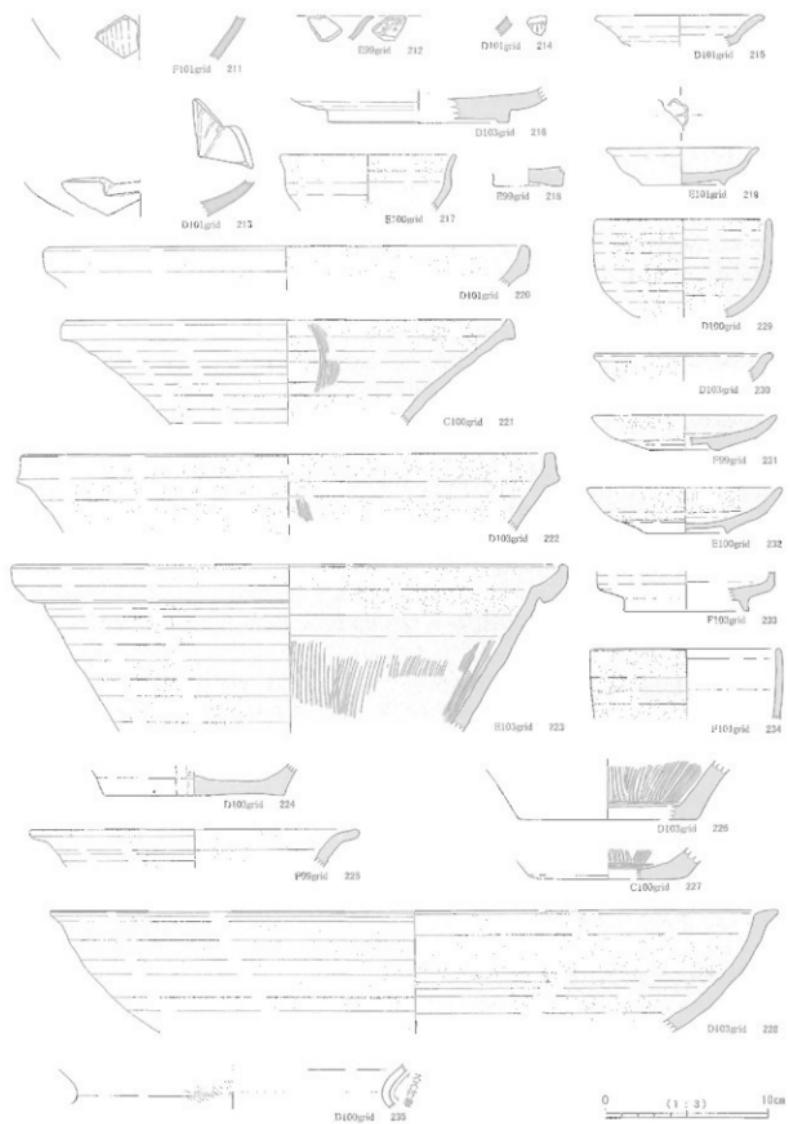
279・280・282・304・318・371は山茶碗底部片で、279は潰れた低く扁平な三角高台で、モミ般痕が残る。高台径は7.5cmである。280は低く短い三角高台である。底部径6.8cmである。279・280は渥美湖西I-1期に位置づけられる。282は、高台は貼り付けられるが形骸化したものである。高台径6.2cmである。渥美湖西産で、松井編年III-2期に位置づけられる。304は扁平な短く潰れた高台である。渥美湖西産で、松井編年I-1期に位置づけられる。318は潰れた幅広い三角高台であり、底部は糸切り後ナデ調整が行われている。底部径7.0cmである。渥美湖西産で松井編年I-2期に位置づけられる。371は底部片である。方形に近い潰れた三角高台である。底部径は8.0cmである。胎土と色調の特徴から渥美湖西産で、松井編年I-2期～II期に位置づけられる。

(3) 貿易陶磁 (第81・85・87図、第23表、図版37)

貿易陶磁では、青磁4点（211・214・326・355）、染付1点（212）が出土した。211・212・214がグリッド出土、326が攪乱、355が表面採取である。

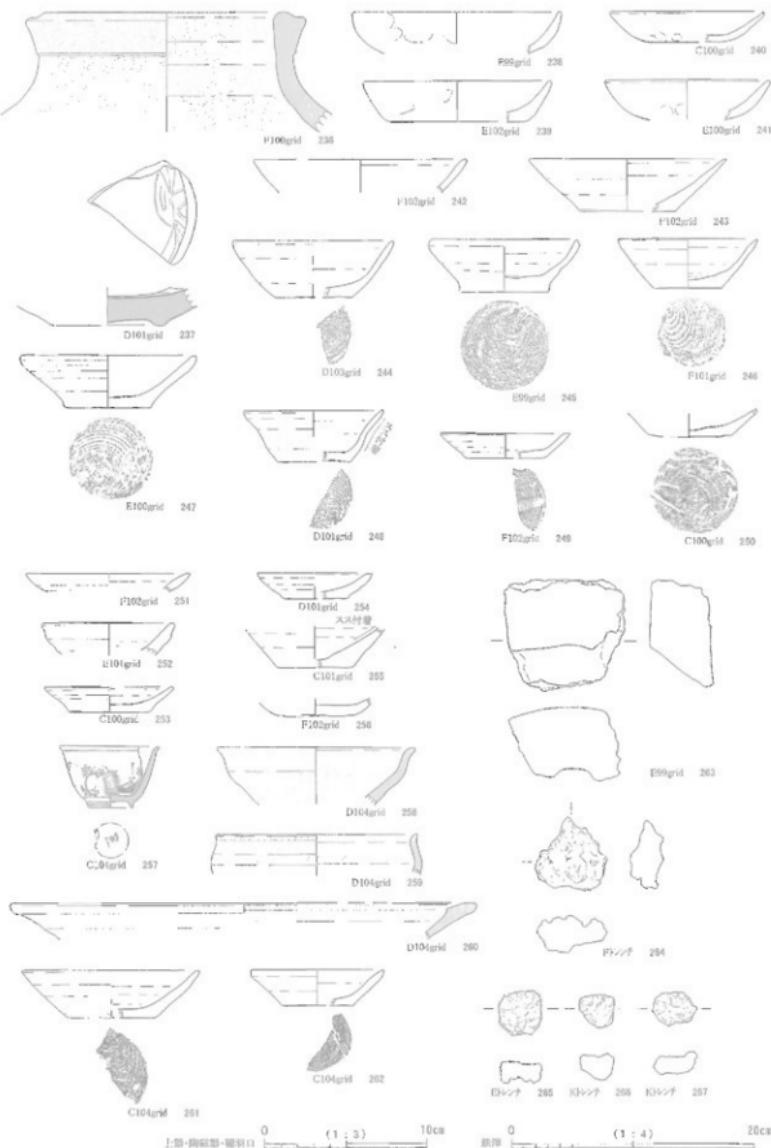
青磁 211・214・355はいずれも龍泉窯の青磁蓮弁碗である。211は蓮弁碗B3類（15世紀中葉）、214は蓮弁碗B4類（15世紀後半）に位置づけられる。355は、どうあんとう同安窯産の青磁皿で、13世紀前半に位置づけられる。

染付 212は染付皿で、端反皿B1群、15世紀中頃～後半に位置づけられる。

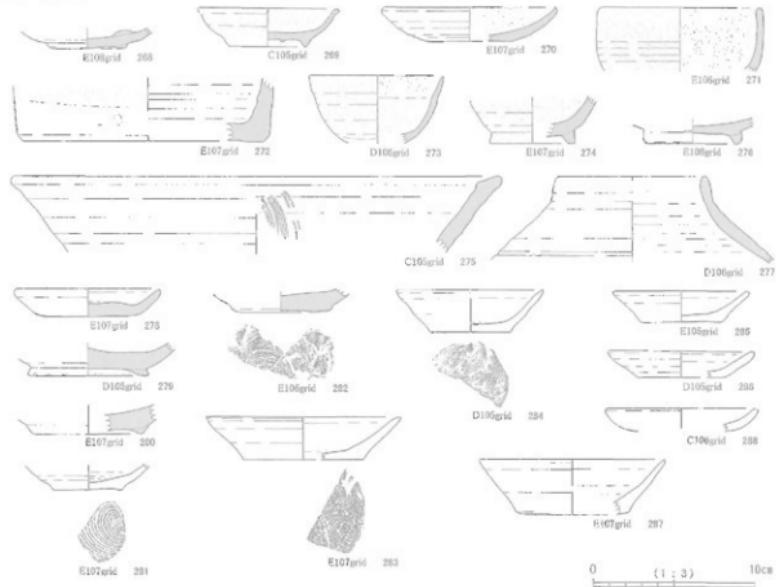


第81図 中層遺跡 遺構に伴わない遺物実測図① (包含層出土)

図4節 中・近世の遺物・墓の調査成果 8. 遺物外出土品



第82図 中層敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図② (包含層出土)



第83図 中層遺跡 遺構に伴わない遺物実測図③(包含層出土)

(4) 施釉陶器

①瀬戸・美濃 (第81~85・87図、第23表、図版37~41)

古瀬戸 古瀬戸はグリッド出土の215・268、確認調査出土の298・300、表面採取の356~358がある。古瀬戸~瀬戸美濃大窯期の製品は表面採取の359・360がある。

215・268は腰折皿である。215は体部の途中で明瞭な屈曲があり、そこから外反して立ち上がる。268は底部片である。2者ともに後IV新期(15世紀後半)に位置づけられる。

356は四耳壺である。頸部と肩部の境目に複数の沈線(条線)が巡らされる。古瀬戸後III~IV期(15世紀前半~中頃)に位置づけられる。

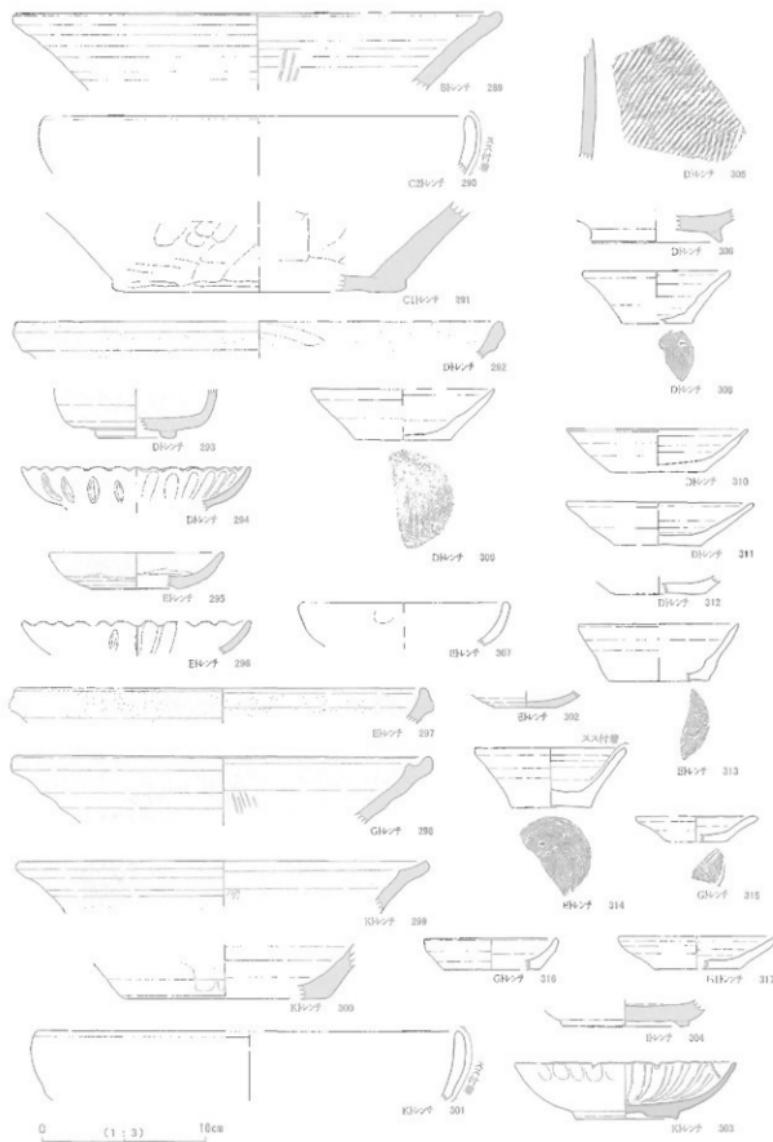
298・357~360は擂鉢である。298・357は口縁部の内面に突起を形成するもので古瀬戸後IV新期(15世紀後半)、358は口縁部は外上方へ直線的に立ち上がった後、屈曲し口縁端部を直立するものある。357と同じく古瀬戸後IV新期に位置づけられる。300は鉢あるいは擂鉢の底部片である。古瀬戸後期に位置づけられるが、詳細な時期は特定できない。

359・360は古瀬戸~大窯期の擂鉢の底部片である、後IV新~大窯1期に位置づけられる。

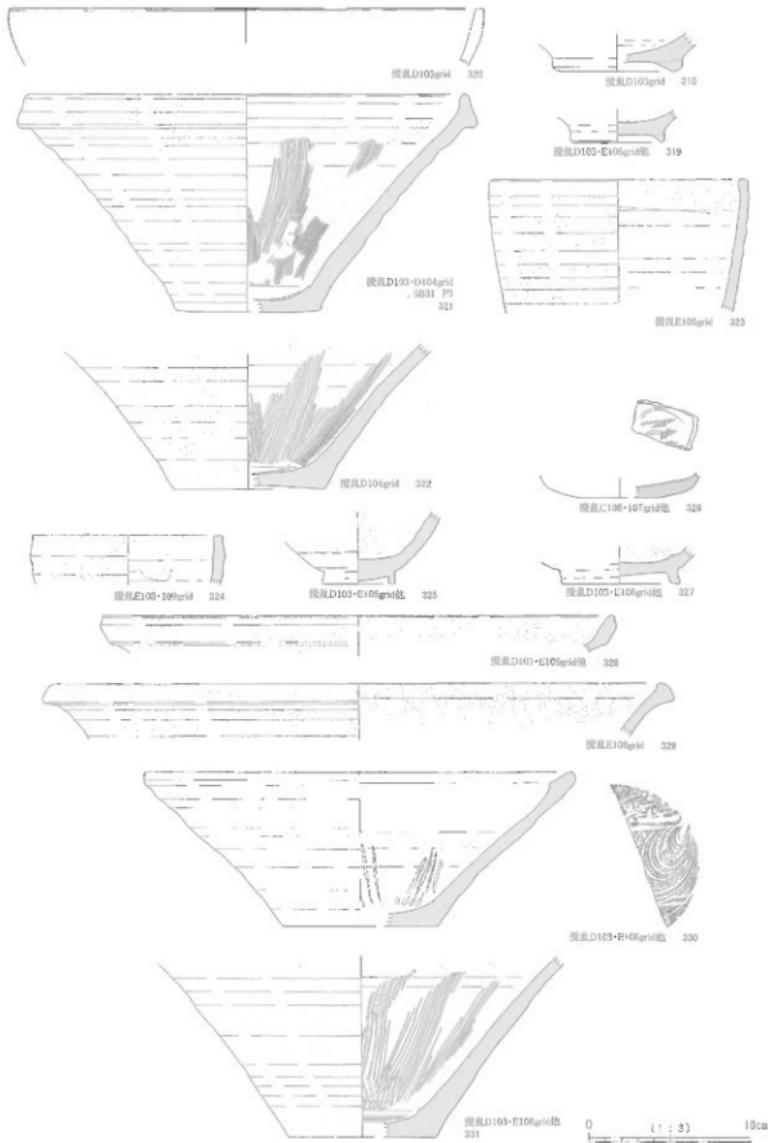
大窯 大窯期の製品は、グリッド出土の216・218~222・269、確認調査出土の297、攪乱出土の321、表面採取の361・362がある。遺構外の大窯製品は天目茶碗、端反皿、大皿、擂鉢がある。

218・362は天目茶碗で、形態的な特徴から362が大窯1期、218は大窯2期に位置づけられる。219・269は端反皿で、形態的な特徴から大窯1期に位置づけられる。216は大皿で、大窯4期に位置づけられる。220~222・297・321・361は擂鉢で、口縁部の形態から220・221・361が大窯1期、297が大窯2期、222が大窯3期、321が大窯3期後半に位置づけられる。

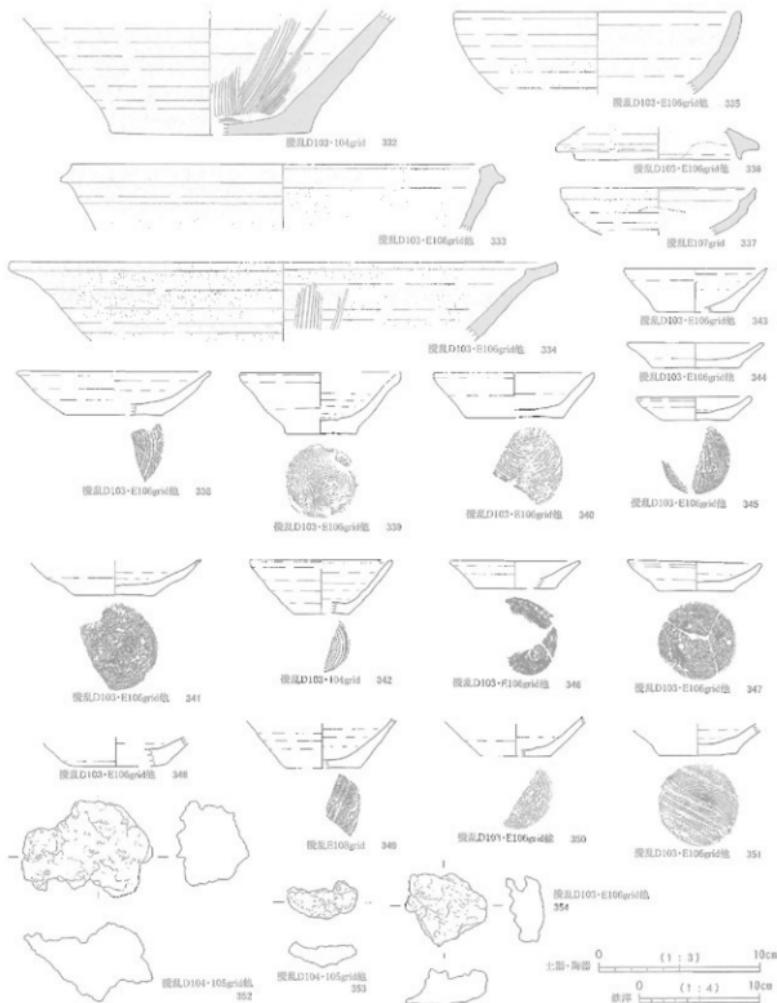
登窯 登房式登窯期の製品は、グリッド出土の223・229・258・259・270・271・274、確認調査時出



第84図 中世歴遺跡 遺構に伴わない遺物実測図④（確認調査時出土）



第85図 中層遺跡 遺構に伴わない遺物実測図⑤（撲瓦出土）



第86図 中世敷跡道傍に伴わない遺物実測図⑤(掲乱出土)

土の292・294・296・302、攢乱出土の325・327～329、表面採取の364・365がある。これらは天目茶碗、菊皿、灯明皿、志野丸碗、片口、腰鉢である。

258・259・325が天目茶碗で、258が登窯3か4小期、325が登窯4小期、259が登窯5か6小期に位置づけられる。294・296・364・365は美濃産菊皿で、登窯3～4期に位置づけられる。229が志野丸碗で登窯1か2小期に位置づけられる。274が美濃産碗で、登窯1～2小期に位置づけられる。270・302が灯明皿で、270が登窯10か11小期、302が登窯11小期に位置づけられる。327が片口で登窯8か9小期、271が腰鉢で、登窯8小期に位置づけられる。腰鉢は4点(223・292・328・329)で、223・292・328が登窯6小期、329が登窯11小期に位置づけられる。

②常滑 (第82・84・87図、第23表、図版46)

常滑製品は3点図示した。グリッド出土の236、確認調査時出土の291、表面採取の367である。

236は甕の口縁部片で頸部からほぼ直立した後口縁部を折り返し、口唇部には明瞭な瘤みが形成されるものである。形態的な特徴から16世紀に位置づけられる。291は鉢の底部片で、底部は平底で内外面に静止ヘラケズリ調整が行われている。これらの特徴から15世紀前半に位置づけられる。367は片口鉢で、口縁部は外上方に向かって直線的に立ち上がり、口唇部には外傾する面をもつ。15世紀前半に位置づけられる。

③初山 (第84～86図、第23表、図版40～45)

初山製品は、確認調査時出土の295、攢乱出土の332がある。この他瀬戸美濃系施釉陶器で、初山製品の可能性がある攢乱出土の322がある(322は瀬戸美濃系として図版40・41に掲載)。

295は内禿皿であり、低い削り出し高台である。大窯3期後半併行期に位置づけられる。332は腰鉢底部片で、大窯3期後半段階に位置づけられる。322は初山製品の可能性があり、その場合は332と同時期に位置づけられよう。

④志戸呂 (第81～87図、第23表、図版37・44・45)

古志戸呂 古瀬戸後IV期併行期の古志戸呂製品はすべて腰鉢で、グリッド出土の275、確認調査時出土の289、攢乱出土の330・331がある。

志戸呂 志戸呂製品は、グリッド出土の217・224～228・230～234・260・273、確認調査出土の293・299、攢乱出土の323・324・333・334・336・337、表面採取の363・366がある。これらは瀬戸美濃の大窯4併行期以降の製品であり、天目茶碗、皿、内禿皿、筒形碗、香炉、腰鉢などがあるが、大窯4期に位置づけられるのは皿(230)、筒形碗(293)、腰鉢(366)である。これ以外は登窯期の製品である。

217・363は天目茶碗で、17世紀前半に位置づけられる。231・232は内禿皿で、17世紀後半ごろに位置づけられる。233・293が筒形碗で、293が大窯4期、233は登窯期の製品である可能性が高い。323・324は香炉、336が蓋、234・273が碗、337が皿、224・225が蓋か甕であり、これらは登窯期(江戸時代)の製品である。

226～228・299・333・334・366は腰鉢で、口縁部や腰目の特徴から判断して、366が口縁部は外側に垂下する形態であることから大窯4期併行期(16世紀末～17世紀初頭)、それ以外は江戸時代に位置づけられる。

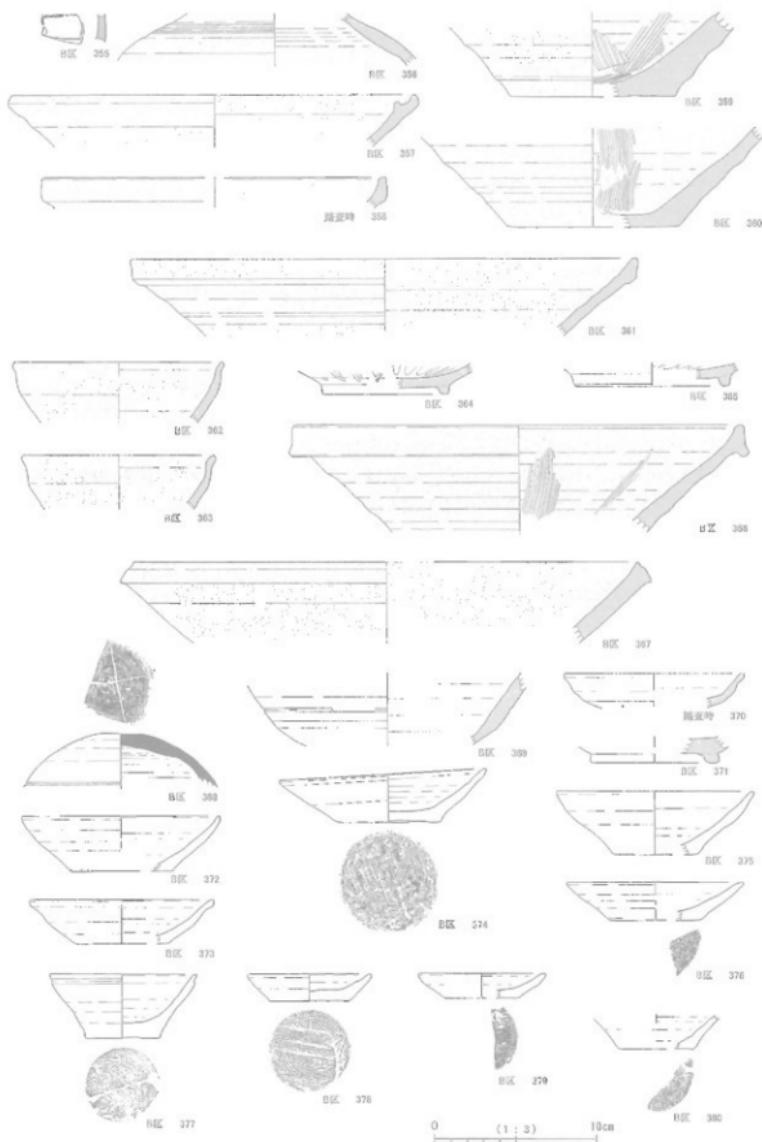
⑤備前 (第86図、第23表)

志戸呂製品にも類似点が確認できることからその可能性も排除できないが、備前の可能性の高い大皿1点(335)が出土した。攢乱出土である。大皿の破片で、丸みをもって立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられている。

⑥肥前 (第81・82・84図、第23表、図版37・46)

肥前産の磁器は、グリッド出土の213・237・257、確認調査時出土の303があり、すべて江戸時代以降

第4類 中・近世の馬鹿・鳥の銅鏡底盤 B. 遺構外出土70件



第87図 中羅敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図⑦ (表土出土・表面採取)

に帰属する。

213は青磁で大皿か盤の可能性がある。江戸時代中期（18世紀）に位置づけられる可能性が高い。237は青磁盤で、江戸時代中期（18世紀）に位置づけられる可能性が高い。257は磁器染付碗で、江戸時代前期末～中期初頭（17世紀末～18世紀初頭）ごろに位置づけられる可能性が高い。303は無文の磁器で菊皿である。江戸時代後期（19世紀）に位置づけられる。

（5）かわらけ（第82～84・86・87図、第23表、図版46・47）

中屋敷遺跡では、最も多く出土した遺物である。

グリッド出土では、238～256、261・262、281・283～288、確認調査時出土の307～317、攢乱出土では338～351、表土出土では372～380を図示した。このうち、238～241・288・307が非ロクロ成形で、256が非ロクロ成形の可能性がある以外はすべてロクロ成形である。

非ロクロ成形かわらけ 非ロクロ成形かわらけは、口径は10～13cmのものが多く、288が9.4cmとやや小さい。器高は低いものが多く、2.5cm以下であり、240や288などは皿に近い。形態的な特徴から307が16世紀後半、238・239・288が17世紀後半、240・241は18世紀に位置づけられる可能性が高い。

ロクロ成形かわらけ 口径10～14cm、器高3.0cm以上の大型品、口径8～10cmの中型品で器高2.5cm以上のもの、口径8cm以下の小型品がある。これらの時期については、第23表を参照願いたい。

16世紀後半のものは、口径10cm以上、器高3.0cm以上のものと、口径8cm以下、器高2.0cm以下のものに分かれる可能性が高い。17世紀前半のものは遺構外からは出土していない。17世紀後半のものは10cm以上で器高約3.0cm以上の大型のものと、8～10cmで1.5～2.5cmの中型ものがあるが、大型のものの割合が少なくなる。大型、小型という大きさによる区分がなくなる傾向にある。18世紀前半になると、口径10cm以上、器高約3cm以上のものが減少し、8～10cmで、器高が1.5～3.5cmのものが増加する。口径が小さくなる傾向にある。また、口径8cm以下で、器高2.0cm以下の個体が増加する。

なお、中屋敷遺跡全体のかわらけの色調の傾向であるが、非ロクロ成形のものが黄褐色に近いものが多く、ロクロ成形のものが褐色に近いものが多い。産地が異なる可能性が高い。

（6）土師鍋（第81・84・85図、第23表、図版46）

土師質の鍋では、グリッド出土の235、確認調査時出土の290・301、攢乱出土の320である。これらは内湾形内耳鍋（290・301・320）、（南）伊勢系内耳鍋（235）である。

235は黄白色系の胎土を示すことから伊勢系内耳鍋である可能性が高い。頸部の破片であることから断定することは難しいが、形態的特徴から、14世紀後半～16世紀前半に位置づけられようか（金子2005）。

内湾形内耳鍋3点（290・301・320）について、290・301は口縁部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。320は同じく内湾しながら立ち上がる口縁部で口縁端部は水平な面をもつ。3者ともに江戸時代前期（17世紀）に位置づけられる可能性が高い（金子2005）。

（7）瓦（第88図、第23表）

D103・E106グリッド周辺の攢乱から1点、煙瓦が出土した。いよじやわら 瓦である。瓦尻の側面には○の刻印が刻まれている。生産者（場所）の名称であろう。江戸時代中期以降の遺物である。

この他、調査区内からは多数の棟瓦片が出土した。棟瓦片であることから、中屋敷遺跡の建物に瓦が採用されたのは早くても江戸時代中期以降である。

(8) 鉄滓 (第82・86図、第25表、図版49)

鉄滓は、図示した7点(352~354, 264~267)のほか、確認調査時のEトレント、Kトレントから11点が出土した。大きさは、352のように長辺10.6cm、重量511gの当遺跡出土の最大のものから、図示していないものの中に最大幅1cm以下、0.3gの小さなものまでがある。

(9) 蘿羽口 (第82図、第23表、図版48)

円筒状の蘿羽口の破片(263)である。E99グリッド、調査区の一番西側で出土した。土製できめ細かい粘土を使用しているが、高温の焼成を受けたためか非常に軽い。復原される残存部分の直径は12cm前後と推測する。厚さは3.6cmである。

鉄滓が多く出土した掘立柱建物E群周辺から離れたグリッドから出土しており、このグリッド周辺ではほとんど鉄滓は出土していない。鉄滓と離れた位置から出土したことを考慮すると、廃棄されたためにこの位置から出土した可能性が高い。

(10) 石塔 (第88図、第24表、図版48)

遺跡の表面で石塔(宝鏡印塔)の基台(383)を1点採取した。

石材は森町周辺で採取される砂岩で、いわゆる「森砂岩」である。石塔は立方体で、上部は階段状に段が2段形成されるが、上段目は削り出しして段とし、下段は沈線を刻むことで段に見えるようにしている。底部は窪む。法量は高さ18.7cm、上部幅(復原)15.0cm、上部奥行き(厚さ、復原)15.0cm、下部幅17.3cm、下部奥行き(厚さ)16.9cmである。底部の窪みは1.5cmである。

上部の段の形成が沈線で行われるなどの省略化傾向にあることから、16世紀前半頃に位置づけられる可能性が高い。

(11) 鉄製品 (第89図、第26表、図版48)

遺構外からは、楔か(384)、釘か(385)、棒状鉄製品(391)、鎌か(393)、包丁などの茎片(392)、板状鉄製品2点(396・397)が出土した。

384は一方に刃部、一方に折り返しが確認できるもので、楔などの道具であると想定する。折り返し



第88図 中世敷遺跡 遺構に伴わない遺物実測図⑧(表土出土・表面採取)

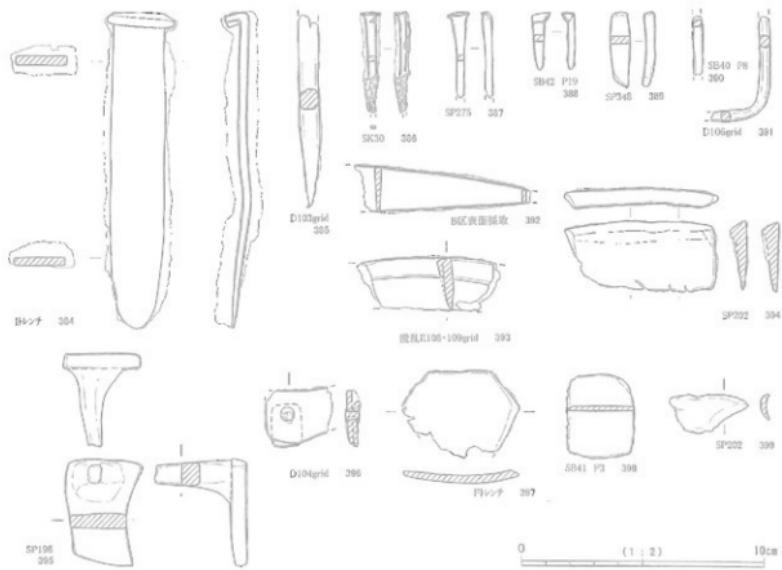
は鉄板をL字形に折り曲げたもので、身は長方形、刃部はU字形である。385は大型の釘の釘身先端の破片の可能性が高い。断面は隅丸方形であり、先端は尖る。391は断面円形の棒状鉄製品で、L字形に折れ曲がっている。392は包丁、鋸、鎌などの道具の茎片である。茎は茎尻に向かって急激に幅を狭めるものである。断面は茎房側が長方形、刃部側が長台形である。393は曲鎌片の可能性が高い。上部が弧を描く。断面は長三角形であり、下部は本来刃が形成されていたと想定する。396は鉄板を重ね合わせ紙で留めた製品で、全体的な形状が不明であることから用途不明である。397は現況六角形の鉄板で、用途不明である。

なお、本節第10項で鉄滓の自然科学分析の成果を示すが、それによると中屋敷遺跡では精錬鍛冶と小鍛冶が行われていた可能性が高く、これらの鉄製品は古い製品を溶解し、新たな鉄素材を製造する精錬鍛冶を行なうための古い鉄製品の可能性がある。

(12) その他

図示していないが、上記以外には、縄文土器と縄文時代と推測できる石器の剥片が出土している。石材については、黒曜石、シルト岩、流紋岩がある。

この剥片の出土により、当遺跡は縄文時代の遺跡でもあることが判明するが、どのような性格の遺跡かは特定できない。現状では、散布地という評価が妥当であろう。



第89図 中屋敷遺跡 金属製品実測図

9. 遺物観察表

(1) 土器・陶器・土製品・石器・石製品・鉄滓・鉄製品観察表

第23表 中型敷遺跡 出土土器・陶器・土製品観察表

No.	測量	形態	底	出土位置	施錠	蓋	縁幅	縁厚	身高	身幅(外側)	色調(内面)	時期・参考	
1		A SB02-P10	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	20	(10, 0)	-	-	西黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
2	24	A SB06-P9	真珠陶瓶	塗付黒	口縁～底深	10	(10, 3)	-	-	明礬灰(7.GY7/1)	明礬灰(7.GY7/1)	(15世紀後半～16世紀後半)	
3	37	A SB06-P6	真珠陶瓶	施錠	口縁	10	-	-	-	明オーリーブ灰(2.GY7/1)	明オーリーブ灰(2.GY7/1)	鐵鑄錠・鍍金錠錫D2 中世後期(16世紀後半)	
4		A SB06-P3	かわらけ	ロクロ	体部～底深	20	-	3.4	-	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
5	24	A SB05-P3	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	20	(7.2)	(4.6)	1.4	褐(5YR7/5)	褐(5YR7/5)	中世後期(16世紀後半)	
6	24	A SB05-P2	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	10	(10, 0)	(5.0)	2.1	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
8	24	A SB11-P14	志戸原	窓	口縁～側面	30	(6, 0)	-	-	黒褐色(2.5Y3/1)	江戸初期～16世紀後半	江戸初期～16世紀後半	
9		A SB11-P7	かわらけ	ロクロ	口縁	20	(9, 0)	-	-	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
10		A SB11-P10	かわらけ	ロクロ	底深～底部	5	-	(1.8)	-	褐(5YR8/4)	褐(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
11	24	A SB15-P1	かわらけ	ロクロ	底深	40	-	(7.0)	-	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
12	24	A SB15-P3	かわらけ	ロクロ	口縁	5	(21, 0)	-	-	黒褐色(2.5Y3/2)	黒褐色(2.5Y3/2)	大正	
13	24, 25	A SB15-P6	真珠陶瓶	染付茶葉	口縁～底部	30	(12, 0)	(7.2)	2.9	灰白(2.5Y3/2)	灰白(2.5Y3/2)	江戸後期B1期 (江戸後期～後半)	
14		A SB19-P1	かわらけ	ロクロ	全体	90	13.3	6.2	3.5	淡黄褐色(7.5YR8/3)	淡黄褐色(7.5YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
15		A SB19-P1	かわらけ	ロクロ	全体	70	(12.5)	(8.0)	3.5	淡黄褐色(7.5YR8/3)	淡黄褐色(7.5YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
16		A SB19-P1	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	20	(4.0)	-	-	淡黄褐色(7.5YR8/3)	淡黄褐色(7.5YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
17		A SB19-P1	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	15	(2.0)	(7.0)	2.5	褐(5YR7/5)	褐(5YR7/5)	にい貝(7.5YR7/3)	
18		A SB19-P11	かわらけ	ロクロ	全体	40	(6.0)	(4.4)	2.5	にい貝(7.5YR7/3)	にい貝(7.5YR7/3)	中世後期(16世紀後半)	
19		A SB19-P1	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	50	(7.1)	(4.4)	1.8	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
20		A SB19-P16	かわらけ	ロクロ	全体～底深	10	-	(3.0)	-	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
21		A SB19-P1	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	20	(6.3)	(5.0)	1.6	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
22		A SB19-P1	かわらけ	ロクロ	全体	80	(7.7)	4.2	1.8	淡黄褐色(7.5YR8/3)	淡黄褐色(7.5YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
23		A SB20-P3	かわらけ	ロクロ	全体	75	10.9	5.4	2.7	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
24		A SB20-P3	かわらけ	ロクロ	全体	95	8.1	5.0	1.7	淡黄褐色(10YR8/4)	淡黄褐色(10YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
25		A SB20-P2	かわらけ	ロクロ	全体～底深	30	-	(4.5)	-	淡黄褐色(7.5YR8/3)	淡黄褐色(7.5YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
26		A SB21-P2	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	30	(7.5)	(3.6)	1.8	褐(5YR7/5)	褐(5YR7/5)	にい貝(5YR7/3)	
27		A SB21-P2	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	25	(6.0)	(3.4)	1.7	褐(5YR7/5)	褐(5YR7/5)	にい貝(5YR7/3)	
28		A SB21-P2	かわらけ	ロクロ	底深	40	-	(4.8)	-	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
29		A SB21-P1	古御戸	脚輪	口縁	5	(30.0)	-	-	黒褐色(5YR3/1)	黒褐色(5YR3/1)	後世	
30		SB22-P1	海戸漆器	底深	口縁～底部	16	(11.1)	-	-	淡黄褐色(7.5Y3/3)	淡黄褐色(7.5Y3/3)	大正	
31		A SB22-P3	かわらけ	ロクロ	全体	60	-	5.0	-	にい貝(5YR7/4)	にい貝(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)	
32		A SB22-P3	かわらけ	ロクロ	全体	40	(6.0)	(4.7)	1.6	淡黄褐色(10YR8/4)	淡黄褐色(10YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
33		A SB22-P3	かわらけ	ロクロ	全体	15	(6.0)	(4.4)	1.6	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
34		A SB22-P21	かわらけ	ロクロ	全体	95	(1.4)	3.2	3.6	淡黄褐色(10YR8/3)	淡黄褐色(10YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
35		C S002-P2	かわらけ	ロクロ	全体	50	(10.5)	4.3	3.5	にい貝(7.5YR8/4)	にい貝(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
36		B S003-P7	美濃	底	脚輪	30	-	(7.1)	-	淡黄褐色(5YR8/2)	淡黄褐色(5YR8/2)	寛政	
37		B S003-P2	美濃	丸穴	底部	25	-	(7.0)	-	淡黄褐色(5Y8/3)	淡黄褐色(5Y8/3)	寛政か2	
38		B SB07-P1	朝山	天日御鏡	口縁～底部	30	(11.2)	-	-	赤褐色(2.5YH4/1)	赤褐色(2.5YH4/1)	大正3後半	
39		B SB07-P3	古御戸	脚輪	口縁～底部	60	-	-	-	淡黄褐色(7.5YR8/1)	淡黄褐色(7.5YR8/1)	後世	
40		B SB07-P3	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	15	(12.0)	-	-	淡黄褐色(10YR8/3)	淡黄褐色(10YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
41		B SB07-P3	かわらけ	ロクロ	全体	70	10.4	4.5	2.5	にい貝(5YR8/4)	にい貝(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
42		B SB07-P1	山茶屋	脚輪	全体	100	-	6.0	-	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	寛政西暦初期	
43		B SB07-P10	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	30	(6.3)	(5.8)	1.7	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
44		B SB07-P1	朝山	内光鏡	全体	95	9.5	5.2	2.1	灰褐色(7.5YR8/2)	灰褐色(7.5YR8/2)	大正3後半	
45		B SB45-P6	朝山	内光鏡	底部	60	-	5.4	-	灰褐色(10YR8/2)	灰褐色(10YR8/2)	大正3後半	
46		B SB45-P2	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	40	(9.2)	(4.0)	2.4	淡黄褐色(7.5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/4)	中世後期(16世紀後半)	
47		B SB47-P1	かわらけ	ロクロ	全体	95	(11.2)	5.3	2.8	淡黄褐色(7.5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/4)	中世後期(16世紀後半)	
48		B SB47-P19	初山	内光鏡	口縁～底深	50	(11.4)	(6.3)	5.7	淡黄褐色(7.5YR6/6)	淡黄褐色(7.5YR6/6)	中世後期(16世紀後半)	
49		B SB48-P1	朝山	内光鏡	全体	20	-	(6.0)	-	淡黄褐色(7.5YR6/6)	淡黄褐色(7.5YR6/6)	中世後期(16世紀後半)	
50	27	B SB45-P3	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	15	(11.3)	6.5	2.1	灰褐色(7.5YR8/1)	灰褐色(7.5YR8/1)	大正3後半	
51		B SB45-P6	朝山	内光鏡	底部	60	-	5.4	-	灰褐色(10YR8/2)	灰褐色(10YR8/2)	大正3後半	
52		B SB45-P2	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	15	(11.2)	(6.0)	2.4	淡黄褐色(7.5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/4)	中世後期(16世紀後半)	
53		B SB47-P1	かわらけ	ロクロ	全体	70	10.4	4.5	2.5	にい貝(5YR8/4)	にい貝(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
54		B SB47-P10	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	30	(6.3)	(5.8)	1.7	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
55		B SB47-P1	朝山	内光鏡	全体	90	-	-	-	淡黄褐色(7.5YR8/3)	淡黄褐色(7.5YR8/3)	大正3後半	
56		B SB47-P2	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	40	(9.2)	(4.0)	2.4	淡黄褐色(7.5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/4)	中世後期(16世紀後半)	
57		B SB47-P1	かわらけ	ロクロ	全体	95	(11.2)	6.5	2.8	淡黄褐色(7.5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/4)	中世後期(16世紀後半)	
58		B SB47-P9	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	70	-	-	-	淡黄褐色(7.5YR6/6)	明赤褐色(2.5YR5/4)	中世後期(16世紀後半)	
59		B SB47-P19	初山	内光鏡	口縁～底深	50	(11.4)	(6.3)	2.5	暗褐色(2.5YR6/6)	暗褐色(2.5YR6/6)	大正3後半	
60		B SB48-P1	朝山	内光鏡	底部	20	-	(6.0)	-	淡黄褐色(7.5YR7/3)	淡黄褐色(7.5YR7/3)	大正3後半	
61		B SB48-P4	かわらけ	ロクロ	口縁	5	(7.4)	-	-	淡黄褐色(7.5YR7/3)	淡黄褐色(7.5YR7/3)	中世後期(16世紀後半)	
62		B SB48-P4	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	10	(8.0)	6.3	2.0	淡黄褐色(7.5YR6/6)	淡黄褐色(7.5YR6/6)	中世後期(16世紀後半)	
63		B SB48-P5	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	15	(12.0)	-	-	淡黄褐色(10YR8/3)	淡黄褐色(10YR8/3)	中世後期(16世紀後半)	
64		B SB48-P7	かわらけ	ロクロ	脚輪	20	-	-	-	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	古墳～良賀	
65		B SB48-P16	須恵器	底	脚輪	10	-	-	-	灰(2.5Y2/1)	灰(2.5Y2/1)	古墳～良賀	
66		B SB48-P14	古御戸	内光鏡	脚輪	5	(6.0)	-	-	淡黄褐色(7.5YR6/6)	淡黄褐色(7.5YR6/6)	中世後期(16世紀後半)	
67		B SB48-P14	古御戸	内光鏡	脚輪	5	(6.0)	-	-	淡黄褐色(7.5YR6/6)	淡黄褐色(7.5YR6/6)	中世後期(16世紀後半)	
68		B SB49-P16	かわらけ	ロクロ	全体	15	(11.3)	(5.6)	3.1	淡黄褐色(7.5YR6/4)	淡黄褐色(7.5YR6/3)	中世後期(16世紀後半)	
69		B SB49-P19	ロクロ	口縁～底深	20	(11.0)	6.0	3.3	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
70		B SB49-P16	かわらけ	ロクロ	全体	90	7.9	4.5	1.6	淡黄褐色(5YR8/4)	淡黄褐色(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)	
71		B SB49-P10	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	40	-	(5.0)	-	褐(7.5YR7/6)	褐(7.5YR7/6)	中世後期(16世紀後半)	
72		B SB49-P10	かわらけ	ロクロ	口縁～底深	20	-	(4.4)	-	褐(7.5YR7/6)	褐(7.5YR7/6)	中世後期(16世紀後半)	
73		B SB49-P12	古御戸	内光鏡	脚輪	5	(7.0)	-	-	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	
74		B SB49-P7	かわらけ	ロクロ	口縁	10	(11.1)	-	-	にい貝(5YR7/4)	にい貝(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)	
75		B SB49-P7	古御戸	内光鏡	脚輪	5	(28.0)	-	-	青灰(4P5/1)	青灰(4P5/1)	大正3後半	
76		B SB49-P5	古御戸	内光鏡	脚輪	10	-	(5.6)	-	青灰(4P5/1)	青灰(4P5/1)	大正4後半	
77		A SE01	SE01	かわらけ	ロクロ	全体	20	(11.0)	-	-	淡黄褐色(7.5YR8/4)	淡黄褐色(7.5YR8/4)	江戸中期(16世紀後半)
78	68	A SE01	SE01	かわらけ	ロクロ	全体	50	(5.6)	44.8	2.7	淡黄褐色(7.5YR6/6)	淡黄褐色(7.5YR6/6)	江戸中期(16世紀後半)
79	29	A SE01	SE01	かわらけ	ロクロ	全体	40	(5.3)	44.4	3.4	褐(5YR6/5)	褐(5YR6/5)	江戸中期(16世紀後半)

No.	神目	部類	区	出土位置	経済	形種	部位	既存	口径	底径	深さ	色調(外面)	色調(内面)	時期・備考	
80	-	A	SK01	吉野戸呂 御跡	御跡	20	-	(10.8)	-	黒地(2.5YR7/6)	にこり(2.5YR7/4)	古瀬戸(16世紀前半)			
81	-	A	SK02	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	29	(11.0)	-	黒地(2.5YR7/6)	黒地(2.5YR7/6)	江戸中期(18世紀前半)			
82	-	A	SK03	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	30	(10.4)	-	黒地(2.5YR7/6)	黒地(2.5YR7/6)	江戸中期(18世紀前半)			
83	29	A	SK07	かわらけ	ロクロ	全体	93	9.0	4.7	2.8	緑(5YR7/8)	緑(5YR7/8)	江戸中期(18世紀前半)		
84	-	A	SK10	かわらけ	ロクロ	口縁部	29	(12.2)	-	緑(5YR7/8)	明治時代(5YR7/6)	江戸前期(17世紀後半)			
85	29	C	SK20	古瀬戸 御跡	口縁～底部	5	(11.9)	-	-	黒地(2.5YR3/1)	黒地(2.5YR3/1)	灰皿			
86	-	C	SK20	灰皿陶器	柄	底盤	10	-	(7.0)	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	透ヶ月形灰皿		
87	-	C	SK20	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	62	(10.0)	-	-	透黄地(2.5YR8/4)	透黄地(2.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
88	-	C	SK20	かわらけ	ロクロ	全体～底部	60	-	(6.9)	-	透黄地(2.5YR8/4)	透黄地(2.5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
89	-	C	SK20	かわらけ	ロクロ	全体	76	7.2	4.8	1.6	緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)	江戸中期(18世紀前半)		
90	29	C	SK20	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	30	(7.5)	(4.6)	1.8	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	江戸中期(18世紀前半)		
91	-	B	SK22	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	15	(6.4)	(5.9)	1.8	緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)	江戸中期(18世紀前半)		
92	-	B	SK22	かわらけ	ロクロ	底部	29	-	(5.3)	-	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	江戸中期(18世紀前半)		
93	-	B	SK22	かわらけ	ロクロ	全体	29	-	(4.0)	-	緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)	江戸中期(18世紀前半)		
94	50	B	SK22	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	30	(12.2)	(5.5)	3.8	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	透月形灰皿(16世紀前半)		
95	29	B	SK22	かわらけ	ロクロ	全体	75	(7.4)	5.1	1.8	緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)	江戸中期(18世紀前半)		
96	30	B	SK22	かわらけ	ロクロ	全体	95	4.0	4.9	1.9	にこり(5YR7/4)	にこり(5YR7/4)	江戸中期(18世紀前半)		
97	30	B	SK24	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	30	(7.5)	(4.6)	1.8	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
98	30	B	SK24	かわらけ	ロクロ	底部	49	-	(6.0)	-	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
99	30	B	SK24	かわらけ	ロクロ	全体	20	(5.9)	(2.9)	1.8	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
100	30	B	SK24	かわらけ	ロクロ	底部	16	-	(5.9)	-	緑(5YR7/6)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
101	31	B	SK36	かわらけ	ロクロ	全体	40	(11.7)	(5.9)	2.8	緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)	中世後期(16世紀後半)		
102	31	B	SK36	かわらけ	ロクロ	全体	100	12.0	6.2	2.8	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
103	31	B	SK36	かわらけ	ロクロ	全体	20	(10.1)	(4.9)	2.0	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
110	30	B	SD01	灰皿陶器	蓋	底盤	25	-	(6.6)	-	灰白(5Y7/6)	灰白(5Y7/6)	灰皿陶器(山形窯)		
111	-	B	SD02	盃	浅皿	口縁～底部	7	(14.2)	-	-	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	灰皿陶器(山形窯)		
112	30	B	SD02	かわらけ	ロクロ	全体	60	(13.0)	6.4	3.5	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
113	-	B	SD02	かわらけ	ロクロ	底部	10	-	(6.0)	-	緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)	中世後期(16世紀後半)		
114	30	B	SD03	脚付盃	口縁	全体	7	(22.0)	-	-	透黄地(5YR8/4)	透黄地(5YR8/4)	中世後期(16世紀後半)		
115	30	B	SD06	古瀬戸 御跡	御跡	二部部	5	(5.6)	-	-	黒灰地(5.5/2)	黒灰地(5.5/2)	透月形灰皿(16世紀後半)		
116	-	B	SD06	脚付盃	口縁	底部	5	(5.6)	-	-	灰灰地(5.5/2)	灰灰地(5.5/2)	透月形灰皿(16世紀後半)		
117	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(24.9)	-	-	灰灰地(5.5/2)	灰灰地(5.5/2)	透月形灰皿(16世紀後半)		
118	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(12.4)	(6.2)	3.2	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
119	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	90	11.9	5.4	2.9	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
120	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(11.7)	(6.2)	3.5	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
121	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(11.7)	(6.2)	3.5	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
122	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(11.7)	(6.2)	3.2	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
123	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(11.7)	(6.2)	3.2	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
124	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(11.7)	(6.2)	3.2	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
125	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(11.7)	(6.2)	3.2	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
126	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	50	(11.7)	(6.2)	3.2	透黄地(5YR8/3)	透黄地(5YR8/3)	透月形灰皿(16世紀後半)		
127	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	70	11.3	5.5	2.9	にこり(5YR7/4)	にこり(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
128	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	70	11.3	5.5	2.9	にこり(5YR7/4)	にこり(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
129	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	30	10.7	4.5	2.4	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
130	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	20	(11.2)	(5.9)	3.4	にこり(5YR7/4)	にこり(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
131	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	60	(11.0)	6.5	2.5	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
132	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	70	(11.2)	4.5	3.0	にこり(5YR7/4)	にこり(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
133	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	70	(11.3)	4.5	3.7	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
134	-	B	SD06	脚付盃	口縁	全体	70	(7.6)	(5.0)	1.8	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
135	-	B	SD03	かわらけ	ロクロ	全体	15	(7.8)	(4.1)	1.8	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
136	32	B	SD03	かわらけ	ロクロ	全体	95	7.5	4.7	2.1	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
137	-	B	SD03	かわらけ	ロクロ	全体	30	(7.3)	(4.0)	2.0	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
138	-	B	SD03	かわらけ	ロクロ	全体	100	7.4	5.0	1.7	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
139	-	A	SK01	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	20	(7.4)	(4.5)	1.8	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	中世後期(16世紀後半)		
140	-	A	SK02	脚付盃	口縁	全体	29	-	(5.5)	-	灰白(2.5YR7/2)	灰白(2.5YR7/2)	透月形灰皿(16世紀後半)		
141	33	A	SK02	葛井陶器	脚付盃	口縁部	10	(14.0)	-	-	灰白地(5YR7/1)	灰白地(5YR7/1)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
142	33	A	SK02	脚付盃	丸皿	口縁～底部	10	(11.6)	(5.4)	2.7	透黄地(5YR7/4)	にこり(5YR7/4)	大皿3		
143	-	A	SK02	脚付盃	火打茶器	台部	100	-	4.5	-	灰白(2.5YR7/2)	灰白(2.5YR7/2)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
144	-	A	SK03	かわらけ	ロクロ	全体	60	(15.5)	4.7	2.8	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
145	-	A	SK05	かわらけ	ロクロ	底部	20	-	(5.0)	-	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
146	-	C	SK06	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	20	(16.3)	(5.0)	2.0	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
147	-	C	SK07	山茶碗	脚	底部	40	-	(5.0)	-	黒灰地(2.5YR7/1)	黒灰地(2.5YR7/1)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
148	-	C	SK07	脚付盃	脚	底部	15	(20.9)	-	-	にこり(5YR7/4)	にこり(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
149	-	C	SK07	脚付盃	脚	底部	75	-	(4.3)	-	灰白地(2.5YR7/2)	灰白地(2.5YR7/2)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
150	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	口縁～底部	5	(12.2)	(6.2)	3.4	透黄地(5YR7/5)	透黄地(5YR7/5)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
151	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	口縁	全体	10	(11.9)	(6.0)	3.3	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)	
152	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	口縁～底部	5	(11.5)	(6.0)	2.8	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
153	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	口縁	全体	10	-	6.5	2.5	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)	
154	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	全体	90	9.0	2.8	2.1	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
155	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	全体	20	(11.1)	(4.0)	2.5	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
156	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	全体	30	(7.6)	(4.5)	1.9	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
157	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	全体	40	(7.5)	(4.0)	2.0	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
158	-	C	SK07	脚付盃	ロクロ	全体	80	7.9	4.2	2.0	透黄地(5YR7/4)	透黄地(5YR7/4)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
161	-	A	SP104	瀬戸窯器	脚付盃	口縁部	5	(20.0)	-	-	透赤灰(10R5/1)	透赤灰(10R5/1)	脚付盃(16世紀～16世紀前半)		
162	37	A	SP101	賀茂陶器	脚付盃	ロクロ	10	(11.7)	-	-	透青灰(5G7/1)	透青灰(5G7/1)	脚付盃1群		
163	34	A	SP129	瀬戸窯器	脚付盃	全体	70	12.6	6.8	2.2	灰白地(5YR7/1)	灰白地(5YR7/1)	脚付盃1群～脚付盃2群		
164	34	A	SP177	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	40	(11.5)	(5.0)	3.2	透黄地(10YR7/4)	透黄地(10YR7/4)	脚付盃1群～脚付盃2群		
165	34	A	SP111	瀬戸窯器	脚付盃	全体	30	(8.1)	(6.2)	5.8	灰白地(5YR7/1)	灰白地(5YR7/1)	脚付盃1群～脚付盃2群		
166	34	A	SP116	瀬戸窯器	脚付盃	全体	16	(10.1)	-	-	灰白地(5YR7/1)	灰白地(5YR7/1)	脚付盃1群～脚付盃2群		
167	34	A	SP138	瀬戸窯器	脚付盃	全体	10	(12.5)	-	-	透黄地(5YR7/2)	透黄地(5YR7/2)	脚付盃1群～脚付盃2群		
168	35	A	SP141	かわらけ	ロクロ	全体	90	10.2	5.3	2.8	透黄地(5YR7/6)	透黄地(5YR7/6)	脚付盃1群～脚付盃2群		

文	序	回数	区	出土地面	別題	圖版	所持	残存	口語	題名	部高	色調(外側)	色調(内側)	時期・場所
169		35	A	SP15	かわらけ	□クロ	全体	60	9.8	4.1	3.1	にぶい黒(7.5YR7/4)	江戸初期(17世紀前半)	
170		35	A	SP15	かわらけ	□クロ	半体	20	(3.8)	3.6	3.6	にぶい黒(7.5YR8/3)	江戸初期(17世紀前半)	
171		-	A	SP17	かわらけ	□クロ	口語～部墨	70	(7.8)	5.0	1.8	桃(7YR7/6)	江戸中期(18世紀前半)	
172		-	A	SP19	かわらけ	□クロ	全体	40	(5.0)	5.0	1.3	にぶい黒(7.5YR7/4)	江戸後期(17世紀後半)	
173		-	A	SP95	かわらけ	□クロ	口語～部墨	30	(7.4)	14.0	1.6	にぶい黒(7.5YR7/4)	江戸後期(18世紀)	
174		35	A	SP25	かわらけ	□クロ	口語～部墨	25	10.4	8.4	2.6	地黄(10YR5/4)	江戸後期(17世紀後半)	
175		35	A	SP26	かわらけ	□クロ	全体	70	(10.2)	5.4	2.1	地黄(7.5YR8/4)	江戸後期(17世紀後半)	
176		-	A	SP28	かわらけ	□クロ	口語墨	20	(10.6)	-	1.6	脂灰(2.5YR5/2)	明治後(5YR5/6)	
177		-	A	SP58	かわらけ	□クロ	口語墨	40	(5.4)	-	-	桃(7YR6/6)	江戸中期(18世紀)	
178		-	A	SP169	かわらけ	□クロ	11跡～部墨	20	(12.5)	-	-	桃(7.5YR7/6)	にぶい黒(7.5YR7/4)	
179		-	A	SP184	かわらけ	□クロ	部墨～部墨	30	-	(5.5)	-	桃(7.5YR8/3)	江戸後期(17世紀後半)	
180		35	A	SP99	かわらけ	□クロ	全体	60	(5.5)	4.9	2.0	地黄(10YR8/4)	地黄(7.5YR8/3)	
181		-	A	SP72	かわらけ	□クロ	口語～部墨	40	-	(4.9)	-	にぶい黒(5YR5/4)	にぶい黒(5YR5/2)	
182		-	A	SP77	かわらけ	□クロ	部墨～部墨	40	-	(5.0)	-	地黄(7.5YR8/4)	地黄(7.5YR8/3)	
183		34	C	SP280	貿易陶器	白小箱	口語墨	20	(5.1)	-	-	白(2.5YR8/2)	江戸後期(17世紀後半)	
184		34	B	SP25	古瀬戸	口語	口語～部墨	5	(5.0)	-	-	地黄(5YR2/1)	地黄(5YR2/1)	
185		-	C	SP285	かわらけ	□クロ	口語	15	(11.3)	-	-	にぶい黒(7.5YR7/4)	にぶい黒(7.5YR7/4)	
186		-	C	SP284	かわらけ	□クロ	口語～部墨	15	(6.0)	(4.6)	1.8	地黄(7.5YR8/4)	地黄(7.5YR8/4)	
187		34	B	SP231	幼鳥	天日茶碗	口語～部墨	20	(13.9)	(4.0)	4.9	地黄(7.5YR8/4)	地黄(7.5YR8/4)	
188		-	C	SP279	地黄脚附	口語	口語墨	16	-	(6.0)	-	桃白(5Y7/1)	桃白(5Y7/1)	
189		34	B	SP31	貿易陶器	青花瓶	部墨	50	-	(5.4)	-	明治後(10YR8/1)	宮口～定期	
190		35	B	SP257	瀬戸物?	青花瓶?	部墨	10	-	-	-	地黄(10YR5/2)	地黄(10YR5/2)	
191		35	B	SP257	瀬戸物?	青花瓶?	部墨	10	-	-	-	桃白(10YR7/1)	占吉～御飯碗?	
192		35	B	SP251	瀬戸物?	青花瓶?	部墨	20	-	-	-	桃(10YR7/1)	桃(10YR7/1)	
193		35	C	SP22	かわらけ	□クロ	全体	60	(12.5)	5.2	3.1	地黄(7.5YR5/4)	桃(7.5YR5/4)	
194		35	B	SP257	かわらけ	□クロ	口語～部墨	20	(11.3)	9.5	2.5	地黄(10YR8/4)	地黄(10YR8/4)	
195		35	B	SP231	瀬戸物?	青花瓶?	口語～部墨	10	(12.0)	-	-	桃(5Y7/3)	大正1～2	
196		-	B	SP256	かわらけ	□クロ	部墨	10	(5.8)	-	-	灰黄(2.5YR5/2)	江戸中期(16世紀)	
197		-	B	SP200	かわらけ	□クロ	口語～部墨	20	(11.0)	-	-	桃(5YR6/6)	江戸後期(17世紀後半)	
198		-	B	SP229	かわらけ	□クロ	全體	60	(10.5)	6.1	3.5	桃(5YR7/5)	桃(5YR7/5)	
211		37	A	FU01	貿易陶器	青花瓶	部墨	10	-	-	-	明オーバー灰(5GY7/1)	明オーバー灰(5GY7/1)	
212		37	A	E29	貿易陶器	染付瓶	口語墨	10	-	-	-	桃白(10Y7/1)	桃白(10Y7/1)	
213		37	A	D101	肥前青磁	大黒?	部墨	20	-	-	-	明灰(10GY7/1)	江戸後期(10Y7/1)	
214		37	A	D101	肥前青磁	青花瓶	部墨	10	-	-	-	桃(5GY7/1)	桃(5GY7/1)	
215		38-39	A	D101	古瀬戸	墨折墨	口語～部墨	10	(13.4)	-	-	地黄(5Y7/3)	地黄(5Y7/3)	
216		38-39	A-B	D103	瀬戸	大黒	部墨	20	-	(11.2)	-	桃白(2.5Y7/3)	桃IV前	
217		24	A	E100	志戸呂	天日茶碗	口語～部墨	10	(10.3)	-	-	桃(5YR2/1)	江戸後期(17世紀後半)	
218		28-38	A	E59	瀬戸	青花瓶	白陶	100	-	4.2	-	地黄(5YR5/1)	地黄(5YR5/1)	
219		37	A	E101	志戸呂	美濃灰	全体	60	(9.4)	3.3	2.3	地黄(5Y7/3)	地黄(5Y7/3)	
220		40-41	A	D161	志戸呂	青花瓶	口語墨	5	(20.0)	-	-	暗赤灰(7.5R4/1)	暗赤灰(7.5R4/1)	
221		40-41	A	C100	志戸呂	青花瓶	口語～部墨	10	(27.3)	-	-	灰(5N5/6)	大正1～2	
222		40-41	A-B	D103	志戸呂	青花瓶	部墨	5	(23.8)	-	-	地黄(2.5YR5/2)	地黄(2.5YR5/2)	
223		40-41	A	E103	志戸呂	青花瓶	口語～部墨	25	(24.4)	-	-	地黄(5YR5/4)	地黄(5YR5/4)	
224		42-43	A-B	D102	志戸呂	青花瓶	部墨	25	-	(11.2)	-	地黄(5YR2/1)	にぶい黒(5Y7/3)	
225		42-43	A	F99	志戸呂	青花瓶	部墨	8	(20.4)	-	-	桃白(2.5Y8/2)	江戸後期(10Y7/1)	
226		44-45	A-B	D103	志戸呂	青花瓶	部墨	35	-	(10.1)	-	地黄(5YR6/4)	地黄(5YR6/4)	
227		44-45	A	C100	志戸呂	青花瓶	底灰	15	-	(5.7)	-	地黄(5YR6/4)	地黄(5YR6/4)	
228		44-45	A-B	D103	志戸呂	青花瓶	口語～部墨	5	(4.6)	3.0	-	灰(10YR4/2)	地黄(5YR6/4)	
229		46	A	D100	志戸呂	青花瓶	口語～部墨	40	(11.0)	-	-	桃白(2.5YR5/2)	桃白(2.5YR5/2)	
230		42-43	A-B	D103	志戸呂	青花瓶	口語～部墨	10	(11.0)	(11.0)	-	桃白(5GY1/1)	地黄(2.5YR4/1)	
231		42-43	A	F99	志戸呂	内青花	口語～部墨	25	-	(11.2)	-	地黄(2.5YR4/1)	地黄(2.5YR4/1)	
232		27	A	E100	志戸呂	内青花	全体	40	(12.0)	(5.2)	2.8	地黄(7.5YR2/1)	地黄(7.5YR2/1)	
233		42-43	A	F103	志戸呂	青花瓶	部墨	5	-	(7.8)	-	地黄(10YR7/2)	地黄(10YR7/2)	
234		42-43	A	F103	志戸呂	青花瓶	口語	5	(11.3)	-	-	灰(10YR7/2)	にぶい志戸(5YR5/4)～中型	
235		45	A	D100	内青花	青花	部墨	10	-	-	-	にぶい青花(7.5YR2/3)	にぶい青花(7.5YR2/3)	
236		46	A	F100	常滑	小型上部	口語墨	16	(17.3)	-	-	灰(2.5YR4/2)	灰(2.5YR4/2)	
237		46	A	F100	常滑	青花瓶	底灰	25	-	(7.2)	-	桃(5YR7/6)	桃(5YR7/6)	
238		46	A	E59	かわらけ	□クロ	口語～部墨	6	(13.0)	-	-	桃白(10YR8/2)	灰(2.5YR4/2)	
239		46	A	E102	かわらけ	□クロ	口語～部墨	13	(11.6)	-	2.5	地黄(10YR7/2)	地黄(10YR7/2)	
240		46	A	C100	かわらけ	□クロ	口語～部墨	20	(10.8)	-	1.9	地黄(10YR8/4)	地黄(10YR8/4)	
241		46	A	E100	かわらけ	□クロ	口語～部墨	19	(10.2)	-	1.9	地黄(10YR8/4)	地黄(10YR8/4)	
242		-	A	F102	かわらけ	□クロ	口語～部墨	29	(13.1)	-	-	地黄(10YR8/3)	地黄(10YR8/3)	
243		-	A	F102	かわらけ	□クロ	口語～部墨	30	(13.3)	(6.0)	3.0	地黄(7.5YR4/2)	地黄(7.5YR4/2)	
244		-	A	D103	かわらけ	□クロ	口語～部墨	25	(9.9)	(4.7)	3.5	地黄(7.5YR8/3)	地黄(7.5YR8/3)	
245		47	A	E59	かわらけ	□クロ	全体	70	(5.0)	5.5	3.2	桃(7.5YR6/5)	桃(7.5YR6/5)	
246		47	A	E101	かわらけ	□クロ	全体	60	(6.6)	4.3	3.0	にぶい青花(5YR5/4)	にぶい青花(5YR5/4)	
247		47	A	E100	かわらけ	□クロ	全体	50	(10.6)	5.3	3.2	地黄(5YR7/4)	地黄(5YR7/4)	
248		-	A	D101	かわらけ	□クロ	口語～超厚	25	(5.0)	(4.6)	3.2	にぶい青花(5YR5/4)	にぶい青花(5YR5/4)	

No.	序号	説明	区	出土位置	縦列	横列	部位	残存	寸法	延長	高さ	西側(外側)	東側(内側)	時期・調査
249	-	A	F102	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	20	(8.0)	(6.0)	1.5	浅黄緑(7.5YR4/4)	黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀前半)	
250	-	A	C100	かわらけ	ロクロ	全体	90	-	-	5.3	浅黄緑(7.5YR4/4)	黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀前半)	
251	-	A	F102	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	15	(16.3)	-	-	浅黄緑(7.5YR4/4)	黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀前半)	
252	-	A	E101	かわらけ	ロクロ	全体	20	(6.0)	-	-	浅黄緑(10YR4/4)	黄緑(10YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)	
253	-	A	C100	かわらけ	ロクロ	全体	40	(5.0)	1.6	黒褐色(5YR4/4)	黒褐色(5YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)		
254	-	A	D101	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	10	(7.1)	4.9	1.5	黒(5YR4/6)	黒(5YR4/6)	江戸中期(18世紀後半)	
255	82	-	A	C101	かわらけ	ロクロ	全体	30	-	(4.0)	-	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)
256	-	A	F102	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	25	-	(4.0)	-	緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)	江戸中期(18世紀後半)	
257	-	B	C101	正直織	柄付織	全体	90	(6.1)	2.7	3.8	灰白(N4/8)	灰白(N4/8)	江戸中期(18世紀後半)	
258	38 - 39	B	D104	戸天井	天井網	全体	110	-	-	-	黒褐色(5YR2/3)	黒褐色(5YR2/3)	室温3~4	
259	38 - 39	B	D104	戸天井	天井網	口縫部	10	(12.6)	-	-	墨緑(2.5YR2/1)	墨緑(2.5YR2/1)	室温5~6	
260	44 - 45	B	D104	戸天井	天井網	口縫部	5	(2.8)	-	-	墨緑(2.5YR2/1)	墨緑(2.5YR2/1)	室温5~6	
261	-	B	C104	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	20	(9.0)	2.9	2.9	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(17世紀後半)	
262	-	B	C104	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	5	(5.5)	(4.4)	2.2	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)	
263	-	B	A 95	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	10	-	-	-	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(17世紀後半)	
264	38 - 39	B	E108	戸戸戸	柄付織	底部	25	-	(4.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	IV新	
265	-	B	C105	戸戸戸	柄付織	全体	60	(6.0)	4.8	2.4	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	大蔵1	
266	38 - 39	B	E107	奥蔵	灯明織	口縫～底部	20	(10.0)	(6.2)	2.1	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	室温10~11	
267	-	B	E108	奥蔵	灯明織	口縫～底部	15	(12.2)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温8	
268	38 - 39	B	E108	戸戸戸	柄付織	全体	5	-	(15.4)	-	灰白(5YR4/2)	灰白(5YR4/2)	室温8	
269	-	B	E107	奥蔵	灯明織	口縫～底部	5	-	(15.4)	-	灰白(5YR4/2)	灰白(5YR4/2)	室温8	
270	42 - 43	B	D106	戸戸戸	綿	口縫～底部	5	(6.4)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸	
271	46	-	B	D106	戸戸戸	綿	口縫～底部	5	(6.4)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸
272	-	B	E107	奥蔵	灯明織	口縫～底部	5	-	(15.4)	-	灰白(5YR4/2)	灰白(5YR4/2)	室温8	
273	-	B	E108	戸戸戸	柄付織	全体	5	-	(15.4)	-	灰白(5YR4/2)	灰白(5YR4/2)	室温8	
274	38 - 39	B	E107	奥蔵	綿	口縫～底部	20	-	(5.3)	-	墨緑(7.5YR3/1)	墨緑(7.5YR3/1)	室温1~2	
275	44 - 45	B	C105	古志呂	綿	口縫部	10	(50.4)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	古志呂(2.5YR4/2)	古志呂(2.5YR4/2)	
276	26	-	B	E108	奥蔵	綿	口縫部	20	-	(6.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温3~5
277	26	-	B	D106	戸戸戸	綿	口縫部	10	(6.2)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温3~5
278	36	-	B	E107	戸戸戸	小包	20	(9.0)	(5.0)	1.6	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温6~8	
279	26	-	B	D102	戸戸戸	綿	口縫部	20	-	(7.3)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温6~8
280	-	B	E107	戸戸戸	小包	全体	20	-	(6.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温6~8	
281	-	B	E107	戸戸戸	綿	口縫部	20	-	(4.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温6~8	
282	-	B	E106	戸戸戸	綿	口縫部	20	-	(5.2)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	室温6~8	
283	-	B	E107	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	30	(12.2)	(7.4)	2.6	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(17世紀後半)	
284	-	B	D102	かわらけ	ロクロ	全体	30	(5.1)	(5.0)	2.6	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
285	-	C	E108	かわらけ	ロクロ	全体	50	(5.4)	(5.0)	1.9	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
286	-	B	D105	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	20	(9.0)	(5.0)	1.9	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
287	-	B	E107	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	10	(11.0)	(7.0)	2.3	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(17世紀後半)	
288	-	B	C106	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	10	(10.4)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
289	44 - 45	B	D105	吉田戸	綿	口縫部	5	(20.0)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
290	46	-	C	Dトレナ	吉田戸	綿	口縫部	5	(20.0)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)
291	-	B	E107	吉田戸	綿	口縫部	20	-	(18.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
292	40 - 41	-	D	Dトレナ	吉田戸	綿	口縫部	5	(20.0)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)
293	-	B	E107	吉田戸	綿	口縫部	10	-	(15.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
294	38 - 39	D	Dトレナ	吉田戸	綿	口縫部	20	(14.2)	-	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	江戸中期(17世紀後半)	
295	42 - 43	B	E107	吉田戸	綿	口縫～底部	15	(19.0)	(5.7)	2.7	墨緑(2.5YR2/1)	墨緑(2.5YR2/1)	大蔵3直営行	
296	38 - 39	B	Eトレナ	吉田戸	綿	口縫部	7	(14.1)	-	-	灰白(2.5YR2/1)	灰白(2.5YR2/1)	室温3~4	
297	40 - 41	B	Eトレナ	吉田戸	綿	口縫部	5	(10.2)	-	-	墨緑(2.5YR2/1)	墨緑(2.5YR2/1)	大蔵2直営行	
298	40 - 41	B	Gトレナ	吉田戸	綿	口縫部	5	(5.0)	-	-	墨緑(2.5YR2/1)	墨緑(2.5YR2/1)	IV新	
299	44 - 45	B	Dトレナ	吉田戸	綿	口縫部	5	(25.0)	-	-	墨緑(2.5YR2/1)	墨緑(2.5YR2/1)	江戸中期(17世紀後半)	
300	40 - 41	B	Kトレナ	吉田戸	綿	口縫部	5	-	(13.0)	-	灰白(2.5YR2/1)	灰白(2.5YR2/1)	江戸中期(17世紀後半)	
301	84	46	-	Kトレナ	内蔵耳	内蔵耳	口縫部	5	(20.0)	-	-	灰白(2.5YR2/1)	灰白(2.5YR2/1)	江戸中期(17世紀後半)
302	38 - 39	B	Eトレナ	吉田戸	綿	口縫部	25	-	(3.0)	1	灰白(2.5YR2/1)	灰白(2.5YR2/1)	江戸中期(17世紀後半)	
303	37	-	Kトレナ	吉田戸	綿	口縫部	30	(15.7)	(6.2)	3.5	白(0/1)	白(0/1)	江戸中期(17世紀後半)	
304	35	-	Iトレナ	山祇戸	綿	店舗	10	-	(5.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	山祇戸(2.5YR4/2)	
305	-	D	Dトレナ	祇園	綿	口縫部	5	-	-	-	灰(0/5)	灰(0/5)	祇園(2.5YR4/2)	
306	36	-	D	Dトレナ	祇園	綿	口縫部	20	-	(5.0)	-	灰白(2.5YR4/2)	灰白(2.5YR4/2)	祇園(2.5YR4/2)
307	39	-	E	Eトレナ	かわらけ	青ロクロ	口縫～底部	10	(15.0)	(4.0)	3.2	浅黄緑(10YR4/3)	浅黄緑(10YR4/3)	江戸中期(18世紀後半)
308	-	D	Dトレナ	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	10	(9.0)	(5.0)	3.2	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)	
309	47	-	D	Dトレナ	かわらけ	ロクロ	全体	45	(11.4)	(5.0)	3.1	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)
310	47	-	D	Dトレナ	かわらけ	ロクロ	全体	90	(11.3)	5.8	2.7	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)
311	47	-	D	Dトレナ	かわらけ	ロクロ	全体	70	(11.5)	5.4	2.6	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(18世紀後半)
312	-	D	Dトレナ	かわらけ	ロクロ	遮部	30	-	(6.0)	-	灰白(10YR4/4)	灰白(10YR4/4)	御器(10YR4/4)	
313	-	E	Eトレナ	かわらけ	ロクロ	全体	10	(10.0)	(6.2)	3.5	浅黄緑(2.5YR2/4)	浅黄緑(2.5YR2/4)	御器(2.5YR2/4)	
314	47	-	E	Eトレナ	かわらけ	ロクロ	全体	60	(6.0)	(5.6)	3.7	被(5YR7/6)	被(5YR7/6)	御器(5YR7/6)
315	-	G	Gトレナ	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	20	(7.6)	(4.0)	1.6	被(5YR7/6)	被(5YR7/6)	御器(5YR7/6)	
316	-	G	Gトレナ	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	10	(5.0)	1.9	被(5YR7/6)	被(5YR7/6)	江戸中期(18世紀後半)		
317	-	H	Hトレナ	かわらけ	ロクロ	口縫～底部	15	(9.7)	2.0	2.0	被(5YR7/6)	被(5YR7/6)	江戸中期(18世紀後半)	
318	36	B	A	振乳	山祇戸	綿	店舗	40	-	(7.0)	-	灰(0/5)	灰(0/5)	山祇戸(1~2~3)
319	36	B	B	振乳	山祇戸	綿	店舗	60	-	(5.0)	-	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	山祇戸IV~V
320	44 - 45	B	A	振乳	内蔵耳	内蔵耳	口縫	10	(29.2)	-	-	浅黄緑(7.5YR4/4)	浅黄緑(7.5YR4/4)	江戸中期(12世紀)
321	40 - 41	C	振乳	物山?	綿	口縫～底部	15	(27.0)	(2.0)	15.3	明黄緑(2.5YR5/6)	明黄緑(2.5YR5/6)	大蔵3直営	
322	-	D	振乳	物山?	綿	口縫部	35	-	(2.4)	-	灰白(5YR4/1)	灰白(5YR4/1)	御器(5YR4/1)	

第4表 中・近世の魚蔵・塩の調査成果 9. 物販網査表

%	詳細	駅名	区	出土位置	種別	面積	深さ	口径	底径	底高	負荷(外側)	負荷(内側)	時期・参考
323	42・43 C	淀丸	志戸呂	香炉	口銘～胴部	20	(16.9)	-	-	-	高(7.5YR4/3)	神(7.5YR4/3)	江戸
324	42・43 B	淀丸	志戸呂	香炉	口銘～体部	5	(11.9)	-	-	-	に低い負荷(5YR5/3)	赤(10R4/3)	江戸
325	38・39	B	淀丸	潮戸	天日奈鏡	体部～底部	40	-	4.6	-	黒(7.5YR1/1)	灰(7.5YR2/2)	江戸4
326	35	37 B	淀丸	貿易陶器	青磁瓶	底部	20	-	(5.1)	-	オリーブ青(7.5YR3/3)	オリーブ青(7.5YR3/3)	阿波受・窓(13世紀前半)
327	38・39 B	淀丸	美濃	片口鉢	断縫	89	-	-	7.3	-	黒(7.5YR2/3)	黒(7.5YR2/3)	寛政8年9月
328	40・41 B	淀丸	潮戸	断縫	口縁部	5	(31.4)	-	-	-	明暦(7.5YR5/5)	明暦(7.5YR5/5)	寛政6
329	40・41 B	淀丸	潮戸	断縫	口銘部	5	(37.4)	-	-	-	黒(7.5YR2/5)	黒(7.5YR2/5)	寛政(7.5YR5/5)
330	44・45 B	淀丸	古戸戸鳥	口銘～底部	10	(26.6)	(5.6)	9.4	9.4	明暦(7.5YR5/4)	赤(7.5YR5/4)	江戸4	
331	44・45 B	淀丸	古戸戸鳥	断縫	体部～底部	50	-	(5.3)	-	に低い負荷(5YR5/3)	黒(7.5YR5/5)	古戸戸鳥後醍醐天皇	
332	44・45 B	淀丸	山砂	断縫	体部～底部	15	-	(12.4)	-	灰(7.5YR2/2)	灰(7.5YR2/2)	人気3第2	
333	44・45 B	淀丸	志戸呂	断縫	口縁部	5	(26.9)	-	-	に低い負荷(5YR4/4)	に低い負荷(5YR4/4)	江戸(13世紀後半)	
334	44・45 B	淀丸	志戸呂	断縫	口縁部	5	(33.7)	-	-	に低い負荷(5YR5/3)	に低い負荷(5YR5/3)	江戸(13世紀後半)	
335	42・43 B	淀丸	美濃	大鉢	口銘～体部	5	(17.9)	-	-	灰(7.5YR4/2)	灰(7.5YR4/2)	灰(7.5YR4/2)	
336	42・43 B	淀丸	志戸呂	量	口縁部	20	10.2	-	-	秋(オリーブ(5YR3/3))	秋(オリーブ(5YR3/3))	江戸	
337	42・43 B	淀丸	志戸呂	量	口銘～体部	10	(12.2)	-	-	明暦(7.5YR3/4)	オーリーブ黄(5YR4/4)	江戸	
338	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	口銘～底部	30	(12.4)	(6.0)	2.7	明暦(7.5YR4/4)	明暦(7.5YR4/4)	江戸(13世紀後半)
339	47 B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	50	(8.9)	4.4	2.6	青磁瓶(7.5YR2/4)	青磁瓶(7.5YR2/4)	江戸(13世紀後半)	
340	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	30	(6.9)	6.0	5.8	青(7.5YR3/3)	青(7.5YR3/3)	江戸(13世紀後半)
341	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	体部～底部	40	-	(5.0)	-	西周(7.5YR4/4)	西周(7.5YR4/4)	江戸(13世紀後半)
342	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	40	(6.9)	C-4	3.5	青(7.5YR5/5)	青(7.5YR5/5)	江戸(13世紀後半)
343	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	口銘～底部	20	(6.8)	5.0	2.7	青周(7.5YR3/2)	青周(7.5YR3/2)	江戸(13世紀後半)
344	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	20	(6.9)	5.4	1.6	西周(7.5YR4/4)	西周(7.5YR4/4)	江戸(13世紀後半)
345	47 B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	40	7.2	6.2	5.5	西周(7.5YR5/5)	西周(7.5YR5/5)	江戸(13世紀後半)	
346	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	45	(6.9)	5.0	1.7	青(7.5YR2/2)	青(7.5YR2/2)	江戸(13世紀後半)
347	47 B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	45	(6.9)	5.0	4.8	青(7.5YR4/4)	青(7.5YR4/4)	江戸(13世紀後半)	
348	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	底部	5	-	(3.2)	-	青(7YR7/6)	青(7YR7/6)	江戸(13世紀後半)か
349	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	体部～底部	20	-	(6.0)	-	西周(7.5YR4/4)	西周(7.5YR4/4)	江戸(13世紀後半)か
350	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	体部～底部	20	-	4.9	-	西周(7.5YR5/6)	西周(7.5YR5/6)	江戸(13世紀後半)か
351	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	底部	70	-	4.9	-	西周(7.5YR4/4)	西周(7.5YR4/4)	江戸(13世紀後半)か
355	37 B	青鉢	貿易陶器	青磁瓶	体部	5	-	-	-	洪(オリーブ(7.5YR2/2))	洪(オリーブ(7.5YR2/2))	江戸(13世紀後半～14世紀前半)	
356	38・39 B	B	淀丸	古戸戸鳥	四耳壺	体部	5	-	-	-	オリーブ青(5YR6/3)	オリーブ青(5YR6/3)	後醍醐4
357	40・41 B	B	淀丸	古戸戸鳥	断縫	口銘部	5	(25.9)	-	-	黒(7.5YR2/1)	黒(7.5YR2/1)	後醍醐4
358	40・41 B	淀丸	古戸戸鳥	断縫	口銘部	15	-	-	-	赤(7.5YR4/1)	赤(7.5YR4/1)	後醍醐4	
359	40・41 B	B	淀丸	古戸戸鳥か 潮戸美濃	断縫	底部	30	-	(10.3)	-	黒(7YR4/2)	黒(7YR4/2)	後醍醐4～太閤1
360	49・41 B	B	淀丸	古戸戸鳥か 潮戸美濃	断縫	体部～底部	20	-	(10.5)	-	黒(7YR3/1)	黒(7YR3/1)	後醍醐4～太閤1
361	40・41 B	B	淀丸	潮戸美濃	断縫	口銘部	5	(31.4)	-	-	海浜(10YR4/1)	海浜(10YR4/1)	大宝1
362	38・39 B	B	淀丸	潮戸美濃	天日奈鏡	口銘～体部	5	(13.0)	-	-	黒(7.5YR1/1)	海浜(10YR1/1)	大宝1
363	42・45 B	B	淀丸	志戸呂	天日奈鏡	口銘～体部	5	(11.9)	-	-	黒(7YR2/2)	黒(7YR2/2)	江戸(13世紀後半)
364	38・39 B	B	淀丸	美濃	断縫	底部	30	-	(7.8)	-	洪(5Y7/2)	洪(5Y7/2)	江戸3か4
365	38・39 B	B	淀丸	美濃	断縫	底部	20	-	(9.7)	-	灰(7YR5/2)	灰(7YR5/2)	江戸3か4
366	44・45 B	B	淀丸	志戸呂	断縫	口銘部	10	(28.0)	-	-	灰(7.5YR5/2)	灰(7.5YR5/2)	大宝4世後
367	46 B	B	淀丸	常識	片口鉢	口銘部	10	(21.2)	-	-	に低い負荷 (7.5YR5/4)	に低い負荷 (7.5YR5/4)	10世紀前半
368	-	B	淀丸	須恵器	坪壠	穴井部	40	-	-	-	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	古墳時代(7世紀前半～ 小畠6)～ヒラタケモノ
369	36 B	B	淀丸	須恵器	坪壠	全体	10	-	-	-	灰(2.5Y7/1)	灰(2.5Y7/1)	古墳時代(7世紀前半)
370	36 B	B	淀丸	須恵器	坪壠	口銘～体部	20	(11.2)	-	-	須(10YR5/1)	須(10YR5/1)	後半7世紀～8世紀
371	36 B	B	淀丸	須恵器	坪壠	底部	20	-	(3.0)	-	灰(5Y7/1)	灰(5Y7/1)	中世初期(10世紀前半)
372	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	口銘～底部	30	(12.2)	3.0	3.4	に低い(7.5YR4/4)	に低い(7.5YR4/4)	中世初期(10世紀前半)
373	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	口銘～底部	20	(11.4)	(5.6)	2.7	残周(7.5YR5/4)	残周(7.5YR5/4)	江戸(13世紀後半)
374	47 B	B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	70	(2.8)	6.4	3.0	残周(7.5YR4/4)	残周(7.5YR4/4)	江戸(13世紀後半)
375	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	口銘～底部	30	(12.2)	(5.2)	5.9	残周(7.5YR4/4)	残周(7.5YR4/4)	中世初期(10世紀後半)
376	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	天日奈鏡	10	(11.0)	(5.8)	2.3	残(5YR7/6)	残(5YR7/6)	江戸(13世紀後半)
377	47 B	B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	60	(6.0)	4.6	4.0	残(5YR6/6)	残(5YR6/6)	江戸(13世紀後半)
378	47 B	B	淀丸	かわらけ	口コロ	全体	95	(7.6)	5.0	1.7	残(5YR7/6)	残(5YR7/6)	江戸(13世紀後半)
379	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	口銘～底部	20	(7.3)	(4.6)	1.5	残(5YR7/6)	残(5YR7/6)	江戸(13世紀後半)
380	-	B	淀丸	かわらけ	口コロ	体部～底部	5	-	-	-	に低い(7.5YR7/2)	に低い(7.5YR7/2)	江戸(13世紀後半)
382	-	B	淀丸	瓦	瓦	-	25	-	(13.9)	-	に低い(7.5YR7/4)	に低い(7.5YR7/4)	江戸(13世紀後半)
400	52 B	SZ01-SZ04	土師器	壺	全体	60	14.3	7.0	27.2	礁(5YR5/0)	礁(5YR5/0)	10世紀前半	
401	52 B	SZ01-SZ04	土師器	壺	底部	70	-	5.5	-	礁(5YR5/0)	礁(5YR5/0)	10世紀前半	
402	52 B	SZ01-SZ04	土師器	底部	40	-	9.0	-	-	礁(5YR5/0)	礁(5YR5/0)	10世紀前半	
403	52 B	SZ01-SZ04	土師器	台付壺	倒壺	25	-	(13.9)	-	に低い(7.5YR7/4)	に低い(7.5YR7/4)	古墳後期・奈良	

※古記 表記～表記取扱 ロクロ～クロクア成型 非クロクア～クロクア成型
 ■種別 淀戸美濃底脚部については、淀戸底と淀戸底と特定できるものについては、「淀戸」、「淀戸」としている。

第24表 中層遺跡 出土石器・石製品觀察表

No.	坪目	圓版	出土位置	種類	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
7	38	24	SB09-P20	軋石	凝灰岩	10.0	3.5	3.3	168.79	
48	50	27	SB41-P10	硯	粘板岩	4.6	2.45	0.5	5.58	
383	88	48	表面採取	石塔	砂岩	18.7	17.3	16.9	10300	宝鏡印塔 茎台 16世紀前半

単位 長さ・幅・厚さ(cm) 重量(g)

第25表 中層遺跡 出土鉄滓觀察表

No.	坪目	圓版	出土位置	全長	幅	厚さ	重量	備考
43	50	27・49	SB38-P8	11.2	7.6	5.3	284.00	試料No. 1
44			SB38-P10	6.3	3.8	2.9	46.41	試料No. 7
45		27	SB38-P12	4.2	4.2	2.9	62.65	
46		49	SB38-P11	3.7	2.4	1.8	4.76	
49			SB42-P16	3.3	2.7	1.95	10.17	
50		27・49	SB42-P13	4.45	3.4	1.8	23.61	試料No. 13
51			SB43-P20	2.95	2.35	1.4	13.69	
52		27・49	SB45-P2	3.9	3.2	2.4	27.97	試料No. 12
53			SB45-P2	5.6	3.35	1.7	34.48	試料No. 11
97	68	30・49	SK22	10.8	10.3	4.7	352.00	試料No. 8
114	75	49	SD02	3.2	2.05	1.95	15.44	
115			SD03	4.1	3.2	1.35	22.53	
116		49	SD04	4.5	3.9	1.25	24.15	
117			SX07	4.0	2.8	1.9	13.87	
159			SX07	4.3	2.75	1.6	13.78	
160	80	36・49	SP227	9.6	7.5	3.9	210.00	試料No. 5
199			SP227	3.5	2.1	2.2	22.27	
200		49	SP228	2.8	2.3	1.45	7.62	
201			SP229	3.3	2.9	2.9	19.27	
202		49	SP232	2.25	2.25	1.0	4.76	
203			SP233	3.7	2.9	2.4	16.99	
204		49	SP236	3.1	2.5	1.5	8.58	
205			SP241	3.6	2.5	0.8	11.29	
206		49	SP254	4.9	3.1	1.3	28.54	
207			SP255	1.9	1.4	1.2	2.95	
208		49	SP256	4.1	2.15	2.05	19.23	
209			SP307	5.7	4.8	2.7	61.73	試料No. 2
210	82	49	確認Fトレンチ	5.8	5.55	3.05	86.82	試料No. 6
264			確認Eトレンチ	3.5	2.95	1.8	32.98	
265		49	確認Kトレンチ	2.8	2.7	1.85	15.11	
266			3.65	2.8	1.4	12.16		
267		49	10.6	6.9	5.8	511.00	試料No. 9	
352			5.5	2.4	1.8	34.85	試料No. 10	
353		49	搅乱	6.7	5.4	2.9	118.01	試料No. 4
354								

単位 全長・幅・厚さ(cm) 重量(g)

※全長=長辺・長軸 幅=短辺・短軸

第26表 中層遺跡 出土鉄製品觀察表

No.	坪目	圓版	出土位置	種類	材質	全長	幅	厚さ	重量	備考
384	89	-	Iトレンチ	楔?	鐵	12.9	2.1	0.4	70.64	
385	89	-	D103grid	釘?	鐵	7.9	0.8	0.8	11.96	廻材か
386	89	48	SK30	釘	鐵	4.1	0.4	0.2	2.05	
387	89	-	SP275	釘	鐵	3.4	0.3	0.3	0.92	
388	89	48	SB42-P19	釘	鐵	2.4	0.4	0.3	0.72	
389	89	48	SP346	不明	鐵	3.1	0.8	0.3	1.76	廻材か
390	89	-	SB40-P8	棒状	鐵	2.4	0.4	0.3	0.89	廻材か
391	89	48	D106grid	棒状	鐵	4.3	0.5	0.5	2.41	廻材か
392	89	-	B区表面採取	茎	鐵	7.3	1.8	0.3	6.63	廻材か
393	89	48	搅乱?	茎?	鐵	5.9	2.2	0.6	11.04	廻材か
394	89	48	SP202	鍵?	鐵	6.0	2.9	0.8	14.29	廻材か
395	89	-	SP196	不明	鐵	3.8	2.3	0.7	23.01	廻材か
396	89	-	D104grid	不明	鐵	2.8	2.3	0.6	6.66	廻材か
397	89	48	Fトレンチ	不明	鐵	3.6	4.9	0.3	7.53	廻材か
398	89	48	SB41-P3	不明	鐵	3.4	2.8	0.2	4.38	廻材か
399	89	-	SP202	不明	鐵	1.6	3.3	0.2	1.38	廻材か

単位 全長・幅・厚さ(cm) 重量(g)

10. 鉄滓自然科学分析の成果

株式会社 日鐵テクノリサーチ

(1) はじめに

中屋敷遺跡は、太田川による冲積平野を南に臨む丘陵先端の河岸段丘上に位置し、周辺には文殊堂古墳群・宇藤横穴墓群・天王ヶ谷横穴墓群などの遺跡がある。また、本遺跡から約200m離れたところには、鉄滓が出土した北堀遺跡が存在する。中屋敷遺跡からは、古墳・中世～近世の掘立柱建物などが検出されている。

本分析は中屋敷遺跡から出土した鉄滓約160点の中から13点を選定し自然科学的調査を行ったものである。

(2) 調査試料

調査試料の一覧を第27表に示した。鉄滓13点は30～100mmの大きさを有する鉄滓である。

第27表 調査試料と調査項目

試料番号	遺物番号	遺構名	重 量	大きさ	外観	マクロ組織	ミクロ組織	硬さ測定	EPMA	化学成分
1	43	SB38-P8	284	110×80×47	○	○	○	○	○	○
2	210	SP307	61.7	60×48×32	○	○	○	○	○	○
3	117	SD04	57.1	52×43×28	○	○	○	○	○	○
4	354	搅乱	118	67×63×30	○	○	○	○	○	○
5	199	SP277	210	100×75×38	○	○	○	○	○	○
6	264	Fトレンチ	86.8	60×57×27	○	○	○	○	○	○
7	44	SB38-P10	46.4	65×43×25	○	○	○	○	○	○
8	97	SK22	352	105×102×50	○	○	○	○	○	○
9	352	搅乱	511	105×75×60	○	○	○	○	○	○
10	353	搅乱	34.8	60×33×20	○	○	○	○	○	○
11	53	SB45-P2	34.4	58×38×20	○	○	○	○	○	○
12	52	SB45-P2	28.1	33×44×25	○	○	○	○	○	○
13	50	SB42-P13	23.6	46×33×20	○	○	○	○	○	○

※重量は、観察表と若干異なる。

単位 重量(g) 大きさ(mm)

(3) 調査項目および試料調製法

①外観観察

肉眼ならびに実体顕微鏡により、遺物の形状・大きさ・表面状況を観察・記録した。

使用装置 デジタルカメラ パワーショットG10型 (キャノン製)

実体顕微鏡 VHX-500型 (キーエンス製)

②断面マクロ・ミクロ組織観察

代表的な箇所をダイヤモンドカッターにて組織観察用と成分分析用の2片に切断し、組織観察用は洗浄・乾燥後、真空下にて樹脂埋め込みして組織を固定した。その後、鏡面まで研磨して組織を現出し、光学顕微鏡にて観察・記録した。

使用装置 金属顕微鏡 BX51M型 (オリンパス光学工業製)

③硬度測定 ピッカース硬度計 AMT-7FS型 (マツザワ製)

④EPMA定性分析 (鉱物相の分析)

上記組織観察用に使用した埋め込み研磨試料を用いて、EPMA (X線マイクロアナライザー) により鉱物相の構成成分の分析を行なった。

使用装置 X線マイクロアナライザー (EPMA) JXA8100型 (日本電子製)

⑤成分分析

ダイヤモンドカッターで切り取った試料片は洗浄・乾燥後、乳鉢にて粉砕(60メッシュ以下)し、成分分析用試料とした。分析元素および方法は以下の通りである。

T・Fe、SiO₂、Al₂O₃、CaO、MgO、MnO、TiO₂、P₂O₅、Cr₂O₃、K₂O、Total・S

····· JIS M8205(蛍光X線；ガラスピード法)

M・Fe ····· JIS M8213

FeO ····· JIS M8213(酸可溶性鉄定量方法)

Fe₂O₃ ····· 計算

Cu、V ····· JIS K0116(ICP発光分光分析法)

Na²O ····· JIS K0121(原子吸光法)

Total・C ····· JIS G1211

(4) 調査結果と考察

各遺物の外観と断面マクロ・ミクロ組織を写真22～34に、第28表に各鉱物相の成分と硬さ測定結果および第90～102図に検出元素のX線スペクトル、第29表に平均成分分析結果を示した。以下に各遺物の特徴と組成を記す。

①No. 1(遺物番号43) 鉄滓(写真22、第91図、第25・27～29表)

大きさは110×80×47mm、重さ284gである。茶褐色で大小の孔や木炭片が存在する椀形状の塊である。表面の一部は赤褐色の領域がみられ、酸化鉄(鉄鏽)の濃化していることが窺える。底部には変質した細かな炉材成分と思われる物質が固着している。断面マクロ組織をみると、空孔内壁周辺には薄く酸化鉄皮膜や湯玉、木炭片が存在する。

構成鉱物はウスタイト(理論化学組成: FeO)を主体とし、一部に微粒の金属鉄が存在するもののマトリックスは殆どがガラス質になっており、ファヤライト(理論化学組成: 2FeO・SiO₂)やチタン化合物は存在しない。ウスタイト(FeO)中のチタン分(TiO₂)は0.5%と僅かである。ガラス質珪酸塩中のカルシウム分(CaO)は15%と高い。これは、炉材成分のAl₂O₃/CaO比よりもはるかに高く、鍛冶操作段階でカルシウム分(CaO)を造滓剤として使用したことが窺える。おそらく、精錬過程での産物と推測される。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト(FeO)が423HV、ガラス質珪酸塩が584HVとやや低い値である。

平均化学組成のうち、全鉄(T・Fe)は52%と高く、チタン分(TiO₂)は0.36%と低い。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂Oの合計)は20%程度である。

外観的特徴と構成鉱物から、鉄の溶融・半溶融状態と接触していた領域にて生成した鉄滓と考えられる。

②No. 2(遺物番号210) 鉄滓(写真23、第92図、第25・27～29表)

大きさは60×48×32mm、重さ61.7gである。黒灰色で一部に茶褐色の領域も存在する小塊である。表面の一部は発泡スラグ化(炉壁が溶融)しており、この部分は炉壁に接触していたことが窺える。断面マクロ組織をみると、空孔が少なく比較的緻密な構造を示す。

構成鉱物は微細な葉片状のウスタイト(FeO)と大きく発達したファヤライト(2FeO・SiO₂)およびガラス質珪酸塩からなり、チタン化合物は存在しない。ウスタイト(FeO)中のチタン分(TiO₂)は0.92%とやや高い。また、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分(CaO)は検出限界以下である。炉材成分が多く溶

け込んでいるものと推測される。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト (FeO) が370 Hv、ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が536 Hv、ガラス質珪酸塩が468 Hv と何れもやや低い値である。

平均化学組成のうち、全鉄 (T·Fe) は54%と高く、チタン分 (TiO_2) は0.2%と低い。造滓成分は28%と若干高い。

本鉄滓は、No. 1 鉄滓より炉壁に近い生成物といえる。平均組成および構成鉱物から、No. 1 とは熱履歴および生成位置が異なるものの、操作過程は同様と考えられる。ただ、微細結晶のウスタイトに対しファヤライト結晶が大きく発達した状態からみて、中温度領域で冷却速度は遅かったものと考えられる。

③No. 3 (遺物番号117) 鉄滓 (写真24, 第93図, 第25・27~29表)

大きさは $52 \times 43 \times 28\text{mm}$ 、重さ57.1 g である。茶褐色で大小の空孔が存在し、一部に黒灰色の発泡スラグが生成している小塊である。断面のマクロ組織は、No. 1 鉄滓と同様に大きな空孔内壁に酸化鉄の皮膜が存在すること、および表面近傍には湯玉が見られる。

構成鉱物は、比較的丸みを帯びたウスタイト (理論化学組成; FeO) と大きな結晶を有するファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) および僅かなガラス質珪酸塩からなり、チタン化合物は存在しない。ウスタイト (FeO) 中のチタン分 (TiO_2) は0.65%と少なく、ガラス質中のカルシウム分 (CaO) は13.5%と高く、No. 1 鉄滓と同様の操作過程が窺える。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト (FeO) が443 Hv、ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が665 Hv、ガラス質珪酸塩が557 Hv であり、ほぼ平均的な値を示す。

平均化学組成のうち、全鉄 (T·Fe) は55%弱と高く、チタン分 (TiO_2) は0.18%と少ない。造滓成分は21%弱である。

外観的特徴ならびに構成鉱物および結晶の大きさからみて、No. 1 鉄滓とほぼ同様の操作過程を経たものと考えられる。

④No. 4 (遺物番号354) 鉄滓 (写真25, 第94図, 第25・27~29表)

大きさは $67 \times 63 \times 30\text{mm}$ 、重さ118 g である。茶褐色で凹凸が著しく大小の空孔を有する塊である。一部に鉄錆と思われる赤褐色をした領域と黒灰色を呈する発泡スラグが存在する。断面マクロ組織をみると、木炭の小片や空孔内壁に酸化鉄皮膜および錆化した金属鉄粒が多く含む鉄滓である。

構成鉱物は微細なウスタイト (FeO)、長柱状ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) およびガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない。ウスタイト (FeO) 中のチタン分は検出限界以下であること、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分 (CaO) は4.46%とNo. 1・3 鉄滓に比べ半分以下である。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト (FeO) が443 Hv と低く、ガラス質珪酸塩は630 Hv と高い値である。

平均化学組成のうち全鉄 (T·Fe) は48%強でチタン分 (TiO_2) が0.2%程度と少ない。また、造滓成分は26%と多い。トータルカーボン (T·C) が1%と高く、本鉄滓中には木炭が多く噛みこんでいることが窺える。

外観的特徴および構成鉱物の結晶形状から、No. 1・3 鉄滓と同様の操作過程で生成したものと考えられるが、No. 1・3 に比べやや上層にて生成した鉄滓と考えられる。

⑤No. 5 (遺物番号199) 鉄滓 (写真34, 第95図, 第25・27~29表)

大きさは $100 \times 75 \times 38\text{mm}$ 、重さ210 g である。茶褐色で凹凸が著しく大小の空孔を有し、赤褐色の酸化皮膜や黒灰色を帯びた発泡スラグが一部に存在する塊である。断面マクロ組織をみると、試料No. 1～

4と同様の鉄滓組織を呈する領域とは別に、大きさが約10mmの楕円形をした領域が存在する（写真34中の丸印）。この部分は直線状の模様を示す特徴ある組織で、ここはグラファイトカーボンである。元は銑鉄塊であったものが精化した組織といえる。一方、通常の鉄滓組織は、精化した金属鉄粒子や空孔内壁には薄い酸化鉄皮膜が存在する組織である。したがって、本鉄滓は銑鉄塊と鉄滓が合体したものであるといえる。

鉄滓領域の構成鉱物は微細で葉片状のウスタイト（FeO）、長柱状のファヤライト（2FeO·SiO₂）と僅かであるがガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない。ウスタイト（FeO）中のチタン分（TiO₂）は0.56%と低く、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分（CaO）は10.8%と高い値である。

一方、鉄滓領域の鉱物相硬さは、ウスタイト（FeO）が454HV、ファヤライト（2FeO·SiO₂）が589HV、ガラス質珪酸塩が530HVと平均的な値であった。

平均化学組成のうち全鉄（T·Fe）は55%と高く、チタン分（TiO₂）は0.2%と低い。また、造滓成分は25%強である。

外観的特徴および構成鉱物の結晶の大きさ、および銑鉄塊が存在することから、この銑鉄塊を加熱しながら鉄中の炭素を低減させる操作（精錬操作）過程で生成した鉄滓と考えられる。

⑥No. 6（遺物番号264）鉄滓（写真26、第96図、第25・27～29表）

大きさは60×57×27mm、重さ86.8gである。茶褐色で凹凸が著しく大小の空孔が存在する小塊である。底部には炉材の変質した粗粒子が固着する。断面マクロ組織をみると、空孔内壁に薄く酸化鉄皮膜や表面近傍に薄片（鉄頸が加熱されて酸化した皮膜が剥離したもの等）が存在する。

構成鉱物は、微細で丸みを帯びたウスタイト（FeO）、微細長柱状のファヤライト（2FeO·SiO₂）と僅かなガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない。ウスタイト（FeO）中のチタン分（TiO₂）は0.36%と低く、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分（CaO）は12.9%と高い値を示すことから、No. 1, 3, 4, 5鉄滓と同様の操作過程が窺える。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト（FeO）が413HVと低く、ファヤライト（2FeO·SiO₂）は579HVと平均的な値を示す。

平均化学組成のうち全鉄（T·Fe）は47%強でチタン分（TiO₂）は0.2%と少ない。造滓成分は30%弱と若干多い。No. 1～5鉄滓類と同様の操作過程にて生成した鉄滓と考えられる。

⑦No. 7（遺物番号44）鉄滓（写真27、第90図、第25・27～29表）

大きさは65×43×25mm、重さ46.4gである。黒灰色の小さな空孔を多く有する小塊である。断面マクロ・ミクロ組織をみると、全面にわたってほぼガラス状になっており、そこには数10μmから数100μmの丸い空孔が多く存在し、一部に10μm前後の球状金属鉄もみられる。一方、ガラス層の硬さは、585～632HVであった。

平均化学組成のうち、全鉄（T·Fe）は13%と低く、造滓成分は80%弱と非常に多い。ほぼ炉材成分に近い組成を有することから、炉材の一部が溶融固化したものと考えられる。

⑧No. 8（遺物番号97）鉄滓（写真28、第97図、第25・27～29表）

大きさは105×102×50mm、重さ352gである。茶褐色でNo. 1～6鉄滓類とは異なり、あまり凹凸が少なく重量感のある鉄滓である。形状から推測するに楕円形の破片と思われる。表面には薄皮状の酸化鉄皮膜が存在し、底部には炉材の変質した粗粒子が混在する焼土が付着する。断面マクロ組織をみると、大小の不規則な形状を示す空孔が多く存在し、その内壁には酸化鉄皮膜が厚くあるいは薄くみられる。

構成鉱物は、錯化した金属鉄(Fe・Fe)、若干のウスタイト(FeO)、短冊状のファヤライト(2FeO・SiO₂)と確かにガラス質珪酸塩からなる。ウスタイト(FeO)中のチタン分(TiO₂)は検出限界以下である。また、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分(CaO)は14.3%と高く、前記鉄滓と同様の操作を行なったことが窺える。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト(FeO)が642HV、ファヤライト(2FeO・SiO₂)が638HV、ガラス質珪酸塩が514HVである。

平均化学組成のうち、全鉄(T・Fe)は50%で酸化第二鉄(Fe₂O₃)が54%強を占め、金属鉄の錯化したもののが多いことが窺える。また、造滓成分は22%である。

組織的特徴および平均化学組成から、反応途中で鉄分が分離しきれずに残存した比較的上層で生成した鉄滓と考えられる。

⑨No. 9 (遺物番号352) 鉄滓 (写真29、第98図、第25・27~29表)

大きさは108×78×60mm、重さ511gである。黒灰色で細かい空孔を多く有する大塊である。表面は油脂感のある光沢を呈するが一見、発泡スラグのような様相を呈する。断面は比較的空孔の少ないマクロ組織で、前記の鉄滓類に比べ錯化した酸化鉄の存在も少ない。

構成鉱物は細かな葉片状ウスタイト(FeO)、柱状のファヤライト(2FeO・SiO₂)、ガラス質珪酸塩からなり、その一部には微細な析出物が認められ、チタン化合物は存在しない。ウスタイト(FeO)中のチタン(TiO₂)分は0.57%およびガラス質珪酸塩中のカルシウム分(CaO)も1.02%と低く、炉材成分がかなり溶け込んでいることが窺える。明らかに、鉄浴から離れた箇所での産物と思われる。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト(FeO)が508HV、ファヤライト(2FeO・SiO₂)が544HV、ガラス質珪酸塩が505HVであった。

平均化学組成のうち、全鉄(T・Fe)は51%強と高く、チタン分(TiO₂)は0.26%と少ない。造滓成分は30%弱と多い。

本鉄滓は、流動性の良い比較的初期に生成したものと考えられるが、No. 1~5、6、8とは外観的特徴および成分的に異なる。おそらく、鉄浴からかなり離れた箇所で生成したことが窺える。

⑩No. 10 (遺物番号353) 鉄滓 (写真30、第99図、第25・27~29表)

大きさは60×33×20mm、重さ34.8gである。黒灰色で細かい空孔を有し、外観的にはNo. 9鉄滓と同様の様子を示す小塊である。断面マクロ組織をみると、丸い小さな空孔が存在するが比較的緻密な鉄滓である。

構成鉱物は細かな葉片状ウスタイト(FeO)、柱状のファヤライト(2FeO・SiO₂)、ガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない。ウスタイト(FeO)中のチタン分(TiO₂)は0.39%と低く、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分(CaO)は9.43%と高く、精錬操作段階の比較的初期に生成したことが窺える。

一方、鉱物相の硬さ測定では、ウスタイト(FeO)が428HV、ファヤライト(2FeO・SiO₂)が500HV、ガラス質珪酸塩が480HVと全体的に低い値である。

平均化学組成のうち、全鉄(T・Fe)は54%弱、チタン分(TiO₂)は0.23%と低い。造滓成分は28%弱と、炉材成分が多く溶け込んでいることが窺える。前記No. 9鉄滓とほぼ同様の箇所で生成したものと推測される。

⑪No. 11 (遺物番号53) 鉄滓 (写真31、第100図、第25・27~29表)

大きさは58×38×20mm、重さ34.4gである。No. 9・10と同様に黒灰色で表面は油脂感のある光沢を

呈する小塊である。断面マクロ組織をみると、大小の丸い空孔を多く有し、一部には金属鉄が酸化した酸化鉄が存在する。また、湯玉や木炭の小片も見られる。

構成鉱物は比較的丸みを帯びたウスタイト (FeO)、短冊状のファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、ガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない。ウスタイト (FeO) 中のチタン (TiO₂) 分は0.32%と低く、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分 (CaO) は検出限界以下であった。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト (FeO) が420Hv、ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が554Hv、ガラス質珪酸塩が503Hvである。

平均化学組成のうち、全鉄 (T・Fe) は45%でチタン分 (TiO₂) は0.23%と少ない。造滓成分は35%と炉材成分が多く溶け込んでいることが窺える。

本鉄滓は、No. 9・10と同様に比較的初期に生成した流動性の良い鉄滓と考えられる。

②No. 12 (遺物番号52) 鉄滓 (写真32, 第101図, 第25・27~29表)

大きさは33×44×25mm、重さ28.1gである。灰色～薄茶色で油脂感があり大小の空孔を有し、炉材成分が変質したと思われる粗粒子が一部に固着している小塊である。断面マクロ組織をみると、大小の空孔を有し、一部に酸化鉄皮膜が存在する。

構成鉱物は丸みを帯びたウスタイト (FeO)、大きく発達した短冊状のファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、一部微細なウスタイト結晶が析出したガラス質珪酸塩からなるがチタン化合物は存在しない。ウスタイト (FeO) 中のチタン分 (TiO₂) は1.26%と前記鉄滓類と比べ高い値を示す。また、ガラス質珪酸塩中のカルシウム分 (CaO) は0.97%と低い値であった。

一方、鉱物相の硬さは、ウスタイト (FeO) が452Hv、ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が545Hv、ガラス質珪酸塩が539Hvである。

平均化学組成のうち、全鉄 (T・Fe) は46%でチタン分 (TiO₂) は0.5%である。造滓成分は31%と多く、No. 9~11鉄滓と同様に炉材成分が多く溶け込んでいることが窺える。

本鉄滓はNo. 9~11と同様に、比較的反応初期に生成した流動性の良いものと考えられるが、試料が小さいことから、鉄浴にあまり関与していない箇所にて生成したものと推測される。

③No. 13 (遺物番号50) 鉄滓 (写真33, 第102図, 第25・27~29表)

大きさは46×33×20mm、重さ23.6gである。薄茶色～灰色で油脂感があり大小の空孔を多く有する小塊である。切断時に小さな塊となって崩れるほどに結合力は弱い。断面マクロ組織をみると、大きな空孔が存在し、湯玉、溶融金属鉄が酸化したもの等、多くのものが合体したものである。

構成鉱物は鉄錆と僅かであるがファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) および反応途中の炉材生成物などが混在した鉄滓である。緻密な錆層からは、チタン分 (TiO₂) は検出限界以下であった。また、ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 中にはカルシウム分 (CaO) が46.13%と高い値である。

一方、鉱物相の硬さは、緻密な錆層が600Hv、ファヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が585Hvと平均的な値である。

平均化学組成のうち、全鉄 (T・Fe) は36%でチタン分 (TiO₂) は0.38%と少なく、造滓成分は45%と多い。

本鉄滓は、酸化した金属鉄や湯玉および炉材成分が合体したもので結合力も弱く、明瞭な操作過程を推測する情報は少ないが、おそらく反応の最上層部あるいは炉壁近傍のあまり温度が高くなっていない箇所で生成した鉄滓と考えられる。

第28表 鉄物相の成分分析結果 (wt%: EPMA) と硬さ

試料No. (鉄物相)	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Na ₂ O	K ₂ O	硬さ Hv
1 (W) (S)	97.3 32.5	0.26 38.3	0.37 5.99	... 15	1.08 1.05	0.51 0.47	0.5 0.6	0.91 0.5	4.38 0.5	423 584	
2 (W) (F) (S)	97.3 63.5 1.89	0.68 32.1 62.7	0.93 0.28 24.8	... 0.47 ...	0.92 3.62 0.21	370 536 10.4		468
3 (W) (F) (S)	97.8 64.5 25.2	0.55 32.1 37.5	1.01 0.29 17	... 0.74 13.5	0.65 1.8 0.37	0.57 2.15 0.46	... 2.15 0.46	... 2.13	443 665 557		
4 (F) (S)	65.7 27.1	32.3 41.1	... 20.6	0.26 4.46	1.74 0.83	... 0.49	... 0.44	... 4.77	443 630		
5 (W) (F) (S)	97.9 63.5 25.2	0.36 31.9 41.6	1.06 0.51 17.3	0.16 1.02 10.8	0.56 2.52 0.26	0.46 0.83 0.71	... 0.12 3.02	... 0.12 530	454 589 530		
6 (W) (F)	96.7 29.6	0.39 41.8	0.28 6.11	0.21 12.9	1.32 2.04	0.36 0.51	0.65 1.29	... 0.9	0.12 4.32	413 579	
7 (S)ガラス	45.8	43.3	9.33	0.29	0.43	0.89 585		
										~632	
8 (W) (F) (S)	98 63 17.4	1.97 32 42.2	0.22 0.94 19.9	0.94 3.4 14.3	0.34 0.37 0.68	0.37 0.84 0.32	0.37 3.96	0.32	642 638 514		
9 (W) (F) (S)	97.6 63.5 45.4	0.59 31.4 30.1	1.01 0.19 22.7	0.27 1.68 1.02	0.57 2.49 0.22	0.67 0.67 0.7	0.67 0.81	0.81	508 544 505		
10 (W) (F) (S)	98.1 61.6 18.3	0.4 32.8 43.2	0.56 1.89 19.5	0.21 3.09 0.22	0.33 0.7 0.39	0.39 0.7 0.38	0.39 0.38 3.89	0.38	428 500 480		
11 (W) (F) (S)	98.3 61 1.91	0.47 32.2 64	0.61 2.16 25.5	... 3.66 ...	0.33 0.71 0.23	0.32 0.71 0.23	0.32 0.71 0.23	0.23	420 554 503		
12 (W) (F) (S)	96.6 61.3 40	0.58 32.6 41	1.11 0.28 15.9	0.42 0.66 0.97	1.26 4.62 0.19	0.55 0.55 0.99	0.55 0.55 0.25	0.55	452 545 539		
13 (W)織	97.4	1.8	...	0.17	600		
(F)	58.9	31.7	0.24	6.13	2.27	0.77	0.77	0.77	585		

第29表 鉄滓の平均化学組成 (wt%)

No.	T·Fe	M·Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	MnO	TiO ₂
1	51.95	0.47	22.65	48.43	15.09	3.26	0.8	0.53	0.17	0.36
2	54	0.45	61.66	8.04	21.06	3.99	1.23	0.82	0.12	0.2
3	54.86	0.46	33.93	40.07	16.13	2.9	0.42	0.45	0.08	0.18
4	48.51	0.48	26.68	39.02	20.35	4.25	0.51	0.35	0.04	0.21
5	55.11	0.46	58.11	13.56	18.36	3.86	1.06	0.71	0.09	0.21
6	47.31	0.47	31.14	32.36	20.89	4.19	1.68	0.83	0.16	0.2
7	13.2	0.68	5.93	11.31	6045	13.99	0.45	1.55	0.11	0.5
8	50.33	0.31	16.03	53.7	16.62	3.55	0.6	0.45	0.07	0.28
9	51.51	0.57	57.09	9.38	20.63	3.96	2.33	1.09	0.28	0.26
10	53.69	0.62	58.3	11.09	18.06	3.83	2.58	1.17	0.3	0.23
11	45.07	0.46	36.06	23.71	25.77	4.46	1.79	0.98	0.18	0.23
12	46.36	0.46	34.3	27.51	21.67	4.91	1.79	1.01	0.23	0.5
13	36.05	0.28	25.44	22.87	31.99	7.75	2.05	1.25	0.23	0.38

No.	V	Cu	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	T, C	T, S	TiO ₂ /T·Fe	MnO/T·Fe	選擇成分
1	0.009	0.004	0.367	0.005	0.143	0.536	0.7	0.069	0.007	0.003	20.36
2	0.005	0.004	0.238	0.001	0.236	1.419	0.11	0.023	0.004	0.002	28.76
3	0.011	0.005	0.366	0.007	0.14	0.899	0.4	0.07	0.003	0.001	20.94
4	0.005	0.012	0.248	0.004	0.275	0.723	1.07	0.117	0.004	(0.001)	26.46
5	0.007	0.002	0.258	0.002	0.312	0.938	0.27	0.028	0.004	0.002	25.24
6	0.004	0.009	0.752	0.001	0.316	1.627	0.63	0.084	0.004	0.003	29.53
7	0.011	0.004	0.221	(0.001)	0.921	2.363	0.44	0.01	0.038	0.008	79.74
8	0.019	0.01	0.199	0.008	0.138	0.82	0.41	0.135	0.006	0.001	22.18
9	0.009	0.006	0.64	0.004	0.232	1.636	0.23	0.028	0.005	0.005	29.88
10	0.008	0.012	0.6	0.005	0.218	1.816	0.18	0.024	0.004	0.006	27.67
11	0.005	0.016	0.566	(0.001)	0.362	1.775	0.34	0.063	0.006	0.004	35.14
12	0.039	0.005	0.694	0.025	0.281	1.76	0.59	0.053	0.011	0.006	31.42
13	0.008	0.016	0.548	0.001	0.459	1.864	0.57	0.087	0.011	0.006	45.36

(注) 選擇成分 = SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O

(5)まとめ

中屋敷遺跡から出土した鉄滓13点について、自然科学的調査を行った結果、鉄滓はチタン分が少なく、殆どが1%以下のものであった。形態は若干異なるが、いずれも鉄浴近傍にて生成したものであった。13点の鉄滓は以下のようにまとめることができる。

①鉄滓の特徴

中屋敷遺跡出土の鉄滓の特徴について下記にまとめることができる。

- 銑鉄塊を伴う鉄滓が1点 (No. 5)
- 銑鉄塊は見出せなかったが溶融・半溶融した金属鉄が鋳化したものが多く存在するものが6点 (No. 1~4, 6, 8)、
- 初期の流状滓に近いもの4点 (No. 9~12)、
- 鉄浴表面にてあまり反応にあらずからなかったもの1点 (No. 13)、
- 炉材が反応したもの1点 (No. 7)

銑鉄塊を伴う鉄滓は、明らかに銑鉄塊を加熱し、炭素を低減する操作過程（精錬過程）の産物であった。また、銑鉄塊は見出せなかったが、鋳化した金属鉄が多く存在した6点は、明らかに鉄素材を加熱し、溶融あるいは半溶融状態にて鍛冶操作（精錬）が行われていたことを示すものである。流状滓に近いもの4点は組成的にみても、鉄浴から少し離れた箇所にて生成したものとみられることから、上記の7点 (No. 1~6, 8) と同様の操作過程と考えられる。また、他の2点も同様に本来の反応には直接あらずからない箇所であることから、この13点の鉄滓は同様の操作過程（精錬）で生成した産物の可能性が高いと考えられる。中屋敷遺跡では鍛冶関連遺構は確認されていないが、羽口などが出土していることから、銑鉄塊は確認できなかったが鉄の廃材を鉄素材とした精錬操作に伴う鍛冶工房であったことが考えられる。

②他遺跡との比較（第30表）

中屋敷遺跡と同時期（近世）と想定される他の遺跡から出土した精錬滓と判断された鉄滓の分析例と比較してみると（註1~7）と、第30表に示す如くほぼ平均的化学組成と類似していることが判る。さらに、a. 1例（梅ノ木沢）を除くとチタン化合物が存在しないこと、b. ウスタイト(FeO)中のチタン分が少ないと、c. ガラス質珪酸塩中のカルシウム(CaO)分が多いことなども、ほぼ共通した特徴である。また、これらの遺跡では鉄素材として銑鉄塊や鉄の廃材等を使用していたと想定されている。

したがって、この時代の鍛冶工房では同様の鉄原料（銑鉄塊や廃材）を使用し、ほぼ同じような技術的手法で鍛冶操作が行われていたと考えられる。

③始発原料および鉄原料について

砂鉄を原料として造られた銑鉄塊あるいは鋼塊、あるいは延鉄などの素材中に含まれるチタン濃度は非常に少なく0.0数%であり（註8）、これを使用した鍛冶操作段階で排出されるチタン分(TiO₂)は極僅かである。これから判断すると砂鉄を始発原料とした素材が使われたとはいえない状況であるが、上記

第30表 同時代の出土鉄滓（精錬滓）の化学組成例

遺跡名	所在地	T·Fe	M·Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	造滓成分	註
茅ヶ崎城	神奈川	53.57	0.67	50.75	19.23	15.93	4.14	2.64	1.04	0.44	23.71	1
笠井若松	静岡	50.2	0.46	53	12.9	21.7	5.12	1.18	0.88	0.23	28.88	2
小川城	静岡	57.9		51.65	24.58	9.19	1.49	1.43	1.41	0.11	13.52	3
養殖園	宮城	58.15	0.89	64.63	10.04	17.52	2.25	1.16	0.4	0.1	21.33	4
大京町東	東京	58.1	0.36	47.1	30.21	11.5	2.72	1.11	0.68	0.15	16.01	5
中ノ宮	神奈川	54.3	0.44	57.5	13.7	20.8	3.02	0.55	0.77	0.28	26.12	6
施ノ木沢	岩手	40.5	0.36	33.7	19.9	30.7	4.43	1.91	0.68	2.99	39.7	7

第4節 中・近世の農落・薦の調査成績 10. 鉄鉱自然科学分析の成果
のような銑鉄塊や廃材を使ったとすれば、当然の結果として位置づけできるものと考えられる。
(文責:山本広一・伊藤 薫・山下真理子)

註

- 1 (財) 横浜市ふるさと歴史財団 2000 『茅ヶ崎城III』
- 2 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002 『恒武西宮遺跡II・笠井若林遺跡』
- 3 焼津市總務都市史編纂室 2003 『焼津市史考古資料調査報告書 小川城』
- 4 仙台市教育委員会 1997 『黄種圓遺跡発掘調査報告書』
- 5 (株) 第三開発発掘調査部 2004 『大町東遺跡』(社) 永生会・(株) 第三開発
- 6 (財) 横浜市ふるさと歴史財団 1999 『中ノ宮遺跡発掘調査報告書』
- 7 岩手県埋蔵文化財センター 2004 『梅ノ木沢遺跡発掘調査報告書』
- 8 矢野武彦 「たら製品の品質(1, 2)」『金属材料』第9巻第9号および10号 (社) 日本国金属学会

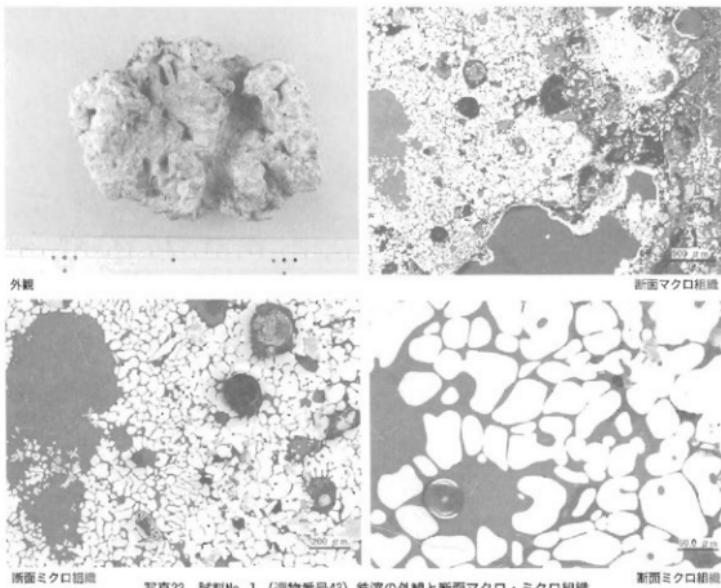


写真22 試料No. 1 (遺物番号43) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

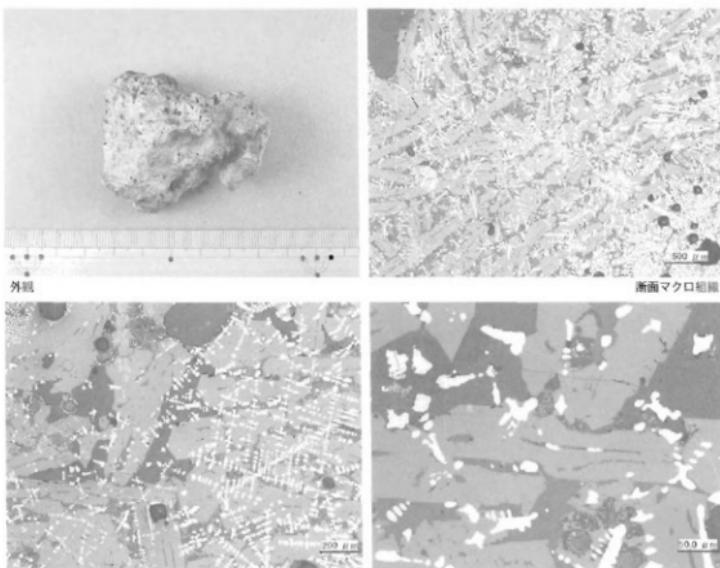
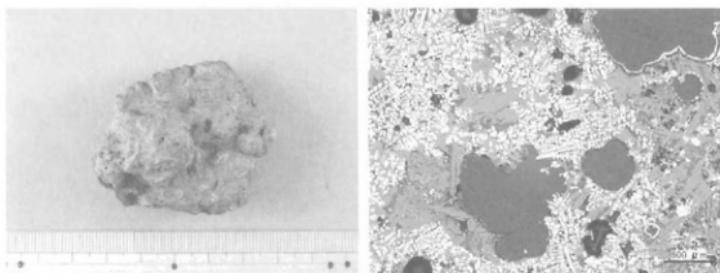
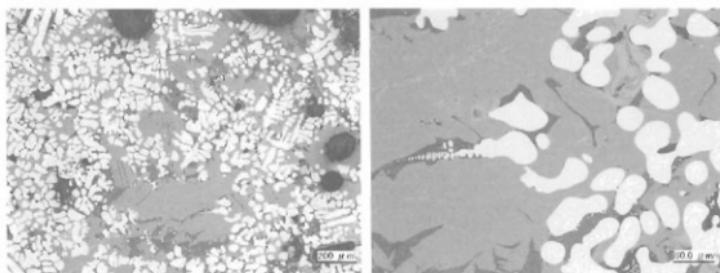


写真23 試料No. 2 (遺物番号210) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織



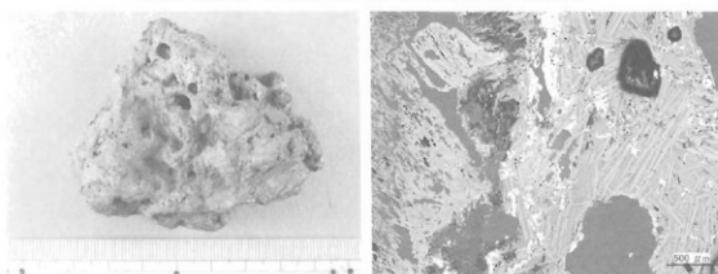
外観

断面マクロ組織



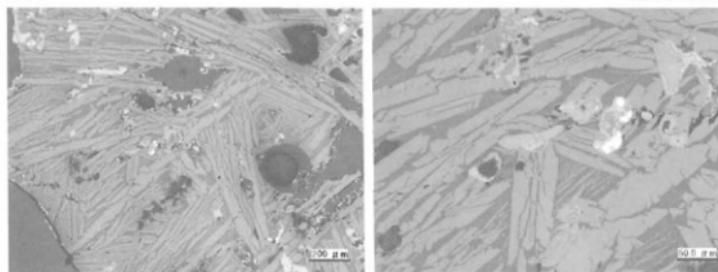
断面ミクロ組織

写真24 試料No. 3 (遺物番号117) 鉄岸の外観と断面マクロ・ミクロ組織



外観

断面マクロ組織



断面ミクロ組織

写真25 試料No. 4 (遺物番号354) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

断面ミクロ組織

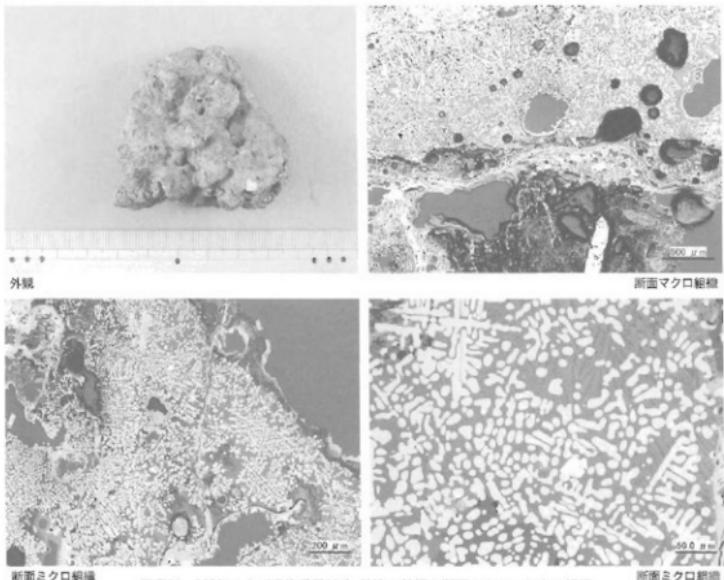


写真26 試料No. 6 (遺物番号264) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

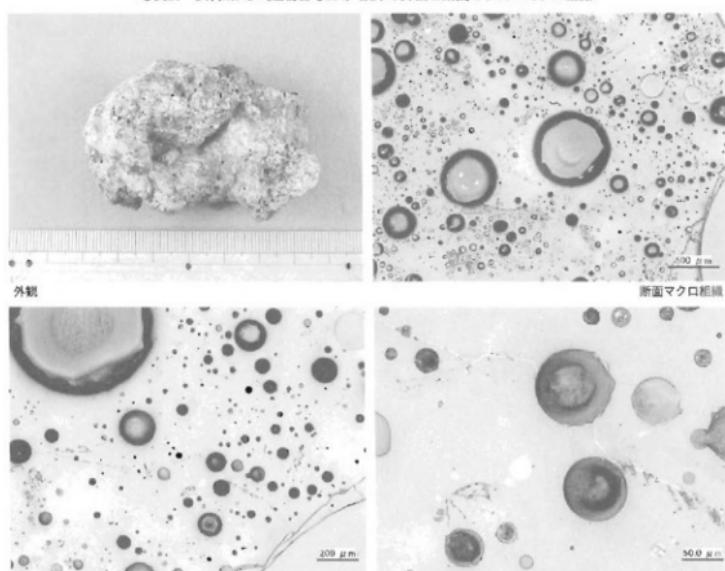


写真27 試料No. 7 (遺物番号44) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

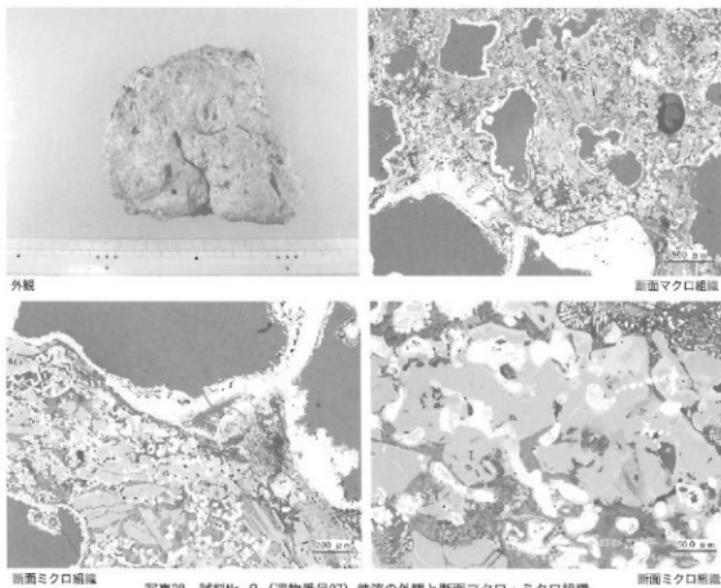


写真28 試料No. 8 (遺物番号97) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

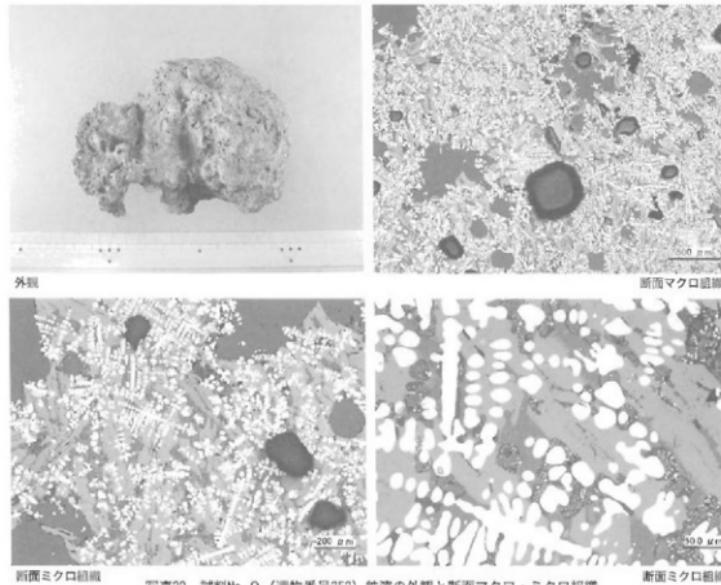


写真29 試料No. 9 (遺物番号352) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

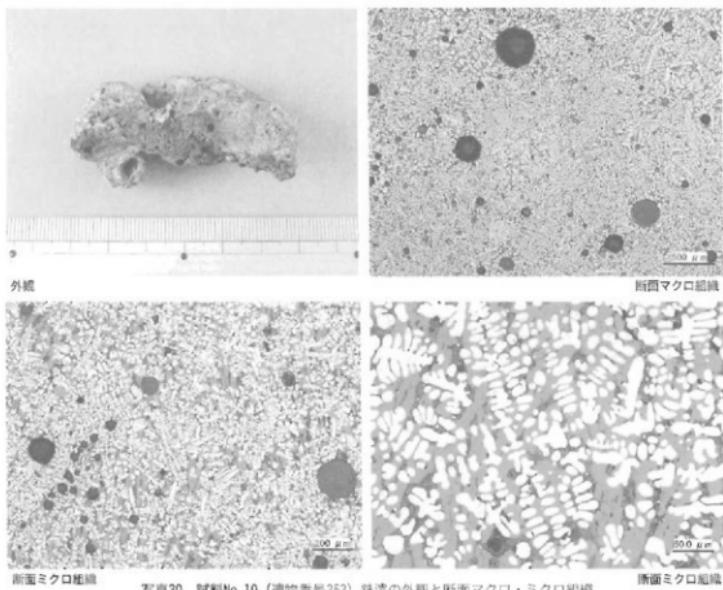


写真30 試料No. 10 (遺物番号353) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

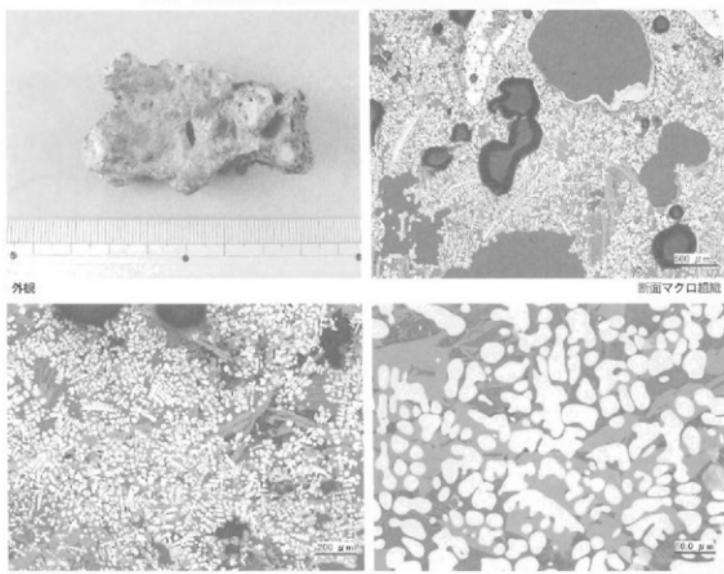


写真31 試料No. 11 (遺物番号53) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

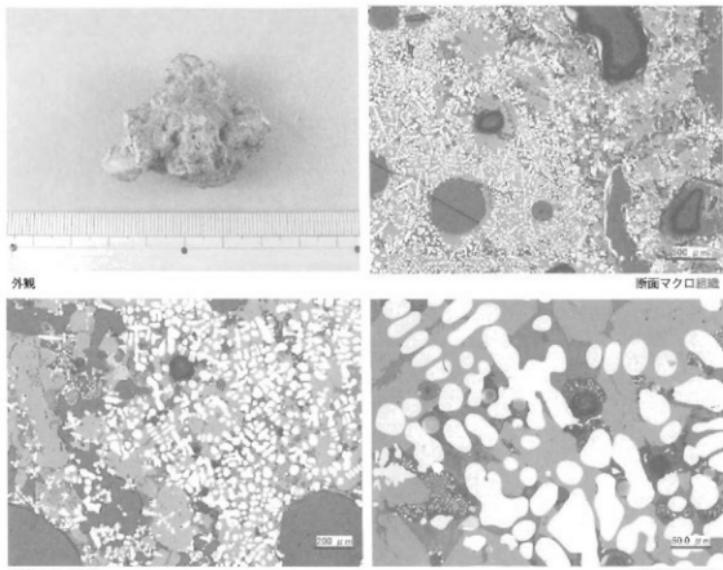


写真32 試料No.12(遺物番号52) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

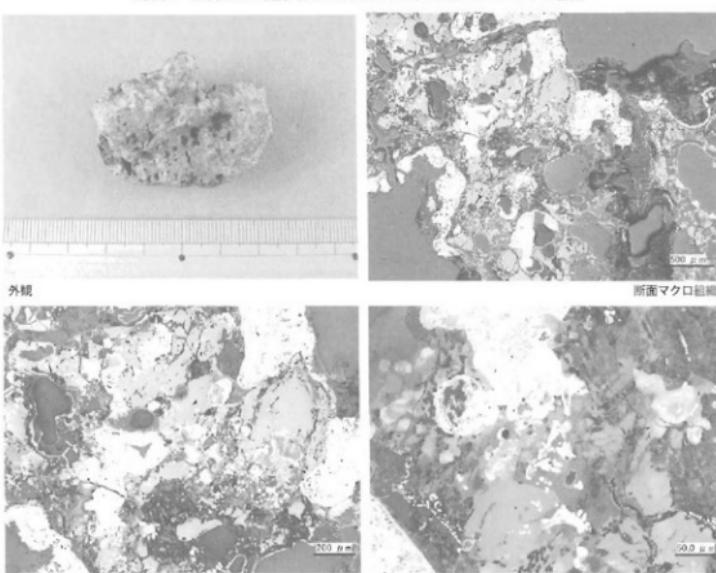


写真33 試料No.13(遺物番号50) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

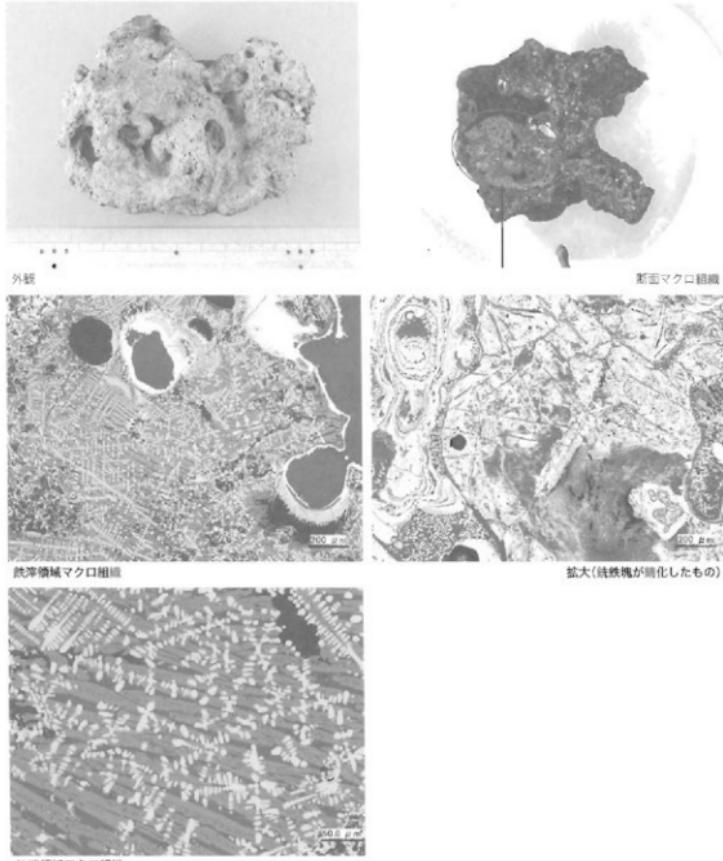
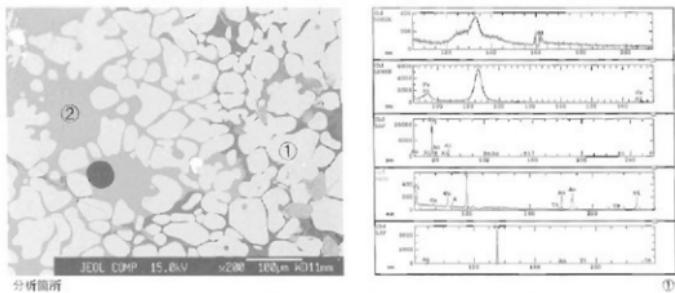
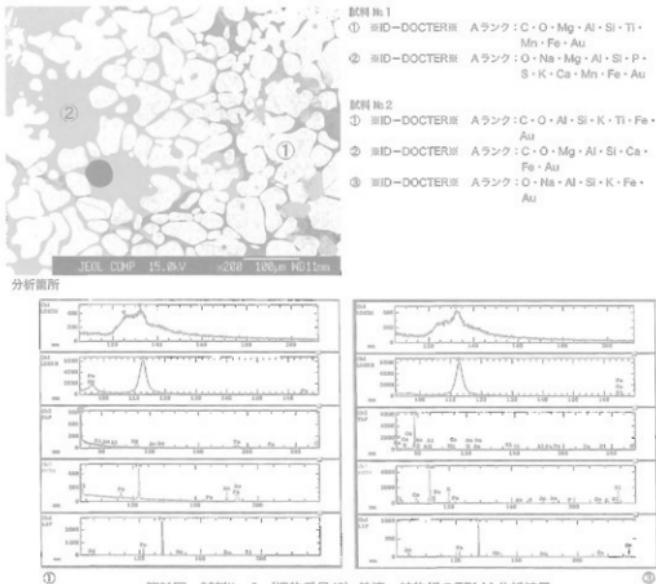


写真34 試料No. 5 (遺物番号199) 鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織

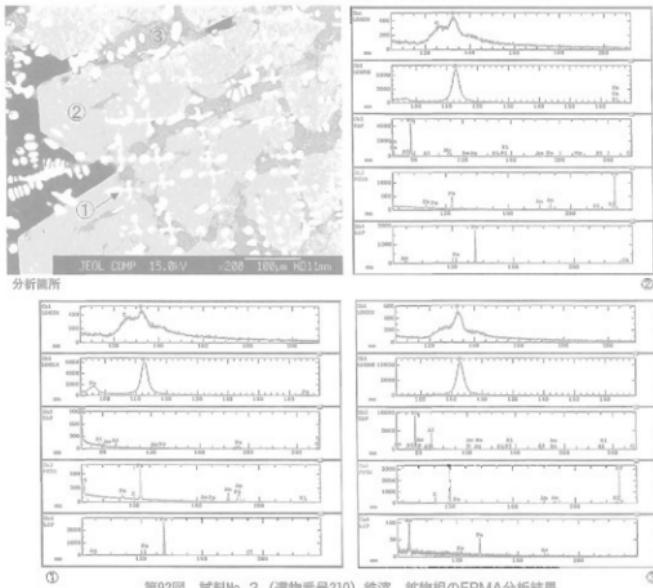


第90図 試料No. 7 (遺物番号44) 鉄滓 組成相のEMPA分析結果

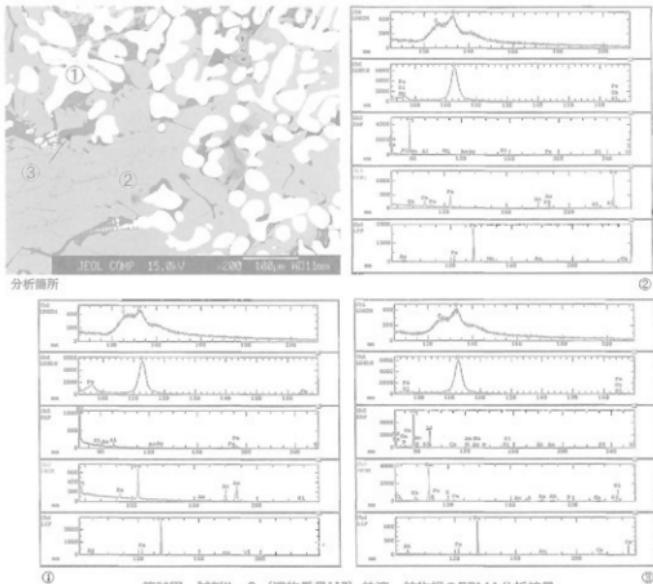
●: 未ID-Drosterite Aランク: C, Al+Si, K, Ti+Fe, Au



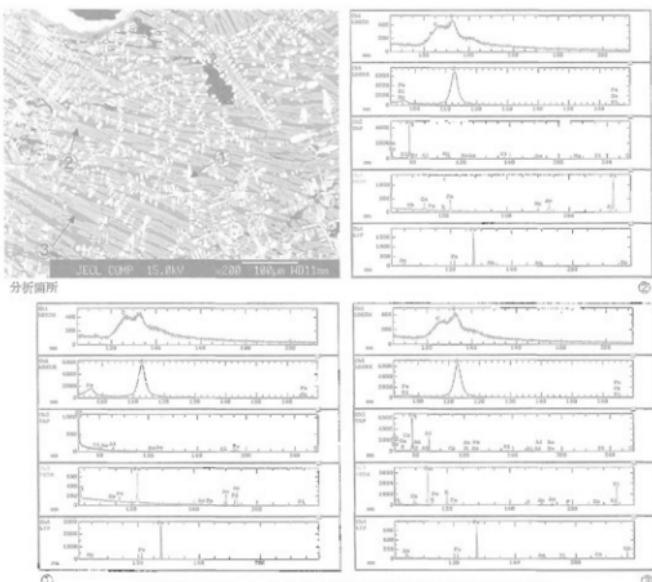
第91図 試料No.1 (遺物番号43) 鉄滓 鉱物相のEPMA分析結果



第92図 試料No.2 (遺物番号210) 鉄滓 鉱物相のEPMA分析結果



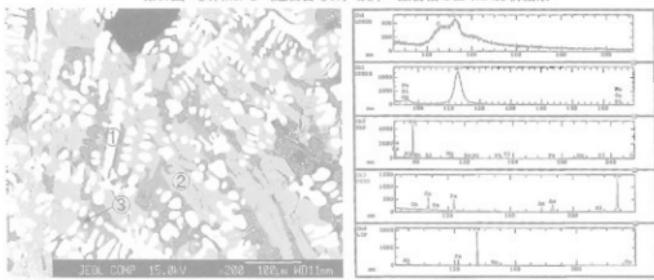
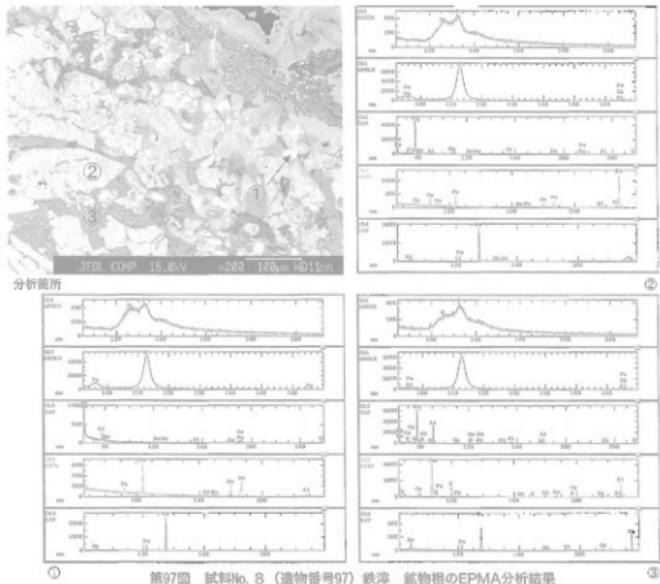
① ② ③
試料No. 4 (遺物番号354) 鉄 sulf 試料相のEPMA分析結果



第95図 試料No. 5 (遺物番号199) 鉄滓 鉛物相のEPMA分析結果



第96図 試料No. 6 (遺物番号264) 鉄滓 鉛物相のEPMA分析結果

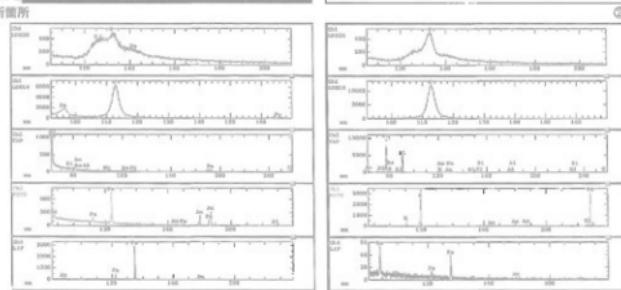
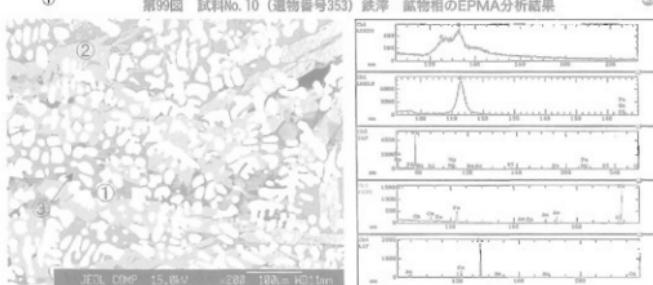
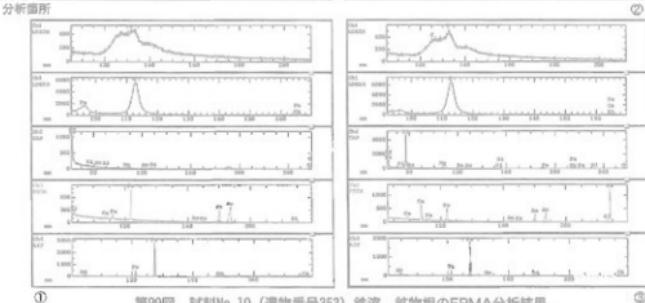
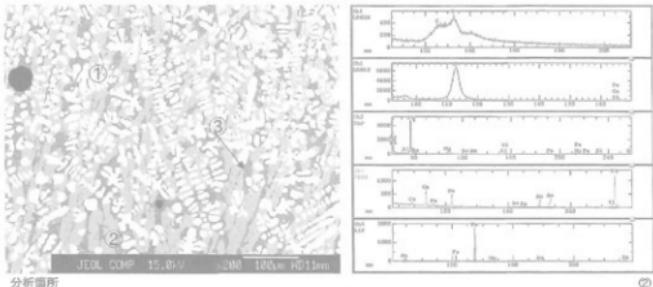


試料 No.8

- ① III-ID-DOCTERⅢ Aランク : C・O・Si・Fe・Au
 ② III-ID-DOCTERⅢ Aランク : C・O・Mg・Al・Si・Ca・Mn・Fe・Au
 ③ III-ID-DOCTERⅢ Aランク : C・O・Na・Al・Si・P・S・K・Ca・Ti・Fe・Au

試料 No.9

- ① III-ID-DOCTERⅢ Aランク : C・O・Mg・Al・Si・Fe・Au
 ② III-ID-DOCTERⅢ Aランク : C・O・Mg・Al・Si・Ca・Mn・Fe・Au
 ③ III-ID-DOCTERⅢ Aランク : C・N・O・Al・Si・K・Ca・Fe・Au

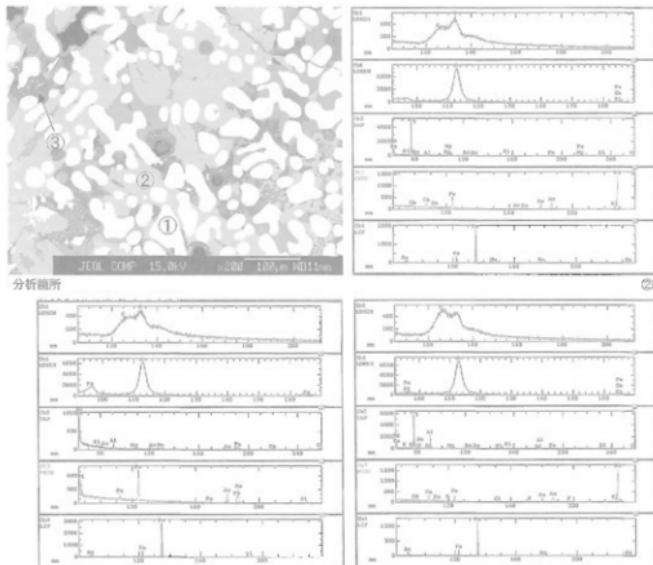


試料 No.10

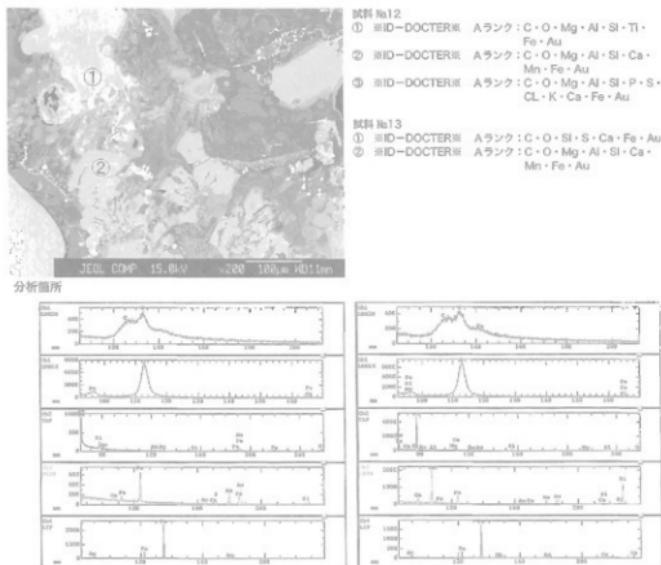
- ① ■ID=DOCTERⅢ Aランク: O・Mg・Al・Si・Ca・Ti・Fe・Au
- ② ■ID=DOCTERⅢ Aランク: C・O・Mg・Si・Ca・Mn・Fe・Au
- ③ ■ID=DOCTERⅢ Aランク: C・O・Na・Mg・Al・Si・P・Cl・K・Ca・Fe・Au

試料 No.11

- ① ■ID=DOCTERⅢ Aランク: C・O・Mg・Al・Si・Ca・Fe・Au
- ② ■ID=DOCTERⅢ Aランク: C・O・Mg・Al・Si・Ca・Mn・Fe・Au
- ③ ■ID=DOCTERⅢ Aランク: O・Na・Al・Si・K・Fe・Au



第101図 試料No. 12 (遺物番号52) 鉄滓 磁物相のEPMA分析結果



第102図 試料No. 13 (遺物番号50) 鉄滓 磁物相のEPMA分析結果

第5節 中屋敷1号墳の調査成果

1. 中屋敷1号墳の概要 (SZ01, 第103~105図, 第23表, 図版50~52)

調査区の南東、C105~C107、D105~D107グリッドで確認された。

古墳（古墳時代の方形台状墓・方形周溝墓の可能性も残る）は南側が既に削平等により消失しており、北側のみが確認されただけである。

古墳 (SZ01) は埋葬施設が築かれる墳丘と、その周りに掘削された周溝 (区画溝, SD04) で構成される。

SZ01は、草ヶ谷丘陵の先端付近、標高42m付近に築造された墳墓であり、当墳墓からは太田川形成した平地部を見渡すことができる。墳丘の削平が進んでいることから、断言はできないが、近接する円田丘陵上に築造された文殊堂古墳群などと異なり、単独で立地する蓋然性が高い。

2. 墳丘の構造 (第103・104図, 図版50・51)

古墳の平面形は方形で、溝は隅角部が幅を狭める形状を呈するが、残存範囲では陸橋（古墳へ至る道路）は確認できない。したがって、少なくとも北側には陸橋が築かれないとしても南側に築かれた可能性が高い。

墳丘の規模は、東西は北辺で約15.0m、残存する部分の南端で約16.3mである。南北は約10m遺存している。最も残りの良い北辺の規模から想定すると一辺15m前後の墳丘に復原できる。

周溝 (SD04) は、隅角部の幅が急激に狭まる形状であり、北側周溝の中央部付近が最も幅が広い。断面形状はU字形である。周溝の規模は周溝北側で最大幅約3.9m、東側で残存幅約2.3m、残存する深さ約0.3mである。隅角部は北西側1.0m、北東側1.0mで深さは約0.3mである。この部分の幅は、各辺の周溝幅から1.0m程急激に幅を狭めている。

3. 遺物の出土状況 (第104図, 図版50)

遺物は、北側の周溝 (SD04) 内から土器が出土した。北西隅角部付近の周溝底に接するように土師器壺1点 (400, 第105図) は、底部を下にした状態で出土した。本来は正置状態で供獻されていた可能性が高い。

403は、400の東側、周溝 (SD04) 北側の周溝底よりやや浮いた状態で出土した。401・402は周溝 (SD04) 内の覆上出土である。なお、403については、古墳時代後期後半～奈良時代に帰属する土師器大型台付壺であり、直接古墳に伴うものではない。

また、SD04は後世の破壊が著しく、江戸時代に帰属する鉄滓なども出土している。

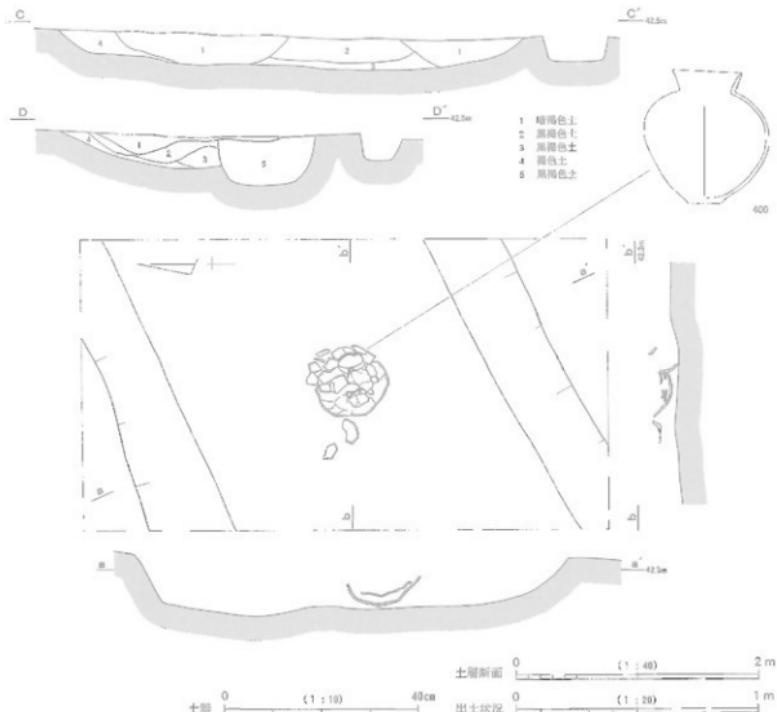
4. 出土遺物 (第105図, 第23表, 図版52)

北側周溝から、4点 (400~403) の土師器壺・壺が出土した。ただし、403については、古墳時代後期以降の大型台付壺（小林1999）であり、SZ01に直接伴うものではない。

400は、無文の単純口縁壺である。頸部はく字形で、口縁部は逆ハ字形に直線的に開き、口縁端部は丸く仕上げられる。胴部は球形の胴部で、胴部上半に最大径がある。底部は平底である。各部位の調整は磨減が著しく判別が難しいが、ハケ調整の痕跡は確認できない。胴部外面は全体的にミガキ調整が施されており、内面は板ナデ調整である。口縁部は横ナデ調整が行われている。これらの特徴から古墳時代中期前半に位置づけられる可能性が高い（註4）。



第103図 中层数1号填（SZ01）実測図



第104図 中屋敷1号墳 (SZ01) 周溝 (SD04) 土層断面図および遺物出土状況図

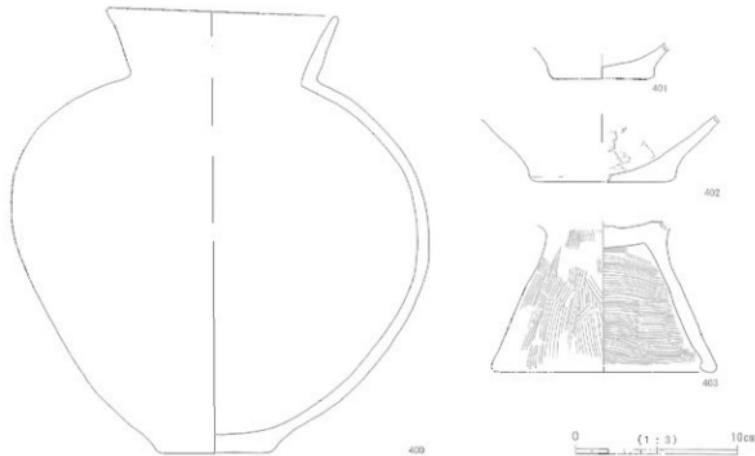
401・402は土師器壺の底部片で、平底である。400と同様の形態、胎土の特徴を示すことから、同時に位置づけられる可能性が高い。

403は大型台付壺の台部片である。弥生時代後期～古墳時代前期の台付壺の台部と比較すると大型且つ厚手であることなどから、三河～遠江で用いられた古墳時代後期～奈良時代の大型台付壺の台部である可能性が高い。外面には縦ハケメ調整が施され、台部底面は内側に折り返されている。

5. 小結

築造時期 周溝から出土した土師器壺については、特徴が少なく時期を特定することは難しい。ハケメ調整が行われず、ミガキ調整のみである点や、胴下部の造作がやや雑である点を評価すれば、古墳時代中期前半頃に位置づけられる可能性が高い（註4・5）

位置づけ 中屋敷遺跡では、この他に須恵器片が出土しており、古墳時代後期～終末期にかけての遺跡か所在する可能性があるが、古墳と想定できる構造はなく、単独で所在した可能性が高い。隣接する円田丘陵には古墳時代中期中葉～後葉に築造された文殊堂古墳群、林古墳群、宇藤蓮台古墳群などが築造されており、それに先立つ古墳として重要な意味をもつ可能性がある。上述したように出土遺物から



第105図 中層敷1号墳 (S201) 出土土器実測図

明確な時期を特定できること、墳丘の高さが明確ではないことから、評価が難しいが、中期前半の可能性が高いことから、丘陵尾根上に群集墳が築造される前段階の古墳として評価しておきたい。

規模も、丘陵上に築造された古墳と比較した場合、最大規模に近く、古墳時代初頭まで築造された方形周溝墓と比べても大きいといえる。

第6節 中屋敷遺跡・中屋敷1号墳の評価

I. 中遠地域における中屋敷1号墳の意義

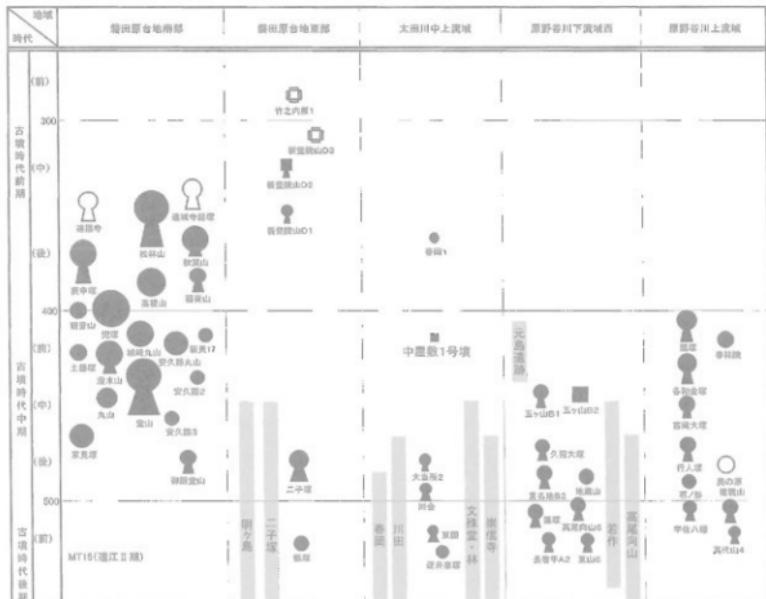
(1) 古墳の概要

中屋敷遺跡では、方墳（方形周溝墓の可能性も残る）である中屋敷1号墳を確認した（註6）。埋葬施設が失われていること、遺物が少ないうえ出土した土師器は特徴が少なく、詳細な時期を特定することは難しいが、無文である点、球脣化している点、ミガキ調整が多用される点、つくりがやや粗雑である点などから古墳時代中期前半に帰属する可能性が高い。

ここでは中屋敷1号墳が古墳時代中期前半に造営されたものとして、中遠地域における古墳の変遷過程の中でその存在意義について確認しておきたい。

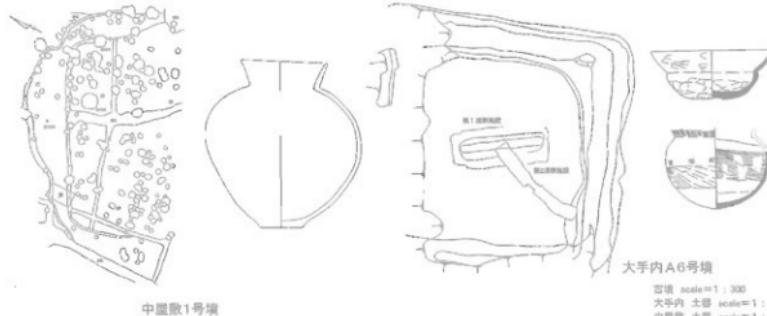
(2) 中遠地域の古墳の変遷からみた中屋敷1号墳（第106・107図）

天竜川東岸～原野谷川流域の中遠地域は、磐田原台地を中心として遠江では古墳が数多く築造された地域であり、100mを超える前方後円墳が築造されたのもこの地域である。これまでの研究により、磐田原台地では古墳時代前期には磐田市松林山古墳や寺谷銚子塚古墳をはじめとして前方後円墳が複数築造され、三角縁神獣鏡を副葬する古墳も多いが、中期前半になると前方後円墳が築造されず、大型円墳となることが指摘されている(中嶋1996ほか)。一方で、中期中葉になると、再び磐田市堂山古墳をはじめ



※「-古墳」「-券塚」「-古墳群」は省略している。
選出抜きの古墳は、墳丘標識が不明で確認できないことを示す。

第106図 中遠地域における主な古墳・古墳群の変遷



第107図 中牟婁地域における古墳時代中期前半の方墳

めとして前方後円墳が築造されるとともに、堂山古墳群や明ヶ島古墳群などの古墳群や初期群集墳の形成が始まる(中嶋1995、中嶋ほか2002ほか)。このように中期前半は磐田原台地では前方後円墳が築造されなかった時期に当たる一方、原野谷川流域の和田岡古墳群ではこの時期から前方後円墳の築造が開始されていることから、大きな政治的な変動があった可能性が指摘されている(中嶋1995など)。

中屋敷1号墳の位置づけ 中屋敷1号墳は、古墳の築造からみた場合の畿内の政治変動に関連した遠江における社会変化があったと考えられる古墳時代中期前半に、古墳時代前期に主体的に古墳が築造された磐田原台地から離れて、それまでに古墳が築造されていなかった地域に築造されていることから、新興の小首長が古墳築造主体として考えられる。また、この中屋敷1号墳はこの時期に形成された和田岡古墳群などの成立契機と何らかの関連性をもって築造されたと考えられる。

さらに、中屋敷1号墳の成立と関連性が窺えるのは磐田原台地の北西辺縁部に築造された磐田市(旧豊岡村) 大手内A6号墳(豊岡村教委2000)である。この古墳は19mの方墳で、埋葬施設は木棺直葬で遺物も管玉だけと少ない。このA6号墳築造以前にA15号墳があるがやや時期差があり、A6号墳の後、連続的に古墳は築造されていないことから中屋敷1号墳同様単独で中期前半に築造された古墳であり、墳形と立地状況は類似している。

中屋敷1号墳と大手内A6号墳は遠江において方墳が少ない時期に両者が方墳である点、築造時期や規模が類似している点、古墳時代前期に主要な古墳が築造された場所から離れている点や継続して古墳が築造されない点など共通点が多い。

したがって、中屋敷1号墳は大手内A6号墳とともに古墳時代中期前半の畿内における社会変動に伴う遠江における社会変動の影響により、畿内王権と新たに関係を取り結んだ可能性が高い集団が築造したもので、中屋敷1号墳は円田丘陵周辺の小首長が築造した古墳といえよう。

2. 中世の中屋敷遺跡

今回の調査において、明確に中世の遺構と特定できる建物や遺構は少ない。現状ではSK30がこの時期の遺構（中世墓）である以外は、土器・陶磁器が出土するのみである。

ここでは、土器・陶磁器を中心に中屋敷遺跡の特徴についてまとめておきたい。

(1) 中世土器・陶磁器について（第31・32表）

①陶磁器の傾向について

平安時代後期 中屋敷遺跡における中世以前の土器・陶磁器については、灰釉陶器が挙げられる。浜松市宮口窯産（松井編年III-2期、10世紀後半）、掛川市清ヶ谷窯産（松井編年IV期）の資料が出土して

第31表 中屋敷遺跡 出土中世土器・陶磁器の構成

器種組成表

項目	破片数	個体数	貿易陶磁分類一覧		年代	破片数	個体数
			器種名	同安窯系			
山茶窯系	15	10			13C前半	1	1
山茶窯	12	9		B1種	13C後～14C前	1	1
小豆	1	1		B3種	15C中	1	1
小豆	0	0		E4種	15C後	1	1
				D2種	15C後	1	1
				不明	15C中？	1	1
				不明	-	2	
かわらけ	30+	30+					
鍋類	22	3					
その他	0	0					
青磁系	69	5+					
黒	76	1+					
鉢	3	3					
その他	1	1					
合計	355+	171+					

窓戸・鏡面

天日茶碗

碗類

皿類

鉢類

壺・瓶類

豆・瓶類

仏具類

その他の

不明

貿易陶磁

青磁

白磁

緑磁

黒磁

その他の

白磁

青磁

緑磁

その他の

白磁

青磁

緑磁

その他の

青磁

緑磁

第32表 中屋敷遺跡 出土中世瀬戸美濃系施釉陶器の構成

瀬戸美濃

器種名	古瀬戸後期				古瀬戸計	後IV期 ～大窯	大窯製品				大窓計	合計
	I	II	III	IV古・IV新			1前・1後	2前・2後	3前・3後	4前・4後		
天目 天目茶碗	1	1	1	1	1	0	3	2	1	1	5	6
碗瓶 灰釉平碗	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1
灰釉丸皿				0	0						1	1
灰釉丸皿 か鑑反皿				0	0		2				2	2
灰釉鑑反皿 か丸皿				0	0	14					14	14
灰釉腰折皿			6	6	0						0	6
綠釉小皿		1	1	0							0	1
灰釉皿		0	0				1				1	1
志野丸皿		0	0								1	1
大皿		0	0								1	1
鉢類 鉢	1	1	0								0	1
擂鉢		8	8	12	10	2		7			19	39
灰釉水注	1	1	0								0	1
灰釉四耳壺	1	1	0								0	1
壺類 壺	1	1	0								0	1
志野内付		0	0								1	1
その他 灰釉盤		1	1	0							0	1
	0	1	1	16			27	4	7	1		
合計			3		22	12	2		2		51	85
											6	

志戸呂

器種名	古瀬戸後期				古瀬戸	後IV期 ～大窯	大窯製品				大窓計	合計
	I	II	III	IV古・IV新			1前・1後	2前・2後	3前・3後	4前・4後		
碗類 簡形碗		0	0		0	0				2	2	2
皿類 皿		0	0						1	1	1	1
擂鉢 擂鉢		20	20	0					1	1	21	
盤類 盤類		1	1	0					0	0	1	
合計		21	21	0					4	4	25	

初山

器種名	古瀬戸後期				古瀬戸	後IV期 ～大窯	大窯製品				大窓計	合計
	I	II	III	IV古・IV新			1前・1後	2前・2後	3前・3後	4前・4後		
碗類 天目茶碗	0	0							2	2	2	2
皿類 内系皿	0	0	1					10		10	10	
擂鉢 擂鉢	0	0						4		4	4	
合計	0	0						16		16	16	

いる。中屋敷遺跡では7～8世紀に位置づけられる土器は出土しているものの9世紀～10世紀後半の土器・陶器は確認できることから、10世紀後半に再び人為が及んだと考えられる。ただし、灰釉陶器の出土数は少ない。

中世の土器・陶磁器 中世の土器・陶磁器については、第31・32表に示したように、山茶碗、土師質土器、瀬戸美濃系施釉陶器、貿易陶磁が出土している。施釉陶磁については碗皿類と鉢類、壺が大部分である。また、貿易陶磁についても碗皿類のみで、威信財とされるような壺瓶類などは出土していない。

山茶碗 山茶碗は知多産が若干出土しているが、渥美湖西産が碗のみであり、唯一出土した知多産が小皿である。渥美湖西産のものは、松井編I期～III期（12～13世紀）まで出土しており、I期（12世紀前半）の製品が多いものの、全体数は少ない。

瀬戸美濃系施釉陶器（古瀬戸段階） 瀬戸美濃古瀬戸段階は、前期・中期の製品は一切確認できず、後II期（14世紀末～15世紀初頭）の天目茶碗1点を初現とする。後III（15世紀前半）～IV期古（15世紀

中葉)の製品では、耳付水注、四耳壺などの壺類が1点ずつ出土している。

一方、後IV新期段階(15世紀後半)になると腰折皿、縁釉小皿などの皿類と擂鉢を中心として出土し、盤類が若干出土するが、前段階にあった壺瓶類は確認できない。この時期に成立した古志戸呂の擂鉢も出土しており、新たな陶器の入手先に加わっている。

出土数が全体的に少ないため遺跡の評価を断定することは慎重にならなければならないが、古瀬戸後III期～後IV新期の壺類から碗皿類、擂鉢への組成器種の変化は遺跡の性格の変化を示すのであろうか。

瀬戸美濃系施釉陶器(大窯段階) 瀬戸美濃大窯段階では、古瀬戸IV期新段階の傾向を引き継ぎ、碗皿類と擂鉢を中心として出土するものの、出土數自体は古瀬戸段階からの大幅な増加は確認できない。出土した器種は、端反皿、天目茶碗が大窯1(15世紀末～16世紀第1四半期)・2期(16世紀第2四半期)で、大窯4期(16世紀第4四半期～17世紀初頭)に志野丸皿や大皿が出土している。大窯3期(16世紀第3四半期)の製品は、擂鉢のみである。

一方、大窯3期後半と同時期と想定されている初山の製品が確認でき、内禿皿、天目茶碗、擂鉢が出土しており、施釉陶器の入手傾向が変化している。また、大窯4期には瀬戸美濃の碗皿類が引き続き入手されているが、志戸呂製品の碗皿類が加わっている。

土器の出土数の傾向については数量を把握していないため明確には示せないが、続く江戸時代(近世)では、瀬戸美濃製品よりも志戸呂製品の方が多い傾向にあり、瀬戸美濃では天目茶碗、志野丸皿、菊皿、灯明皿、腰錆、片口、擂鉢などが出土する一方で、志戸呂では天目茶碗、筒形碗、内禿皿、香炉、蓋、壺瓶類など若干の組成の差異がありそうである。この組成の差異が大窯3・4期まで遡るかどうか明確ではないが、瀬戸美濃産と初山・志戸呂産陶磁器で入手する器種が異なっていた可能性がある。

常滑 常滑製品では壺片を主体として小型土壺、片口鉢、鉢が出土している。時期が推測できるものとしては15世紀前半(古瀬戸後III期併行期)と、16世紀前半(古瀬戸大窯1～2併行期)であり、瀬戸美濃製品の時期と一致している。

貿易陶磁 青磁・白磁・染付が出土している。全体数が少なく、出土した器種は上述したとおり碗、皿のみで、威信財と想定されるような製品は出土していない。

青磁では13世紀前半に位置づけられる同安窯皿、このほかはすべて龍泉窯で13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる龍泉窯B1類、15世紀中頃のB3類、15世紀後半のB4類・D2類の碗である。白磁は時期不明の小皿1片である。染付は、碗皿類で、15世紀中頃～後半の端反皿B1群が4点とやや多く、皿は15世紀末～16世紀前半のC群である。

出土した貿易陶磁器は、山茶碗や瀬戸美濃系施釉陶器と同時期のものである。

なお、すべての数量を確認した中世陶磁(常滑壺を除く)と掲載した陶磁器だけの破片数を比較しても、近世陶器の方が圧倒的に多いことを報告しておきたい。

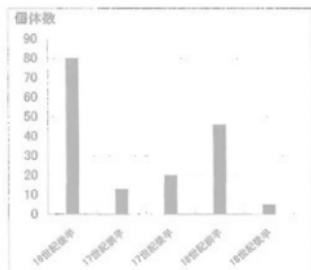
②土師質土器の傾向について

鍋類について 土師質鍋については、(南)伊勢系内耳鍋、く字形内耳鍋、内湾形内耳鍋、半球形内耳鍋、鍔付鍋(羽釜)が出土している。いずれも出土数は少なく、伊勢系鍋、半球形内耳鍋はそれぞれ1破片しか出土していない。

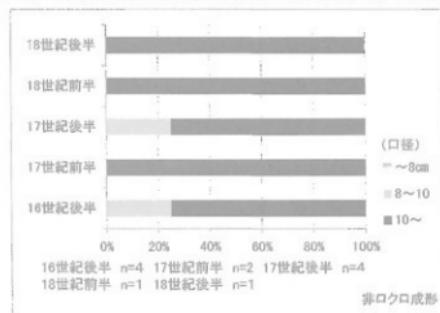
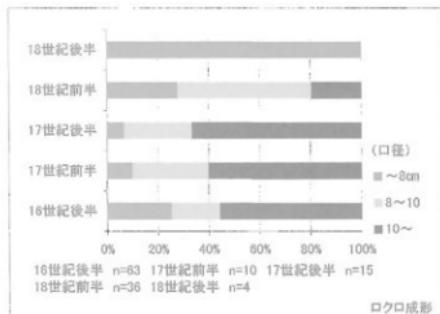
(南)伊勢系内耳鍋は頸部の破片のため時期を特定できないが、14世紀後半～16世紀前半の一時期に位置づけられる可能性が高く、他の土器・陶磁器の傾向からは15世紀後半のものであろう。ここでは中世に位置づけているが、内湾形内耳鍋は江戸時代前期(前半)の可能性が高い。鍔付鍋は15世紀後半～16世紀初頭である。

かわらけについて(第108～116図) かわらけについては江戸時代までの様相についてみておきたい。

かわらけは、松井一明氏の編年(松井1993)による16世紀後半～18世紀後半のものが出土している。



第108図 中屋敷遺跡 かわらけの時期別の出土数



第109図 中屋敷遺跡 出土かわらけ時期別出土割合

出土数としては、17世紀半のかわらけが前後する時期のかわらけと区分が難しいことから少なくなる傾向にあると思われるが、16世紀後半が80個体と多く、17世紀代は30個程度で、18世紀になると増加する傾向にある。18世紀後半のものは減少し、10個に満たない。

以下にそれぞれの時期のかわらけの法量による特徴をみておきたい。

まず、ロクロ成形かわらけでは16世紀後半のものは、口径10cm以上、器高3.0cm以上のものと、口径8cm以下、器高2.0cm以下のものに分かれる可能性が高い（第109図）。17世紀前半のものは全体的な数量が少ないため断定はできないが、16世紀後半と比較すると8cm以下の小型のものが減少する傾向にあり、続く17世紀後半と同様の傾向を示している。17世紀後半のものは10cm以上で約3.0cm以上の大型のものと、8~10cmで1.5~2.5cmの中型ものがあるが、小型の割合が少なくなる。大型、小型という大きさによる区分がなくなる傾向にある。

18世紀前半になると、口径10cm以上、器高約3cm以上のものが減少し、8~10cmで、器高が1.5~3.5cmのものが増加する。18世紀になると口径が小さくなる傾向にある。

また、口径8cm以下で、器高2.0cm以下の個体が増加する。18世紀後半には口径10cm以上のものがなくなり、口径8cm以下の小型のものが大部分となる。この傾向は上述した弥勒平遺跡の18世紀代のかわらけの傾向と合致している。

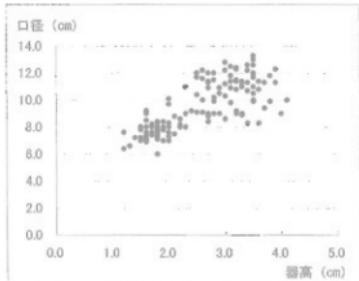
ロクロ成形かわらけでは16世紀代までが、口径12cm前後のものと、8cm前後のものに法量分化していることが指摘されている（松井1993）が、中屋敷遺跡のかわらけの様相からも明らかとなる。

17世紀前半まではその傾向を維持しているようであるが、17世紀以降、大型と小型の中間的な大きさの割合が増加し、18世紀前半には大型は出土数の1/3以下となり、18世紀後半にはほとんどなくなり、小型だけの器種組成となる。

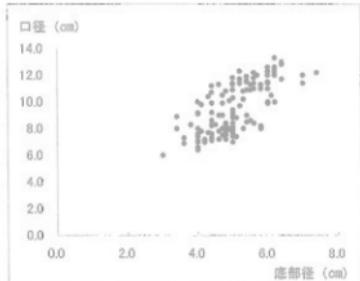
つぎに非ロクロ成形かわらけであるが、出土数自体が13片と少なく、傾向を把握し難いが、16世紀後半から18世紀後半まで数点ずつ出土している。多くのロクロ成形かわらけの中、数点の非ロクロ成形かわらけという器種組成が継続していたことがわかる。非ロクロ成形かわらけが使用され続けた理由については明確にできないが、天竜川以東にあって、ロクロ成形のみの構成にならず、非ロクロ成形かわ

けが江戸時代中期まで継続している点は注目すべきである。

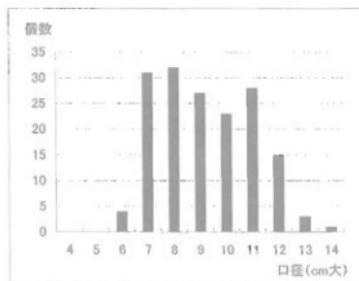
非クロ口成形かわらけは、時期が下るに従い碗形態から、皿形態へと変化しているよう、口径は10cm以上と大型のものが多いが、時期が新しいものに器高が低いものが多い。また、ロクロ成形かわらけは時期が新しくなるに従い口径が小型化する傾向があるにもかかわらず、口径10cm以上のもので推移している点はロクロ成形かわらけと対称的である。



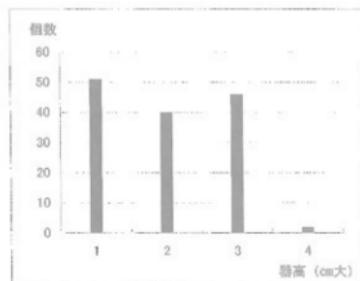
第110図 中居敷遺跡 出土ロクロ成形
かわらけ法量分布図① (口径×器高)



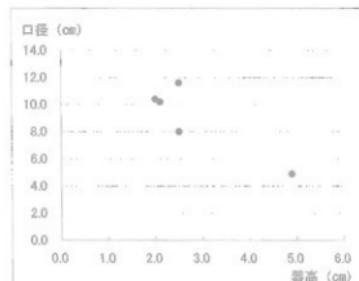
第111図 中居敷遺跡 出土ロクロ成形
かわらけ法量分布図② (口径×底部径)



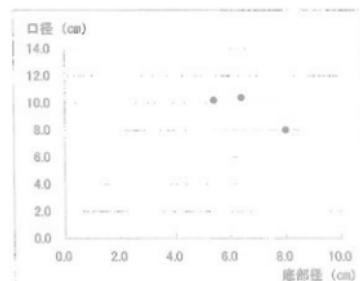
第112図 中居敷遺跡 出土ロクロ成形
かわらけ出土数① (口径)



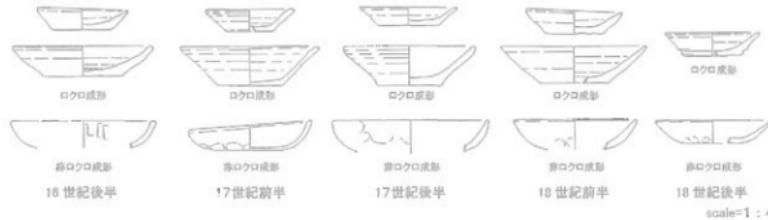
第113図 中居敷遺跡 出土ロクロ成形
かわらけ出土数② (器高)



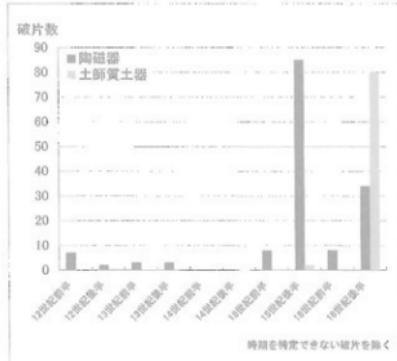
第114図 中居敷遺跡 出土非ロクロ成形
かわらけ法量分布図① (口径×器高)



第115図 中居敷遺跡 出土非ロクロ成形
かわらけ法量分布図② (口径×底部径)



第116図 中屋敷遺跡 出土かわらけの時期別組成



第117図 中屋敷遺跡 出土中世土器・陶磁器の 時期別出土破片数

らみると、中世Ⅰ段階は宮口窯産・清ヶ谷産灰釉陶器と渥美湖西産山茶碗であり、近接地から入手するとともに、同安窯産の青磁が1点出土している。

中世Ⅱ段階は瀬戸美濃製品を主体的に入手するが、志戸呂窯や初山窯の製品は瀬戸美濃製品を捕うような形で入手していた可能性がある。中世Ⅱ段階には急激にかわらけの出土量が増加することから、中世墓SK30が確認されたように、土壙墓が複数営まれていた可能性が高いといえる。

(3) 中世の中屋敷遺跡と武藤氏・香勝寺との関係

武藤氏について 中屋敷遺跡が所在する草ヶ谷地区は一宮荘代官であった武藤氏の本拠(居館)があつた場所で、武藤氏との関連性が深い。草ヶ谷陣屋敷には現在も当時のものとされる土墨が残る(森町史編さん室1999)。また、香勝寺では、1967年の本堂建立に伴い、五輪塔・宝篋印塔・一石五輪塔が発見された。これらは武藤氏一族の墓(供養塔)と想定されている。

武藤氏については不明な点が多いが、将軍足利義教自らが裁許した案件を記録した『御前落居記録』に永享4(1432)年12月2日、代官(一宮荘代官職)大谷豊前入道玄本と争って武藤用定が一宮荘代官職となつたことが記されており、中屋敷遺跡中世Ⅱ段階は武藤氏が代官となつた時期と合致している。また、武藤氏は戦国時代には武田側に組みし、天正9(1581)年高天神城の戦いで徳川家康により武藤氏定が討ち死にしている。その後、1590年の山内一豊の掛川城入城により現在の森町域は山内氏の実質的支配を受けるようになったと考えられることから、武藤氏の影響は中世末までであった可能性が高い。

なお、第117図には、この分析に基づき中屋敷遺跡におけるかわらけの時期別組成を示した。

(3) 中世土器・陶磁器からみた中屋敷遺跡の動向

中世土器・陶磁器の時期別出土数からみると、灰釉陶器・猿投窯折戸53窯併行期以降(10世紀後半)～山茶碗(渥美湖西III-2期、13世紀後半)段階と、古瀬戸後二期(15世紀前半)～大窯期(17世紀初頭)の2時期に区分することができる。13世紀後半にあたる山茶碗渥美湖西III-2期から減少し、この中間期にあたる14世紀前半～後半の資料がなく、中屋敷遺跡の中世段階は中屋敷遺跡中世Ⅰ段階(10世紀後半～13世紀後半)と中世Ⅱ段階(15世紀～17世紀初頭)に区分することができる(註7)。

出土した土器・陶磁器の産地や器種の傾向か

武藤氏の室町時代以前の記録は、『吾妻鏡』に遠江の守護代であった武藤氏は、初代遠江守護安田義定の使者として治承5（1181）年3月に武藤五郎が遠江から鎌倉に参着したとある程度でその本拠や活動記録については定かではない。

香勝寺遺跡について 香勝寺遺跡の第二東名建設に伴う移転候補地の調査では、堀跡（15世紀か）のほか土坑、小穴が出土した。堀跡は香勝寺の南東約50mのところで確認され、幅1.5m、深さ0.7m程である。この堀は南北に延びる丘陵に直交するように掘り込まれており、屋敷地を囲む溝と考えられる。

香勝寺遺跡出土の遺物は12世紀～13世紀前半のものが多いとされる（広川2005、森町史編さん委1998）。遺物から想定される香勝寺の盛行時期は12世紀後半～13世紀と堀が埋め戻された15世紀代であると想定できる。また、香勝寺遺跡の北端に位置する香勝寺の本堂部分では武藤氏に関係する石塔などが確認されており、15・16世紀のものである。したがって、香勝寺遺跡も遺跡の盛期をⅠ期とⅡ期に区分できる。

つまり、香勝寺遺跡の盛行時期と中世の中屋敷遺跡の存続時期はほぼ一致しており、非常に関係の深い香勝寺遺跡群として認定でき、今後は草ヶ谷地区の遺跡全体を通して検討していく必要がある。

武藤氏と中屋敷遺跡との関係 中屋敷遺跡の中世Ⅰ段階については武藤氏が14世紀代の空白期間があり武藤氏がこの中世Ⅰ段階まで遡って草ヶ谷地域に本拠を置いていたか明確ではないため、武藤氏との関連性は不明である。

中世Ⅱ段階については、武藤氏の一宮荘代官の就任と中屋敷遺跡の成立はほぼ軸を一にしており、また中世（16世紀後半）までは墓地であったものが、後述するように江戸時代には掘立柱建物で構成される集落に変化したと考えられ、武藤氏の衰退とこの変化も一致している。

したがって、武藤氏の居館が置かれたと想定される場所からは200m以上離れているが、中世Ⅱ段階の成立と遺跡の性格の変化が武藤氏の一宮荘代官就任と衰退とほぼ一致することから、中世Ⅱ段階は武藤氏の盛衰と関連していたと推測したい。

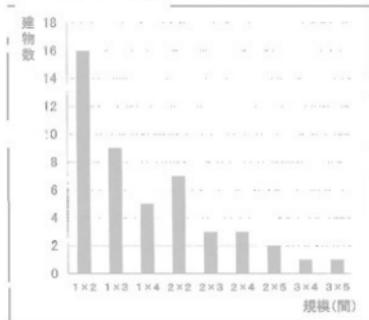
3. 近世の中屋敷遺跡

(1) 挖立柱建物について（第118～120図）

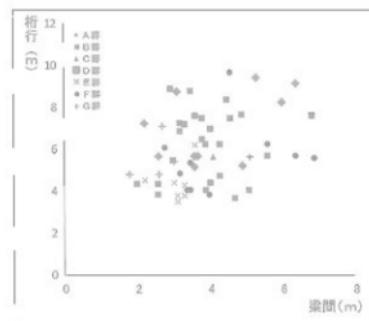
掘立柱建物については、柱穴から出土した遺物に基づき、最も遅い可能性が高い時期について記載しているが、上述した中世土器の傾向からみた場合、柱穴内から出土した土器からは16世紀後半以降に位置づけられる建物しか確認できておらず、大部分の建物は江戸時代の土器・陶磁器が出土しているため掘立柱建物の多くが江戸時代に建設されたものと推測し、それ以前の遺物については、中世墓の藏骨器や供獻されていた葬儀品が建物構築の際に破壊され、柱穴内に混ざり込んだ可能性が高いと想定している。

ここでは、確認した掘立柱建物の傾向についてまとめておきたい。

中屋敷遺跡で確認された掘立柱建物は、第120図に示したように梁間×桁行で 1×2 間、 1×3 間、 1×4 間、 2×2 間、 2×3 間、 2×4 間、 2×5 間、 3×4 間、 3×5 間が確認できる。方形、長方形の外側に壁をもつ建物が多いが、中には総柱あるいは内部に壁をもつ建物の可能性があるもの（SB30・SB44など）、庇付建物の可能性があるもの（SB10・SB30・SB44）が確認できる。



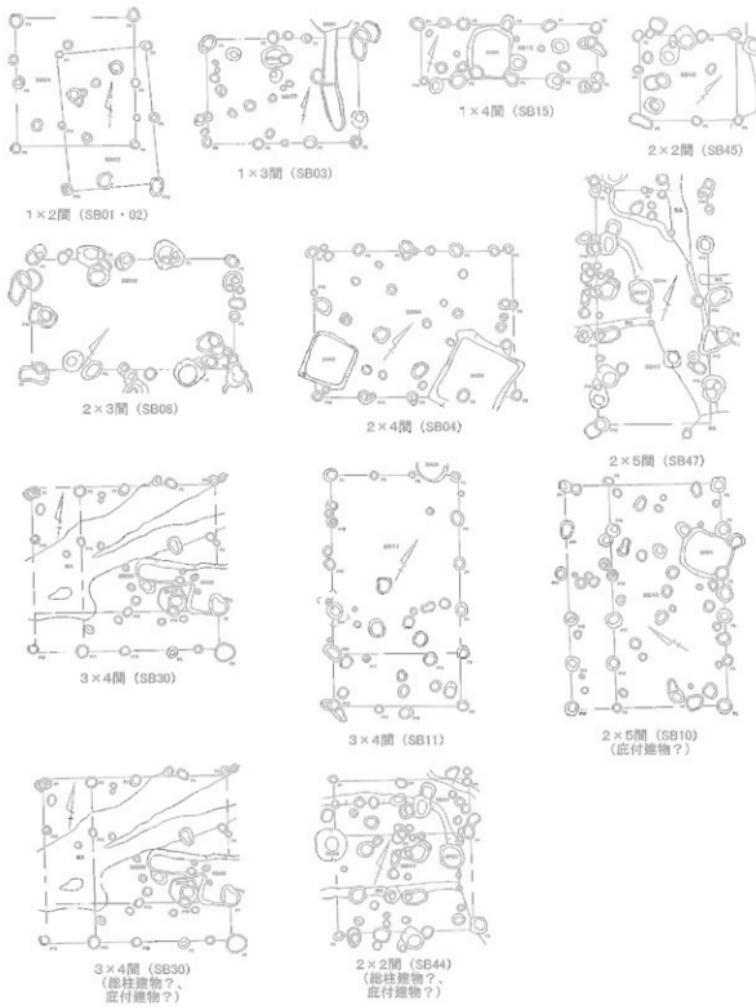
第118図 中屋敷遺跡 挖立柱建物間数別出土数



第119図 中屋敷遺跡 挖立柱建物規模分布図（群別）

(2) 「鍛冶屋敷」と鍛冶関連遺物について～江戸時代の鍛冶～（第121～123図）

中屋敷遺跡が所在する森町草ヶ谷の丘陵上は、「鍛冶屋敷」という名前が残り、「鍛冶屋下」などの屋号もみられることから、農耕を行った集落であることが想定されていた（広川2005、森町教委2007）。



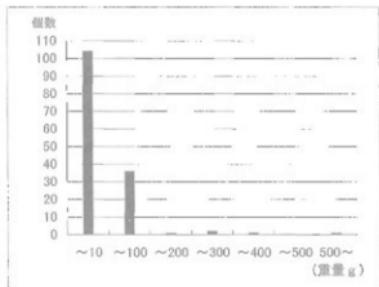
scale = 1 : 200

地図が確定できるもののみ

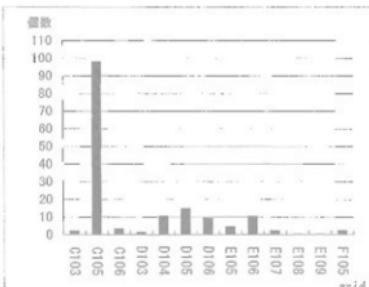
第120図 中層敷遺跡・獨立柱建物分類図

1x2間	SB01・02・07・12・13・19・21・24・26・34・37・39・40・52～54
1x3間	SB03・05・06・14・32・36・43・46・50
1x4間	SB15・27～29・33
2x2間	SB25・38・42・44～46・55
2x3間	SB08・41・49
2x4間	SB04・09・16
2x5間	SB10・47
3x4間	SB30
3x5間	SB11

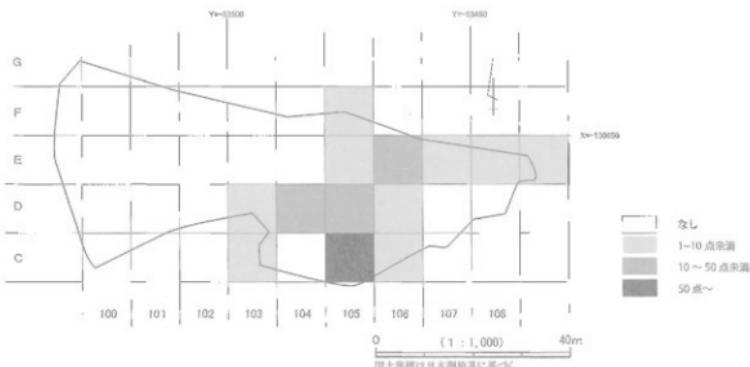
第5章 中屋敷遺跡



第121図 中屋敷遺跡 鉄滓重量別出土数



第122図 中屋敷遺跡 グリッド別鉄滓出土数量



第123図 中屋敷遺跡 グリッド別鉄滓出土数

森町教委による中屋敷遺跡の第1次調査では、遺跡の中央北側で調査が行われたが、鍛冶関連遺構や遺物は出土していない。しかし、第2次調査に当たる今回の調査では、近世に帰属する可能性が高い鍛冶関連遺物が多數出土した。これによりこの地名が当時の集落の特徴を示す名前であることが証明されたといえる。以下では、当遺跡で行われた鍛冶について纏めておきたい。

鉄滓について 出土した鍛冶関連遺物は主に鉄滓であり、約160点が出土した。これは遺構や遺構面に掘り込まれた擾乱坑からの出土であり、表土部分にはさらに多くの鉄滓が含まれていたと考えられるが、詳細は不明である。大きさは、43・97・352のように10cmを超えて、200g以上のもの～10g以下の小さなものまで確認でき、100gを超えるものは5点と少なく、大部分が10g以下の小型の鉄滓である。

鉄滓は調査区全体に均等に分布しているわけではなく、C105グリッドに約100点と集中する。また、C105グリッド周辺のグリッドからやや多く出土している一方で、調査区西側（A区）ではほとんど確認されていない。また、大型の鉄滓もこのC105グリッド周辺から出土している。したがって、遺跡の中央から東側で鍛冶が行われた可能性が高く、特に鉄滓が多く出土したC105グリッド周辺で鍛冶が行われていた可能性が高い。鍛冶関連遺構は確認できなかったが、C105グリッド周辺には掘立柱建物E群が存在していることから、E群の掘立柱建物は鍛冶工房であった可能性がある。

自然科学分析の結果 鉄滓の成分分析の結果、中屋敷遺跡で出土した鉄滓は精錬鍛冶と小鍛冶に伴う鉄滓であることが判明しているが、鉄滓に含まれる成分により一度鉄製品にされたものを廃材として再溶解した段階に伴うものと考えることができる（第4節第10項自然科学分析参照）。

中屋敷遺跡の鍛冶 中屋敷遺跡では、掘立柱建物E群で廃材を再利用し、それを一旦溶解し鉄素材を精製した後、再度製品を生産する精錬・小鍛冶の工程が行われた可能性が高いことが明らかとなった。

ただし、製鉄作業などの大鍛冶が行われた可能性は低く、廃材を再加工し、農工具などを生産する農鍛冶が行われていた可能性が高い。

(3) 「草ヶ谷村」の絵図からみた江戸時代の中屋敷遺跡

江戸時代の中屋敷遺跡について考える上で重要な絵図面が残されている。

森町草ヶ谷（註8）に残る文書（古絵図）には（第二東名記念誌編集委2005-23頁）、江戸時代後期の文化年間（1804～1818年）の絵図（第124図）、明治初期に作成された絵図（第125図）が残る。このうち文化年間の絵図（以下、「文化絵図」）の中央やや上に「香勝寺」、その左に「走り谷田池」、「中山寺」などの地名が確認でき、下に「宗松院」の文字が確認できる。この絵図と明治初期の絵図（以下、「明治絵



文化年間（1804～1818年）に描かれた草ヶ谷村の絵図面。中央やや上が香勝寺、そこから南に向かって伸びる道の東西に建物が確認できる。中屋敷遺跡は道の西側（図左側）の南端部分に当たら可能性が高い。絵図の建物を観察すると、昔様造の建物と切妻造の建物が確認でき、方形の建物、長方形の建物が確認でき、数棟の建物が僅で囲われていることが分かる。

第124図 中屋敷遺跡周辺の絵図①（文化年間の草ヶ谷村絵図）



明治初期に作成された絵図。中央やや上に香勝寺があり、そこから南西に向かって道が伸び、その道がく字形に折れる部分の左下に中屋敷がある。この道の形状は現在と同様であり、この時期には中屋敷という地名であったことが分かる。残念ながら、連続の性格を特定するような記載は確認できない。

第125図 中屋敷遺跡周辺の絵図②（明治初期の草ヶ谷村絵図）

また、草ヶ谷村の文化年間の絵図（第124図）では、建物の周囲に柵が描かれており、少なくとも周囲に柵をめぐらす建物であったと想定できるが、中屋敷遺跡の発掘調査では、残念ながら検出することはできなかった。建物の柱は強度を高めるため深くまで根入れするが、柵は簡易なため根入れが浅く、後世の耕作などにより削平された可能性が考えられる。

このように、草ヶ谷地区に残る絵図と今回の中屋敷遺跡の発掘調査成果を比較することで、江戸時代には方形、長方形の建物で、大きさの異なるものが同時期に存在し、それらが柵で囲まれていることが判明する。村の産業については絵図には記されていないが、中屋敷遺跡の発掘調査の成果や地元に残る屋号「鍛冶屋敷」や「鍛冶屋下」から、鍛冶業を営んだ村であった可能性が高い。

図を比較すると、今回発掘調査した場所が江戸時代の「中屋敷」の集落であることは間違いなく、文化年間に少なくとも香勝寺周辺で20棟弱の建物が建てられていた可能性が高い。また、香勝寺から中屋敷までの間で20棟であり、中屋敷と想定される部分には4棟である。

中屋敷遺跡で確認された掘立柱建物は60棟近くに及ぶが、出土物からみた場合、江戸時代前期から明治初期までの350年間の継続が確認できるうえ、近現代まで建物が造り続けられたとすれば、同時期に存在していた建物は多くないと予想できる。20～30年周期で建て替えが行われたとすれば、100年で3～4回、350年で10～15回の建て替えとすれば、同時期には4～6棟程度が建っていた可能性が高い。この想定からすれば、この文化年間の絵図とは矛盾しない程の建物数である（註9）。

4.まとめ～中屋敷遺跡の変遷～

(1) 縄文時代

明確な縄文時代の遺構は存在しない。縄文土器が出土しているが少量であり、遺跡の性格を明らかにすることは難しい。縄文土器は文様がないものであることから時期を特定するのは困難であるが、やや厚手であることから縄文時代中期に位置づけられる可能性がある。このほか黒曜石・シルト岩・流紋岩の剥片が10数片出土していることから、石器製作が行われた可能性が高い。

なお、縄文時代の後、弥生時代の遺物は一切出土しておらず、この場所は集落には利用されなかつた可能性が高い。弥生時代中期以降、近接する円田丘陵では、文殊堂遺跡をはじめとして丘陵上に方形周溝墓や土器棺墓が築かれるが、この場所は墓域としても利用されなかつたと考えられる。

(2) 古墳時代

古墳時代中期には、地面に明瞭に痕跡の残る中屋敷1号墳が築造される。埋葬施設が削平され、周溝下部のみの出土のため時期を特定することは難しいが、中期前半の可能性が高い。

この古墳が中期前半に築造されたとすれば、太田川上流域では、それ以前に築造された磐田市新豊院山古墳群や袋井市春岡1号墳とは、離れた場所に築造されたことになり、磐田市大手内A6号墳などとともに中期前半の社会情勢の変化に伴って成長した新興の首長像が浮かび上がる。

この古墳が築造された後は、古墳は連続的には築造されなかつたようで、つづくのは古墳時代終末期（7世紀代）である。須恵器や土師器が出土しているが、この時期に比定できる遺構はなく、どのような性格をもつ遺跡であったか不明である。

(3) 古代～中世

灰釉陶器が数点出土しているが、最も遅るのは、宮口窯産の灰釉陶器で、松井編年III-2期に（10世紀後半）に位置づけられるもので、その後は清ヶ谷産の灰釉陶器が少量出土している。

山茶碗の段階も出土数は若干増加するものの、明確な遺構は確認できない。山茶碗との併行段階には貿易陶磁の青磁が出土しており、中世墓の副葬品であろうか。この後、14世紀代は遺物量がほとんどなく、15世紀に入り遺物量が増加し、中世末まで遺物が出土している。この遺物の特徴から中世の中屋敷遺跡は2段階に区分することができ、10世紀後半～13世紀前半までの（古代～）中世I段階と15～16世紀の中世II段階に区分することができる。特に中世II段階は、一宮荘代官の武藤氏との関連が想定できる。

中世I段階について、遺跡の性格は不明確であるが、中世II段階には16世紀前半の石塔が確認されること、16世紀後半代の中世墓（SK30）が確認されることから、16世紀代は墓域であった可能性が高い。

(4) 江戸時代

江戸期に至り掘立柱建物で構成される集落が営まれた可能性が高く、中世II段階とは遺跡の性格が大きく変化した可能性が高い。中屋敷の集落では鉄滓の出土から精錬鋳治と小鎌冶が行われた可能性が高く、村の鍛冶屋として機能していた可能性が高い。

以上、中屋敷遺跡は縄文時代～近世まで断続的に人為が及ぶ複合遺跡であり、それぞれの時期において森町の歴史を復原していくうえで貴重な資料を提供しているといえよう。

註（第5章）

- 1 中屋敷遺跡の掘立柱建物について評価する場合、梁と桁が直交し、柱間隔が一定のものを「規格性（精度）が高い」とし、設計図に基づき番匠が建設した可能性があるものを意味する。これを基準に梁と桁が直交するが、柱間が一定でないもの、あるいは梁と桁は直交しないが、柱間が一定であるものを「やや規格性の低い」建物とし、梁と桁が直交せず、また柱間も一定ではないものを「規格性が低い」建物とする。したがって、「規格性が低い」としたものについても、全く無計画・無設計であつたというわけではない。
- 2 掘立柱建物の時期については柱穴から出土した遺物の時期により決定するが、中世後期においては中世墓が盛んでおり、墓地と集落が同時期に営まれていた可能性は低いと考えている。掘立柱建物の多くが江戸時代以降に建設されたものであることから、中世墓を破壊して掘立柱建物を建設したことで柱穴に中世の遺物が散り込んでいる可能性があるため、ここではその可能性を考慮して、掘立柱建物で中世後期まで遡る可能性が高いものについては、「中世後期以降江戸時代」とし、江戸時代の陶磁器が出土したものについては「江戸時代」と表記する。
- 3 中屋敷遺跡の灰釉陶器・山茶碗・青磁・かわらけについては松井一明氏に、瀬戸美濃系陶磁器など中世の陶磁器については齋澤良祐氏に分類していただいた。また、分類にあたり足立順司氏、池谷初恵氏、河合修氏、濱口啓吾氏、山本智子氏に御教示を得た。
- 4 浜松市文化財課 鈴木敏則氏、鈴木一氏の御教示による。
- 5 『森町円田丘陵の遺跡』（静岡埋文研2006）などで、古墳時代初期の方形周溝墓としていたが、ここで、それらの記述を訂正する。
- 6 なお、中屋敷1号墳の周溝の幅が隅角で狭まるという弥生時代の方形周溝墓に見られるような特徴があり、この特徴は古墳時代中期にはみられない特徴であること、一方で周溝から古墳時代後期以降の遺物が出土していることから、古墳時代中期の方墳ではなく、方形周溝墓や古墳時代後期以降の古墳の可能性も残る。
- 7 ただし、報告したように土師器窯が周溝（SD04）の底面から出土し、遺存状況も良好であったことから、新しい時期に流れ込んだ、あるいは持ち込まれたとは考え難いため、古墳時代中期の古墳（あるいは墳丘の低い方形周溝墓）の可能性が高い。
- 8 ただし、土器・陶磁器が出土していないことは遺跡が形成されていなかった証拠とはならず、土器・陶磁器ではない容器が利用されていた、あるいは山茶碗などの大量消費からの脱却があり、廻収される量が減少したなどの要因も考えられることから、ここで時期区分するには土器・陶磁器からみた標準であることを記しておきたい。
- 9 内山真龍による『遠江風土記傳』によれば、「南周智都」の項に「九 圓田郷」があり、「圓田郷 又圓田郷といふ、村八、内山の田舎郷 曾能郷を混雜するか。天正前に一宮の神領五箇郷の内、水田なり、凡そ圓田郷に属する村々は、圓田郷の水を注いで以て苗田を作るなり、村印に圓田と書く、蓋し圓田か、又田舎の転するか、印に從って改めず」
- 草ヶ谷 高は四百八十三石八斗三升」とあり、香勝寺、中山寺、宗松院などについての記載がみられ、草ヶ谷村に残る絵図面には、この「草ヶ谷」に所在した寺院がすべて記載されている。
- 10 ただし、文化年間の絵図に示された建物は、いくつかのタイプの建物があり、図で囲まれていること、中屋敷遺跡では掘立柱建物群がいくつかのグループに区分することができることからすると、同時に存在したいくつかの建物群のうちの1建物群を表現した可能性もある。

図の出典（第5章）

- 第106図 中嶋・大谷・田村2002より該当箇所を抜粋し、加筆。
 第107図 大手内A 6号墳 豊岡村教委2000より引用。
 第124図 第二東名記念誌編集委員会2005より所有者の許可を得て転載。
 第125図 第二東名記念誌編集委員会2005より所有者の許可を得て転載。

※参考文献は191・192頁に記載している。

参考文献

【論文等】(五十音・年代順)

- 赤根一郎・中野良久 1994 「生産地における縄年について」『中世常滑焼をとて資料集』 日本福祉大学
足立順司 1975 「森町宮代出土の瓶子と古鏡」『森町考古』 9 森町考古学研究会
足立順司 1998 「古代末期の地方縄塚—森町における二例」(森町史編さん委1998に所収)
足立順司 2008 『森町の中世石塔』(『森町考古』 20) 森町考古学研究会
伊藤嘉章 1998 「遠江・宮谷田出土の灰釉陶草文四耳壺」(森町史編さん委1998に所収)
伊藤英鈴 1996 「西平子遺跡、まとめ」『静岡県森町飯田の遺跡』 静岡県周智郡森町教育委員会
井村広巳 2002 「弥生時代集落の概観—西部地域—」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
内山寅龍 1799 『遠江風土記傳』(加藤善根・喜川剛六著 1965 『遠江風土記傳』 歴史図書社)
大川清・鈴木公雄・工業普通組 1996 『日本土器事典』 雄山閣
大橋保夫 1980 「静岡県内出土の石冠」『森町考古』 15 森町考古学研究会
金子健一 2005 「羽茎形土器からみた中世の東海」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
河合 修 2009 「まとめ」『上志戸呂古墳』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
小林久彦 1999 「もう一つの台付窯」『三河考古』 12 三河考古学談話会
佐藤由紀男・荻野谷正宏・糸原和大 2002 「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と縄年—東海編—』 木耳社
鈴木敏則 2001 「湖西駿古墳時代須恵器縄年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 福建・論考編』 東海土器研究会
鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器縄年」『有玉古墳』 葛西市教育委員会
竹内直文 1998 「まとめ」I. 舟谷田 I 遺跡 (1) 弥生時代後期～古墳時代前期『舟谷田 I 遺跡・II 遺跡』
静岡県周智郡森町教育委員会
竹内直文 2003 「明ヶ島の弥生時代墓群と中・東遠江における弥生時代墓制」『東部地区区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 葛西市教育委員会
田村隆太郎 2001 「遠江兵庫寺 1号墳の研究 考察」『静岡県考古学研究』 33号 静岡県考古学会
田村隆太郎 2006 「まとめ」『森町田丘丘陵の遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
田村隆太郎 2009 「網掛山古墳群・片瀬遺跡の遺跡形成」『網掛山古墳群・片瀬遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
永井久美男編 1994 「中世の出土鉢」 兵庫県埋蔵鉄調查会
中嶋郁夫 1988 「いわゆる菊川式と龍田式の再検討」『転轍』 2号 転轍刊行会
中嶋郁夫 1993 「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」」『転轍』 4号 (『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』 転轍刊行会)
中嶋郁夫 1995 「静岡県内の古墳の動向」『古墳時代の集落』 静岡県考古学会
中嶋郁夫 1997 「東海東部の古式土器」『静岡県史研究』 13号 静岡県
中嶋郁夫・大谷宏治・田村隆太郎 2002 「遠江の桜舟」『古墳時代中期の大型墳と小型墳』 東海考古学フォーラム浜北大会 実行委員会・静岡県考古学会
中野晴久 1986 「近世常滑焼における縄の縄年の研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』 II 常滑市教育委員会
中野晴久 2005 「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
原 康志 1999 「横戸(横戸)開拓跡跡群と周辺遺跡の特徴について」『横戸城跡－総合調査報告書』 静岡県周智郡森町教育委員会
原田正雄 2005 「市右門様の由来」「先人の足跡」 第二東名記念誌編委員会 (静岡県周智郡森町)
広川透麻 2006 「第二東名高速道路建設と埋蔵文化財」「先人の足跡」 第二東名記念誌編集委員会 (静岡県周智郡森町)
藤村東男 1984 「御文土器の知識 II」 東京美術
藤澤良祐 1987 「本家統の研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II・古瀬戸後期様式の縄年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1995a 「瀬戸古窯址群III」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 3 瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1995b 「古瀬戸」『概説中世の土器・陶器』 真陽社
藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯縄年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 10 瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」「陶磁器から見る静岡県の中世社会」 2005菊川シンポジウム実行委員会
松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
松井一明 1993 「東海地域のかわらけ縄年について」『久野城IV』 豊井市教育委員会
松井一明 2005 「中世見付とその周辺」「陶磁器から見る静岡県の中世社会」(発表要旨・論考編) 2005菊川シンポジウム 実行委員会
松井一明・木村弘之・溝口彰彦 2009 「遠江・駿河地域の中世石塔の出現と展開」『研究紀要』 32 静岡県博物館協会
向坂綱二 1992 「鐵文土器の縄年」『静岡県史』 3 考古3 静岡県
桃崎祐輔 2000 「石造物からみた中世の横戸」『横戸城跡－総合調査報告書』 静岡県菊川町教育委員会
山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説中世の土器と陶磁器』 真陽社

渡井英誓 2002 「ムラと墓—墓にかかる集落の景観」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会

【報告書・市町村史等】(五十音・年代順)

- 磐田市教育委員会 1998 『馬坂・馬坂遺跡・馬坂上古墳群発掘調査報告書』
 磐田市教育委員会 2005 『新豊原山古墳群II』
 磐田市教育委員会 2006 『新豊原山古墳群D地点の発掘調査』
 磐田市史編さん委員会 1992 『磐田市史』資料編 磐田市
 菊川町教育委員会 2000 『勝地城跡－総合調査報告書一』(静岡県小笠郡菊川町)
 静岡縣 1930 『静岡縣史』第1巻
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a 『元鳥遺跡』
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998b 『高見丘III・IV遺跡』
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004a 『寺山古墳群』
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004b 『森町陸奥の遺跡』(森町-1)
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005 『森町円田丘殿の遺跡』(森町-2)
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『森町円田丘殿の古墳群』(森町-3)
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『片瀬遺跡・網掛山古墳群』(森町-4)
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『合代島丘殿の古墳群』
 第二東名記念誌編集委員会 2005 『先人の足跡』(静岡県周智郡森町)
 豊岡村教育委員会 2000 『大手内古墳群』(静岡県磐田郡豊岡村)
 磐井市教育委員会 1994 『山田源遺跡群』
 森町教育委員会 1988 『善千鳥遺跡確認調査報告書』((静岡県周智郡森町))
 森町教育委員会 1991 『涼松・朝日平・西峰水戸ヶ谷東咲遺跡』(静岡県周智郡森町)
 森町教育委員会 1996 『森町飯田の遺跡』(静岡県周智郡森町)
 森町教育委員会 1998 『與谷田I・II遺跡』(静岡県周智郡森町)
 森町教育委員会 2007 『町内遺跡試掘・確認調査報告書』(静岡県周智郡森町)
 森町史編さん委員会 1998 『森町史』資料編一 考古 静岡県周智郡森町
 森町史編さん室・社会教育課文化振興係 1999 『図説森町史』 静岡県周智郡森町

付 編

付編1 No.118地点出土遺物

第1節 No.118地点 「長者屋敷」推定地の概要

1. 概要

No.118地点は、森町円田字藤小地名に位置し、太田川の流れる沖積平野の西側丘陵地、そのうちの一支谷の最奥部に位置する。当地点は、周知の埋蔵文化財宝蔵地ではないが、後述するように「長者屋敷」とよばれる屋敷地が存在したとの言い伝えや、土壘により池（「宇藤の池」という）を造成した部分が存在したことから、第二東名高速道路建設に伴って確認調査対象地として選定した（静岡埋文研2004）。

2. 「長者屋敷」について

北垣遺跡や文殊堂古墳群、林古墳群の尾根の合間は、「宇藤ノ谷」と呼ばれ、この谷の中央部に江戸時代の延宝以前（慶安3（1650）年という説もある）に大名山口備前守の許可を得て、池が造成され、「宇藤の池」と呼ばれていた。江戸時代の栗倉村の絵図にも、この池と想定されるため池が記載されている（第二東名記念誌編集委2005-23頁）。その奥に時代は不明確であるが「長者屋敷」があったことが伝承されている（北島2005）が、上記した溜池の絵図には屋敷は記載されていないことから、江戸時代以前の屋敷があったことが想定されている（北島2005）。

栗倉にある「大垣戸」からこの谷を通過し宮代方面へ抜け、小国神社へ至る「勅使道」が存在したことが想定されており、この谷は小国神社との関係において非常に重要な場所であったと想定されていた。



第126図 No.118地点の位置と試掘溝記図

第2節 No.118地点 「長者屋敷」推定地出土遺物

1. 調査の概要

第二東名建設に先立つ確認調査では、下記の遺物は出土したもの、屋敷や土塁の痕跡は確認できなかった（静岡埋文研2004）。

出土遺物には、須恵器、瀬戸美濃、志戸呂、常滑、かわらけなどがあるが、造構が確認されなかつたこと、No.118地点を取り巻く、丘陵上には古墳や横穴墓、古墳や横穴墓を利用した中世墓、斜面に築かれた中世墓・近世墓などが所在するとともに、丸山砦が所在したと想定されていることから、丘陵上位からの流れ込みと判断した。

ここでは、No.118地点から出土した遺物について簡略に報告する。

2. 出土遺物（第127・128図、第33・34表、図版53・54）

出土遺物には、須恵器、瀬戸美濃（古瀬戸・大窯・登窯）、常滑、初山、志戸呂、肥前、内耳鍋、かわらけ、鉄砲玉、砥石、土製品あるいは鍋の把手か、が出土している。

須恵器 須恵器（1）は平瓶の口縁部の破片である。湖西産で、遠江須恵器編年IV期前半（7世紀前半）に位置づけられる可能性が高い（鈴木2001）。

北側から東側の尾根斜面に宇佐横穴墓群が形成され、西側の尾根上には林古墳群が所在することから、それらに伴う遺物が流れ込んだ可能性が高い。

古瀬戸 古瀬戸へ大窯期の製品では、壺鉢5点（8～12）がある。口縁部や唐目の特徴から古瀬戸後IV新期～大窯1期に位置づけられる（藤澤1991・1995a・2005、註1）。

瀬戸美濃（大窯期） 瀬戸美濃の大窯期（中世後期）の製品としては、端反皿5点（3～7）があり、志野丸皿（17）がこの時期の可能性がある。

端反皿は口縁部2点（3・4）、底部片3点（5～7）で、7は見込みに印花文が施されている。形態からは、大窯1か2期に位置づけられる可能性が高い（藤澤1987・1995a）。

志野丸皿（17）は底部小片であり、大窯最終段階か登窯初期の製品であろう（藤澤1987・1995a）。

瀬戸美濃（登窯期） 瀬戸美濃の登窯期（江戸期）の製品としては天目茶碗2点（18・19）、碗1点（20）、香炉2点（22・23）、不明（21）、皿（丸皿か）の底部片3点（24～26）、壺か1点（27）、壺鉢1点（28）がある。

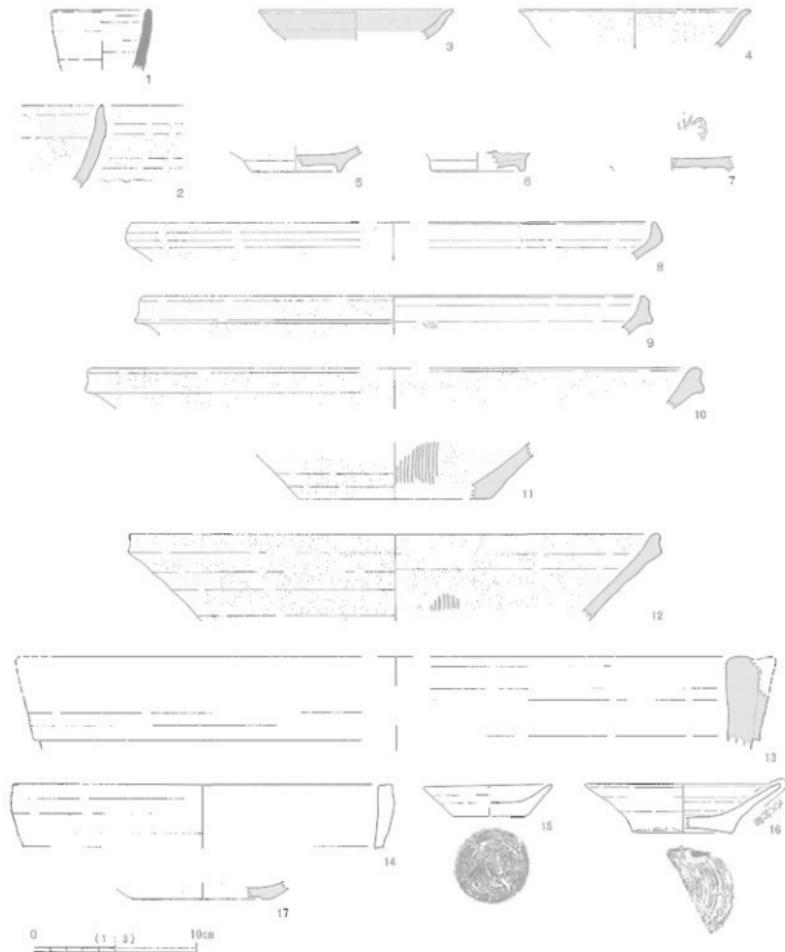
すべて江戸時代に位置づけられる。天目茶碗（18・19）は登窯第6小期、香炉は23が登窯第5小期、22が登窯第6～7小期、皿（24～26）は登窯5～7小期、壺鉢（28）は登窯第3小期に位置づけられようか（藤澤1987）。20・21・27は小片のため磁器を特定することは難しい。

これらの瀬戸美濃の登窯期の製品の時期からみると、登窯第6～7小期の製品が多い。

内耳鍋 内耳鍋（14）は内湾形内耳鍋の口縁部の破片で、やや内湾しているが、頭部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は水平面をもつ。非常に硬質に焼き上がっている。この特徴から、17世紀前半に位置づけられる可能性が高い（金子2005）。

このほか、鍋の把手の可能性のある土師質の製品（30）がある。鍔付鍋の破片の可能性が高いと考えるが、断定はできない。

肥前 広東碗の可能性が高い磁器染付碗（29）が出土した。高台に一条の横線が確認できる。江戸時代に位置づけられる。

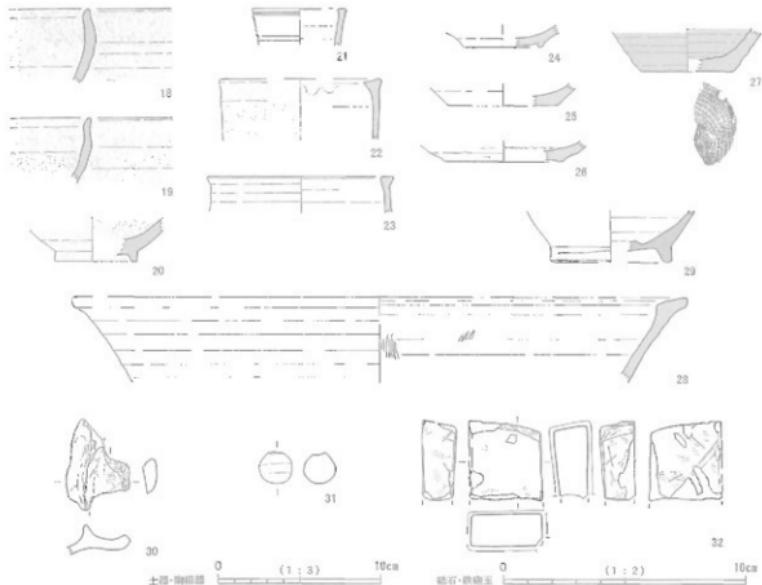


第127図 No. 118地點出土遺物実測図①

かわらけ かわらけはロクロ成形かわらけ破片が多く出土しているが、小片が多く、図示できたのは2個体である。非ロクロ成形かわらけ片は存在しない。

15は小型のもので、口径7.9cm、底部径4.3cm、器高1.9cmである。17世紀後半～18世紀前半ごろに位置づけられる。16は大型のもので、底部は焼成によるゆがみか上げ底である。口縁部はやや外反するもののほぼ直線的に外上方に向かって伸びる。17世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

鉄砲玉 鉛製の鉄砲玉1点(31)が出土した。直径1.3cmである。No. 118地點東側の尾根には丸山砦が存在したとされており(森町史編さん委1998)、遺構は確認されなかったが、それに伴う戦国期の遺物で



第128図 No.118地点出土遺物実測図②

であろうか。

砥石 砥石片が出土した、断面長方形で、非常に質がよいことから、近世以降の砥石で、明治以降の可能性もある。残存面には、細かい削り痕が残る。石材は凝灰岩である。

第33表 No. 118地点 出土土器・陶磁器類表

No.	種類	形態	寸法	底径	高さ	釉調(外側)	色調(内側)	時間	参考		
1	粗泥器	平底	口部φ20	(6.3)	-	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	弥生			
2	粗泥器	天目茶碗	口部～底径	-	-	灰白(2.5Y5/2)	灰白(2.5Y8/2)	大塗3			
3	粗泥器	粗灰陶	口部	10	(12.0)	-	灰白(2.5Y5/2)	灰白(2.5Y3/2)	大塗1か2		
4	粗泥器	粗灰陶	口部～底径	10	(14.3)	-	灰白(2.5Y5/2)	灰白(2.5Y3/2)	大塗1か2		
5	粗泥器	粗灰陶	口部～底径	10	(15.7)	-	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	大塗1か2		
6	粗泥器	粗灰陶	底盤	5	-	(5.3)	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	大塗1か2		
7	粗泥器	粗灰陶	底盤	-	-	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	大塗1か2	印文		
8	古窯址～廻戸瓦器	筒井	口部	-	-	-	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	弥生～大塗1		
9	古窯址～廻戸瓦器	筒井	口部	7	(31.6)	-	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	弥生～大塗1		
10	古窯址～廻戸瓦器	筒井	口部	-	-	-	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	弥生～大塗1		
11	古窯址～廻戸瓦器	筒井	底盤	-	-	(11.3)	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	弥生～大塗1		
12	廻戸瓦器	筒井	口部～底盤	10	(31.6)	-	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	弥生～大塗1		
13	常滑	瓶?	口部	-	-	-	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	常滑1形式		
14	内耳鍋	内円形容	口部	10	(23.3)	-	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	江戸(17.5Y7/4)	江戸(17.5Y7/4)	
15	かわらけ	ロクロ	全体	100	7.9	4.3	1.9	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	伊賀(16.5Y8/3)	伊賀(16.5Y8/3)
16	かわらけ	ロクロ	全体	40	(12.1)	(6.4)	5.9	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	伊賀(17.5Y7/6)	伊賀(17.5Y7/6)
17	廻戸瓦器	志摩大屋	底盤	10	-	(6.9)	灰白(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y6/1)	志摩～近世		
18	廻戸瓦器	天目茶碗	口部～底盤	-	-	-	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	近世		
19	廻戸瓦器か	天目茶碗	口部～底盤	-	-	-	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	近世		
20	廻戸瓦器	碗	口部～底盤	30	-	(5.1)	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	近世		
21	廻戸瓦器か	瓶?	口部	20	(5.8)	-	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	近世		
22	廻戸瓦器か	香炉	口部～底盤	-	-	-	灰白(2.5Y6/6)	灰白(2.5Y7/4)	近世		
23	廻戸瓦器か	香炉	口部	10	(11.4)	-	灰白(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/2)	近世		
24	廻戸瓦器か	壺	底盤	20	-	(4.9)	にふい(2.5Y8/3)	にふい(2.5Y7/3)	近世		
25	廻戸瓦器か	壺	底盤	20	-	(6.7)	にふい(2.5Y8/3)	にふい(2.5Y7/3)	近世		
26	廻戸瓦器か	壺	底盤	12	-	(7.4)	にふい(2.5Y8/3)	にふい(2.5Y7/3)	近世		
27	廻戸瓦器	壺?	底盤	40	-	(5.7)	灰白(2.5Y6/2)	灰白(2.5Y6/2)	近世		
28	廻戸瓦器	壺?	底盤	5	(88.6)	-	にふい(2.5Y8/4)	明治(2.5Y8/4)	明治(2.5Y8/4)	近世	
29	肥前か	兔付広鉢	体部～底盤	10	-	(7.5)	明治(2.5Y7/1)	にふい(2.5Y7/4)	明治(2.5Y7/4)	近世	
30	肥前か	兔付窓	不明	-	-	-	にふい(2.5Y8/4)	にふい(2.5Y8/4)	にふい(2.5Y8/4)	中世?	

単位 長さ・幅・厚さ(cm) 重量(g)

第34表 No. 118地点 出土石製品・金属製品表

No.	種類	図版	種類	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
31	128	54	鉄泡玉	船	1.4	1.3	-	10.35	図の天の位置に寝みあり
32			砥石	凝灰岩	3.3	3.0	1.4	24.49	

単位 長さ・幅・厚さ(cm) 重量(g)

第3節 「長者屋敷」推定地について

No.118地点の確認調査の結果、屋敷地を想定できる明確な遺構は確認できなかった。

江戸時代の延宝以前に造成された「宇藤の池」はこの谷の湧水を堰き止めることで造成されたもので、第二東名建設工事以前にも湧水があったとされる。これを裏付けるように、今回の確認調査時にも試掘溝での湧水が激しく調査に支障をきたすほどであった。この池を維持できるほどの湧水があったとすれば、長期的に居住することは困難であったと考えられる。

江戸時代の元禄12(1699)年の「栗倉村絵図」(第二東名記念誌編集委2005)には「宇藤の池」が描かれているが、その北部に建物などの痕跡は確認できない。少なくともこの時期には建物はなかったと想定できる。また、明治時代の栗倉村絵図にも池のみで建物の記載はない。したがって、江戸時代(17~19世紀前半)には長期的に継続する屋敷地は存在していない可能性が高く、また出土した陶磁器も多くはないことから、江戸時代の陶磁器・かわらけは建物に伴う遺物ではないことが推断できる。

「長者」とは古代から鎌倉時代頃の有力者の居住域が想定されている(北島2005)が、今回の確認調査の遺物には一切その時期のものが含まれておらず、上述したように中世後期(室町時代以降)~近世のものである。

「長者屋敷」が想定される谷奥部の周囲の丘陵上には中世墓や近世墓が営まれていたことが判明しており、そうした箇所から陶磁器やかわらけが流れ込んだ可能性が高いと想定する。

したがって、「長者屋敷」は、No.118地点対象地内に所在したのではなく、北島恵介氏(北島2005)が想定するように、この谷の入り口付近の丘陵平坦面に築かれた北垣遺跡周辺に存在した可能性が高いとしておきたい。

註(付編1)

1 陶磁器については、当研究所 溝口彰啓氏に分類していただいた。

参考文献(付編1)

- 大場常治 2005 「宇藤の池・ねんぶり・お船荷揚」『先人の足跡』 第二東名記念誌編集委員会(静岡県周智郡森町)
金子健一 2005 「羽釜形土器からみた中世の東海」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
北島恵介 2005 「冨田長者屋敷」『先人の足跡』 第二東名記念誌編集委員会(静岡県周智郡森町)
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 「森町龍実の遺跡」
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 「森町冨田丘陵の遺跡」
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「森町冨田丘陵の古墳群」
鈴木敏則 2001 「西湖窯古墳時代須恵器編年の中再構築」『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考編』 東海土器研究会
第二東名記念誌編集委員会 2005 「先人の足跡」(静岡県周智郡森町)
中野晴久 2005 「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
藤澤良祐 1987 「本業焼の研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1995a 「瀬戸古窯址群III」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』3 瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1995b 「古瀬戸」『概説中世の土器・陶器』 真陽社
藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10 瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』 2005菊川シンポジウム実行委員会
森町史編さん委員会 1998 「森町史」資料編一 古考 静岡県周智郡森町

付編2 戸綿殿ノ谷遺跡出土遺物

戸綿殿ノ谷遺跡については、『森町睦実の遺跡』（森一，静岡埋文研2004）で報告したが、漏れていた資料があったため、ここで追加報告する。

1. 戸綿殿ノ谷遺跡の概要

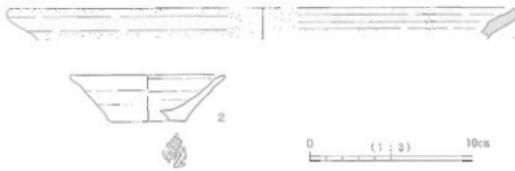
第二東名No.109地点 戸綿殿ノ谷遺跡は森町睦実字殿ノ谷に位置し、睦実地区の丘陵に囲まれた谷の平坦面に位置している。当遺跡の調査成果については、『森町睦実の遺跡』（静岡埋文研2004）で報告しているため、遺構や遺物の概要についてはそちらを参照されたい。

2. 出土遺物（第129図、第35表、図版54）

報告書（静岡埋文研2004）では、戸綿殿ノ谷遺跡から小穴や土坑などが確認され、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、青磁、瀬戸美濃、志戸呂、かわらけなどが出土したことを報告したが、ここでは、誤ってNo.118地点の遺物の中に紛れ込んでいた志戸呂製品、かわらけについて報告する。

1は、志戸呂製品で擂鉢である。口縁部は、端部で内面に稜線を設けるものであり、瀬戸美濃大窯3期後半併行期、16世紀後半に位置づけられる（河合2009）。

2は、ロクロ成形かわらけである。口径9.6cm、底部径4.6cm、櫛高2.9cmである。底部から外上方に向かって直線的に立ち上がるものの、17世紀後半に位置づけられる可能性が高い。



第129図 戸綿殿ノ谷遺跡 出土遺物実測図

第35表 戸綿殿ノ谷遺跡 出土土器・陶器観察表

No.	種類	回数	幅別	幅幅	幅幅	部位	残存	口径	底径	部高	色調(外側)	色調(内面)	時期	網考
1	志戸呂	129	54	かわらけ	ロクロ	口縁～底部	-	-	-	-	にぶい赤褐(5YR5/3)	にぶい赤褐(5YR5/3)	大窯3期後半併行期	志戸呂前期(17世紀後半)承切り赤陶器

単位 残存率(%) 口径・底径・部高(cm)

3.まとめ

ここでは、遺漏した土器・陶磁器について報告した。報告書において記載された遺物と同時期の遺物の事例であり、大きく遺跡の評価を変えるものではない。しかし、志戸呂製品については1と同時期の擂鉢の底部部は出土していたが、1により口縁部の形態を明らかにすることができた。また、かわらけについても口縁部の形状が不明確であったため、全体的な形態が判明する貴重な事例となつた。

参考文献（付編2）

河合 勝 2009 「まとめ」『上志戸呂古窯』 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004b 『森町睦実の遺跡』（森町-1）

藤澤良祐 1995a 「瀬戸古窯址群III」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』3 瀬戸市埋蔵文化財センター

付編3 上神増A古墳群出土銅錢

上神増A古墳群の調査報告は、『合代島丘陵の古墳群』（豊岡村－3、静岡埋文研2010）で報告したが、その報告に漏れていた資料があつたため、ここで報告する。

1. 上神増A古墳群の概要

上神増A古墳群は、磐田市（旧・豊岡村）合代島ほかのいわゆる「合代島丘陵」に位置する古墳群で13基で構成される。第二東名高速道路建設に伴いA5号墳が発掘調査の対象となり、当研究所で発掘調査を実施し、すでに報告済である（静岡埋文研2010）。

A5号墳は古墳時代中期後半に築造された円墳を、古墳時代後期後半に再利用し、横穴式石室をつくったものである。この表土から中世墓や近世墓に伴うと想定する銅錢が出土し、「元豊通寶」と「寛永通寶」2点について報告したが、1点報告漏れした銅錢があつたためここで報告する。

2. 上神増A古墳群出土銅錢（第130図、第36表、図版54）

銭貨 上神増A5号墳の表土より出土した銅錢「祥符通寶」（1）である。

「祥符通寶」は宋錢で、1008年初鋤である。本錢の可能性が高い。

第36表 上神増A古墳群 出土銅錢観察表

No	辨別	回収	出土位置	種類	銘名	1回名	初期年	直径	内径	孔幅	重量	備考
1	130	54	上神増A5号墳表土	銅錢	祥符通寶	京	1008年	25	19	6.5	3.33	

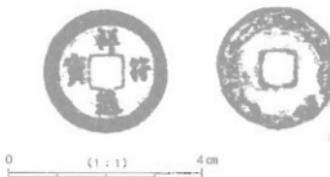
単位：mm・内径・孔幅(mm) 重量(g)

3.まとめ

上神増A5号墳は横穴式石室の攪乱が著しいため古墳中央や墳丘が大きく破壊されている可能性が高いことから、墳頂部付近にあった遺構も同時に破壊された可能性が高い。墳丘表土から銅錢が複数出土したことから中世墓、近世墓が存在する可能性が高い。また、銅錢の鋤造時期から想定される輸入・使用時期は中世であり、「元豊通寶」と同一の中世墓に翻刻されていた可能性が高い。

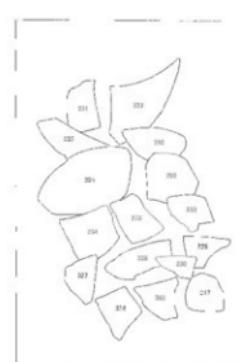
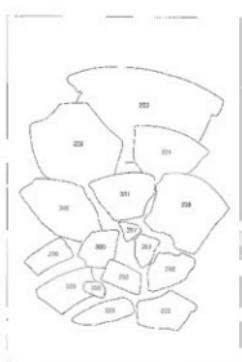
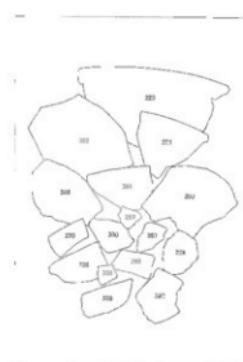
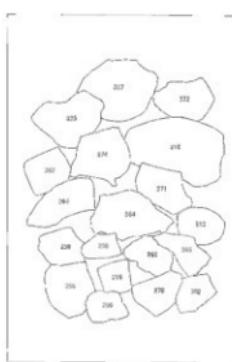
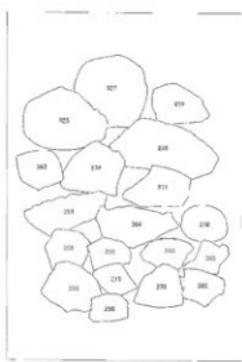
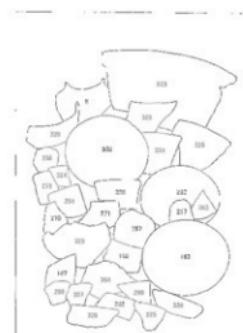
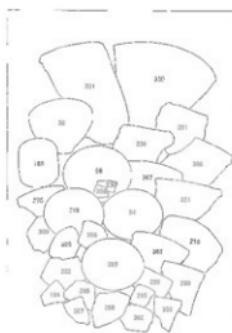
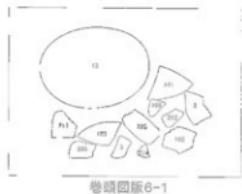
参考文献（付編3）

静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『合代島丘陵の古墳群』



第130図 上神増A古墳群 出土銅錢拓影

図 版

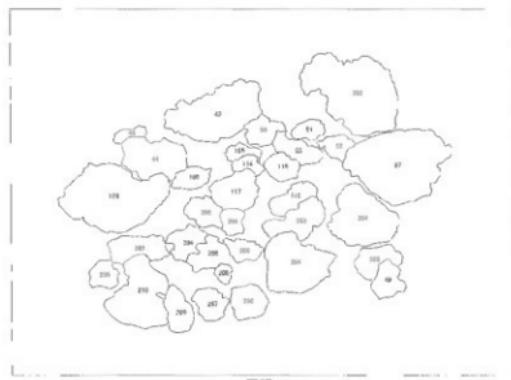


付図1 中層敷遺跡 出土遺物写真の掲載遺物番号①



回版 44

回版 45



圖版 49

付図2 中屋敷遺跡 出土遺物写真の掲載遺物番号②

弥勒平遺跡・中屋敷遺跡 図版1



森町円田丘陵周辺の地形（調査前、上空より） 国土地理院提供

図版2 弥勒平遺跡・中屋敷遺跡



森町円田丘陵周辺 遠景（南から） 天王ヶ谷横穴墓群、北畠遺跡などが調査中

△の交点 弥勒平遺跡
▲の交点 中屋敷遺跡

弥勒平遺跡 図版3



1. 弥勒平遺跡 遠景（南西から）



2. 弥勒平遺跡 調査区全景（南から）

図版4 弥勒平遺跡



1. 弥勒平遺跡 調査区全景（北西から）



2. 弥勒平遺跡 調査区中央部光景状況（北西から）

弥勒平遺跡 図版5



1. 積穴建物 (SH01~03) 完掘状況 (南から)



積穴建物内炉 (SL01) 完掘状況 (南から)

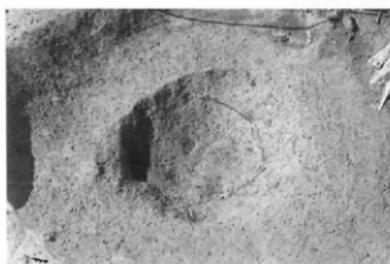


3. SX12 遺物出土状況 (北から)

図版6 弥勒平遺跡



1. SK01 踏出土状況（南西から）



2. SK01 集石除去後黒色土検出状況（北東から）



4. SK03 完掘状況（南から）



3. SK01 完掘状況（北東から）



5. SK04 完掘状況（南から）



1

1. 出土遺物①(縹文土器)



10



11

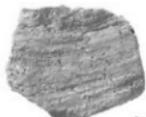


13



12

2. 出土遺物②(弥生土器)



2



3



4



5



6



7



8



9

3. 出土遺物③(弥生土器)

図版8 弥勒平遺跡



1. 出土遺物④（古漁戸）



2. 出土遺物⑤（陶器・かわらけ）



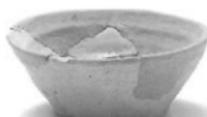
22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33

図版10 弥勒平遺跡



1. 弥勒平遺跡 周辺の墓地 石函が集積された様子 (この墓地は第二東名高速道路建設に伴い再度移転した)



2. 弥勒平遺跡 周辺の墓地 近世墓が残されている

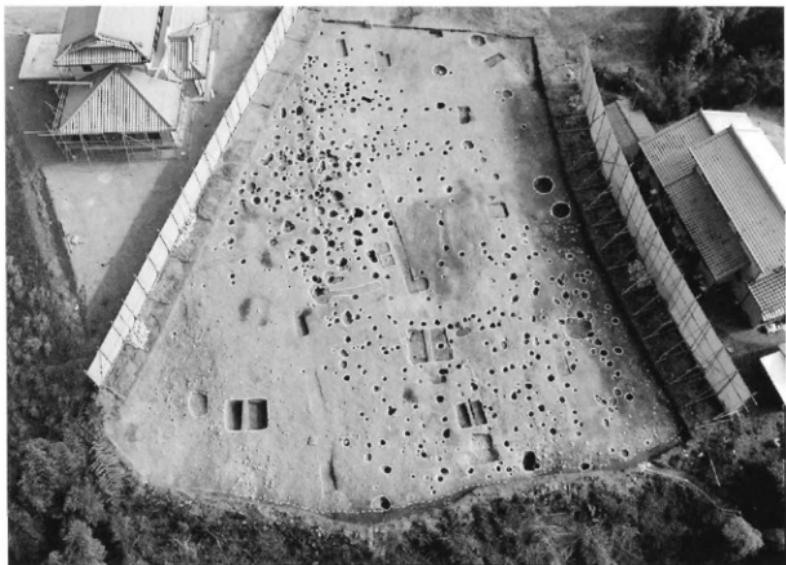


1. 中屋敷遺跡 調査区全景（東から）



2. 中屋敷遺跡 調査区全景（北上空から）

図版12 中屋敷遺跡



1. 中屋敷遺跡 調査区西侧（A区）全景（西から）



2. 中屋敷遺跡 調査区西侧（A区）全景（東から）



1. 中屋敷遺跡 調査区東側（B区）全景（北上空から）



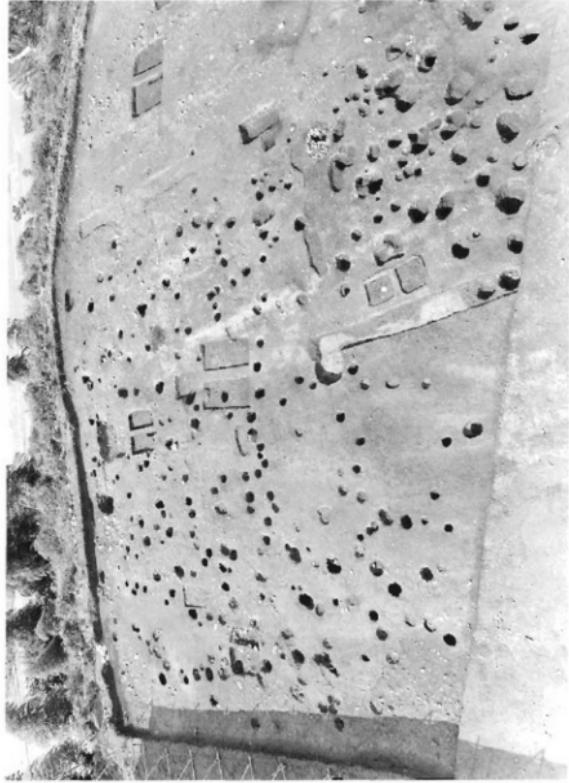
2. 中屋敷遺跡 調査区東側（B区）全景（北西から）

図版14 中屋敷遺跡

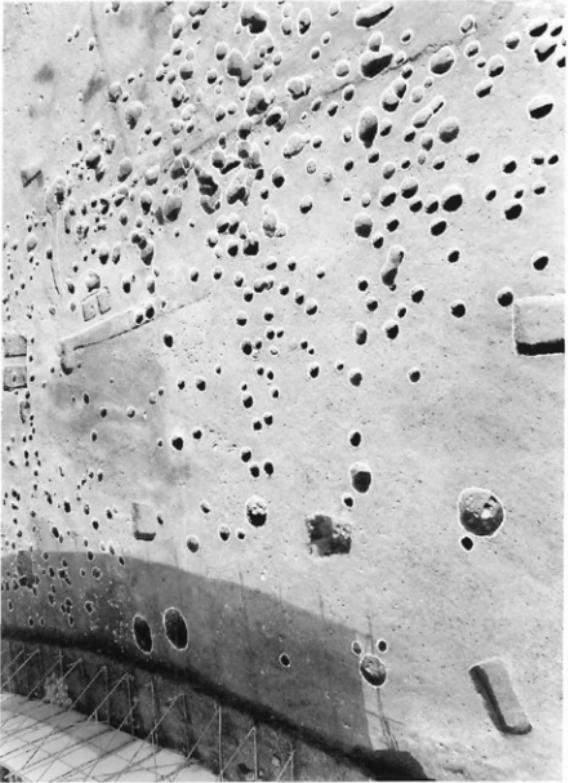


掘立柱建物関係撮影範囲概略図

中屋敷遺跡 図版15

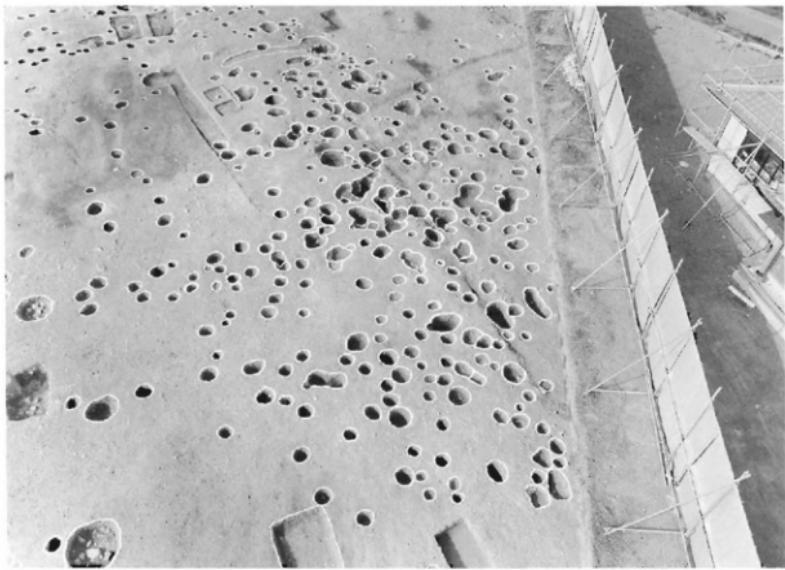


1. 調査区南西隅（A区西北側） 墓立柱遺物群（東から）



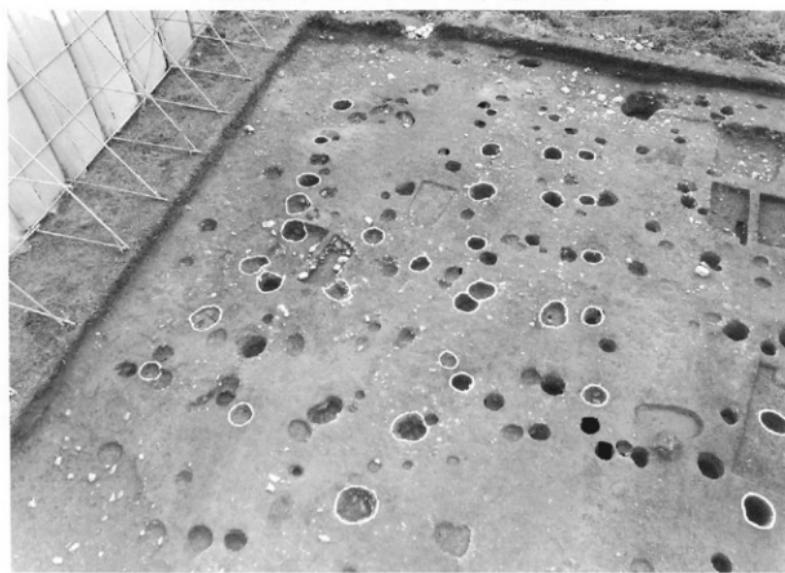
2. 調査区中央（A区南東側） 墓立柱遺物群（東から）

図版16 中屋敷遺跡



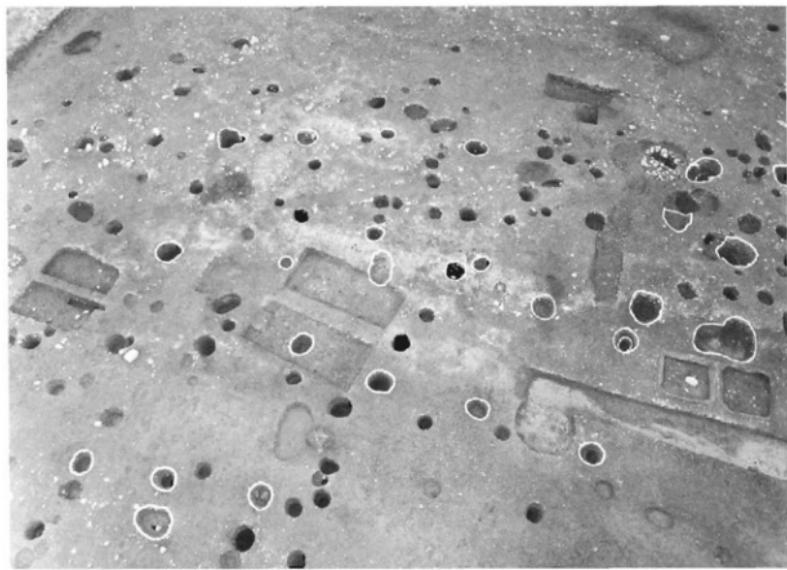
1. 据立柱建物群 (SB06～SB08, SB16～SB29) 完掘状況 (東から)

調査区中央北側 (A区北側)



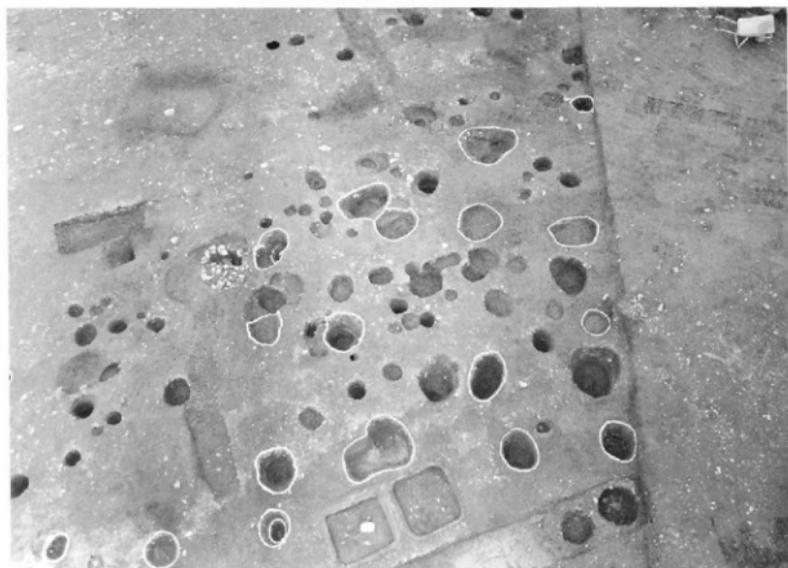
2. 据立柱建物群 (SB05, SB10, SB12～SB15) 完掘状況 (北東から)

調査区南東隅 (A区南東隅)



1. 掘立柱建物 (SB01~05) 完整状況 (南東から)

調査区西側中央部 (A区西側中央部)



2. 掘立柱建物 (SB06・07) 完整状況 (南東から)

調査区西側中央部 (A区中央部)

図版18 中屋敷遺跡



1. 挖立柱建物群 (SB30～SB34) 完掘状況 (北から)

調査区中央南側 (目区南西側)



2. 挖立柱建物群 (SB36～SB53) 完掘状況 (北西から)

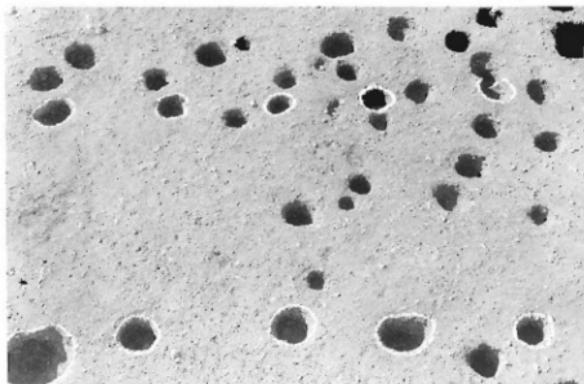
調査区東側 (目区中央部)



1. SB11 完掘状況（西から）

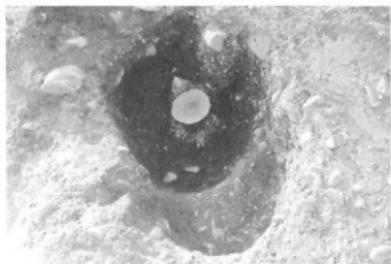


2. SB22 完掘状況（南東から）

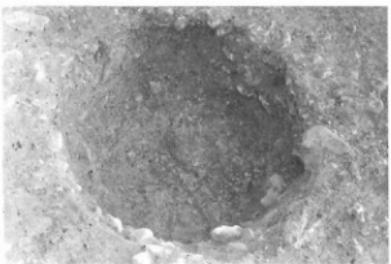


3. SB28 完掘状況（北東から）

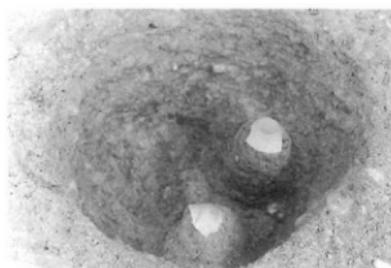
図版20 中屋敷遺跡



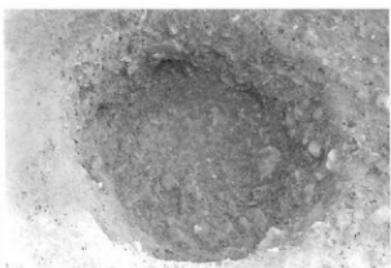
1. SB16-P1 遺物出土状況（南から）



5. SK06 完掘状況（北から）



2. SB37-P3 遺物出土状況（北から）



6. SK07 完掘状況（北から）



3. SB45-P3 遺物出土状況（南から）



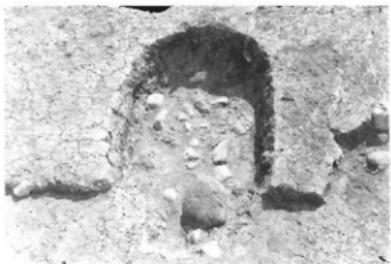
7. SK10 完掘状況（西から）



4. SK01 完掘状況（東から）



8. SK11 完掘状況（北から）



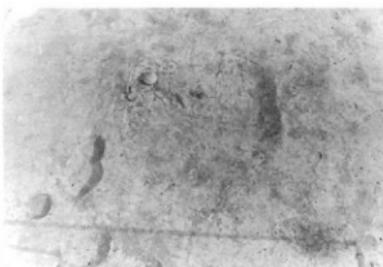
1. SK21 完掘状況（北から）



2. SK22 完掘状況（北から）



3. SK24 完掘状況（東から）



4. SK30 完掘状況（西から）



5. SK23およびSD03 完掘状況（西から）

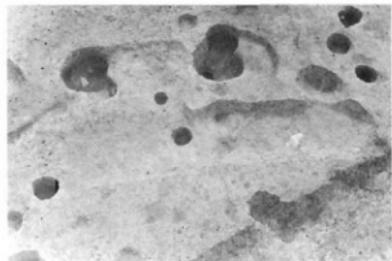


6. SD03 遺物出土状況①（東から）



7. SD03 遺物出土状況②（北東から）

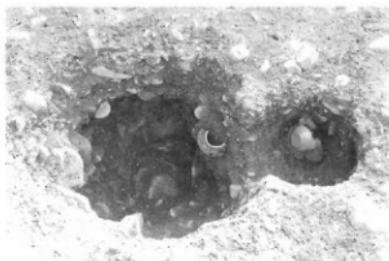
図版22 中屋敷遺跡



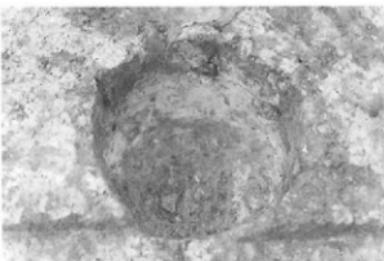
1. SD02 完掘状況（北から）



2. SP14 遺物出土状況（東から）



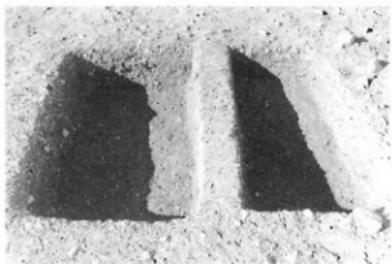
3. SP15・16 遺物出土状況（北東から）



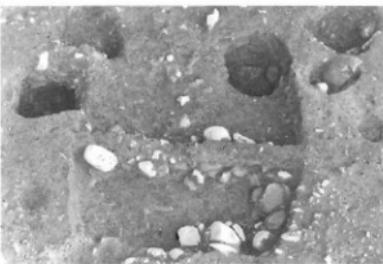
4. SP196 完掘状況（北から）



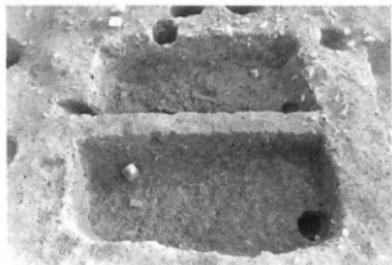
5. SE01 完掘状況（北から）



1. SX01 完整状況（西から）



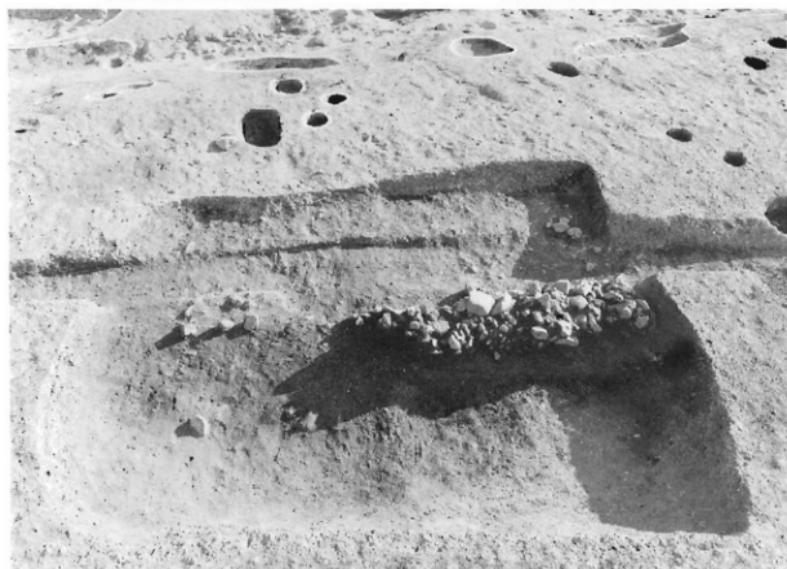
2. SX04 完整状況（東から）



3. SX02 完整状況（北から）



4. SX05 完整状況（北から）



5. SX07 完整状況（北から）

図版24 中屋敷遺跡



SB06 2



SB09 7



SB06 5



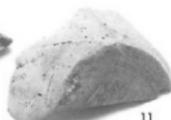
SB08 6



SB11 8



12



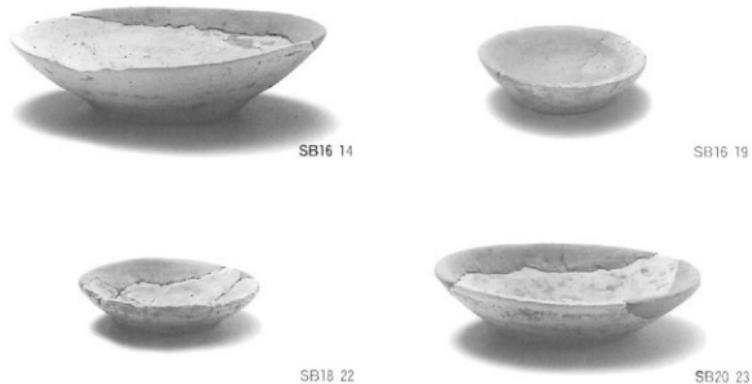
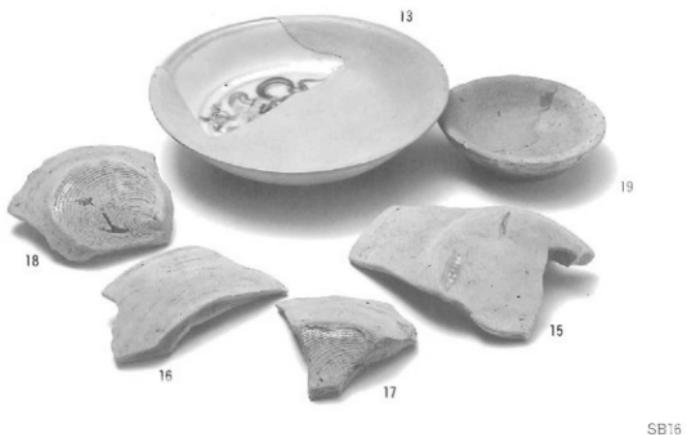
11

SB15



SB16 13

掘立柱建物出土遺物①



掘立柱建物出土遺物②

図版26 中屋敷遺跡



SB22 30



SB26 33



SB23 32



SB29 34



SB37 39



36

SB33



SB37 38



SB30 35



SB37 41



SB37 40



SB38 42

据立柱建物出土遺物③

中屋敷遺跡 図版27



SB38 43



SB38 44



SB38 45



SB41 48



SB43 51



SB42 50



SB45 52



SB45 53



SB40 47



SB45 54



SB47 58



55

56



SB47 59



SB48 381

掘立柱建物出土遺物④

図版28 中屋敷遺跡



SB48 60



SB49 63



64



65



SB49 66



SB49 67

SB49



SB49 68



SB49 70



SB51 73



SB57 75

塼立柱建物出土遺物⑤



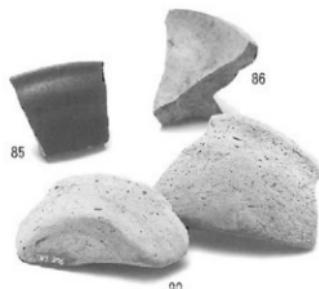
SB56 76



SK07 83



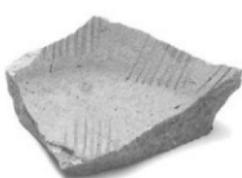
SE01 77



SE01 79



SK20 89



SK01 80



SK22 95

掘立柱建物出土遺物⑩、井戸、土坑出土遺物⑪

図版30 中屋敷遺跡



SK22 96



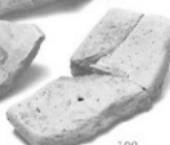
SK22 94



98



99



100

SK24



SK23 97



121

118

120

119

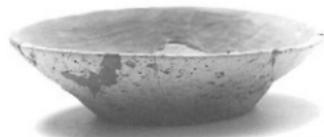
SD03



110



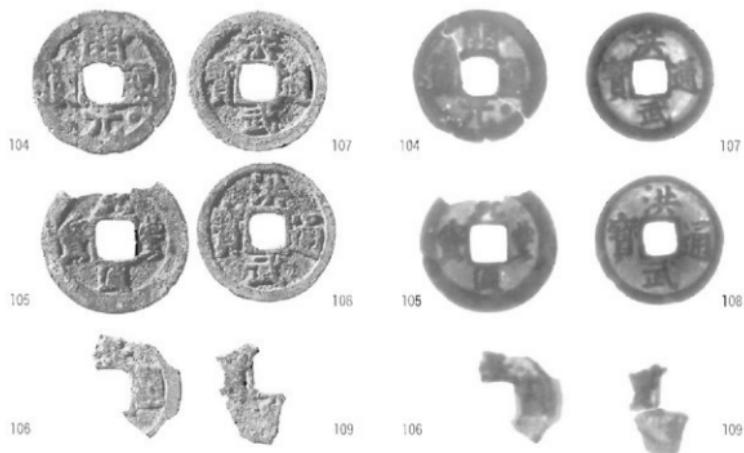
111



SD02

SD02 112

土坑出土遺物②、溝出土遺物①



1. SK30出土銭貨



2. SK30出土遺物

3. SK30出土かわらけ

図版32 中屋敷遺跡



117



129



122



131



123



132



124



133



126



136



127



138

溝出土遺物② (SD03・04)



SX02 141



SX03 144



142



143



SX03 144



SX07 148



SX07 147



SX07 149



SX07 156



SX07 154



159



160

SX07



SX07 158

性格不明遺構出土遺物

図版34 中屋敷遺跡



SP380 183



SP225 184

SP379 188

SP129 163



SP331 187

SP111 165



SP16 166

SP138 167



SP77 164



SP331 189

小穴出土遺物①



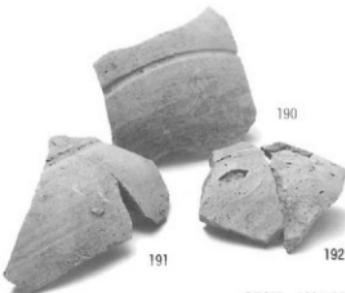
SP331 95



SP185 170



SP26 174



SP26 175



SP25 194



SP380 193



SP14 168



SP69 180



SP16 169



SP289 198

図版36 中屋敷遺跡



SP227 199



SP307 210

1. 小穴出土遺物③



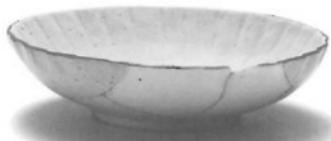
368



278



2. 遺構に伴わない遺物①



遺構に伴わない遺物②

(ただし、3はSB06、162はSP101出土)

図版38 中屋敷遺跡



瀬戸美濃 碗皿類

遺物番号は付図1参照



瀬戸美濃 瓢皿類

遺物に伴わない遺物④

遺物番号付因? 参照

図版40 中屋敷遺跡



瀬戸美濃 詳類

遺構に伴わない遺物⑤

遺物番号は付図1参照
322は瀬戸美濃系佐雅陶器（初山の可能性あり）



瀬戸美濃 鉢類

遺構に伴わない遺物⑥

遺物番号は付図1参照
322は瀬戸美濃系焼物可能性（若山の可能性あり）

図版42 中屋敷遺跡



志戸呂・初山ほか 碗皿類

遺構に伴わない遺物⑦

遺物番号は付図1を採



志戸呂・初山ほか 硬皿類

遺構に伴わない遺物⑧

遺物番号は付箋1参照

図版44 中屋敷遺跡



志戸呂・初山 輋類

遺構に伴わない遺物⑨

遺物番号は付図2参照

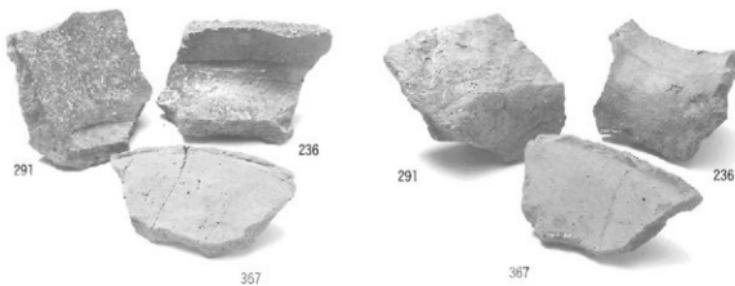


志戸呂・初山 林類

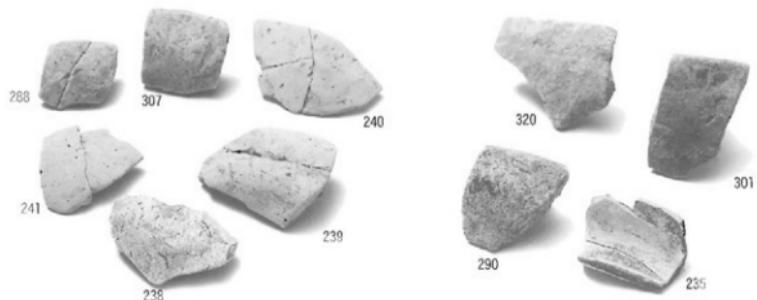
遺構に伴わない遺物②

遺物番号は付図2参照

図版46 中屋敷遺跡



常滑



かわらけ

遺構に伴わない遺物①

鍋



245



345



314



378



247



347



310



377



311



339



309



374

遺構に伴わない遺物②

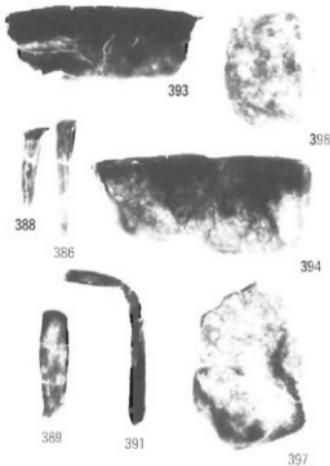
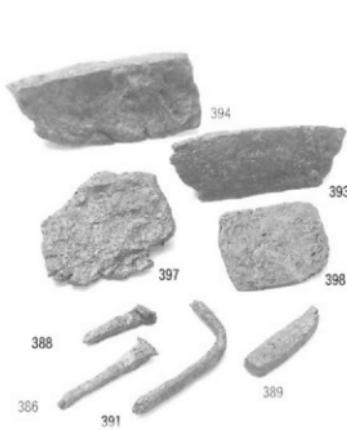
図版48 中屋敷遺跡



383

263

1. 滲構に伴わない遺物②



2. 金属製品①



384



1. 金属製品②



2. 主な鉄滓

図版50 中屋敷遺跡



1. SZ01 完振状況（北から）



2. SZ01 (SD04) 遺物出土状況（北から）



3. SZ01 (SD04) 遺物出土状況細部（北から）



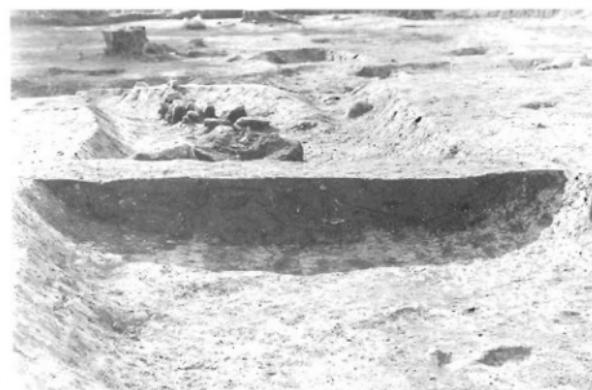
4. SD04 遺物出土状況（北東から）



1. SZ01 (SD04)
北側実掘状況 (西から)



2. SZ01 (SD04)
土層堆積状況①
(北東から)



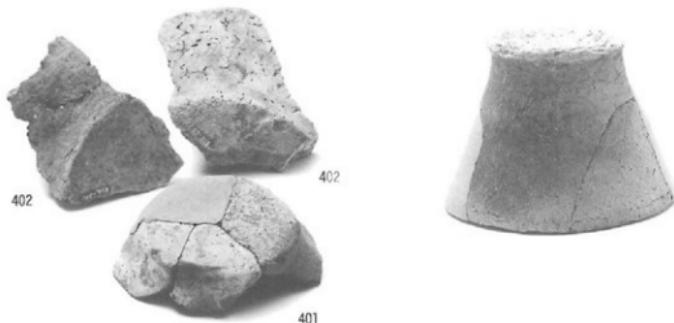
3. SZ01 (SD04)
土層堆積状況②
(北東から)

図版52 中屋敷遺跡



400

1. SZ01 出土遺物①



402

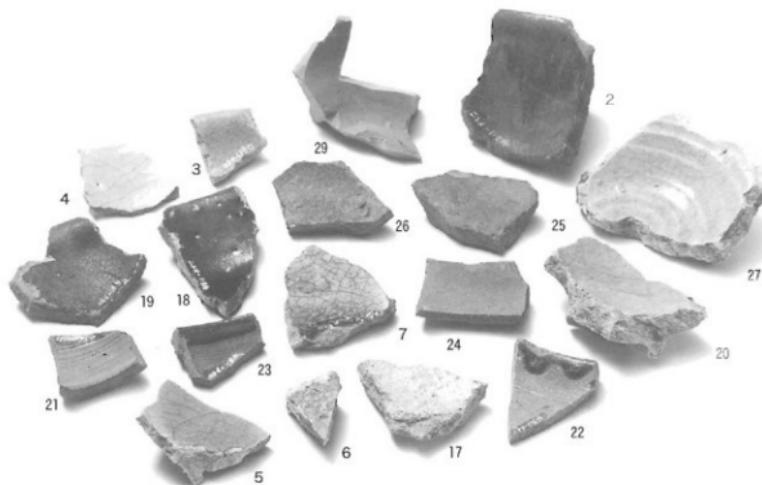
402

401

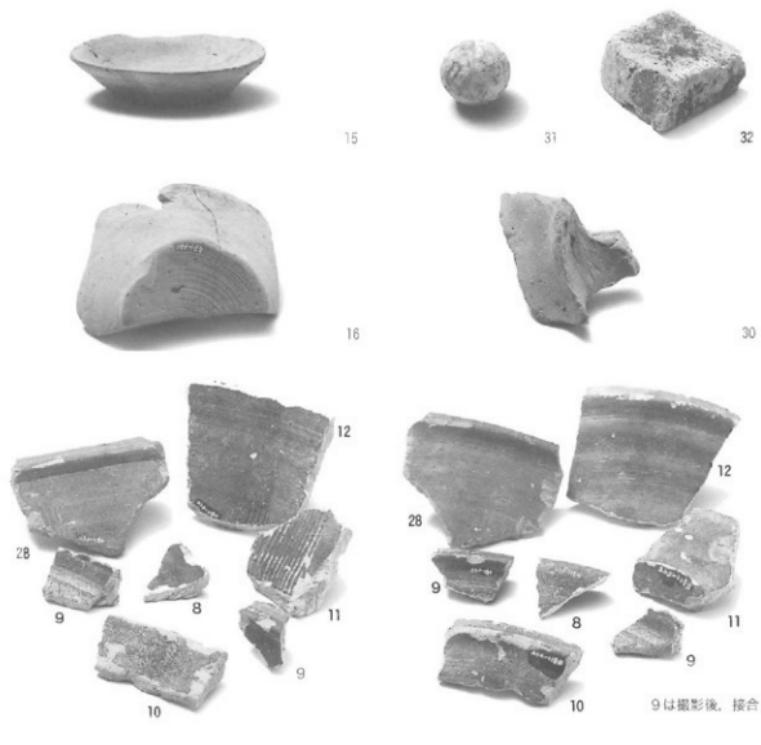
403

2. SZ01 出土遺物②

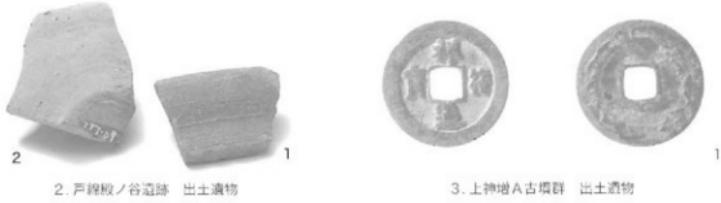
3. SD04 出土遺物



図版54 No.118地点（長者屋敷推定地）、戸綿殿ノ谷遺跡、上神増A古墳群



1. No. 118地点 「長者屋敷」推定地出土遺物(2)



2. 戸綿殿ノ谷遺跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みろくだいらいせき・なかやしきいせき							
書名	弥勒平遺跡・中屋敷遺跡							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	森町-5							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第241集							
編著者名	大谷宏治・田村伸太郎(編集) 大谷宏治 株式会社日鐵テクノリサーチ(執筆)							
編集機関	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8000 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL. 054-262-4261(代)							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 (世界測地系)		発掘期間	充掘 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡 番号	北緯	東經			
弥勒平遺跡	静岡県島田市智頭町 宮代字林453-2、 4444-1・4545-1・4500-2	-	34° 49' 35"	137° 54' 13"	20000229- 2001025	1,300 m ²	記録保存 (第二東名 高速道路建 設に伴う埋 蔵文化財発 掘調査)	
中屋敷遺跡	同上 草ヶ谷字上屋敷 939-1・939-2・940・ 941・942-1・942-2	22461	278	34° 49' 26"	137° 54' 44"	20000807- 2001025	2,940 m ²	記録保存 (第二東名 高速道路建 設に伴う埋 蔵文化財発 掘調査)
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
弥勒平遺跡	散布地	縄文・古墳 (終末期)・中 世・近世	土坑・溝状 遺構・柱格 不明遺構	縄文土器・須 恵器・古瀬戸・かわ らけ・近世陶磁 器・銅鏡	縄文土器は中期の阪神式。須恵器は古墳時代終 末期。古瀬戸は瓶子・四耳壺で、古瀬戸商山期 に位置づけられるものである。遺跡周囲にある 石塔との関連から中世馬の喰まれていた可能性 が高い。かわらけ・近世陶磁器は近世墓地に伴 うものであろう。			
	集落 ・墓	弥生時代中期 ～古墳前期？	竪穴建物・ 土器陪塚？	弥生土器	弥生時代中期前半(丸子式)～後半(白堀式) の土器陪塚が喰まれた可能性が高い。丘陵頂部 に喰まれた弥生時代の方形周溝墓や土器棺により 一段階古いものの確認された。その後、弥生 時代後期後半～古墳時代前期前半に竪穴建物が 複数回にわたって建て替えられた可能性が高い。			
中屋敷遺跡	散布地	縄文・古墳・ 古代	なし	黒曜石片・須恵器・ 土師器	縄文・古墳～平安時代に人為が及んでいる。			
	集落 ・墓	中世～近世	掘立柱建物 ・土坑・井戸・性格 不明遺構・小穴	山茶碗・古瀬戸・ 大瀬戸・登窓・志戸・臼 ・初山・常滑・備前 ・肥前・貿易陶磁 (青磁・染付)・土 製鏡・石刷・鉛灯 ・鉄滓・繩羽口・ 銅鏡・石塔	中世後期(室町時代)～江戸時代に亘る複合遺 跡である。中世後期には墓地であった可能性が 高く、江戸時代に掘立柱建物で構成される集落 に変化した可能性が高い。遺跡内からは鉄斧が 出土しており、江戸時代は鍛冶を行なう工房開 拓の遺跡であった可能性が高い。			
	古墳	古墳中期か 基	方墳(方形 周溝墓) 1 基	土師器蓋3点	低壇丘の方墳(あるいは方形周溝墓)で、5世 紀前半に築造された可能性が高い。埋葬施設は 消滅して不明。占墳の規模は、約16.3m以 上である。			
要約	弥勒平遺跡は、弥生時代中期の墓地であったものが、後期～古墳時代前期に竪穴建物に変化した可能性が 高い。その後、中世倭に再び墓地となり、その最晩期として古瀬戸・四耳壺や瓶子が使われた可能性が高い。 中屋敷遺跡は、古墳時代中期前半の占墳が1基確認され、円田丘陵にあらわる文殊堂古墳群など先立つ可能性 が高いとともに、単獨で立地している点も重要な要素である。 中世後期には墓地に変化し、石塔を伴う中壇墓や火葬が行なわれた可能性が高い。近世に至り、掘立柱建物 で構成される、鍛冶を行う集落が喰まれた可能性が高い。							

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第241集

弥勒平遺跡・中屋敷遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町一5

平成23年3月31日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL (054)262-4261(代)

FAX (054)262-4266

印 刷 所 松本印刷株式会社

〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210

TEL (0548)32-0851(代)

